

アスカ物語 ～アスカ誕生～

塚越広治

「ウォルヒ、ウォルヒ」

夢にうなされていた、ウォルヒ・パクを気遣ったのかもしれない。コロンは優しい口調で、椅子の背もたれに身を任せていたウォルヒの目を覚まさせた。ゆっくりと目を開けた彼女の心に、何やら不安な夢の残滓がわだかまっているのだが、その正体は記憶の底に沈んでいて、姿を現さない。

部屋の中央に映しだされた高速艇の立体映像が、早朝まで仕事のアイデアを練っていて、この椅子の上で、休日の朝を過ごしてしまった事を思い起こさせた。時間は既に朝の10時を過ぎていた。

彼女は背もたれに身を横たえたまま、何気なく右手の人差し指を回した。その動きに合わせて高速艇の姿がくるくる回った。開発コードFW201-3fシリーズ、通称「スピカ」と呼ばれる汎用小型宇宙艇である。機動性に優れ、保安局や救助機動隊の有人パトロール艇という用途で、この21年間に既に3428隻の製造実績がある。その内343隻、火星の近傍で運用されるスピカの大半を、彼女が勤めるネヤガワ工業でライセンス生産しているのである。

立体映像に映しだされる船体の姿は、この時代の一般的な宇宙船の姿だった。背骨を連想させるチタン合金の頑丈な骨組みに、操縦、生命維持、推進エンジン、推進剤タンク、電子機器など様々な目的を持ったモジュールが据え付けられている。その外観は、皮膚を剥ぎ取った肉食獣の体といったところで、滑らかさや美

しさにはほど遠い。

しかし、不要な美しさを一切排除した実用一点張りの構造は、安定感や信頼感を生み出して、操縦士を始め整備士たちからも、絶大な信頼を寄せられているのである。そして、試作機の初航行から、実に34年を経てさえ、現役の船体として製造され続けているのは、その時代に応じて、より高性能、より多機能のモジュールに換装し続けたことによる。換装を容易にしたのは、この構造に起因している。チタン合金の背骨から古いモジュールを外して、高性能のモジュールに取り替えるだけで、新たな新型機に生まれ変わるのである。

これは、新型機開発に要する多額の設計コストの低減や、開発期間の短縮、新型機に機種を改変したときの、搭乗員や整備士の訓練期間の短縮、部品の共有化による維持コストの低減や稼働率の向上など、製造メーカーが見ても、使用者側から見ても、多くのメリットがあり、FW201という船体は、そのベースになった初期型のFW201—1aを始め、170を越える機種があると言われた。

この構造はFW201以降の船体にも引き継がれて、今や太陽系内の小型船の大半は、骨格や内蔵を剥き出しにした外観と言っても良かった。男の子に、あこがれる宇宙船を描かせれば、間違いなく、まず頑丈なフレームを描いた。その特徴は彼女の目の前に浮かんだ小型機の姿に要約されているのである。

彼女が勤めるネヤガワ工業では、ノーラン&ベイズ社、通称N&B社からFW201のライセンス生産権を得て、「スピカ」という名の火星仕様の船体として製造販売しているのである。し

かし、出力増大によるエンジンの大型化、安全性強化に伴う操縦モジュールの重量増大など、様々な要因によって、この船体は限界を迎えていた。彼女たちは船体の老朽化と性能の限界を知りつつ、この船体にしがみついて、生計を支えなければならない事情を持っていた。

彼女は開いていた指先を閉じた。その動作が、映像を縮小するための指示であったらしい。スピカの立体映像が、部屋の中央で30cmばかりの大きさに萎んだ。彼女はスピカを弄ぶように映像を眺め、やがて、指先を拳の中に握り込んで映像を消した。

部屋の中は、しんと凍り付くように静まり返って、やや薄暗い。ウォルヒは部屋の端に一人取り残された。先ほど彼女に声をかけたコロンの姿もない。室内の構造を見れば明らかに居間であるはずの部屋の中は、彼女の性格を物語っていて、整理整頓が行き届いているばかりでなく、一切の無駄がない。普通の女性なら、縫いぐるみや花でも飾ってありそうな棚には、スピカの模型が置いてある。装飾目的ではないらしい、その構造を確認するための実用的な用途に使うに違いない。壁には写真のパネルが4枚掲げられているのだが、写っているものは組立ライン上のスピカとその実体図である。

人間くさい生活感を探するのが難しい部屋の中で、テーブルの上に唯一、光を放っている写真がある。それを眺めれば赤ちゃんを抱き上げた5歳くらいの少女の傍らに、父母らしい男女が寄り添っている。少女を見つめる女の面立ちは、ウォルヒによく似ているが、その表情はずっと軟らかく、ウォルヒ本人ではない。彼女

の母親だった。そして、微笑みつつも、生真面目に正面を見つめる男は彼女の父親である。少女の背後から肩を抱いた腕のがっしりした線に、父親の責任感が現れている。少女は、おそらく、5歳を迎える頃のウォルヒ・パクであり、その腕に抱かれているのは彼女の弟だろう。彼女は面立ちを母親から、性格を父親から受け継いだと聞いたことがある。

彼女はこの家族について、彼女の想像を交えて作り上げた、虚構半分の記憶しか持たない。何故か、唯一、実感を持った記憶として残っているのは、初めて会った弟について、感想を求められたときの記憶だった。嬉しいとか可愛いという感覚ではなく、生命に対する不可思議な疑問だった。

「ぷにぷにしている」

そんな妙な表現で自分の弟を表現した時、両親が顔を見合わせて笑った。彼女は新しい命が自分の腕の中にいる、その事が不思議でならないと言うことを伝えたかったのである。彼女は言葉を補って弟に頼ずりして言った。

「温かくて柔らかい」

事実、この赤ちゃんの重みや感触は、彼女の気分を高揚させて、叫び出したくなるほど嬉しかったのである。

彼女はこの記憶を、この写真の時の記憶だろうと思うのである。ただ、この記憶は短く断片的で、舞台が切り替わるように、別の記憶に繋がっている。はぐれてしまった両親が見つからない、という不安とともに、弟が彼女の腕の中で冷たく変わってゆくという記憶だった。面立ちや生命感ではなく、冷たく変わって行くという残酷な感触で、彼女は弟の存在を記憶していた。恐怖や不

安の叫びを、頭を抱え込んだり、両手で顔を覆ったりして抑え込むほどの努力をして、彼女はこの後の記憶を心の底に封じている。彼女がうなされていたのは、底から湧き上がって漏れだした感覚の残滓が原因かもしれない。

しかし、目が覚めてみると、地球時間で23年も前の記憶である。彼女は幼い頃の記憶をしっかりと封じて、心を振るわず程の感慨はない。ただ、うたた寝によって、休日の朝の数時間を無駄に過ごしたという、小さな後悔があった。その後悔と、引継を済まさなければならない過去の仕事と、新たな仕事の不安で心が乱されて落ち着かない。

「北公園に行こう」

彼女は思ったのみならず口に出して呟いていた。

(何のため?)

自分でも良く分からないのである。彼女は思ったばかりではなく、それを独り言のように口にしている。彼女の癖の1つだった。他人が聞けば、指示か独り言か良く分からない、しかし、コロンは主人の性格を良く理解して言った。

「分かりました。ムーヴァーを表通りに準備します」

彼女の外出準備に手間はかからない。鏡と向き合って髪のを直して、淡いクリーム色のカーディガンを羽織って、全身の衣服の乱れを整えた。

自宅玄関のドアをくぐると、幅6メートルほどの通路がこの区画を貫いており、通路に沿って画一化されたドアが並んでいる。

ここは、この都市の居住区なのである。ただ、個々のドアには、手作りの表札、居住者の似顔絵、明滅する小さなランプなど、居住者たちが画一化に埋もれてしまうことに、ささやかな抵抗している様子が見受けられる。その抵抗の仕方に、家庭の数だけ個性があって面白い。

今も1つの変化が現れている。ウォルヒが通りかかった1軒のドアの前で、若い男が自分と妻の名前を表記した四角く硬いアルミのプレートを、カンガルーだか、犬だか分からない、茶色の動物を型どったプレートに取り替えている。表札のプレートには幼い名前が増えていた。世間話をするほどの親しさではないが、ウォルヒは男の妻が妊娠していたことを知っていた。ウォルヒは軽い会釈で喜びを表した。感情を封じられてしまった彼女の笑顔は固い。しかし、男は、はにかみながらも、嬉しそうに頷いた。ユキコ、その新たな名と父親のアジア系の顔立ちから判断すれば、この夫婦に生まれたのは女の子に違いない。

しばらく歩を進めると、白い高分子の通路一杯に、今日は、赤と青の色調で動物が描かれている。ウォルヒは首が長いのをキリンで、その横の人間の子供は、絵の描き手だと見当を付けたが、後は判別できない。通路の落書きをいやがる大人もいるのだが、この白い床は、子供にとって大きなキャンパスにも成り得るのである。ペンを持った少女は、ウォルヒが彼女の絵の理解者だと言うことを知っており、屈託のない笑顔を浮かべた。ウォルヒは自分の頬に指先を当てて、少女が誤って付けたらしい頬の赤い汚れを注意した。少女は左の腕で頬をこすって創作活動に戻った。数時間後には清掃ロボットによって消去されてしまう芸術だが、ウ

オルヒはその芸術を踏みつけないように注意して通り過ぎた。彼女は硬い表情の内側で、こんな変化を面白いがる感性を持っていた。

ウォルヒはいくつかの変化を味わいつつ、通路を100メートルばかり歩いた。エレベーターで植物プラントに上がる。地表は植物プラントであると同時に、都市の交通網の中心でもある。コロンは四輪ムーヴァーと呼ばれる電気自動車に姿を変えて道路に待機していた。

ウォルヒを認識したコロンはハザードランプを点滅させて、自分がこのムーヴァーに乗り移っていることを知らせた。コロン、ウォルヒが所有する「思考ロボット」として、この時代の標準的な機能と能力を有している。

ロボットは大地を均すにはブルドーザーの外観をしているのが都合が良く、重量物の運搬はトレーラーの形がよい。子守をさせるには人間の女性の形をしているのがいい。ロボットはその機能や用途に合わせて、その外観を多岐に分岐させた。ロボットの用途の数だけ、外形があったといえる。

同時に、ロボットのインターフェース部分が、思考ロボットとして本体の機械的な構造から分かれて、人に従属したのである。思考ロボットは思考機能そのものであると言って良い。その存在は、システムに属する人工知能ではない。様々に形を変えて積極的に考え、人をサポートする存在なのである。ウォルヒが自宅を出るまで、コロンは自宅の環境システムのメモリー上において、空調を管理したり、飲み物を提供しメイドや執事としての役割を

果たしていた。ウォルヒはムーヴァーの構造や操縦方法を熟知しているとはいえないが、今はコロンがムーヴァーの運転システムのメモリーに乗り移って、ウォルヒを目的地まで運ぶのである。極端な例だが、コロンを発電所のシステムに転送すれば、彼女が一人で核融合炉の制御をすることすら可能なのである。もちろん重要なシステムには幾重にもセキュリティーの鍵がかかっている、実行は出来ないに違いないのだが。この時代、ロボットはこうして人に接して、人の生活と切り離せない存在になっていた。

今、そのコロンはムーヴァーそのものとして、植物プラントの間を縫うように走って、ウォルヒを北公園に運んでいる。ムーヴァーの窓は開放している。ウォルヒは窓から入ってくる土の香りの乗った風を楽しんでいた。コロンはこの香りが、主人の好みだと言うことを記憶しているのである。

木々の緑が目心地よければかりではなく、しっとりとした土の香りが漂ってくる。当然の事ながら、土の上には落ち葉がある。その落ち葉を分解して土に帰す微生物や、その土を掘り返すミミズは地球のものだ。彼女たちは、ここで経験する僅かな自然を、地球市民と共有しているのかもしれない。彼女たちは目に見えないものまで地球に依存しつつ、火星の大地の上で生活しているのである。

コロンは28分でムーヴァーを目的地に着けた。路線バスの『北公園停留所』にも近く、若者で賑やかな中央公園に比べて、年輩者の姿が多い。ウォルヒはここでコロンと分かれて徒歩になる。

賑やかさという点を差し引いても、都市の中央部と比べると、

雰囲気が違う。ウォルヒは都市造りの専門家ではないが、その彼女にさえ、都市の構造が、中心部と違っていることが分かるのである。小さな区画で区切られている。この都市の旧市街なのである。天井のダクトや空調機や配管、ドアや装飾品によって変化は付いているが、よく見れば、どの区画のどの壁面も、長さ25メートル、高さ8メートルの画一化されたパネルを120度の角度で繋げて構成してあるのが分かる。今は、都市全体が巨大なドームで被われてしまったが、この都市の旧区画は、巨大な六角柱を成して繋がっていたのである。人々は、まるでミツバチが巣を拡張するように、居住区、動力区画、研究棟、植物プラントなどの役割を持った六角柱を継ぎ足しながら、火星の大地に都市の礎を築いた歴史をもっていた。

ウォルヒは社内で密かにステンレス・プリンセスという異名で呼ばれている。彼女の表情が金属のように変化が無く、しかも、その特質が錆びることなく揺るぎ無いという意味らしい。歩を進める歩幅や速度も、性格を現して乱れがない。リズムカルであると言うより、秒針が時を刻む無機質な感じである。その秒針が突然に止まった。

壁面から空調機の操作盤でも剥ぎ取った痕だろうか？ 壁の一面が照明に彩られて浮き出して、真新しく、四角く、白い。彼女はその新たに出現した壁面に、文字を見つけたのである。当時の作業者が配管やケーブルの接続先をメモしたらしい記号に混じって、二人の人名が見受けられるのである。(2124. 12. 24) という日付らしい数字が並べて書いてある。たぶん、今の

火星では使われなくなった西暦の日付だろう。とすると、人名もこの頃、パネルが設置された頃の名に違いない。数十年も前の文字であり、もちろん、彼女はこの2人には面識がない。

しかし、『エド・キムラ』という黒く硬く几帳面な文字と、『トム・ブランドン』という赤く自由奔放な字体に、この2人が目の前にいるように偲ばれる。火星で生きてきた証として、この都市の一部を築いたのだという誇りを込めて、慎ましやかにこっそりと、隠れるはずの壁面に自分たちの名を書き残したものらしい。珍しいことではない。旧区画の不要部分を解体するときに、こうやって歴史にも残らない人々の名が蘇ることがあり、火星市民はまるで旧知の友に再会したような感慨を抱くのである。

彼女は感情を表さないまま、指先で撫でるようにその文字の奔放さを楽しんでいたが、やってきた家族連れに気付いて、道を譲るように身を避けた。老人が誇らしげに傍らの孫に胸を張っている。ウォルヒは、彼らとすれ違いざま、父親らしい男が語る言葉を聞いた。

「この辺りはね、」

ウォルヒには続く言葉が予見できるようだった。母親も子供の手を引きつつ建物の説明をする。

『あの辺りはね、あなたのお爺ちゃんが造ったのよ』、肩車した幼い息子に『この区画の移動システムは、俺が造ったんだ』と語る父親。ここだけではない、火星の地で生活する市民の大半が、そんな経験を持っているのである。

しかし、彼女にその経験はない。彼女の父親は地質学、母親は惑星環境学の専門家であつたらしい。彼女は母親が自分の職務

を「大地との通訳」と称したのを臚気に記憶している。言葉少ない大地と、人類の橋渡しをするという意図を込めたに違いない。

人類は温室効果ガスを放出して、この星に太陽の温かさを受け止める。時を経て上昇した気温は氷を溶かして地表に川や海を作り出すはずだ。水はバクテリアや植物をはぐくんで、やがては、この地表に人が呼吸できる大気を生み出すだろう。ただし、まだ、呼吸する大気を生み出すために、二千年以上の時を経なければならぬと考えられていた。人類は文明と同じ時間をかけて、この星に根付こうとしているのである。地球時間で僅か28歳に過ぎないウォルヒに父母の業績の片鱗も感じることが出来ないことは当然といえる。

「すみませんが」

彼女に語りかける者がある。未だ若い、10代、地球時間で言うと22、23歳の女である。おしゃれをして着飾った様子から他の都市からの旅行者だと知れた。祖母らしい年齢の女性を伴い迷っている様子である。そうだろう、旧区画は規格統一された六角柱が繋がっていて、慣れない者や長らくこの町を離れていたものたちが、自分の位置や方向を見失い迷子になることが多い。新区画なら環境システムに思考ロボットを転送して音声で道案内をさせることも可能だが、旧区画にはその設備が無い。その不便さを甘受しても、この区画は歴史の遺物のように、当時のありのまま保管されているのである。

「あっ、おばあちゃん」

女はウォルヒを見て祖母を振り返った。その言葉から孫と祖母

という関係が、ウォルヒの中で確証になった。孫に指摘されなくとも、老人はウォルヒの襟元のバッジに気付いており、老人は自分の襟についたバッジを握りしめた。

「あなたも？」

ウォルヒは老人の問いかけを逸らして尋ねた。

「北公園、、、大地の碑へ行かれるのですか？」

「ええ」

「行く先が同じです。ご案内しましょうか？」

「ええ、、、」

老人とウォルヒの会話はそれだけで足りた。周りの光景を興味深く見回しつつ、歩幅がほとんど変わらない。ただ、彼女は老人に合わせて歩調を落とした。彼女は、ほぼ、想定していた時刻に目的地に到着した。都市の北西の隅、既に旧市街を抜けている。突然に、天井が高くなったところが、北公園の一部で、展望区画になっている。ドームの天井と壁面がこの区画だけ透明で、他は高分子素材の建材で被われて白い。更に、展望区画に近づくと、白い高分子の床が途切れて、火星の大地が赤く、素のままで露出して、シンカンサイ市の端に訪問者の足跡を刻んでいるのである。ウォルヒは踏み出す足の一步毎に、しゃりしゃりと赤い砂の感触を味わっていた。訪問者の目の前には現在の火星を象徴する光景が広がっている。

シンカンサイ市。タルシス台地の西部、アルシス山の裾野にあって、まるで、岩や古木の根に生える苔のような生命感を持って、火星の大地にしがみついているのである。東西の差し渡しは4.9 km、南北が5.1 km。上空から見ればやや歪な楕円形を

している。その楕円形が最大高さ57mのドームで被われて、34万人もの人々が、火星の大気から切り離されて生活しているのである。広大な地表から見れば、いかにも小さい。こういう小さな輝きが、火星の地表にへばりつく苔のように点在して、ふと気付いてみると、火星は既に12億人という人口を抱えているのである。

展望室の透明な壁面を通して、北西方に淡い炭酸ガスの霧を背景にパボニス山が見える。そのゆったりした稜線から想像しがたいが、標高2万メートルに達する火山である。地球のエベレストに比べると、実に2.5倍の高さを有する。この山ばかりではなく、この山の稜線に隠れて、太陽系最大とも称されるオリンピア山、南西のアルシア山が分布していて、このタルシス台地は、火星でも屈指の火山地帯ともいえる。

再び、北方に目を転じると、アスクレウス山が400キロメートルに裾野を広げているはずだが、地平線が淡い霧に被われてぼやけて見えない。景色はこの地平線によって、空と大地に切り離されていて、上空は大地に染まったように淡く赤い。地球市民が空の色を海の色にたとえるように、彼女たちはこの空の色を真珠の色にたとえている。人類が大気に放出した膨大な温室効果ガスが効果を現し始めていて、極冠のドライアイスが昇華して、大気中の二酸化炭素が僅かながら増加している。その為に、ウォルヒの父母の時代に比べれば、この真珠の色はやや赤みを増しているはずだ。この大気は太陽の熱を受け止めて大地を暖め、凍り付いた水を地表に戻すのである。この色の僅かな変化が、ウォルヒの

父母たちテラフォーミング技術者の成果といえる。今、火星の水の一部は、薄い大気に溶け込み始めている。しかし、川や海という姿で液体の水を見ることが出来るのは、未だ数百年も先の話である。

そんな火星の微妙な変化が、地球に住む人々には悠長に見えたのかもしれない。火星市民の心の変化を段階を追って区切るとすれば、これが地球と火星に住む人々の最初の価値観の分岐だったに違いない。地平線の手前に、縁が尖った真新しいクレーターを見受けることができるのである。『火星の息吹計画』の傷跡である。

現段階で、乾いて干からびた地表を、液体の水で潤すことが出来れば、植物を育て、大気の中に酸素を作り出すことが数百年早まる。というのが、『火星の息吹』で地球市民が主張した趣旨である。もちろん、最初は藻や苔のような植物だが、地表が緑で被われると言うのは哀れな火星市民に対する最大の援助物資に見えたのだろうし、そうなれば、溢れ返った地球の人口を、更に火星に移すことも期待できるのである。

ウォルヒの父母に代表される火星市民のテラフォーミングの試みは、地球の巨大資本が推進する『火星の息吹計画』に押し潰されるように、取って代わられることになった。火星市民は計画に疑念を抱いた。記録に寄れば、計画が推進される以前に、市民から正式な抗議がされているし、実施段階においても、このシンカンサイ市で大規模なデモやストライキが起きたという記録が残っている。巨大なエネルギーを注いで大地を掘り返すということや、地中の水を取り出したとしても、数十億トンと推定される水や

液体の炭酸ガスを計画通り制御することに不安を抱いたのである。

（我々の地は実験場ではなく、我々は実験用のマウスではない）という不安と不満である。

彼らの不安は的中した。タルシス大地中央の地層深く眠っていた水の一部が、そそぎ込んだ巨大エネルギーによって、地盤を揺らして人間の制御を失ったまま吹き出した。数億トンもの水の噴流が岩を伴った濁流となって無防備なシンカンサイ市を襲ったのである。当時、一万人三千人を越えた都市である。濁流は都市と人の一部を流し去って、西方のノクティス・ラビリントスの窪みの中に消えた。いま、大地と人々に傷跡を残した水は、再び地中に消えたり、空に昇華して液体の姿を留めていない。

この事故によってシンカンサイ市は都市の中核機能が破壊されて行政機能が麻痺したばかりではなく、空港・通信施設にも多大な被害を被り、医薬品、エネルギーの供給も途絶えてしまった。そして、この事故は彼女たち火星市民にとって様々な意識の転換点になった。

この都市の古老たちが語ることがある。

「空は荒れて航空機が飛べる状態ではなかった。このまま寒さや渇きで死んでしまうのかと、腕に抱えた子供を不憫に感じたときに、砂嵐の中から物資を満載したトレーラーのキャラバンが出現した」

『出現した』という表現に、この時の人々の予想もしなかった驚

きや感謝が溢れている。

ルナ平原のピッカリング市から救援隊が到着し始めたのである。未だ、交通網は整備されていない時期だから、火星地表の荒れた大地の表面を数十台のトレーラーが全速力で駆け抜けたのだった。ほぼ同時にピッカリング市を出発したトレーラーが、到着したときには、最初のトレーラーの到着から最後の一台を迎えるまでに、11時間を要したという。その時間の間隔に、個々のトレーラーの運転手の技量が現れた。彼らが仲間を思いどれほど全速力で突っ走ってきたかが分かるだろう。

ピッカリング市の人々ばかりではない、火星全土から補給物資、医師や看護師等の人員が到着し始めた。生き残ったシンカンサイ市の人々は彼らによって救われたのである。

居住区から壁一つ隔てた外は、人の生存という観点から見れば、真空と変わりがなく、もちろん呼吸することなどかなわない、当時、赤道に近いピッカリング市やシンカンサイ市の辺りですえ、平均外気温はマイナス60度、気圧は地球の百分の一に過ぎず、人の感覚では真空と代わりがない。耐寒と圧服を装着していなければ、人は5分と生存してられない環境である。この火星では、わずかなトラブルで人は死ぬ。

限られた物資をシンカンサイ市の人々に分け与えて、ピッカリング市の人々自身が危険に晒されることもあり得るはずだ。

(何故だろう)と、古老は首を傾げるのである。

彼らを救援に赴かせた動機についてである。人道的という、人が後天的に身につけた言葉で表現できるものではない。この火星の場合、救援するというのは聞こえはよいが、それがそのまま家

族の命を危険に晒すことにもなるのである。英雄的な行為かもしれないが、とうてい、人道的という美しい言葉では語れない。

と、すれば？

人の性別や民族には関わりがない、特定の信仰とも無縁なようだ。人類はその誕生と共に民族、政治、宗教という衣服を身に纏い、憎しみや悲しみという感情をアクセサリーにしている。そのアクセサリーや衣服を剥ぎ取った時に、その奥底に善意の火種のような物があるらしい。都市の古老は、その正体をはっきり見極めることも出来ないまま、ただ首を傾げるのである。

この北公園の碑はその時の記念碑で「記憶の碑」と呼ばれた。事故で亡くなった人々の名と合わせて、残された者の命を救ってくれた人々への感謝の言葉が刻まれているのである。

碑の基礎部分の後ろには出入り可能な空洞があり、事故で亡くなって人々の名前を刻んだプレートが収められている。

遺体も見つからず、ウォルヒが心の中で亡くなったのだと納得せざるを得ない父母の名と、当時まだ幼かったウォルヒの腕の中で冷たくなった弟の名を刻んだプレートもあった。そして、その上方、碑の裏側には命がけの救出に関わった人々の名が感謝の念と共に刻まれていた。

老人は黙ったまま、指先でその数々を愛でた。夫か、息子か娘、失った大事な人々への思いがこもっている。ウォルヒは老人にかける言葉が無い。

ウォルヒは若い女に右手のほうを指し示して言った。

「お帰りのときは、あちらの区画をまっすぐに2つ抜けると、ム

ーヴァーの駐輪場があります」

透明な高分子の壁面から見える火星の風景と、碑の裏に刻まれた名前が重なった。彼女はゆっくりと碑の周囲を回って正面に相対した。

『忘れないでください、私たちのことを』

亡くなった人々が残された人々に投げかける言葉、

生き残った人々が感謝を忘れていないということ

そして、地球にも向いている。

遠く離れてしまった自分たちのこと

そして、救われたと思う反面、彼らは夜空を見上げて思うのだ。
。

(地球は、遠すぎる)

ふと気付いてみると、彼女たち火星市民は、地球とずいぶんと距離を置きすぎてしまっていたのである。

今や、細々と、と表現しても良い。火星の気温を上昇させるためには6千億トンという膨大な温室効果ガスが必要だと見積もられている。この地の人々は、温室効果ガスを放出し、極地のドライアイスを溶かして数百年先の海を夢見ながら生活しているのである。

大地に根を張ると言えば聞こえはよいが、この時期の都市は人類にとって風に吹き飛ばされるのをようやく防ぐほどの僅かな足がかりにすぎない。

この広場の入り口にはパトロールの警官が居る。この区画への立ち入りを制限しているのである。警官が姿勢を正した。ウォルヒの胸のペンダントに気づいたのだろう。事故の遺族だということを証明する品だった。警官の姿勢は、幾つかの事実を示唆している。

1つは、これらの人々が先達の命を代償に築いて来たものの上で、生活をしていることを知っていることだ。そして、人々は火星の大地を安息の大地だとは感じていないらしい。

今一つ、この種の地球との接点となる史跡が、テロ事件の標的となりうる点だった。連邦宇宙軍施設爆破事件があり、軍関係者に死傷者を出していた。テロの警戒がこの一帯にも広げられているのである。人類という共通項で括られながら地球人の枠からはみ出しているのである。火星市民は我々が何者かと言う共通の不安を抱いた人々だった。

ウォルヒは無表情で言った。

「お父さん。お母さん」

ここに来る度に何かもやもやしたものを感じて口ごもってしまうのである。両親が果たせずにいたもの。テラフォーミングの夢かもしれない。ウォルヒが成人するのを見届けることが出来ないという思いかもしれない。或いはウォルヒの弟を幼いまま死なせてしまう後悔。同時にウォルヒは両親から何かを背負わされたような気もするのだが、それが何かわから無い。彼女は試みに言葉にした。

「私たちは、私たちの船を造る事になりました」

父母とは異なった道を歩んだウォルヒ・パクが、彼女の決意を口にした最初の言葉だった。

場面は変わって、物語は一ヶ月ほどさかのぼる。

ネヤガワ工業社長ウルマノフは、営業部のイマムラを伴って顧客訪問の最中である。

(人物にも、物事にも、長所と短所がある)

そんな単純な持論をウルマノフは堅持している。この場合、彼の行為の短所というのは、顧客訪問のための移動時間のロスである。顧客と面談するために相手を訪問する必要はない。普通の家庭にもある通話装置を用いれば、スクリーンに相手の映像が投影されるし、気の利いた高級品なら、立体映像を映し出すことも可能である。離れていても、微妙な表情の変化や動作を感じ取りつつ会話ができるのである。にもかかわらず、この男は部下を伴って移動している。

一方、長所というのは彼が「温感」と称するニュアンスを伝えることが出来ることである。交渉事では、何よりも相手の首根っこを掴んで放さず、彼の主張をじっくり話して聞かせるのがいいと考えているのである。その強引さは、『ロシア者』と呼ばれることがある。

この時期の火星で、地球の様々な地域を示す用語を用いて、例えば、『ヤンキー血筋』とか、『インド者』と言われるような表現があった。地球外に生活圏を有する人々の間で、地球の束縛から逃れようとするほど、一方では故郷に関わる表現を生じた。そして、火星市民は夜空を見上げたときに、無意識のうちに地球という星ではなくて、自分の異名に該当する地域を探していたりす

るのである。

ミハイル・ウルマノフの場合、凍てついた大地の上でも、失われることがない暖かな包容力を、長所として語る場合と、厚顔とも思える粘り強い交渉力を発揮するときに、『あれはロシア者だから』と理由付けされるのである。彼自身と父親は火星生まれだし、母親は月面都市で育ったから、地球とは直接には関係がない。ただ、地球儀の上で、祖父が生まれたというシベリアという地域を知っているだけだ。彼は幼い頃に、地球に住む祖父が語るのを聞いた覚えがある。

「我が家は、ロシア貴族の誇りを受け継いでいる」と

成人してから、その祖父の言葉を父親に尋ねたのだが、全くのでたらめではないらしい。ただし、誰それの叔母だの、兄弟だの、姪だのという姻戚関係を示す言葉が幾つも並んだ後、ようやく一人のロシア貴族に行き着く関係だから、ほとんど血縁はないといってもいい。しかし、ウルマノフはそういう祖父を、微笑ましく記憶している。もしも、機会に恵まれていれば、祖父の膝の上でそんな昔話をねだっただろうと思うのである。祖父のごつごつした無骨で質朴な指先を通じて、シベリアという土地を開拓して、生き抜いてきた祖父や曾祖父の人生が、火星で彼を育てた父親の人生と重なって、俺の血筋はこういう血筋かと考えるのである。血筋というものは敬意を払うべきものだが、身分制度ではなくて、子孫のために積み上げた労苦の大きさにに対して払うべきものだろうと、父母の人生が彼に教えていたのである。

「これは、シベリアのようだ」

ウルマノフが社内を表現したことがある。地球市民なら、荒涼

としたというイメージを描いて、使うはずがない表現だろう。しかし、ウルマノフは懐かしさを込めて、事務所の光景を称した。

彼は社長就任に当たって、まるで地を均すように、社長室の壁を取り払うということをした。そのために、1つのフロアーがぶち抜きで、中央に社長の席が位置するという、事務所として珍しい構造になった。部下たちにはシベリアという意味は良く分からないが、地平線が見えるほど、見晴らしが良くなったという意味だろうと推測した。

事務員にとって、社長の目が行き届くと言うことは、仕事をさぼる気はないなせよ、随分堅苦しくなる。ただ、ウルマノフにすれば、社員を見張るつもりはなく、仕事の全体の流れを、事務所の雰囲気の中で感じ取って身につけておくというノルマを、自分自身に課していたらしい。

事務所ばかりではない。技術部や製造部からは、秘書課に対して『あのヒグマに、電波発信機付きの首輪を付けておいてくれ』という冗談が囁かれた。野生動物の行動をモニターしておいて、接近したときに警報を鳴らせというのである。ウルマノフが何の予告もなく、技術部や製造部に出現して作業者を驚かせることが、何度も生じたからである。社長が出向く必要はなかった。必要なら社長席の端末で作業の進行を確認できるはずだし、役員会議で各部署の責任者を呼ぶことも出来るはずだった。しかし、ウルマノフは技術者だった創業者より、現場に顔や口を出すことが多いとも言われた。これも、技術的な雰囲気を肌で感じようとするウルマノフが、自分に課したノルマだったに違いない。

こういう中で、秘書が社長の居所を見失ったことが再三起きた。生真面目な秘書課長が、ウルマノフに行く先を端末に記録して置いてくれと懇願したことがある。ウルマノフはそれを黙って聞いていたが、次に席を離れたときには、ちゃんと秘書課長との約束は果たしていた。端末の表示板に、一言、"うんこ"と表示されていたのである。トイレから戻った彼は、秘書課長に黙ったまま笑って見せた。この種の馬鹿げた冗談と人なつっこい笑顔で、ウルマノフは社員を怒鳴りつけつつも、妙な人気があった。しかし、秘書課長を始め社員は、このヒグマを飼い慣らすことには成功していないのである。

一方、陰では、ウルマノフが先代のニシダ社長から経営権を奪ったという噂があり、ウルマノフに同行しているイマムラも聞き知っていた。と言っても、彼が入社する以前の出来事だから、詳しい事情は良く分からない。ただ、先代社長のニシダについて、未だに、その人柄を懐かしむ社員が多いのも事実である。とりわけ、社内の技術者の中には、ニシダに対して信仰に近い感情があった。ウルマノフもそういった噂を知っているはずだが、経営権を引き継いだことについて、一切の論評をしたことがないのである。ウルマノフはその沈黙の中に、頑固さと、人懐っこさと、強引さを「ロシア者」という言葉に融和させているのである。

そのウルマノフは車内で空を睨むように、上向いて黙りこくって機嫌が悪い。この時間のロスの対価は得られていないのである。販売拡大を目的として、彼自身が顧客を回っている。しかし、今回のイマムラとの顧客訪問でも色好い感触はない。

ウルマノフとイマムラが乗るムーヴァーは、14号線を東方に走行してシンカンサイ市に戻った。二人は車の中で黙って過ごした。イマムラを黙らせているもの、ウルマノフに感じ続けている存在感は、彼の体から滲み出す「ロシア者」の香りであるらしい。他の人になんか存在感を感じるのである。

ウルマノフを黙らせているものは、いましがたも腹の底から湧き上がってきたげっぷである。彼はややうんざりした表情で運転席のイマムラを眺めた。この男と顧客を訪問すると、どの顧客でも、気さくな笑顔で飲み物の接待を受ける。二人は朝から既に顧客4社を訪問して、ウルマノフは断りきれなかったお代わりを含めて、7杯の飲み物を腹に入れている。（こういう男か）と、ウルマノフは思った。

大抵の営業マンなら、顧客との相性と言うものを感じる。馴れ馴れしいほど仲がよいかと思うと、別の顧客では冷ややかな対応を受ける、という具合である。イマムラとの顧客訪問ではそれがない。イマムラは馴れ合いになることを避けて、礼儀正しく顧客との間に一線を画しているが、信頼を潤滑油にした仕事の話は、世間話の延長線のように滑らかだった。この信頼と、顧客の女性事務員から呼ばれる『ティベアーさん』というニックネームがイマムラという男を現している。売り上げ成績と言う点では、飛び抜けて有能とは言えないが、顧客の要望を製品に反映させるよう、工場との粘り強い調整を図って信頼を得ているらしい。

ムーヴァーが走る14号線は、シンカンサイ市の南部に入ったこの辺りで高度を感じさせる。巨大な支柱に支えられて宙に浮か

ぶ感じである。居住区や商業区のある北部では、地下と地上合わせて最大8階層に積み重なっているのだが、この都市の本来の目的は南部に集中しており、いくつかの階層を上下に貫通して、中小の工場があるという構造である。

「あれか？」

ウルマノフは何の脈絡もなく、突然、言った。この男の言葉に主語が欠落していることがままたある。しかし、イマムラは良く察して答えた。

「ええ。あれですね」

(やはり、資本力が違う)

二人ともため息を付きたくなる思いだ。二人の視線は、八分通り完成した巨大な工場施設に向けられている。建設が進んで、以前は見えなかったこの位置からも、その存在が見えるようになった。N & B社の小型機サービスセンターである。現在の火星と地球との微妙な関係を慮ったのか、N & B社は『工場』と呼ぶことを避けている。しかし、実質上、小型機を製造することを目的とした工場で、事実、このサービスセンターはネヤガワ工業より数倍大きく、設備も充実しているのである。立地条件も良い。この14号線に隣接して、彼らネヤガワ工業が、整備した船体をいくつかに分解して運搬しなければならないのに比べると桁違いに効率が良い。短すぎる会話の後、二人は再び黙ったまま時を過ごした。彼らが置かれている立場を考えれば、交わすべき言葉がない。

皮肉なことに、ネヤガワ工業とN & B社には強い取引関係がある。地方中小企業に過ぎないネヤガワ工業と、N & B社という

巨大資本の関係を、ウルマノフがロシア者の手腕で作り上げたのである。彼の就任当初、経営危機にあったネヤガワ工業は、N & B社の小型機FW201のライセンス生産権を得て、火星仕様の「スピカ」という名の小型機を製造販売することで、今に至るも存続しているのである。同時に、N & B社は火星に自社製品の販売や製品のメンテナンスの足がかりを得た。以降、両社が共存する時期が続いたのである。

ここ数年来、ネヤガワ工業はN & B社に、FW201に続く新型機アンドロメダのライセンス製造を求めていた。市場では、N & B社がネヤガワ工業を経ず直接に、新型機アンドロメダの売り込みを図っている。ネヤガワ工業で製造する老朽化したスピカの販路が、日毎に閉ざされてゆくのである。しかし、一方では、FW201のライセンス製造を請け負っていた以上、続く新型機の製造も、自分たちが請け負うのが当然だという、ある意味で、虫の良すぎる期待を持ってもいた。

（何故か、ライセンス権に関わる交渉がうまく進展しない）

そういう感触を持っていた彼らに対して、N & B社の回答がこの施設なのである。今後、小惑星資源の開発が飛躍的に活発化する。その時期に、大型艦以上に小回りが利き、汎用性のある小型機の需要が増大する。火星はその需要を満たす小型機の製造整備の中継基地になる。そう読んでいるのだろう。N & B社は、この火星に直接に資本を投入したわけだった。今やN & B社にとって、ネヤガワ工業の存在価値は薄い。現実的なウルマノフが、新型機の自社開発という極めて夢のような目標を、胸のうちに秘

めているのは、こういう理由なのである。

ウルマノフの脳裏に蘇る光景がある。この世でただ一隻だけ作られた高速艇の傍らにたたずむ、先代のニシダ社長の姿である。ウルマノフの脳裏に焼き付けられたイメージだが、不思議なことに、ニシダに漂う雰囲気は臆気で、彼の表情を読み取ることが出来ない。

宇宙船の自主開発と言う点で、彼らは未経験ではない。経理部長として先代のニシダ社長に仕えていた時代に、その夢を試みたことがある。しかし、基礎技術の格差を思い知らされただけだった。現在、製造しているスピカを見ても、船体を構成する部品の1割は地球からの直接輸入品であり、7割はそのライセンス生産品である。とりわけ、核融合エンジンやエンジンに推進剤を供給する高圧ポンプなど、高い工作精度と信頼性を要求される部品は、火星では作れないと言うのが定説で、仮に国産品を付けたとしても顧客から信頼性を認めてもらえなかった。当時の状況は現在より遥かに悪い。また、船の運航を司るコンピューターは作れても、運航させるためのシステムは、小さなメモリーチップに収められた物を輸入するしかない。メモリーチップには地球企業が長年に渡って積み重ねてきた試行錯誤がノウハウとして詰め込まれていて、その宇宙船の運用における試行錯誤には、人命に関わった錯誤さえ含まれている。経験の浅い彼ら火星市民が、学問的知識だけで作れるものではない。MSA-Xと称された自主開発船は、出来上がったものの買い手が付くはずもなく、スクラップとして叩き売られるまで、工場の敷地の隅で晒し者になって

いた。

ニシダはしつこい男であつたらしく、MSA—Xの失敗の後、目先を変えて夢に挑んだ。現在、ネヤガワ工業を支える副社長エバンズを筆頭に、技術部長ストヤン、製造部長カルロスなど古株の技術者は、地球のメーカーや研究機関への留学経験を持つ者が多い。ニシダが技術力の向上を目指して派遣したのである。しかし、戻って来た留学者の目が高慢に満ちて濁っていた。留学者たちは目にした地球の技術力に圧倒されて、その信奉者になった。地球に劣等感を持つ反面、そこで学んだと言うことが彼らの誇りの支えになった。当然、火星の技術力を貶め辱めることが、彼らの行動規範になっているように見られた。留学はネヤガワ工業にとっても火星市民にとっても、何も生み出すものがなかった。ニシダは気弱な面を人に見せようとはしない男だったが、ウルマノフには留学制度は失敗だったかもしれないと語ったことがある。

ウルマノフは車内で過去の思い出を反芻したのだが、宇宙船の自主開発について明るい要素は何一つ無い。しかし、今やネヤガワ工業と社員の生活を守るためには自主開発に賭けるしかないようにも思われるのである。

「リーダーの欄は空けておけ」

ウルマノフは技術部長のストヤンにそう命じていた。開発チームのメンバーの人选は、部課長連中に任せればいい。ただ、そのチームのリーダーはウルマノフの価値観を反映させて、彼自身が判断したかったのである。最も有望だったのが、技術部設計課

に所属するキム課長である。設計課という部署で、顧客の要望を受け入れて、スピカに改修を施すための設計を行っており、経験も豊富に持っている上、顧客から工場に至るまでの仕事の流れを的確に把握しているはずだ。キム自身が有能であるばかりではなく、上司や部下の信頼も厚くリーダーとして適任だった。

技術部長ストヤンを通じて、本人の意思を確認したところ、彼は机を叩いて、こう言い放ったらしい。

「そんな見込みのないものに手を付けて、私に会社を去れと言うのですか？」

彼の言葉には二重の意味がある。新型機開発には全く見込みがないという判断と、この有能な自分を会社が手放せるはずがないという自信である。好ましいとは思わないが一理ある。順風満帆に人生を歩んできた男にとって、宇宙船の自主開発のリーダーを引き受けると言うことは、危険のみ多いと判断したのだろう。やや前向きといえるのは、彼が業務に関わる組織改編を、新たな部署の名と共に提案したことだ。

「技術開発課という程度の名で良いんじゃないでしょうか？」

国産機開発をやるというなら、現在の設計課に持ち込むのではなく、専属の部署を作れと言うのである。ウルマノフは国産機開発を技術部設計課の内部でやろうとした。会社組織を複雑にはしなくなかったからである。しかし、技術部長ストヤンは、この時にはキムに賛同した。そして、『技術開発課』という任務から考えれば奇妙な名称は提案通り採用された。しかし、その名称には新しい技術に挑むというニュアンスをなんとかみ取ることは出来ても、宇宙船の自主開発という本来の匂いを感じ取ることは出

来ない。ストヤンやキムに自主開発という夢を追わせるのは難しそうだった。今のウルマノフには、技術部長ストヤンや設計課課長キムに代わる技術的な指導者のめどが立っていた、今のウルマノフが欲していたのは調整役としてのリーダーである。

ムーヴァーで走っていると、N & B社の施設の巨大さが分かる。ウルマノフの真横に、N & B社のロゴマークを大きく描いた新工場が大きくそびえている。彼が思い出にふけている間に、この施設を通り過ぎて遠ざかるどころか、工場の外周に沿って走行しているのである。唐突に、ウルマノフはイマムラの横顔を眺めて言った。

「よし。ひとつ、あそこへ表敬訪問といこうか」

建設途上のN & B社の工場に乗り込んでみようと言うのである。イマムラを観察する感もある。イマムラは彼の思考ロボットから運転機能を取り戻して、彼自身が工場に向けて四輪ムーヴァーのハンドルを切った。

「そうですね」

言葉に力みが無く、しっとり体温を帯びている。言葉の前に行動に移っていて躊躇がない。現在のN & B社との関係は競合メーカーになっていると言っても良い。そのメーカーにアポイントもなく乗り付けるのである。規模が桁違いで、彼らが相手にしてもらえないはずがなく、その強引さに多少の戸惑いがあってもいいはずだ。今後の交渉のために、呈の良い強行偵察をしておこうというウルマノフと違って、イマムラの迷いのなさには、心の奥底

に人の善意を信じ切っている楽天的な面がある。その笑顔が透明で曇りがない。

(いい笑顔をする) とウルマノフは思った。

そして、テディベアーさんという、小太りのイマムラのニックネームを思い出しながら考えた。

(この男も、苦勞すれば。もう少し痩せられるだろう)

新型機開発の指揮をこの男に任せようと思ったのである。新型機開発のための最後の人が終わったのである。

出張から戻って2日目。イマムラが営業部長のシンプソンから呼び出しを受けたが、その理由には全く心当たりが無かった。普通なら、所属する営業一課の課長を経由して連絡があるべきだった。呼び出した部長自身にも心当たりがなに違いない。ディスプレイに映ったシンプソンの表情にも困惑が隠せなかった。

「いいニュースがある」

部屋に顔を出したイマムラにシンプソンはそう言い、握手の手を差し出してその理由を付け加えた。

「おめでとう。君は、明日付で課長に昇進だ」

しかし、シンプソンの笑顔の中に困惑が消えていない。普段は開けっ放しにしているドアを閉じるように、身振りで指示して続けた。

「そして、私にとって残念なことだが、優秀な部下を失うことになった」

やや、二人の会話に間が開いた。両者とも困惑しているのに違いなかった。

「明日付で、君は今回発足する技術開発課に異動になる」

「技術開発課？ 聞いたことがありません」

中途半端な部署名で、その名称からは、何をするのか分からない得体の知れない雰囲気漂っている。

「技術部の中で、新しい船の開発に当るそうだ」

「私が、ですか？」

その声音は不思議さに満ちている。イマムラの入社時の部署は販売促進課で、スピカのパンフレットの作成にあたった覚えがある。その当時の直属の上司が、目の前のシンプソンだった。イマムラはこの男から、営業の仕事を基本から学んだのだった。その後、数回の人事異動は経験したが、営業部内に限られたもので、自分は根っからの営業マンなのだと思っていた。直接に顧客と触れ合う仕事は、成果が目に見えてやりがいがあった。苦労も多いが、この仕事が嫌いではなかった。

シンプソンの立場から見ても、イマムラと顧客を回ると、嫌な顔をする顧客が居なかった。受付の女性事務員さえ、彼にテディさんというニックネームで呼ぶ者がいた。イマムラが小柄で小太りだったから、縫いぐるみのクマを連想したものらしいが、顧客と気さくに世間話が出来るといえるのは悪いことではなかった。営業マンとして派手さや強引さは無かったが、顧客の意見を良く聞いて、可能な限り意見を反映させる努力を怠らなかった。シンプソンがさっきの会話で、イマムラを優秀な部下と評したのはお世辞ではない。イマムラ本人から見ても上司から見ても、特別な欠点無く嫌な仕事も無難にこなす男だった。

「ここだけの話のだが、何かやらかしたのか？」

シンプソンは懲罰人事ではないかと考えているらしい。イマムラと直属の上司の相性は悪くは無いはずだったし、イマムラからの転属願いも出ていない。それならば、先の顧客への同行の時に、イマムラが社長の逆鱗に触れるようなことをしでかしたに違いない。しかし、イマムラにはその心当たりは無かった。二人の営業マンは、宇宙船の自主開発という目的から、この異動を懲罰人事に結び付けている節があった。

自主開発については、彼らの立場で振り返れば、ネヤガワ工業の営業部は過去にひどい苦渋を嘗めていた。先代のニシダ社長はこの企業の設立当初から自主開発の夢を持っていた。その開発船をMSA-Xと称したが、その実体はエンジンモジュールに国産品使うという控えめな試みだった。社長の叱咤激励にもかかわらず、社の命運を左右するはずの船体は、営業部員の努力にもかかわらず全く売れなかった。工場には売れる見込みの無い船体が放置された。輸入コストを加えても、大量生産する地球製のエンジンの方が安かった。彼らの船体の信頼性は格段に劣っていた。高価で信頼性の無い船体を購入する顧客が居るはずは無かった。結局、スクラップとして叩き売るしかなかったのである。

自分たちに作って売れるものは、チタン製の骨組みだけだと自虐的に囁かれた。自社開発は商売にならないという定説が、このときの思い出話とともに、ネヤガワ工業の新入社員に固く引き継がれていた。現在、ネヤガワ工業の営業マンにとって売上を支えているものは、

「我が社のスピカは、たとえ火星で作っていても、元は信頼性の

ある地球製の船体です」と言うセールストークだった。

こういう経緯があって、先代のニシダ社長の意思とは別に、営業部員は自社開発について嫌悪感があっても好感を持つ者はいなかった。その業務への異動と聞いた彼らが、懲罰人事を理由に挙げたのも無理は無かった。

もう一つ、二人は口には出さないが、思い当たる理由がある。スピカのライセンス権を有する地球に拠点を持つN & B社が大規模なサービスセンターを火星に築いていた。先の顧客訪問でウルマノフと共に眺めた施設である。協力関係が競合関係に変わりつつあった。概して火星メーカーの方が不利な条件に立たされていることに違いは無かった。

N & B社は彼らの新型機を売り込んで、協力工場のはずのネヤガワ工業の市場を食い荒らしつつあった。当然のことながら、彼らが新型機のライセンス権を、今や競合するネヤガワ工業に委譲するはずは無かった。防戦するネヤガワ工業にはスピカという旧式機と、顧客の要望に合わせて旧式機の改良型を作りますというノウハウだけだった。改良するにしても旧式の船体をベースにするのだから新型機に対抗できるほどの性能の向上は期待できなかった。顧客の新たな受注は明らかにN & B社に流れていた。

売上が低迷する中で、社員にとってもっと身近な問題として、大規模な解雇が囁かれていた。イマムラやシンプソンから見て、会社が業績が上がるはずの無い部署を創設して、解雇する予定の社員を異動させ、業績不振を理由に社員ごと部署を消滅させるといふ手口は、いかにもありそうに思えたのである。なにしろ強引

なウルマノフ社長のことである。やりかねない。しかも、根っからの営業マンとして、技術に疎いはずのイマムラをその部署のリーダーに据えているのである。

「まずは偵察がてら、新しい上司に挨拶に行くことだな。会議で顔を合わせる限り、頑固だが悪い男じゃなさそうだ」

シンプソンは肩を叩いて励ましたつもりだったが、うつむいて部屋を出てゆくイマムラには、慰めもならなかったようにも思えた。彼はもう解雇されてしまったように、うなだれて妻の名を呟いた。

(アマリアにどう説明したらいい?)

結局、その日の彼は妻に自分の得体の知れない昇進を告げることが出来ず、あくる日も、その次の朝も、自宅から彼を送り出す妻のアマリアにとって、夫はネヤガワ工業の営業部員のままだった。

出勤途上のウォルヒの表情は、柔和で落ち着きがあるものの、常に事務的な香りを漂わせていて近寄りがたい。彼女のウォルヒという名は、昔の地球の表意文字で表記すれば、「月のお姫様」というロマンチックな意味を持っていることが分かる。

その名の持つ童話じみたほのぼのした雰囲気と、生身の彼女に漂う冷徹な雰囲気ギャップをもじって、同僚は彼女に『ステンレス・プリンセス』という異名を与えていた。

自分の異名と、そう名付けられた理由を、彼女は自覚している。幼い頃から、彼女は感情を表に出すのが苦手だった。大勢の人の中にいることは、嫌いではなかったが、もっぱら感情の受け取り手としてであって、自分の感情を語るということがなかった。他人に溶け込むために、努力を必要とするのなら、彼女は幼い頃からその努力を怠ってきた。

しかし、その硬い表情の中で密かにだが、今日の彼女は機嫌がよいのである。上司のキム課長に提出する予定の提案書が出来上がったこと。そして、もう一つは起き抜けの歯磨きの時に”自分の鼻の頭が見える”という発見をしたことである。やや、寄り目で口にくわえた歯ブラシを見ると、視界の中に自分の鼻の頭が見えるのである。彼女は地球時間で28歳という歳で、初めてその事実に気付いたのだった。世の中の趨勢には、全く寄与することのない新発見だが、彼女は子供なら母親に報告に走るような衝動で、にんまりと笑いたくなるような感情が湧き上がって来るのを感じたが、それが表情に反映されることはなかった。彼女はそ

ういう発見を面白がる子供じみた感覚を秘めている。しかし、彼女はそんな寄り目で、鼻を眺めている自分を人に見せたいとは思わない。

コロンが操縦する四輪ムーヴァーで会社に着いたのが、8時11分。事務的な笑顔で保安部員に挨拶をしたのが8時19分。保安部員が挨拶を返しつつ、時刻を確認した。保安部員たちが、彼女の出勤時間に合わせて、時計の誤差を確認すると言うほど、この時間の正確さに定評がある。彼女にすれば、この時間に会社の正門を通過すると、二カ所のセキュリティーをくぐる時間のロスを含めて、8時30分には技術部設計課の部屋に着けるはずだった。

ネヤガワ工業の技術部設計課という部署が、この日までの彼女の職場だった。加速力の増大、航続時間の延長、探査機器の出力増大など、顧客がスピカに求める要求を取り入れて、船体を改設計する。そのデータをシュミレーションセンターに転送して、設計上の問題が無いことを承認してもらった上で、設計データを製造部に転送して、彼らの作業は終了する。宇宙船の設計とはいえ、彼らが扱うものは、量子コンピューター上の数値と、映像だけなのである。その為に、設計課のドアをくぐると、室内は機械部品一つなく、清潔感に溢れている。職場内はラベンダーの香りがうっすら漂っている。キム課長の好みである。部下の集中力を高めるのだという。手前に机が6つ並んでいて、コンピューターの端末が置かれている。奥の仕切られたブースの中に課長の席がある。

部屋の中は既に明るく照明がついており、空調機も働いていて

温かい。コロンが四輪ムーヴァーから、社内の環境システムに移って、この部屋の環境をコントロールしているのである。彼女はいつもの席に手荷物を置いて、誰にともなく言った。

「コロン。ココアをちょうだい」

まだ入社している同僚はいない。必要な会議の時以外は、出勤時間が定められているわけではないから、おかしなことではない。彼女はいつものように『机の上を拭く』という行為をした。汚れているわけではないから、その必要はない。それでも、同僚が見れば驚くほど、念入りに拭いたのである。キム課長によれば、それが彼女が仕事を始めるための儀式だった。

数分後、ウォルヒは小さなチャームを合図に、ドリンクサーバーへマグカップに入ったココアを取りに行った。温度、砂糖やミルクの分量が彼女の好みに合わせてあるばかりではない。早朝、自宅で飲んだココアより濃いめにしてある。彼女の体調に合わせて微妙に調整されているのである。

彼女はマグカップに口を付けて一口飲み、味に満足するように「よしっ」と気合いを入れて、朝の儀式を締めくくった。

既に、端末から電子ペーパーと称される液晶フィルムに、彼女の昨夜の仕事の結果が印字されている。コロンに任せればよい作業だが、彼女はあえて自分で端末を操作した。このデータは彼女の自宅から会社のサーバーに転送したものだ。データをそのまま課長の端末で表示させればよいのだが、古い体質の人々の中には印刷された物をありがたがる人々があり、彼女の上司もそんな人間だった。

データの内容はスピカの推進剤タンクの増設に関わるものだ。推進剤タンクの重量増加による加速性能の低下というデメリットと、搭載する推進剤が増加することによる航続時間の延長というメリットを詳細に比較したものだ。彼女の考えによれば、この改良によりFW201スピカという旧式機は、顧客にとってより好ましい船体になるはずだ。スピカの主たるユーザーである保安局高速機動隊から、航続時間の不足を指摘されていた。搭載した推進剤タンクが小さすぎるのである。彼らメーカーから見れば、やむを得ない。西暦2134年のロンドン条例で大型艦に搭載するエンジンの出力規制、2年後のルナ条例で小型機を対象にして推進剤タンクの容量について制限という2つの制限が課せられている。

この2つの条例の目的は、民間で製造される宇宙船を、許可無く軍事目的に転用させないということであり、一般の船にはほとんど関係がない。スピカの場合は高速機動隊のパトロール艇やレスキューの司令船として使われるため、どうしても緊急時に高加速度が要求される。そこで、この種の船体について推進剤タンクの容量を制限することで、惑星軌道近傍に行動範囲を制限し、軍事目的への転用を防止しているのである。

ウォルヒはユーザーが求める航続時間の延長という要求に対して、核融合エンジンのやや前方に増槽をつけることを思いついたのである。船体に固定した推進剤タンクの容量を増やす代わりに、切り離し可能なタンクをつけること、そのタンクの容量を1基300リッター以下に抑えることで、規制の制限を免れる事に気付いたのである。しかも、そのタンクが船体の重心に極めて

近い位置に取り付けられること、船体に特別な補強を要しない事など、彼女の思いつきは最適な改造方法のように思われるのである。

「おはよう。ウォルヒ君」

キム課長である。上司の信頼ばかりではなく部下の人望も厚い。

「課長。見ていただきたいデータがあるのですが」

キム課長はウォルヒの手にある電子ペーパーにちらりと視線を送った。ウォルヒの意図が分かるのである。今回が初めてではない、また、何か新しい提案を持ってきたのだろうが、うんざりだと思った。

営業部を通じて設計課に持ち込まれる仕事如山積みになっている。顧客がこれから購入するはずの新造船の市場は、地球の大資本に占有されていて、ネヤガワ工業が食い込むことは期待できない。しかし、老朽化しつつある現用船の寿命延長を狙った小規模な改造の要請は頻繁にあり、ネヤガワ工業は先行きの不透明さの裏腹の忙しさに、どっぷり浸かっているのである。しかも、このような作業は大きな利益を生み出すはずはなく、得られる利潤は企業の労力に見合っているとは言い難い。

彼女には危機管理部から提示されているペイロード増大について、データをまとめておくように指示してあるはずだ。たとえ、個人的な時間を利用しているとはいえ、もっと指示した仕事に専念してくれと言いたくなるのである。

また、キムは営業部員を御用聞きと見下してもいる。彼の見る
ところ営業部員は顔なじみの顧客を回って、その要求を集めて来
るのみで、こちらからの提案を顧客に説明し納得させて購入に結
びつける能力など持ち合わせては居ないと考えているのである。

しかし、彼は感情を隠して人の良い笑顔をを浮かべて言った。
「後で見てください」

このあたり、この男が女子社員に人気がある所以だろう。し
かし、ウォルヒは食い下がった。過去のデーターは全て、課長の
机にしまい込まれてしまって、今度こそ、ものにしたいと思っ
たのである。このしつこさに、キムもやや腹に据えかねたらしく、
ウォルヒの差し出す電子ペーパーを奪い取り、データーを消去す
るという行動で、感情を現した。何か言いたげなウォルヒに畳み
かけるように言った。

「君に向いた仕事がある」

新たな部署が創設されるというのである。

「昨日、部長から新しい部署に一人出すようにとの指示を受けた
。君を推薦して置いた」

「異動ですか？」

ウォルヒは宇宙船の設計という仕事から離れてしまうのかとい
う不安で、そう尋ねた。

「新しい部署で自社開発が始まるそうだ」

始まるそうだという伝聞ではない、キム課長自身が新たな部署
の設置を提案した。現実味のない任務を、この部署に持ち込ま
れて、作業が混乱するのを防ぎたいのである。ウォルヒはそのた
めの、いわば人身御供だった。ウォルヒが抜けて、仕事が忙しく

なるには違いないが、職場が混乱するより遥かにましだ。

「君が今抱えている作業は、キャロウェイとクラフトが引き継ぐ」

次々出勤してきた設計課メンバーの中では、課長がやっかいばらいをしたのだという囁きがあったが、ウォルヒについて同情的な言葉がない。彼女のこの部署での立場を象徴している。彼女は同僚の噂を気にする様子がなく、心の中で課長の言葉を反芻していた。

(宇宙船の自主開発?)

彼女の血の中に、かつて人が空を飛んでいたという、うずうずと心を震わす記憶があった。

「火星に着いてから6日目の朝だ。昨夜、部屋の中がやっと片づいて、隣のワイスさんとチェスを楽しんだ。今朝が初出勤だ」

短い単語を簡潔に繋いだラベルの言葉は、彼の木訥な性格を表しているのかもしれない。ただ、年老いた妻に対して、柔らかな愛情も感じさせる。思いつくまま語るラベルの声音は、少し落ち着いた穏やかな調子を取り戻している。火星での生活に馴染んできたという証拠だろう。彼は意図してチェスの話を挿入した。地球市民に対する火星市民の感情悪化を心配していた妻に対する配慮である。この言葉は電子メールにしたためられて妻に転送されるのである。電子メールという通信形態は、キーを押すという作業が、話し言葉に置き換わっただけで、基本的に200年も前と変わらないのである。

こうやってメールをしたためつつ、ラベルは20年前、初めてこの火星にやってきたときの事を思い出す。地球の妻と惑星間通信による会話を試みたのである。もちろん、計算上の時間は知っていたから、会話を始める前に、テーブルに飲み物と軽食を準備した。最初に言葉を発してから、妻の返事が返ってくるまで26分以上を要した。カップのコーヒーは2杯目になっていた。ラベルはぽつりぽつり言葉を区切って話し続けたのだが、妻の返事はラベルが26分以上も前に話した話題に向けられている。日常会話で、それほど以前に自分がどんな話をしたかなんて覚えているものではない。こちらが深刻な話をしているのに、ディスプレイに映った妻は、26分以上も前のラベルの冗談にけらけら笑って

いたりするのである。当時、銀婚式を迎えようとしていた仲の良い夫婦に会話が成立しなかった。頭の中で想像する感覚以上に、二人は隔てられていたのである。

(随分、遠くまで来た)

そんな感慨を抱かざるを得なかった。そういう苦笑いと共に思い出す記憶である。

荷が少なく几帳面な性格にも関わらず、5日目の夜にしてようやく部屋が片づいたというのは、2日前にこの小さな部屋に引っ越したからだ。ネヤガワ工業が彼のために最初に準備した部屋は、彼に対する十分な敬意を表した部屋だった。

(経理出身のくせに、随分と無駄遣いをする)

ラベルは部屋の中の贅沢な調度品を撫でて、苦笑いしつつ思った。自分を火星に招いたウルマノフについてである。

「老人には、部屋が大きすぎるようだね」

彼は本音をそういう言葉で表して、この質素な部屋に移ったのである。周りは全て火星市民の居住区である。これから何年かかるかは分からないが、その間、この人々の中に身を置いて共に生活をする。それがラベルのやりかただった。ラベルは今では珍しいアナログの腕時計で時間を確認した。身なりを確認しながら椅子から立ち上がり、そして小さなスーツケースを手にとって、玄関から新しい仕事に向かって踏み出した。

「お早うございます、ラベルさん」

「お早う、エリカ」

先に、挨拶の声をかけてきたのは、隣人のエリカだった。この区画で過ごした2日間で、ラベルは3人の友人を得ている。その

内の一人だった。やや大人ぶる所があって、今もラベルに対する好奇心を抑えようと振る舞っているが、まだ11歳の好奇心は押さえきれず、ラベルを眺める目から溢れている。

「お早う、ジャン」

ラベルをファーストネームで呼んで、その生意気さを姉にたしなめられているのは、エリカの弟のレイである。こちらは姉の背後に隠れながらラベルをのぞき見て、笑顔の中に好奇心を隠そうとしない。

(顔や体はライオンみたいに厳ついけれど、優しいお爺さん)

ごつごつと工場労働者を想像させる手をしているが、ただ、頭を撫でられたときに、その分厚い手の皮を通して、じんわり暖かさが彼の人柄と共に伝わってくる。そういうことを、ラベルがやって来た日に、レイはたどたどしい舌足らずな表現で、母親に伝えたのである。日に3回はこうやって母親に報告に行く。彼らの新しい隣人は、がっしりした体格から見て地球市民に違いなかった。レイはまるで童話の言葉を語るライオンが隣に引っ越してきたかのような興奮を覚えているのだろう。

ひよっとすると、この子供たちの感想が、火星市民の地球市民に対する心の奥底の意識を象徴しているかもしれない。言葉が通じる相手だ、しかし、それは血の滴る生肉を、ぼりぼり骨ごと嚙る肉食獣に違いない、というのである。

自分がこの地の人々にそういう印象を与えているのかもしれないと言うことを、ラベルはここにやってきた日から、なんとなく自覚している。11歳だというエリカの身長は、既にラベルの目

の高さに達している。しかし、彼女のウエストサイズはラベルの感覚からすれば、随分と細いのである。レイがラベルの体格にライオンのイメージを抱くのなら、ラベルはこの2人にカモシカの姉弟のイメージを当てはめなければならない。生まれ育った星の重力の差が、ラベルと姉弟の体格を分けたといってもいい。

(面白い進化の仕方だな)

学校に行く姉弟を見送りつつ、ラベルは思うのである。

体格というものについてはない。体格や外観についての多様性なら、地球に住む人々の中にもある。アフリカ大陸に誕生したという人類は、住む地域によって随分と多くの人種に枝分かれした。肌や目や髪の色、体格等の形質によって分かれ、民族や文化の違いまで加えれば、その多様性は数えきれない。この火星に住む人々は、人種や民族という点では地球の縮図のはずだが、多様性という雰囲気は何故か薄い。地球市民の中に火星の人々を評して『神を感じ、人の信念に祈る人々』という表現がある。首を傾げたくなるような不思議な疑問と共に呟く言葉である。

人類という樹木は、その幹の先に小さな枝を広げるのではなくて、古い幹の根本の辺りから、新たな幹を伸ばし始めているのかもしれない。

『ロボットを眠らせる』

思考ロボットを停止状態にしておくことを、地球市民も火星市民もそう呼んでいる。いま、ラベルは彼の思考ロボットを眠らせていた。周りの状況を素直に眺め、自分で考え、自分で判断するのである。

地上に出て辺りを見回すと、『都市の風景が技術よりも、コストや効率に左右される』という言葉思い出させた。目の前の景色は近代都市のものとは言い難い。この都市は火星の中でも歴史のある部類に属する。しかし、地球のどの都市よりも若い。最新技術では都市間の移動にリニアモーター列車や有翼式の高速度列車があり、その列車を市内を走らせることも可能だろう。しかし、この市内の移動手段は主として2つある。1つは小型の四輪ムーヴァーで、個人の思考ロボットが運転する。もう一つは燃料電池で走行するバスであり、前者はタクシー、後者は路線バスを連想すればいい。バスは市内で定められた路線を走行して、停留所で停止するようプログラムされている。主要な交通機関が、重力に逆らって浮遊する近代的な乗り物ではなくて、車輪で道路を走行するという点で、300年前の地球と変わらないのである。重力が小さいこの惑星で車輪の回転を効率よく地面に伝えるために車輪の幅が広い。違いがあるとすればその程度か。この都市の中で、人々を目的地にばらまくためには、この種の古くさい輸送機関の方が効率がいいということなのだろう。

ラベルは通勤の交通手段に後者を用いた。大勢の人々とふれ合うことが出来るという理由である。バスの停留所はすぐに見つかった。歩道に通勤者の流れが出来ていて、20世紀の地球の都市を思わせる。停留所の端のガイドウェイに突っ立っていると、乗客はコンベアーで振り分けられて、目的地に向かうバスの発着場に送られるのである。大規模停留所で、目的地へ行くバスを探さずに済む、という点だけが便利になった所かもしれない。

ラベルは運ばれた停留所で、やってきたバスに乗り込んだ。ラベルは多少、人々の注目を浴びた。地球市民の骨格と、左手首の腕時計にである。この惑星の人々は、地球や地球市民に対して、最先端の技術や流行という偏見とも言えるイメージを抱いているのだろう。意外かもしれないが、この火星の生活は、旧式な技術の集大成で成り立っている。新たな技術の可能性より、信頼性や安全性が優先されるためである。その火星市民は、時計を耳飾りのように、耳の後ろに貼りつけている。時計を見て時間を確認するのではなくて、時間をイメージすれば、現在の時刻が頭の中に思い浮かぶ。火星市民にとって時計というのは、そういうものである。ただ、現在ではその時計すら旧式化し、地球では電子回路が糸のように紡がれて布の形に織り込まれ、情報端末が衣服の一部になっていた。大気に充満する様々な情報を受信、肌に接する部分から情報を選択して人に伝えるのである。時間など数多くの情報の一つに過ぎない。

ラベルという男は、秒を刻むアナログ腕時計という記録映画の中の遺物を身につけていた。ラベルはこの頑丈な腕時計が気に入っている。祖父から父に、父から彼に受け継がれた時計だが、今でも休むことなく正確に時を刻んでいる。古い時代の地球で、地球の時間を刻むために製造されたものだから、当然、この火星では1日の長さに誤差を生じる。彼はその誤差を1日に一度、火星の時間に合わせ直していた。ラベルは几帳面な反面、この種の誤差を許容して受け入れるという寛容性を持っている。

盗み聞きをするというわけではないが、ラベルは旅先で、人々の中から漏れ聞こえてくる言葉を聞くのが好きだった。言葉の訛

りや語感が、その土地の風土を現していて、興味深いのである。このバスの中でもラベルは心躍るほど興味深い。まるで、祖父母の言葉を聞くようだった。火星市民の言葉の音感に訛りがある、しかし、自由闊達に語法を変化させて、文法を乱した地球市民に対して、この人々は、彼の祖父のように、よほど正しい文法で言葉話すのである。ひょっとしたら、様々な人種を寄せ集めた人々は、互いに意志を伝えるために、この種の国語教育に力を注いでいるのかもしれない。

その話題も面白い。姑が息子の嫁が気に入らないという不満だったりする。笑ってはいけないのである。ラベルの向かいに座った老女は、その隣の女に真剣に悩みを打ち明けている。ラベルの記憶は定かではないが、古代ギリシャかエジプトの記録に、息子の嫁に不満を漏らす老女の話があったという。もちろん、現代の地球で、ラベルの周囲にもそういう女性がいた。女たちは時代を経るだけではなくて、何百万キロメートルという距離を隔てたこの星にまで、そういう話題を持ち込んでいる。女の中に、何か永遠に変わることのない核があるらしい。

目をつむって、周りの音を楽しんでいたラベルが、突然に目を開けて周囲を見回した。日常会話の中に場違いな専門用語が混じっていたことと、その声が他の音を圧する自信に満ちて大きかったことである。話の雰囲気から察すると、同僚を掴まえて仕事の苦労話を聞かせているらしい。

その運の悪い同僚のダニガンは、車内の隅から自分の名を呼ばれて、気付かない振りをしていたはずだった。車内は、やや混

み合っていて、座席に座る人々ばかりではなくも吊革に掴まって立っている人々がいる。そういう人々に紛れて、そんな演技が通用するように思われたのである。しかし、ムハマドはダニガンのもとにやってきた。同僚と会話をするために人混みをかき分けて移動した。それが周りの人々に迷惑な行為だとは考えていないらしい。

(出勤時間をずらしたはずなのに、)

ダニガンは舌打ちしたくなる思いだ。悪い男ではないが、ムハマドと人混みの中で顔を合わせるのありがたいことではなかった。案の定、ムハマドは大声で仕事上の苦労話を始めたのである。

「チタン合金を炭素繊維で積層補強するんだ。すると素材の弾性係数、つまり、、、」

ムハマドに与えられた研究テーマらしいが、説明には意図して専門用語を多用し、周りに聞こえる大声なのだが、内容を理解させたいわけではない。

「俺の強度計算に寄れば、」

ダニガンはムハマドの話をそこまで聞いて、口元を抑えてあくびを噛み殺した。会社の業績は思わしくはないらしいが、彼の職場は、その低迷した業績が嘘のように忙しく、残業が続いている。ムハマドの話を聞くよりも仮眠を取っておきたい気分だ。

「おいっ。聞いているのか？」

ムハマドは念を押した。ダニガンに対して、そして周りの人々に対してである。自分が宇宙船の設計に携わっている。その事を周りの人々に知らしめたいのである。たぶん、彼は宇宙船の設計

という仕事が、他の仕事に増して高級だと信じて疑わない。仕事に誇りを持つと言うことは良いことだが、ムハマドの場合は、それがやや鼻をついた。他人を見下した感がある。

この二人は、他の乗客の視線をちらちら浴びていた。それがムハマドの声をいっそう大きくした。人の注目を浴びている、その事が心地よいのである。運の悪いダニガンは愛想笑いを振りまいて、周りの乗客にムハマドの非礼を詫びた。しかし、乗客の視線は冷たく、二人を刺すようでもある。

しかし、中に一人だけ笑顔が混じっている。ラベルである。ムハマドから見れば、温厚で几帳面そうな男で、骨格が太い。地球市民に違いない。

(市役所の戸籍係を無難に勤め上げて、定年退職後、火星に観光旅行に来た)

ムハマドはラベルの姿をそう推測した。ムハマドは声のトーンを、更に引き上げた。ムハマドにとって、こういう無学な男を啓蒙してやるのも自分の義務なのである。

その後、迷惑にもムハマドの演説は10分に渡って続いた。その演説から、意味無く挿入された専門用語を取り去って要約すると、俺は仕事に理解のない上司の元で才能を持て余しているという愚痴である。挿入された専門用語やその解釈も文献から直に引用したもので、仕事に役立てると言うより、自慢をするために専門書を読んでいるらしい。

現実には様々な制限が伴って、専門書に記述されている理論通りに事が運ぶことがない。慣れた技術者ほど、制限や課せられた

条件をふまえた上で、現実を理論に近づける修正項を、経験的に持っている。その経験が彼らの言葉や行動の端々に、滲み出して、技術屋としての存在感になるのである。ムハマドの言葉には、そういうものがなかった。幾多の文献の引用を、自分の未熟な推測で繋ぎ合わせており、本人には悪気はないのだろうが、技術的な嘘が幾つも混じっているのである。しかし、初老の戸籍係は、ムハマドのそんな言葉を、終始、機嫌良く聞いていた。

ダニガンにとって、やっと『工業団地前』停留所で停車したときに、彼は演説中のムハマドを車両から引っぱり出すように降りた。そして、明日からは四輪ムーヴァーの通勤に切り換えよう、と固く決心したのである。ムハマドはそんな同僚の考えに気付く様子はない。ただ、目聡く、さっきの戸籍係も、この停留所で降りたのに気付いていた。戸籍係も降りたムハマドに気付いたらしい、彼の演説に対するお礼のつもりか会釈を返した。全身から滲み出すほど濃厚だが、奢りのない透き通った笑顔である。

人を誉めることのないムハマドだが、
(さすがは、、、) と思った。

戸籍係を真面目に勤め上げたことはある、というのである。ダニガンは会社からの送迎用の大型ムーヴァーにムハマドを押し込んだ。この男を会社の中に閉じこめて、社会から隔離しておくのが、一般市民に迷惑をかけずに済む方法なのである。

ネヤガワ工業の敷地の中で、セキュリティの関係で技術部の建物は製造部の建物と並んで、事務棟とは隔てられていた。温かみのある象牙色の事務棟と違って、水色と白で冷たく塗り分けられていた。イマムラはぞっと身震いするように思った。

(このあたりは雰囲気が違う)

だいたい、技術部の連中というのは得体が知れなかった。計測器の前でじっと座ってデータ取りをするなど、イマムラには考えられないことだった。モニター上の訳の分からない数字を眺めながら、笑ったり怒ったりしているのは変態と同じだ。頭の中の妄想や偏見ではない。彼は顧客の発注条件を打ち合わせるために、ここに出向くことがあり、実際にそう言う気違いじみた光景を目にしている。イマムラは研究棟入り口のセンサーに手をかざした。

「営業部のイマムラだ」

もはや、技術部員かもしれないが、彼はいつもの癖でそう名乗った。セキュリティシステムが彼の指紋、声紋、網膜、顔立ちを始め、言葉や仕草の癖など社員にも明らかにされていない項目も加えて、イマムラ本人だと言うことを認識し判断しているはずだ。実は、この時にも未だに営業部に戻ることは出来ないかと考えていたのである。心のどこかに、セキュリティシステムの拒絶への期待感があった。

しかし、セキュリティシステムはイマムラを認識し、この新人を受け入れた。人事異動の手続きが全て完了し、もはや営業部に

彼の席はないということだった。ドアが開いて、後はこの得体の
知れない魔窟に踏み込んでいく運命しかなさそうだった。

イマムラばかりではない、新たな部下を受け入れるストヤン技
術部長も、困惑を隠せないのである。ストヤンの見るところ、営
業部の連中は、顧客の無理な要求をそのまま技術部に伝えること
だけを、自分の仕事だと考えていた。技術的や時間的な可能性な
ど関係なく、不都合なことは全て技術部に押しつければよいと考
えているのである。しかも、とうてい利益が上がりそうもない価
格で、仕事を請け負ってくる。限られた技術部員が、顧客の多岐
に渡る要求に答えるために、振り回されている。

そんな、絶望的な人員不足の中で、なんとか人数をやり繰り
して、新たな技術開発課を編成した。当然、今までの業務を残さ
れた人数でこなさなければならないから、各部署は遥かに忙しく
なるはずだった。その恨みは自分に向けられるに違いない。部下
の一人を引き抜かれた材料研究課の課長が、既に彼に噛み付いて
いた。そして、成果の上がる見込みがない部署に回される部下の
恨みを買うのも、自分になるはずだった。

（成果が上がるはずがない）と、ストヤンは考えているのである
。

今回の思いつきはウルマノフの仕業に違いないが、地球との技
術格差を知っているのかと言いたい気分だ。

本音を言えば、成果が上がらない宇宙船の自社開発に人手を取
られるよりも、日常の業務を円滑にこなすほうがありがたい。増
員を要請したのだが、人員は情報管理部から来たアーシャ・バレ

という黒人女性と、彼の目の前に居る技術的な素養の無いイマムラだけだった。

「ほかの係員には9時に集合するように伝えてある。君の下に部下が8人つく。顔を合わせるといい。アイエロ君。課長をロッカーに案内して、作業着を、」

ストヤンは部下にイマムラの案内を命じてドアを指さした。(まるで、部屋から追い払われるようだ)と、イマムラは思った。

そのイマムラをストヤンは呼び止めて言った。

「イマムアくん」

まだ、名前も覚えてもらっていないらしい。

「イマムラです」

「イマムリ君、出来るだけおとなしくやってもらいたい」

船体の改造には、様々な高度な計算や計算に基づく判断を要する。環境システムに在中する思考ロボットにすら扱い切れないほどなのである。そのために、ネヤガワ工業には数台の専用の高速演算装置を備えたシュミレーションセンターがあり、改良に関わる様々な要因が、最終的に船体にどういう影響を与えるものか、量子コンピューターでデータを多角的に解析している。顧客からさまざまな要求が持ち込まれて、その対応にシュミレーションセンターの処理能力が限界に近づいている。新型船の開発となれば、更に使用頻度が上がり、その処理能力を超えることもあるかもしれない。一時的にせよ、従来から抱えている仕事がストップする。ストヤンとしては最も避けたい事なのだった。加えて実

際に試作機を製造するとなれば、現在稼働している製造ラインにも影響が出るかもしれない。

あまり張り切られて、予算やシュミレーションセンターの時間を割かれては、他の部署に支障が出る、それを恐れたのだろう。

(できるだけ静かに、おとなしくしている)

それがイマムラの新しい上司が、彼に与えた作業方針だった。

新たな作業着を着たイマムラが案内された会議室は、思いの外広かった。丸いテーブルに椅子が11脚程、形が不揃いなのは、今日の会議のメンバーの頭数に合わせて、椅子を追加して持ち込んだものらしい。イマムラは着慣れない作業着を身にまとって、椅子の数で会議のメンバーの数を推測した。

その部屋に、先客が一人いた。肌や目や髪の色という外見上の区分以前に、大きな目と口が、彼女の好奇心のよりどころを求めて自在に動くという印象が、彼女の特徴になっている。彼女は立ち上がってイマムラに近寄ってきた。獲物を見つけた黒豹のようだ。彼女は手をさしのべて言った

「初めまして、情報管理部から来たアーシャ・バレです」

握手のつもりか握った手を大きく振ったあと、その手を離さず、イマムラの返事を待たずに尋ねた。

「営業部のイマムラさんですね？」

答えを聞かなくても確信があるらしい。握った手に力がこもったままで、捕らえた獲物を離そうとしない。イマムラの返事も聞かないまま、手を引っ張って、彼女が座っていた席の横に彼を導いた。そして、イマムラの席を指示して、自分は椅子の向きを変

えてイマムラと向き合った。イマムラにすれば、教師から悪戯について詰問される生徒の立場に立たされたようなものだった。彼女はイマムラの微妙な表情の変化を見逃さないよう顔を近づけて聞いた。

「率直に伺います。N & B社の新型船受注の話は、本当にダメになったの？」

彼女の言葉通り、率直すぎる質問である。現在のところ、彼にはその質問に回答する権限はない。黙って肩をすくめるイマムラに彼女は質問を替えた。

「新型船の開発。自主開発というのは、技術部の総意なの？」

やや、イマムラの本意を探るように首を傾げて見せた。彼女は次のようにたたみかける。

「営業部や製造部が納得しているようには見えませんが、」（その通りだ）と、イマムラは思った。

つい昨日まで営業部員だった自分は、こんな話に納得はしていないのである。製造部の連中も、同じようなものだろうとも思うのである。しかし、彼女の質問は、イマムラに回答の時間的な余裕を与えてはくれない。彼女は既に次の質問を発していた。

「ネヤガワ工業として、地球メーカーのバックアップも受けずに、独自に新型船を開発することに対して、どうお考えですか？」

自主開発というのは事実らしいが、単独で取り組むというのは彼にとっても初耳で、彼の方が質問したいくらいだ。イマムラはバレの話に返事を挟み込む余地を見つけれないでいる。

「ふうーん」と、彼女は言った。

真偽を見極める表情でイマムラの顔をのぞき込んでいたが、その表情をやや不満そうに、そして、やや失望感に変えた。営業部員のような素人に、回答を求めるのが無理なのかと悟ったようだ。彼女がいかなる情報源を持っているのかは知らないが、この一件については彼女の方がはるかに詳しそうだった。

イマムラに続いて3人目が入って来た。14歳程度、地球時間に換算して言えば28歳程度だろうか、アジア系の顔立ちの女性である。バレがガイド役になって入室者を紹介した。

「元設計課のステンレス・プリンセス。ウォルヒ・パク。あの堅い雰囲気がある感じでしょ。新型船開発で設計課からはみ出ちゃった感じね。ハンサムな上司のもとから離されるなんて悲劇よね。私もね、設計課のキム課長なんて好みだわ」

イマムラをあきれたようにバレに向けた。彼女は自分の話が主題からそれてしまったのに気付いて舌を出してから、話題をウォルヒに戻した。

「彼女のスリーサイズもお望み？」

イマムラは首を振った。バレという女性は黙っていれば、ウォルヒのスリーサイズから私生活まで暴露しかねないと思ったのである。ウォルヒは先客に事務的な会釈をすると、イマムラから距離を置いて、しかも彼と向き合うことも避けて、彼から3つ離れた席についた。会議が始まるまで黙って時を過ごすつもりらしい。

4人目は、うすら禿の白人男。バレがそう表現したのである。ヒツジを連想させる温厚な目が特徴だった。彼は部屋の中をぐるりと見回して、ウォルヒの姿を見つけると、彼女の隣に席を占

めた。

「エリック・ドノバン。シュミレーションセンターのうすら禿。恋愛シュミレーションは素人同然ね。騙されてばかりだもの。でも言わせてもらえば、女を見る目がない彼が悪いのよ」

「女性の話は良いから、仕事上の説明をしてくれないか？」

ここに顔を揃えつつあるメンバーは、彼の新しい部下らしい。少しでもその人柄を知っておきたいのである。

「仕事面でも運が悪いのね。もう5回目の異動だもの。人が良いから新しい職場で真っ先に飛ばされるのは彼。異動慣れした雰囲気でしょう？ 最後に辿り着いたのがこの墓場ね」

彼女は最後に、やや好意的に付け加えた。

「でも、あちこちで仕事を経験しただけに、何でも無難にこなすわよ」

ドノバンには周りを包み込む自然で柔らかな雰囲気があり、そういう好意的な感想を付け加えたくなるのだろう。

5人目が荒々しい足音と共に入ってきた。

「笑顔の冷血商人。電子技術課のシン」と、バレが小声でイマムラに紹介した。

「仕事上の特徴は？」

「個人的な銭勘定にうるさい事かしら？」

(仕事上の特徴じゃなからう？)

と思いつつ、イマムラはシンを、契約上、几帳面に仕事をこなす男だと解釈することにした。バレは片手を振ってシンに挨拶をした。

「今日のご機嫌斜めね。シン」

「フォボスの出張から帰ってきたら、いきなりだぜ。『今日からお前の机はここじゃない』って。自主開発だって、何を考えてるんだ？」

怒りが口をついて出て収まらない。席についても、ぶつぶつ不満を独り言で漏らしていて、今日は彼に接近しない方が良さそうだ。

6人目は、ずっとおとなしい。中肉中背のアジア系の男で、黙ってのっそりとドアの所に現れた。

「人畜無害。理論派の毒舌ハツカネズミ。品質規格課のアサハリ」

バレの人物評はそうかもしれないと思わせるものがある。アサハリは自分の身を安全に守るために、慎重に周りを見渡すという雰囲気、部屋の中を見回した。危険な人物ではなさそうだが、存在感の薄い男でもある。

「おおかた、毒舌が災いして追い出されてきたんじゃない？」

7人目。大柄な黒人男だが、目が子供のように無邪気で愛嬌がある。

「パワーモジュールのタロウ・ガーヤン」と、バレは彼を評した。

核融合エンジンを中心にその付属機器を含めたモジュールを、エンジンモジュールとかパワーモジュールと呼んでいた。ガーヤンの作業着からはみ出してはちきれそうな太い腕や、筋肉に覆われた胸板は出力全開のパワーモジュールなのだろう。ただし、その制御の面では不安定であるらしく、バレが言葉を付け加えた。

「究極の破壊魔人とか、暴走する最終兵器とかいう異名も聞いたわ」

ガーヤンはバレから席一つ分、椅子の間隔を開けて座った。最初、そのままバレの隣に座りかけながら、少し考えて、間隔を空けたというのは、他人に窮屈さを感じさせないようにとの配慮らしい。人なつっこい笑顔通りの思いやりを持っているらしい。

「おれ、とうとう、こんな所に島流しになっちゃったよ」

「今度は何を壊しちゃったの？」

ガーヤンは照れたように笑って応えない。

(島流しか？)

イマムラは自分の運命を重ねて思った。

8人目。片手に難しそうな専門書を持ってきた。この時代、書籍を持っているというポーズは珍しい。必要なら求める情報を手近なモニターに表示させることは容易なのである。知識を誇示するためのアクセサリーであるらしい。

「材料研究課のアリ・ムハマド。プライドだけのケチなひよっこね」

彼女の言葉はそれだけである。その一言で彼の人物を語り尽くせるらしいのである。

9人目。整った顔立ちの金髪美人だが、マイペース派の人間がもつ独特の余裕を漂わせている。

「世紀の天然ボケ。PM技術課のヘレン・ウィリアムス」

その天然ボケは、バレとガーヤンの間の席について、部屋のメ

ンバーの顔を見回した。

「変なメンバーねえ」

彼女はこの部屋のメンバー構成をそう表現した。そののんびりとした口調から察するに、彼女自身はその変な顔ぶれ含まれていないらしい。

「ねえ。知ってる？」

ヘレンは小声で言ったつもりだが、マイペース派の彼女のこと、声が入り口まで響くほど大きい。

「業績が上がるはずのない部署を作って、不要な社員をまとめて異動させて、業績不振を理由にして、部署ごとまとめて消滅させるってシナリオ」

部屋に集まったメンバーの視線が彼女に集中した。

「だいたい、今の社長は、先代のニシダ社長の時に国産機開発の反対者の筆頭だったんでしょ」

「そうね、あの鈍いヒグマが。本気のはずはないものね」

「何か裏に陰謀があるのよ、きっと」

「私は嫌よ。馬鹿社長の為に倒産や解雇なんて」

イマムラが左脇のバレの足を蹴った。注意を促すつもりで軽く蹴ったつもりだが、慌てていて、思いのほか、力が入っていたらしい。バレがムツとした表情をイマムラに向けた。その瞬間に、バレとウィリアムスはイマムラの意図に気がついた。

「あら、社長。今日もいい天気ですね」

バレは取り繕ったつもりだが、バレの背後に立っていたウルマノフの表情は硬い。

「私の心中は、砂嵐だね」

そんな社長の表情に、ウィリアムスは微笑みかけた。

「新型船開発なんて、なんて夢のあるお仕事でしょう。がんばりますわ」

「給料分は働いてくれ、倒産なんて私も嫌だからね」

ウルマノフは静かにそう言った。

この場合、バレとウィリアムスに一方的に非がある。社長は社員の話盗み聞きするつもりが無かったことは明白だった。彼女たちがおしゃべりに夢中になっていて、ウルマノフの登場に気付かなかっただけである。

一瞬、ムハマドが訳が分からないという風に息を飲んだ。社長に数歩遅れて続いてきた男に気付いたのである。骨格の太い体格と、透き通るような笑顔に記憶がある。朝の通勤バス車内にいた、あの元戸籍係に違いなかった。

「まず、紹介しよう」

ウルマノフは背後の人物を振り返って続けた。

「元デメテル社の主任設計者のラベルさんだ」

ムハマドの職務経験は、火星時間で僅か1年にしかならないが、小型船の製造に関わる者としてラベルの名は聞き知っていた。N&B社のスピカと並び賞される、デメテル社の小型機プロメテウスの主任設計者で、様々な面で今の船体設計にも影響を及ぼしていると言われた。

『宇宙船プロメテウスを作り上げた人々』という書籍があった。名機とたたえられたプロメテウスの開発に携わった人々のエピソードを、一般の人にも分かるように分かりやすく描いた書籍で、

若い頃のラベルについて触れられている。イマムラも、この業界に勤める者として、教養程度に読んでいた。その書籍の中の人物が、自分の目の前で呼吸している。

その書籍よれば、ラベルと言う男は、気性の激しい男だったという。意に添わなければ部下や同僚に暴言を吐き、手近な物を投げつけるという激しさだったらしい。ただし、剛速球だがそのコントロールは悪く、周りの者が迷惑をしたと聞いていた。

ただ、古典的な人物とも言える。ムハマドが知っている主任設計者ラベルの顔立ちは、彼が若い頃のもので、今は別人のようで、彼の表情から過去の激しさを感じ取ることが出来ない。この男も歳と共に惚けてしまったのだろうか。彼の年齢はまもなく地球時間で80歳に達するはずだ。そのラベルは黙ったまま笑顔を浮かべて席に着いた。

メンバーはラベルの経歴への驚きと共に首を傾げざるを得ない。宇宙船開発というのは、常に時代の最新の技術が盛り込まれる。同時に、体力と好奇心に満ちた創造性が要求される。彼がデメテル社を退職し、現役を退いてからの期間を考えれば、その空白の期間を埋めることが出来るかどうか疑問なのである。

「ご老体か？」

普段は温厚なドノバンが、この地球市民に対して嫌悪感を示した。ドノバンばかりではない。多かれ少なかれ、地球市民というのは自分たちの理解者ではないだろうと言う嫌悪感や、あきらめに近い感覚がある。

冷静で自信家の設計課のキム課長に言わせれば

『名馬も、引退時期を誤ればロバに等しい』

などと酷評するだろうとウォルヒは思った。ラベルという男が、彼女たち火星市民を小馬鹿にして、昔の技術がそのまま通用すると考えているのかもしれないとも思うのである。ラベルの経歴に率直に敬意は払うが、新しい技術的な知識では自分たちの方が、博識なのではないか、それがメンバーの率直な感想である。

メンバーの雰囲気によそに、会議の進行はウルマノフらしい。「ややこしい話がしたい訳じゃない。我々が扱っているスピカが旧式化して、新型船の売り込みを図る競合メーカーに対抗できない」

もちろん反対意見はない。船体の改良にあたって、船体にかかる荷重は増大し続ける。その荷重を支える強度を持った素材を提供するのが、ムハマドがいた材料研究課の仕事だが、強度だけを増して重量は軽い、そんな都合の良い素材が、そうそう世の中のある訳ではない。ムハマドはその問題を身にしみて知っていたし、その作業を要求する上司を密かに罵ってもいたのである。シュミレーションセンターで、環境維持システムに関わる計算を担当していたドノバンは、探査機や情報処理システムを扱うシンたち電子技術課と、限られた電力を奪い合っていた。互いの電力を確保するために、発電システムを増設しろと言う要求は、船体全体を取りまとめるウォルヒがいた設計課にとって受け入れられる要求ではない。船体をまとめて行くために、不用意な重量の増大は認めることが出来ない問題だった。FW201は名機という名にふさわしい船体だが、その老朽化が様々に形を変えて顕在化してきており、この部屋に集まったメンバーは日々の作業の中でそれ

を肌で感じているのである。

ウルマノフは続けた。

「第二。N & B社が小型機のサービスセンターを構築した。彼らは自分で船体の改造やメンテナンスを行うつもりだ。従来、我々が請け負っていたメンテナンスの作業も受託できなくなる」

この言葉にも全く異論はない。N & B社の動向については繰り返し報道されているし、実際にそのサービスセンターの巨大さを見る機会もある。その世の中の経済的な趨勢以前に、生活を脅かされ、自分たちが解雇されるのではないかと、漠然とした不安を抱き続けてもいるのである。ウルマノフはメンバーの顔を見回した。表情からはさまざまな思惑が読みとれるのだが、ここに集う者たちはネヤガワ工業という共通の生活基盤を通して不安を抱いている。この連中に足りないものは、共通の前向きな目標だと、ウルマノフは思った、

「第三。しかし、我々は生き延びる。君たちがN & B社の新型機に匹敵する国産機を開発するからだ。バレ。ウィリアムス。君たちが開発した船体で、」

ウルマノフはバレとウィリアムスを見ながら続けた。

「我が社の売り上げは増大。君たちは失業から、私は倒産から逃れられるんだ。ありがとう。君たちがこれから頑張るおかげだ」

バレとウィリアムスは顔を見合わせて迷惑そうな表情をした。

「どうだ、極めて単純で明快な理屈だろう。そしてイマムラ君、君がここの責任者だ」

やっと、イマムラは内心の疑問や不満を口にした。

「しかし、社長もご存じの通り、私は営業部員で、技術的なこと

には、」

「ラベルさんが、君の技術的な支援をする」

ウルマノフはイマムラに最後までしゃべらせず、そんな言葉でイマムラの不満を封じた。

「技術者なんて連中は信用できん」

ラベルがウルマノフの言葉をそう補った。ウルマノフの若い頃からの口癖だということを知っていた。ウルマノフはメンバーの顔をぐるりと見回した後、イマムラに向き直って言った。

「そう言うことだ。イマムラ君、この連中の言い訳は聞かないでも宜しい。顧客の要求を全てこいつらに押しつけて解決させろ」

この後、ぐるりと部屋を見回した。

「給料分は働け。後は新型船が出来上がったという報告だけくれればいい」

これもウルマノフの口癖である。ウルマノフは一方向的にまくし立てると部屋を去った。このあっさりしした姿の消し方もウルマノフらしい。イマムラはラベルに視線を向けた。彼の不安を的確に探るようにラベルが言った。

「私が君の領分に踏み込みそうで不満かね」

「いえ。そう言うわけでは」

「役割分担をはっきりさせておこう。新型船を創るのは君たちの責任だ。君たち火星市民の手で新たな船を作り上げる。私の仕事は君たちを創り上げることだ」

君たちを作り上げる。イマムラにはそのラベルの言葉がよく飲み込めず、技術者という者はこういう訳の分からない言い回しを

使う者かと思ったただけだ。

「しかし、」と、ラベルは人の良い笑顔をムハマドに向けた。

「我々だけがえらいと思わない方が良いな。進歩が無くなる」
出勤途上のムハマドの顔を覚えていたらしい。

メンバーはそんなラベルを眺めて黙りこくって首を傾げた。彼らがラベルに質問したいと思いつつ、心に秘めてしまった疑問は、

（こんな高名な男が何故、わざわざ火星まで。しかも、ただの中小企業にやってきたのだろう）という事実である。

彼ら自身が、火星という地方が、地球という中心部に対して文化や技術の後れた田舎に過ぎないという、表に出ない劣等感を抱いているのである。

未だ姿を見せない船だが、既に『MSB—X』というコードネームが割り当てられていた。メーカーが計画中の船につける略称である。イマムラは昔の刑務所を連想した。人間としての名前ではなく、囚人を番号や記号で識別したという話である。たしかに、事務的な冷たさがある。

『MSB—X』の頭文字の「M」が、未だ類のない火星おける開発を現している。続く「S」が汎用小型船である事を意味し、3文字目の「B」は、ニシダ社長の時代に失敗した「MSA」に続く船体である事を示していた。この後開発する船体はMSCと称される。そして、末尾の「X」は、開発中の船体であることを示唆しているのである。

このコードネームによって、彼らの夢は、過去から現在、そして、MSC、MSDと称されるはずの後継船によって、未来に続いているはずだった。現在のところ、部屋に集合した仲間たちの前にある新型船は、ただ、このルールを持った名前だけなのである。しかし、彼らの雰囲気は楽天的で明るい。何しろ、自分たちは全く素人というわけではないという自負がある。ネヤガワ工業はライセンス生産とはいえ、既に十数年の小型船製造の実績を持っており、集まったメンバーの顔ぶれは、例えば、ドノバンの場合は入社以来火星時間で6年間、地球時間で言えば12年に当たる。ウォルヒの場合でも5年間の経験を持っており、新人から中堅技術者に育ちつつある連中である。

何とかなるだろう、という楽観的な観測と、宇宙船の自主開発

というプライドをくすぐられるテーマが入り交じって、部屋の中の雰囲気支配している。その雰囲気が無ければ、この部屋は薄汚れていて覇気がない。

研究棟の一番奥、倉庫代わりに使われていた部屋である。メンバーの顔が皆、薄汚れているのは、その大掃除を終えたところだからだった。ドノバンが腰を下ろしているのは、原材料の強度を測定するための古い試験器機である、その高さが妙にドノバンの体格に合い、この後、彼の椅子と化した。別にこの部署が虐げられているというわけではない。ネヤガワ工業にとってこれ以上新型機開発に、投資する余裕がない。彼らは新型機開発を、与えられた部屋の不要物を運び出して、椅子やテーブルや量子コンピュータの端末を運び込む、そこから始めなければならなかった。アーシャ・バレなどは、彼女の美しい髪を埃まみれにさせていて、既に、新たな仕事に不満を浮かべているのである。

彼らは清掃を終えて再び集った。MSB-Xという新たな船の具体的な口火は、アーシャ・バレが切ったといえるかもしれない。

「当然、スピカの性能を上回る事よね」

バレの言葉を待つまでもなく、在来船のスピカに代えて販売するのだから、スピカと同等の性能では不十分だ。彼らの新造船、MSB-Xは地球のメーカーの製品ではなく、火星で設計製造されたものになるということ、製造するのが大手企業ではなくて、中小企業で製造したということなど、その信頼性に、現段階で既に大きなハンディを背負っているのである。少なくともN&B社の新造船と同等の性能でなければ、顧客から興味すら示してもら

えないだろう。

「居住空間にはもっと余裕が欲しいな。搭乗員が長時間疲れないような配慮が必要だ」と、ドノバンが言う。

彼の知識は幅広い。昨日まではシュミレーションセンターに所属していたが、技術部内を転々と異動して操縦・生命維持に関する技術にも長く携わっている。ガーヤンも希望を述べた。

「航続時間にも余裕が欲しいな。今のスピカでは、任務に制限を受けるから」

保安局の機動隊員や危機管理部のレスキューチームの任務が複雑化して、1回の出動当たりの推進剤の使用量が増加し、そのまま、彼らが使用する船体の航続時間の減少を招いていた。内装設計課出身のガーヤンは、船体の航続時間についてその改善を求められていたのかもしれない。

「エンジンの出力も大事よね。今よりも、もっと加速性を要求されるはずだわ」

PM技術課から来たというウィリアムスがそう言った。

「頑丈で、故障せず、壊れにくいこと、生存性も大事だよ」

品質保証部品質企画課から来たというアサハリの言葉である。

「電子機器も忘れないでくれよ。最近、ユーザーからレーダー1つとっても目標探知だけじゃ無くて、衝突防止や緩衝装置、速度制御まで嫌になるくらい多目的になって大型化してるんだ」

電子技術課からやってきたシンはそう言った。設計課から来たウォルヒも夢を語った

「大幅な自動化を推し進めて、搭乗者の負担を軽減したいわね」

ラベルは、彼らの意見を黙って見守るように聞いていた。会話の中から彼らの力量を推し量る感じ、別の見方をすれば幼稚園児の夢を微笑ましく見守ってやる保父の感じだ。イマムラは正直なところ、愕然とせざるを得ない。技術的な素養ではたしかに素人だが、長年、顧客に接した経験から言えば、専門家だと信じていた部下の会話は素人に近いのである。新型機の姿が夢の中に朦朧としていて、具体的な姿が全く見えない。発言をもっと具体化しろと指示しようとしたイマムラをラベルは制止した。部下にもっと発言させろと言うのだろうか？

「もしも、火星市民の手で宇宙船の自主開発が出来たら、俺達は英雄じゃん」

「解雇や倒産の心配もなくなるのよ」

「N & B社の鼻をあかしてやる」

たった十数分の中に彼らは意見を尽くしてしまっただけらしい。頭の中が空っぽになって、全く関係のない話題に変わりつつある。彼らの新型船に関する思い入れというのは、たった十数分で尽きてしまった。

「でも、良いものが作りたいわ」

ウォルヒが胸の底に最後に残った言葉を吐いた。

「そうだ、良いものを作ろう。君たちの手で新たな船を開発するんだ」

ラベルはそう言い、メンバーの顔を見回してドノバンに目を止めた。温厚そうな顔立ちにラベルに対する不信感を現している。

「ドノバン。なぜ、N & B社は火星に進出するんだ」

「今後の小惑星開発の進展と共に、汎用小型船の用途と、その市

場が拡大しているからです」

「そうだね。小型船を作れば、あの巨大な工場設備の原価消却が出来るほど儲かるんだ。N & B社は火星に進出すると言うことを通じて、我々にそれを教えてくれているわけだ」

ラベルはウォルヒに目を移した。

「ウォルヒ。宇宙船は宇宙空間で造る方が便利じゃないか？」

「工場の建設費を比べれば、宇宙空間に宇宙船の製造工場を造るよりも、地上に建設する方が遥かに安上がりです。デメリットとして、地上の工場で製造した船体は、宇宙空間へ運ぶための運搬コストがかかります。一概には言えませんが、一般にアスクレウス港の打ち上げ能力を考慮すると、19火星トン程度の小型船なら地表の工場で製造し、宇宙空間に運ぶ方が有利だと考えられます。もちろん大型艦の場合は、最初から衛星軌道上のドックで建造する方が有利です」

「そうだ。自分たちの力量を客観的に見ることも必要だね」

ラベルはバレに目を移した。

「バレ。我々の設備を具体的に説明して？」

「主として4つの製造ラインからなります。この第一製造ラインは解装ラインとも言われます」

バレの言葉にあわせて、彼女の思考ロボットが、解装ラインを白い壁面に映しだした。現在、顧客からオーバーホールに回されてきた船体が2隻あり、一方は外観のチェックを受けており、もう一方はモジュール毎に解体が始まって宇宙船の原型が崩れつつある。バレは説明を続けた。

「このラインはユーザーからオーバーホールに回されてきた船体をチェックし解体する機能を持っています」

思考ロボットは彼女の次の説明を予測して、映像を切り換えた。映像にあわせてバレの説明が続く。ひょっとしたら、思考ロボットが説明の主導権を持っているのかもしれない。

「この映像の第二製造ラインは加工ラインとも呼ばれています。主として、オーバーホールを行う船体の損壊部分を修理したり、改造のための部品を製造します。次の映像の第三製造ラインは先のラインで解体整備したモジュールを組み立てたり、新たに販売する船体を製造したりしています」

映像で映しだされる工場のラインに余裕はなさそうだ。しかし、その作業は破損した船体の修理や、過去に販売した船体の能力向上を狙った改造などが大半を占めて、企業の利益に繋がる新しい船体の製造はほとんど見られない。最盛期には2週間に1隻の割で製造されていたスピカも、現在は、顧客で耐用年数を越えた船体の補充の為に購入されるものが、僅かに製造されるだけで、製造工場のはずだったネヤガワ工業の業務は、利益を生まない船体のメンテナンスに移行しつつある。過去に販売したスピカが老朽化している。その為に、能力向上のための改造という需要が生じていて、工場は目が回るほど忙しいのである。つまり、仕事は忙しいにも関わらず、企業の業績は思わしくないと言う、経営者にとって最も好ましくない状況に陥っているのである。

更に、バレの思考ロボットは映像を切り換えて塗装中の船体を映しだした。

「この映像が最後の仕上げラインです。船体の塗装や搭載した機

器の最終調整を行います」

ラベルは黙ってバレの説明を聞いていた。説明を終えたバレがラベルをうかがう様子は、先生の採点をどきどきしながら待っている生徒のようだ。

「今度は、一言で説明してくれないか？」

ラベルの言葉にバレはやや口ごもって応えた。

「小型船の製造や整備をします」

「そうだ、小型船を作り整備するという『設備』がある。忘れてはならないのが、その設備を動かす人々のことだ。設備と人を総合してみれば、私たちは小型船を製造し、整備するという『能力』を持っている。だから、その市場が拡大するという点を合わせて考えれば、汎用小型船の開発に挑む方針に間違いはないね」

ラベルはバレの横のウィリアムスに目を移した。

「ウィリアムス。今、ライセンス生産しているスピカの用途は何？」

「主として保安局の機動隊や危機管理部のパトロール艇として使われています」

「ただのパトロール艇なら無人機で充分だ。何故、人を乗せて航行するんだい」

「レスキューの場合、訓練を受けた人間が現場指揮を取ることが必要です」

「そうだ。事故の第一報でレスキューの連中を乗せたパトロール艇が飛び出して行く。司令室は事故現場から状況報告を受けながら、必要な救援物資を高加速の無人機で送るんだ」

アサハリがウィリアムスを補った。

「犯罪捜査の場合は、現場に警官を立ち合わせる必要があります」

「そうだ、我々の小型機は、常に人が動かすんだ」

ラベルはメンバーの会議の当初の発言内容をはっきりと記憶していた。

「航続時間？ ガーヤン、君の言うとおりの、大事な性能だな。一回の補給や整備で地球まで行けたらさぞかし便利だろうね」

ガーヤンはラベルの言葉に頷いて自分の意見を認められた嬉しさを拳を振って現した。

「加速性？ ウィリアムス、君の言うことも正しい。保安部や危機管理部で機動艇に乗る連中なら、もっと出力の大きなエンジンが欲しいと言うだろうね。パトロール艇なら、急激に加速し、急激に減速することが必要だ」

ラベルは用意されていたスピカの模型を手にして微妙に動かして見せた。

「操縦性。操縦者の微妙な手の感覚を船体に伝え、船体の状況を、素早く操縦者に伝えなければならない。操縦者と船体を優しくリンクするんだ」

ラベルは優しくメンバーを見回して語った。言葉は穏やかだが、具体的な事例でメンバーは彼の話に引き込まれている。

「居住性。ドノバン、君の言うとおりのだ。乗っていて、身動きできないほど狭かったり、寒かったり、息苦しかったりするの嫌だね」

ラベルは寒そうなジェスチャーをした。メンバーもつられて素

直に笑った。

「信頼性。整備のしやすさがね、その船体の信頼性を支えるんだ」

彼はスピカの模型を押しつぶす真似をして言葉を続けた。

「安全性。任務を考えれば、多少の無理な操縦をする。その無理な操縦に十分に耐えうる事が必要だ」

ラベルは、一拍、間をおいてメンバーを見回した。

「バレ。君の言うとおりで、スピカの性能を上回る必要がある。どうすればいい？」

「矛盾が生じます。航続時間を延長しようとして推進剤を多量に積んだり、安全性を考えて頑丈な構造にすれば船体が重くなって加速しにくくなります」

ウィリアムスが言葉を継いだ。

「逆に加速性を向上させるためには、推進剤の搭載量や船体の重量を制限し無ければなりません」

当然に生じる矛盾である。ラベルはそれには触れずにメンバーの言葉に頷いて続けた。

「高速機動隊でスピカに乗っている連中は何を求めているだろう？危機管理部のレスキューの連中にとって、何が一番大事だろう？」

ラベルと視線が合ったウォルヒが答えた。

「まず、出来るだけ早く現場に着くことです」

「そうだね。どんなに優れた性能を持っていたとしても、事故が起きた現場に間に合わなければ意味がない」

シンが不満そうに尋ねた。

「加速性だけを優先させれば良いんですか？」

「輸送船なら、ゆっくりと長時間加速するのが都合がいい。私たちの船は短時間でも高出力の出るエンジンを選定して、加速性と機動性を確保する。その代わりに推進剤タンクは小さくして重量を軽減しなければいけないね」

自分たちの矛盾に具体的な解決策を提示できずに黙り込む連中を眺め回しながらラベルは言葉を続けた。

「人生と一緒にだ。何もかも出来る訳じゃない、何をなすべきかということだ。限界があるから面白い」

要するに、メンバーは夢を現実化する方法を知らない素人だった。ラベルはメンバーとの会話の中に自分の思考を溶け込ませてメンバーの心に伝えた。

「どうだい。私たちの新型機の概略が頭の中に描けたかい？」

数時間後にラベルがそう聞いた時に、壁際のスクリーンには非常にアバウトだが、彼らの新型機MSB-Xの要求項目が明示されていた。

『複座型の機動艇』

『加速性能、競合メーカーの予測される新型機の加速性能を10%上回ること。』

『航続時間はスピカと同等。』

『機動性。YPRコントロール0.6秒以下。』

『居住・操縦モジュールは自己修復機能を有すること。』

ラベルは様々な要求項目を調整し、更に彼らの力量を加味して、彼ら自身に大まかな概略を作らせたのである。ラベルは若者達の意志と意見を、穏やかな雰囲気の中にまとめ上げてしまった。数十年の時間が、この男に温厚さを与えたい。そして、ラベルは彼らに欠けているものを付け加えた。

「ムハマド。新造船を1隻いくらかで売るつもりだ？」

ムハマドは馬鹿な質問をするという風に大げさに怪訝な顔をした。

「船体を製造するのに要した費用に、適正な利益を上乗せして販売価格を決めます」

(42点)

ぎりぎり合格点を与えておこうかとラベルは胸の内で甘めに採点した。

「私たちは製品を顧客に買ってもらって生活してるんだ。次にアサハリ、正直に答えてくれよ。N&B社の新型機の価格が100万OSA、ネヤガワ工業の新型機が120万OSA。どちらも性能は同じ。君はどちらを購入する？」

「N&B社の製品です」

「ウィリアムス、君なら？」

「同じです。N&B社を選びます」

「何故？」

「価格と信頼性」

「そうだ。船体の選定は性能と同じく、値段と、メーカーに対する信頼感が影響する。次にウォルヒに質問しよう。地球で製造し

たスピカと火星で製造したスピカ。火星に住んでいる君はどちらを選ぶ？」

「火星で製造した船体を選びます」

「郷土愛？ それとも愛社精神で？」

「いえ。私たちが作ったスピカなら、製造や整備履歴が分かります。この火星で確実なメンテナンスを受けることができます」

「そうだ。君たちは、君たちの新造船にそういう付加価値を付け加えることができる」

イマムラはラベルの指摘は正鵠を射ていると思った。部下の会話にはコスト意識がない。利益を生み出さなければ、彼らの生活が成り立たないと言うごく単純な理屈なのである。

ラベルは端末を使ってスクリーンに人の似顔絵を描いた。イマムラの似顔絵だとはっきり分かるほど上手い。

「営業の連中はね。新型機の価格はスピカと同等に抑えろと主張するだろうね」

ラベルはウルマノフの似顔絵を描き加えた。

「そして、経営者の連中は、その低く抑えた販売価格の中から、ネヤガワ工業の利益を生み出せと主張するんだ」

(まだ、細かなことは分からなくても良い)

ラベルはそう考えている。しかし、彼らを技術的な形式の中に閉じこもらせてはいけないとも考えている。

「最高級のコモジュールを、納得行くまで手間暇掛けて組み上げることは、誰でもやってみたいと思うんだが、そんなことをすれば、船体の価格はユーザーに納得してもらえらる範囲を超えるだろう。いいものを造りたい、しかし、そこにコストとの矛盾も生じる

んだ」

イマムラが見回したところ、メンバーは皆、黙ってやや首を傾げて聞いている。たぶん、もとの職場でこういう話を聞く機会は無かったのだろう。ラベルは言葉を続けている。

「生じた矛盾をユーザーや会社に転嫁してはいけない。プライドがあるのなら君たちが背負って行くんだ」

イマムラにも経験がある。技術部が提示した改造費用が法外な額で、彼ら営業部員は顧客に改造の見積書を提出することもできない。そういう事が多々ある。顧客を説得する前に社内で説得しなければならないのである。技術者達は原材料費、加工費、雑費、諸々の費用を単純に足し算しておけばいいと考えているのではないかと不満を抱えていたのである。

「君たちは上手いモノを作るコックかね。それともサービスを提供する熟練したウェイターだろうか？どちらにしても、プライドを持って仕事をしたいね。客に高くて不味いものを喰わせるような商売人になるなよ」

イマムラはため息をつきたくなる思いだ。会議にまとまりがつかないからだ。ラベルのおかげとも言える。しかし、イマムラの認識も甘い。ラベルはイマムラに言った。

「さあ、始めようか？」

この程度の概略は、未だ設計に踏み込んだとも言えないというのである。そのラベルの人の良さそうな笑顔と裏腹に、イマムラを含めて、メンバーの苦労はここから始まってゆくのである。

この後、『ラベル教室』とか『ラベル学校』とも呼ばれる技術

開発課がスタートしたのである。

「たしかに、雰囲気は温厚になったかもしれないけれど、」

昼食のフライドチキンを目の前にして、思いだしたようにウィリアムスが口ごもった。彼女がラベルから「ローストチキン娘」と称された直後の食事の時のことである。

彼女は核融合エンジンから出る廃熱の処理について検討していたときのことである。核融合炉が発する熱の一部が、艇内に蓄積される。核融合炉ばかりではない、探査機などの電子機器を始め、様々な搭載物が、不要な熱を発生する。地球上なら空気や水を使って比較的簡単に熱を外部に排出できる。

そういう不要な熱を、空気も水もない環境で、効果的に船外に排出しなければならないのである。彼女の計算が甘かった。彼女の計算通りに造れば、船体に蓄積された廃熱で、操縦者はコックピットで蒸し焼きになってしまうはずだ。ラベルはそれを、『小型機をグリルにしてローストチキンを造るつもりか』と指摘したのである。ウィリアムスはラベルの口の悪さが、噂を越えていると言いたいのだ。周囲のメンバーも笑いながら頷いた。彼らがラベルの指導の元で自主開発に入って、既に三週間を経過していた。そのたった三週間でラベルは本性を露呈していた。ひどく、口が悪い。その言葉が回りくどい嫌みな皮肉ではない代わりに、彼らの欠点や問題の本質に、鋭く打撃を与えるのである。

なんとなく、部屋の中で席が決まっていた。リーダーであるべきイマムラは、最も奥の席を占めて部屋の中を見回している。上座に当たると言うより、邪魔にならないように端っこに追いやら

れたようだ。ラベルは机を拒否していた。この狭い部屋を効率よく使うことを考えろと言うのである。ラベルは大抵、部屋の中をくるくる移動していた。試験官や教師のような感じ。ラベルは端末の前で考え込むメンバーを回って、端末に表示されるデータを生徒と共に眺めがら、生徒の習熟度を図ったり、居眠りしていないか、見守り監視しているのである。

「アユミ。8番の構造材を、チタン合金に変更した場合の強度を計算して」

アユミというのはガーヤンの思考ロボットの名である。たしか、女性アイドル歌手に同じ名があるから、その歌手の名を付けているのだろう。ガーヤンは担当しているフレームの強度が、どう変化するのか比較したいと言うのである。技術的に考えれば非常に曖昧な指示だが、アユミは良く理解して、彼女の回路の中で計算を始めた。

「アユミちゃん」

ラベルは優しく言った。思考ロボットはパブリックモードになっていて、主人のガーヤン以外にラベルの指示も受け付けるのである。

「今の指示はキャンセルだ。この怠け者が言うことは聞かないで良い」

ガーヤンは意外な言葉に、ラベルの顔を見上げた。ラベルの口元は優しい笑顔を作っているが、目は鋭く光っていて笑っていない。

「ガーヤン。ロボットに頼りすぎるな。まず、フレームの堅さを

頭に描け。頭をぶつけたらどんなに痛いか想像して見ろ。イメージだ。もっと君のイメージを膨らませろ」

ラベルはまだ怒鳴ると言うほどではないが、怒鳴り出すのも間近だ。あの初めて出会ったときの温厚そうなラベルの豹変ぶりはどうだろう。この激しさがラベルの技術者としての一面らしい。

「コロン。103—D図面の2番高圧ポンプの立体図を見せて。周囲の部品と重ね合わせて表示してみて」

コロンは言うまでもない。ウォルヒの思考ロボットである。彼女に似て生真面目な性格をしている。ウォルヒがコロンに指示したのは、推進剤を供給するポンプだが、彼女はそれが想定した位置にぴったり納まるかどうか知りたかったのである。

壁を勢い良く蹴り上げる音が響いた。ウォルヒが振り返ると、ラベルである。表情からウォルヒの指示が不満だったことが見て取れる。彼は部屋のドアを指さした。

「ウォルヒ。工場で現物に触れてこい。その重さと大きさと感触を自分で味わって来るんだ」

メンバーは啞然とし、ラベルの意図を図りかねた。ネヤガワ工業には350人の社員がいる。

(たった、350人)

そう表現しても良いのである。

その業務は繰り返すまでもない。FW—201「スピカ」という小型機をベースにして、例えば、加速性の増大を求めるユーザーに応じて標準的なエンジンを、より高出力のエンジンに換装して販売する。エンジンを換装するという作業を例に挙げると、そ

の荷重を受け入れる船体の強度計算、廃熱の処理能力の変更などをエンジンに関するものを始め、推進剤タンクの容量、変動する重心に応じて姿勢制御システムの変更など、1つの変更に関係する無数の複雑な計算を要するのである。20世紀の昔なら、数千人、数万人の技術者が必要だったろう。

思考ロボットは、技術データ管理システムのメモリーの中から、必要な値や数式を引っ張り出し、それらを関連づけ、主人の求めるデータを提示するのである。そして、その結果を技術データ管理システムに戻し、蓄積する。それはネヤガワ工業創業以来の記憶とも言える。思考ロボットはこの記憶を共有し、利用しあうのである。技術開発課のメンバーが、この僅かな人数で新型機開発に取り組めるのは、思考ロボットの機能に依存している。ラベルはその思考ロボットの使用を制限しろと言うのである。

「イメージだ。イメージを描くんだ。人は考え、感じることを止めてはいけない」

ラベルは彼らを怒鳴り続けるのである。

一ヶ月を経ずして、部屋の奥のメンバーの視界に入る位置に立体映像が浮かんでいた。ラベルがそれを指示した。今は、宇宙船の姿とは言い難い。幼児が四角いブロックを積み上げたような歪な形をしている。しかし、日々、完成に近づく変化が見て取れる。

ラベルの意図が良く飲み込めないものの、それでも、メンバーの作業は徐々にその映像に反映されて、映像は完成に近づいて行くのである。

「ドノバン、君の膀胱はネズミ並みかね？」

メンバーの誰も、ネズミの膀胱など見たことはない。ただ、ネズミの体は小さいから、膀胱も小さいのだろうとイマムラは思ったが、その言葉の真意を図りかねた。

「ドノバン。君ならいったい1日に何リッターの小便をするんだ、何リッターの汗をかくんだ。こんな量に控えておけというのか？小便ぐらいちゃんとさせてやれ」

もともと、ドノバンに限らず、重量の制限の問題が頭の片隅にある。彼は汚水の発生量を少なく見積もりすぎて、汚水タンクを小さくしすぎたのだろう。ラベルはドノバンに彼の作業をやり直しを命じた。この生徒が再提出した答案を見て、教師は感想を漏らした。

「ドノバン。君の膀胱は、象並みだ」

今度は大きくしすぎたらしい。こういうやりとりが、汚水処理のタンクの大きさが、汚水の発生量だけではなくて、汚水処理装置の処理速度の関係で決まるという、当たり前の結果に行き着くまで続くのである。ドノバンに対してだけではない、

「ウォルヒ。君は搭乗員の首を絞めるつもりかね？ 搭乗員にいったい何グラムの酸素を与えるつもりだ？」

ウォルヒは思考ロボットのコロンに頼るまでもなく、酸素の標準的な消費量については記憶があった。

「1日に、一人当たり、840グラムだったと思います」

ラベルは額に手を当てて呆れ返るように天井を振り仰いだ。

「ウォルヒ。君はなんて大根役者だ。演技力だよ。もっと、演技

力を身につけたまえ」

もちろん、ウォルヒは女優ではないし、そうなりたいと思ったことすらないのである。

「機動隊員になって犯罪者を追いかけてみたまえ。緊張し、脈拍は上がり、呼吸は浅く荒くなる。遥かに多くの酸素を消費するんだ」

人間というのは、数値で固定できない感情の起伏を持っているのである。ムハマドも時折首を傾げることがある。ラベルの言葉の本質は当然のことで疑問を差し挟む余地はない。しかし、彼が知識のよりどころにする専門書では、記述してあることがない事柄なのである。

ラベルの怒鳴り声と共に、開発機の立体映像が完成に近づいている。メンバーの日々の作業が、この立体映像に反映されている。数週間前、船体中央に角張ったブロックが表示されていた。全てのタンクを一括して象徴している。今の映像では、そのブロックが小さく、推進剤、水、酸素など内容物に分割されて表示されている。メンバーにとって、自分の作業がこの映像に反映されて作業の進行状況が自覚できるばかりではなく、自分の担当するパートが他のメンバーの作業とどう関わっているのかを自覚することもできるのである。

ある時、アサハリが映像を見ながら言った

「なかなか、かっこいいじゃないか？」

「うん」

ガーヤンが短く応えたが満足感が籠もっている。

「なあ、俺達にも出来るんだ」

ムハマドも自信を顔に出して付け加えた。イマムラはそんな部下たちの姿を見ていた。

この時、彼らがMSB—Xの開発に携わり始めてから8ヶ月を要している。彼らが見る立体映像の機首は四角い箱で表されている。他のパーツも似たようなものだ。ただ、四角いブロックが球形や円錐形が組み合わされて表示され本来の姿に近づいていた。居住モジュールを例に取ってみれば、このモジュールに供給しなければならない電力や酸素、モジュール内の空調機的能力などが決まったにすぎない。ここから、ようやく設計らしい作業に進むのである。

(ここまでは何とか順調に来た)

ラベルは彼らに怒鳴り声を上げつつも考えている。ムハマドが映像に手を伸ばした。もちろん触れることは出来ず、彼の手はMSB—Xの映像を素通りする。そんな姿を見ながら、ラベルは多少いたずらっ子のような好奇心も持って考えた。

(これから後の苦労を知ったら、今の彼らはさぞかし怯えるだろう)

まだまだ、技術的な問題を始め、人間関係、関係職場間の調整など、今の彼らが全く想像していない難問に直面せざるを得ない。難解な専門書を読んだところで、問題の解答が書かれているわけではない。思考ロボットが計算してくれるわけでもない。彼ら自身が模索し、幾つもの失敗も含めて経験を積み上げるしかないのである。

早朝、どのちゃんねるも放送スケジュールを変更して、臨時ニュースとして昨日アルテミス市で起きた新たなテロ事件を大きく報じていた。市民を含めて十数名の死傷者を出し、軍関係者に警護された軌道エレベーターの建設も一時ストップするほどだったという。連邦宇宙軍陸戦隊のアルテミス市駐留施設の一部を狙ったらしい。火星市民にも多数の死傷者を出したためか、犯行声明がない。

軌道上の陸戦隊が火星の大地に進出したというのは、どの火星市民にとっても不快な事実だった。テロを刺激して政治状況を悪化させていた。ドノバンとシンが乗る通勤バスの中でもその話題で持ちきりである。

「逃げ帰った連中が、何を今更のこのこやって来るんだ？」

ドノバンが同僚にそう評した。市民に死傷者を出したのは、テロリストの責任に違いないのだが、軍関係者が地表に進出したと言うことがそれを誘発したと思うのだ。

ドノバンの父親と祖父の名が北公園の碑に刻まれている。彼は地球時間に換算して7歳の時に「火星の息吹」で肉親を失っていた。多くの犠牲を出した後、生き残った地球市民の工事関係者は地球に引き上げてしまった。その事実をドノバン達は（あの連中は我々を見捨てて逃げ出した）と称するのである。

事故はやむを得なかったとしても、彼らだけが安全な場所に逃げ帰ったということが許せない。そんな連中が彼らの頭上、軌道上をぐるぐる回っていることさえ不愉快だが、同じ地面に威圧的

な態度で立つというのは何か我慢できないような気がするのである。

ネヤガワ工業にも小さな波紋となって広がっている。

(私は、紅海を切り開いたというモーゼか?)

ラベルは皮肉を込めて思った。体格を見ればラベルが地球市民だと言うことが分かるのである。ネヤガワ工業の社内も、アルテミス市の酒場で起きた事件の話題で持ちきりだった。社員の肩が触れ合う程の人混みの中で、ラベルが廊下を歩いていると、人々は黙ってラベルを避けて通るのである。歩いて行く先に道が広がって行くようだ。その光景を紅海に重ねたのである。そして、ラベルが技術開発課のドアをくぐると、ここでも波乱が起きている。

ウォルヒがシンから回ってきたレーダーモジュールの設計データを再検討していた。正確に言えば、再検討という以前に、その重量を見て即座にはねつけているのである。

「シン。16kgオーバーなんてめちゃくちゃじゃない。小手先のやり方でダメなら、最初からやりなおしてよ」

ウォルヒはきっぱりと断言した。シンは面白いはずはない。彼はその設計に数週間という時間を費やしていたのである。かといって反論することも出来ずに、小さく吐き捨てるように呟いた。

「あのヒステリー女が、」

彼女にも漏れ聞こえているはずだが、ウォルヒは意に介する様子がない。彼女は既にガーヤンが担当したフレームの図面に目を移して言った。

「ガーヤン。フレームのこの補強板は肉抜きできないの？」

フレームの強度を維持するために、鋼の補強板がつけられていた。彼女はその補強板に穴を空けることが出来ないかと言うのである。穴の分だけ重量が軽くなる。彼女の口調は提案と言うより命令に近い強引さを持っていた。

「せいぜい70g程度の軽量化にしかならないぜ」

ガーヤンは、暗に、軽量化のメリットより、製造に手間がかかるというデメリットを主張するのである。

「いいから、やってちょうだい」

ウォルヒは有無を言わせない。現段階で、新型船MSB—Xの総重量は52トンになるものと見積もられていた。彼女が削れと主張した70gと言え、硬貨数枚分の重さでしかない。船体の重量と比較すれば微々たる重量だが、その程度の重さにもこだわって削ると言うのである。こういう調子が設計当初から続いていた。その細かさや強引さは、他の仲間の反感を生んでいた。更に、そんな反感を全く意に介しないと言う彼女の態度が、その反感をいっそう増幅しているのである。

彼女には、使用するエンジンモジュールの出力が小さいという、強迫観念めいた意識があって、重量軽減については一切譲るつもりはない。設計の役割分担という観点で、メンバーの役割を見ると、シンやガーヤンほとんどのメンバーは各モジュールやフレームなど船体を構成する部分の設計を担当している。彼らの設計したデータを、ウォルヒがその妥当性を判断して、船体として組み上げているのである。社内の肩書きで言えばメンバーは全

て同格だが、その仕事の判断では、ウォルヒが一段高い位置にいる。組織を円滑に動かすためには、イマムラ自身が判断して部下に指示を下すか、ウォルヒを他のメンバーより高度な判断の出来る地位に置いてやらなければならないのだろう。

「あんだ。何様のつもりよ？」

バレが冷静な口調でウォルヒに詰め寄った。もともと、バレは腹を立てれば大声でわめき散らすと言う癖がある。そうやってエネルギーを発散し尽くして、後はあっけらかんと笑っている。そのバレが落ち着いた冷たい口調で詰め寄っているのである。よほど怒りや不満を貯め込んでいるのだろう。ウォルヒは怪訝な表情を浮かべるだけで、臆する様子はない。

「バレ。貴方が、いいものがつくりたいと言ったのは嘘なの？
いいものが造りたければ、私に協力してちょうだい」

メンバーは作業の手を止めて耳を澄ましてバレとウォルヒのやりとりを聞いていた。ウォルヒに対して好意的な視線がない。この場合、イマムラが雰囲気改善しなければならないのだが、技術的な事が分からず事態を收拾することが出来ないのである。机に座っておろおろと事態を見守っていた。メンバーが仕事の手を止めてしまっている。その事が気になったらしい。ウォルヒは部屋の中を見回していった。

「ねえ、みんな。時間がないんだから、こんな事に関わってないで、次の作業を進めてちょうだい」

「ウォルヒ。それは言い過ぎだ」

ドノバンが調停に入った。技術的にはウォルヒの言い分は正しいのだが、人間関係にも配慮してくれと思うのである。ウィリア

ムスも嫌悪感を現した。

「ねえ、ウォルヒ。あなたはそんな独善的で横柄な態度で、設計課でも孤立してたんじゃない？」

「なあ、みんな、」

イマムラが立ち上がってそう言った。ここ数週間続いている険悪な雰囲気は更に悪化して、爆発寸前だった。自分が何とかしなければならぬのだろうが、そのあとの言葉が続かない。自分だけが取り残されて、ひどく惨めな気分だった。

「他のメンバーはウォルヒの指示に従うことだ」

事態を見守っていたラベルが裁定を下した。船体総重量の十万分の一の単位で細かく重量管理をすることには誤りはない。妥協しないと言う姿勢も正しい。ルーズな重量管理や中途半端な妥協は、まともな船体を生み出すことはないのである。しかし、ラベルは自分が話しに割って入ったことが事態を悪化させるかもしれないと危惧している。

果たして、ラベルの危惧は的中した、今まで調停役に立っていたドノバンがラベルに噛みついたのである。

「でも、先生。今の人間関係をどう考えておられるんですか？バラバラです。こんなことで設計が続けられるんでしょうか？」

そう叫んだドノバンは普段は温厚でメンバーの信頼も厚い。ただし、地球市民に対しては嫌悪感を露骨に示すのである。イマムラにとって、最後の調停役として期待している2人がこの調子なのである。気まずい雰囲気のまま、それでも、彼らは作業を続けざるを得ない。実際に船体が出来上がるまでの長い期間を考え

れば、目の前が闇に閉ざされるようだった。

定時になり、メンバーは思い思いに席を離れた。開発スケジュールに遅れは出ていない。ラベルは彼らのプライドを気遣って口にしてはいないが、彼らがほとんど素人だということを見越して、開発スケジュールを立てさせていたのである。普段、スピカの改良設計に携わっている試作課のキム課長などは、そのスケジュールの長さを称してと公言してはばからないのである。

「まったく、お年寄りには気がながい」

仕事はスケジュール通りだから、メンバーが帰宅することに問題はない。技術開発課の部屋の中は、終業のブザーから5分を経ずして、イマムラとラベルだけになってしまった。その5分という時間の短さが、この時のメンバーの自主開発に対するこだわりのなさを現していた。

開発というのは、目標に向かって問題解決を積み重ねて行く作業である。その過程で革命的な変化を生じることがもあるが、大半は地道な努力や手探りの模索が続く。部屋の中に開発中の船体の姿が浮かんでいた。地道な作業の中で士気を維持するためにラベルがそれを指示していた。メンバーはこの映像によって、ずいぶん勇気づけられて自信を深めている。しかし、この映像だけでは不足しているらしい。

「何かきっかけがあればいいんだが」

ラベルはイマムラに呟いた。

(あの連中は育つ) と思うのである。

この映像以外にも、何か彼らを励まし、目標に目を向けるきっかけが必要だろう。

次の日、そのきっかけは意外な形で現れた。

ドノバンがいつになく遅れて入社した。他のメンバーは既に部屋に顔を揃えており、遅れて入ってきたドノバンを一斉に注視した。

「何か変わったことでもあるのか？」

そんな言葉で、ドノバンは不機嫌そうに自分に向けられた不審と好奇心の入り交じった視線を振り払った。変わったことどころではない。いつもの端末の前に行き、座席代わりの計測機器に腰を下ろしたドノバンは、背中に幼児を背負っているのである。幼児は機嫌良く小さな声でけらけら笑った。幼児の衣服がピンク色をしているから、女の子なのだろう。過去のネヤガワ工業社内で、男性社員が幼児を背負ったまま作業場に現れた事例はない。ドノバンは優しく気を配りつつ、ゆっくりハーネスを解いて幼児を腕に抱いた。課長としての立場上、イマムラが尋ねた。

「で、さっそくだが、ドノバン。その子の事情を聞かせてくれないか？」

「カティアだ」

ドノバンは短く娘の名を答えた。

「いや、何故、その子を？」

「かみさんに、逃げられた」

ドノバンはそう答えた。普段は温厚で人の良い男だが、今日は不機嫌で言葉が短い。短い言葉を繋いで察すると、昨夜、夫婦喧嘩のあげく、再婚の妻が娘を棄てて失踪したということらしい。

「よくまあ、セキュリティーをくぐれたもんだ」

シンがそう指摘した。建物の入り口からこの部屋まで2カ所のセキュリティドアがあって、関係者以外は通行できないはずだ。

「危険性はないと判断したのかしら？」

「当たり前だ、俺の娘だぞ」

ドノバンはセキュリティをくぐり抜けた理由を述べたバレにそう反論した。

「作業に支障無ければ、例えば、猫でもセキュリティーをくぐれるの？」

「俺の娘を猫と一緒にするな」

そう言いつつドノバンはウェストポーチから何かを取り出した。時間を見れば、娘の授乳の時間なのである。ウィリアムスがそれを指さした。

「あっ。それ知ってる。ハックマン博士の『オッパイくん』でしょ」

高名な産婦人科医が、離婚率の高まりと独身男性の不慣れな授乳を嘆いて発明した、要するに乳房型のほ乳瓶である。ハックマン博士によれば、授乳期の幼児に母親の乳房の記憶を残すことで、その後の健全な精神の発育を促進するのだという。ドノバンは持ち前の生真面目さで、ハックマン博士の著書の大半を読んでいた。しかし、やや無精髭の伸びたドノバンが、左の胸に付けた大きな乳房は、見ていて気色が悪い。ラベルとイマムラは、見て見ぬ振りをした。

カティアは目を細めて、こくんこくん、喉を動かした。その表情が素直で愛らしい。ウィリアムスがカティアの笑顔につられて頼んだ。

「ねえ。私にも抱かせてよ」

こういう場合、どんな女性も柔和で包容力のある、実にいい笑顔をする。将来、娘にとって気むずかしい父親になるに違いないドノバンも、このウィリアムスの笑顔に満足したようだ。

「落とすなよ」

ドノバンはそう注意したものの、機嫌良く娘をウィリアムスに紹介した。

「ほおら。紹介しよう、こちらはヘレン・ウィリアムス。ヘレンおばちゃんだよ」

「いいえ、カティア。ヘレンお姉ちゃんよ」

カティアは人見知りをする質ではないらしい。ウィリアムスの腕を経てバレの腕に移っても愛想良く笑顔を振りまいた。

メンバーは仕事を忘れてカティアを取り囲んだ。カティアはバレの手からシンへ、シンからムハマドに、順番にメンバーを回って、笑顔で父親の同僚に挨拶をした。カティアはアサハリの腕を経てウォルヒの所にやってきた。迎えるウォルヒの様子が変だ。ウォルヒはとまどいがちに手を伸ばしたのだが、その手を引っ込めてしまった。カティアを抱き上げると言うことが出来ないのである。柔らかで暖かな肌触りが、彼女に彼女の腕の中で冷たくなった幼い弟を思い起こさせるのである。彼女はアサハリの腕の中のカティアの前髪を撫でるだけだ。

「どうして？」

ウィリアムスが首を傾げた？

(こんなに可愛いのに)

「子供を抱けないなんて、女として何か欠陥があるんじゃない？」

バレが言った。表現は悪いが、彼女の口の悪さはもともとだ。笑顔を浮かべていて、そのきつい表現が冗談だと分かる。周りのメンバーもウォルヒを笑ったが、素直な笑顔で皮肉な感じはない。ウォルヒも苦笑いしただけだ。メンバーはウォルヒの心の奥底に踏み込むのを避けていた。

「ホンマに、父親に似なくて良かったな」

毒舌のアサハリがカティアを見ながら、ドノバンの男らしいごつごつした顔立ちを称した。（外見なんて、）と言われるが、その言葉は嘘だ。美男や美女は生まれながらに得をするのである。

「きっと、この子は男の子にもてるわよ」

「嫌だ。一生、俺の手元に残したい」

「こいつ。娘を嫁に出さない気だ」

「当たり前だ、特にお前らみたいな薄汚れた連中に、手塩にかけた娘を嫁に出すもんか」

「ねえ、ドノバン。あんた最近、口の悪さがラベル先生にそっくりよ」

ウィリアムスの言葉にメンバーは口を揃えて笑った。

この子を見ていると、何か誇れる物を残してやりたいと思ったが、自分に何が出来るだろう。誰にも突出して優れた才能はない。この部屋にMSB—Xの映像が浮かんでいた。彼らがこの子に誇れるものは宇宙船造りしか無いようだった。

「お前のために、MSB—Xを完成させてやるからな」

「本当に作れるの？」

「造る。俺はこの子を愛してるんだ」

ドノバンはそう大まじめで断言して、メンバーもドノバンの言葉に頷いたように見える。ただ、普通の人々にとって、情熱に起因するモチベーションは余り長続きはしない。この場ではカティアという幼児が彼らに前向きな情熱を与えたが、この後、彼らは幾つものきっかけを必要とした。

カティアはただ機嫌良く笑っていた。ウォルヒはこの子が将来、自分の後継者になるということを予測できないでいる。

18ヶ月という時間が、イマムラの中で無我夢中の内に過ぎていた。ようやく席に腰が落ち着いたところだ。技術的な点はまだまだ分からないが、専門的なアドバイスについてはラベルがいた。生真面目な男は、ようやく仕事の流れは飲み込んでいたつもりだった。

これまでのメンバーの努力は、MSB-Xの立体映像として、技術開発課の部屋の中に浮かび上がっていた。先週、ようやく量子コンピューターのメモリー上で、エンジンユニットの取り付けが終わり、昨夜の夜半に最終の儀装が取り付け完了したのだった。その全体像はスピカとよく似ているが、スピカと並べて映し出すと、スピカより遥かに大きい。性能の向上を狙って、スピカよりも出力の大きな核融合エンジン・フェニルIIを搭載したためだった。ノーラン&ベイズ社が新型機に搭載するアテナIVと比べて同じか、やや出力が勝るといわれた。しかし、アテナIVに比べて彼女達の使用したフェニルIIは一回り大きく重量が重いという欠点を持っているのである。

しかし、新型の核融合エンジンアテナIVは、地球政府による輸出制限が掛かる恐れがあり、彼らにとって安定して得られる見込みがなかった。フェニルIIが彼らが使用できる核融合エンジンの中では、最良のものだと判定していたのである。エンジンの出力の大きさは、必然的に推進剤の使用量の増大につながり推進剤タンクが大きくなった。重量のあるモジュールを支えるためのフレームは太く頑丈になった。船体の全体が大きく重くなっていた。

こういう重量の増加はエンジンの出力の大きさを相殺して加速性能の低下を招いていた。

しかも、この船体には、元営業部員のイマムラの立場から見れば、ユーザーにアピールする特長が何も無かった。イマムラは頭の後ろで手を組んでディスプレイを眺めていた。

「ローレンツ α 、アリオン、タイフーンII、主要目と性能を表示」
イマムラの指示でディスプレイに他社の競合機種^①の要目が表示される。

「MSB—Xの主要目と性能表を並べて」

イマムラはやや考えて指示を追加した。

「競合機種^①の能力でMSB—Xが勝る項目を緑、劣るものを赤で表示」

ディスプレイ上の数値の一部の色が変化した。どの機種と比べてもやや緑が多いという程度だった。MSB—Xに抜きん出た特徴は無く、ここにMSB—Xが火星市民の自主開発であるという決定的なマイナスポイントが加わるのである。比較するMSB—Xの能力は予想されるデータ^②だった。実機を作る段階で更に性能の低下も予測された。

しかし、危惧をよそに何とかかなりそうだった。少なくとも旧式化したスピカを売り続けるよりも遥かにましだろう。ラベルのおかげとも言える。イマムラは感謝の目でラベルを見た。

この頃、ある都市で彼らの命運を左右する事件が起きていた。火星上、シンカンサイ市の裏側当たりになる。シルチス市から南東30kmの位置のアルテミス市が騒動の舞台である。フォボス

宙港の中継所として、軍関係者が駐留している。事件は発生した酒場の名を取って、後にレオン事件と呼ばれることになった。

夜半を過ぎていたらしい、酒に酔った客同士の小競り合いが生じた。きっかけは、自分の連れ合いの女性に、触れた触れないと言う何処にでもありがちな口論だった。ただ、この時には一方が地球市民で、しかも兵士だったことが騒ぎを大きくした。もともと、火星市民には彼らに対する根強い不信感がある。トラブルは発砲騒動に進展して、市民側に死者が生じた。保安部員が現場に急行して事件関係者を逮捕した。市街地で起きた事件だから、協定によれば保安部員にその責任と権限がある。連邦軍がその逮捕拘束された兵士の身柄の引き渡しを、火星行政府に求めているというのである。

簡単に言葉を綴ればそう言う経緯になる。行政側の縄張り争いという視点から見ると、連邦宇宙軍という国家組織に対して、保安部という地方組織が、国家に対して極めて高い独立性を保った組織だったために、火星市民の民意を反映した。地球政府对火星行政府という対立構造を形作っている。

この時期の火星に救国市民戦線というグループがある。その実態は政治結社か政党か、或いはテロリスト組織という選択肢をくわえても良いかもしれない。選択を迫られれば、その区別を答えることが出来ない火星市民がほとんどだが、こういう状況に乗って勢力を拡大し、その名を耳にすることが多くなった。そのグループのアクセ代表という人物が、市民の愛国心を煽って行政府の

弱腰を攻撃していた。小さな酒場の事件だが、この後、尾を引きそうな騒動に発展しているのである。

「何か、きな臭い」

事件を報じるニュースを聞いたウルマノフは呟いた。火星市民として不愉快な事件に違いなかったが、それ以上に、経営者としての呟きである。業務上、ネヤガワ工業は地球からの輸入品に依存することが多い。商売に悪い影響が出るのではないかと思ったのである。しかし、この事件がそれ以上自分たちに関わってくるとは考えていない。

(技術開発課を見ておこう)

ウルマノフは席を立ち上がった瞬間にそう思った。いつもながら、この男の気まぐれである。まず、何の予告もなく技術部長ストヤンの部屋に顔を出した。その生真面目な性格で、ウルマノフの突然の出現に、慣れることが出来ないらしく慌てるストヤンにウルマノフは声をかけた。

「ちょっと、教えて欲しいのだが、」

彼は、少し考えて遠慮がちに続けた。

「例えばだが、私が特定の場所に近づいたとする、それに合わせて警報を鳴らすことは可能かね」

ストヤンは即座に思った。

(そんなシステムがあるなら、真っ先にオレの部屋に備え付けてやる)

しかし、それを隠して考えるふりをして言った。

「そうですね。まず、全社員の中から社長を特定する印が必要

です。首に鈴でも付けましょうか？」

「それから？」

「鈴の位置を特定するための探査機器と警報装置が必要でしょう」

「で、何故、君はそのシステムをここに付けないんだ」

ウルマノフはストヤンの机をこつこつ指で叩いた。ストヤンは内心を見抜かれているのかもしれない。

「コストがかかりすぎますね。それに誰が社長の首に鈴をつけるんです？ 困難でしょう」

「常識的・現実的には無理なんだな？」

ウルマノフは技術部内で、自分に電波発信機的首輪を付けて、居所をモニターして置いてくれという冗談があるのを知っていた。突然に、意外な場所に姿を見せて社員を驚かせるからである。今も、ストヤンを驚かせた。もちろん首輪というのは冗談に過ぎない。自分はそんな首輪をする気もなければ、行動を制限されるのも嫌だ。

ところが、技術部棟の奥、技術開発課に接近すると必ず、彼らの部屋から警報が鳴るのである。他の部署では冗談に過ぎない警報システムを作り上げているのだろう。ここの連中は他の部署には無い、やる気と才能を持っていた。

(頭を使うのは悪い事じゃない)

そう考えるウルマノフに、いまでも警報が聞こえている。彼の経験から言えば、間もなく警報の間隔は短くなって、自分が更に接近していることを室内に知らせるのである。

「あっ。社長」

イマムラである。この男は芝居は上手くない。何か、しどろもどろなのだが、先のストヤンとは違う。突然に社長が現れたことではなくて、現れることを知っていたことを隠すために、不自然な演技をしている。

「何かご用でしょうか？」

「別に。MSB—Xが見たくなっただけだ」

ウルマノフは室内を見回した。さり気なく見回す振りをしながらメンバー、一人一人の表情を確認した。イマムラは下手な演技をしており、アサハリは隅で彼の顔をちらちら偵察している。ウィリアムスは誰にでも愛想がいい、他の人に向けるのと同じ笑顔をウルマノフにも向けた。バレは彼を全く無視してのけている。

(課長以下、随分と個性溢れた連中だ)

ウルマノフはそう思った。社長の自分を迎える表情や動作に同じものがない。ただ、どの表情も奢りもせず卑屈でもない。その共通点が、MSB—Xという計画段階の自主開発の船の裏に秘められていた。

ウルマノフは部屋には入りもせず、ぐるりと向きを変えて技術開発課を立ち去った。開発は次の段階を迎えて、ウルマノフにとって頭を悩ます問題を生じている。MSB—Xは現段階で、映像やコンピューター内の数値で表されるデータにすぎない。要したコストは技術開発課のメンバーの人件費程度のものだ。

しかし、今後、試作船を製造するとなれば、莫大な回収不可能な費用を要する。当然の事ながら、経営上、大きなダメージを被る可能性が生じるのである。試作船にかかる費用、言い換えれば

、失うかもしれないコストは、ほぼ正確に計算されて彼の手元に届けられていた。しかし、最後の判断が付かない。

経営判断というものに、何か道具や材料が必要だとするのなら、この時のウルマノフは、失うかもしれないコストと、技術開発課の連中の笑顔を、天秤に乗せて図り比べてみたのである。ウルマノフは思った。

（今夜は、久しぶりにぐっすり眠れるかもしれない）

心が重く濁って眠れない夜が続いていたのだが、あの連中の表情はウルマノフの心を、こころもち、明るくしたような気もするのである。

一方、技術開発課ではイマムラが警報の音量をもう少し小さく、社長に気付かれないようにしておいてくれと命じたのを、ラベルは笑いながら見ていた。

（興味深いねえ）と言うのである。

新型船開発の片手間に、警報システム作りをしたバレヤアサハリやシンから見れば、社長の首に鈴をつけるという発想が間違っている。社の環境システムのメモリーを調べて、ウルマノフの思考ロボットが見つからなければ、社長は不在である。ロボットが見つければ、ウルマノフのロボットに主人の居場所を逐一教えてもらえばいいのである。特別な道具や費用は不要である。もちろん、プロテクトがかかっているファイルを利用したり、ウルマノフの思考ロボットに、内緒で主人の居場所を囁いてもらうために、それなりの秘密のテクニックを要するのだが、シンは環境

システムの仕組みに詳しく、バレはプロテクト外しをパズル代わりに楽しむ趣味がある、アサハリはもとの部署で思考ロボットを扱う専門家である。最初は犯罪者と同列に扱われるのが嫌で不快な顔をしていたドノバンやウォルヒも、システムが稼働してみるとその効果に感心せざるを得ない。

彼らはこのシステムの目的を秘匿して「みんなお友達システム」というふざけた名を付けている。

偶然にも、1つの部屋に様々な専門分野や異なる趣味を持った人々が集まって、意外な成果を上げていたのである。

「この船体の特徴を一言で言って見たまえ」

妻のアマリアは腰に手を当てて威張った調子でそう言った。彼女のイメージの中で上司というのはそういう姿なのだろう。役になりきっているつもりらしいが、演技はうまくない。イマムラは答えた。

「全般的な性能において、在来機種のスピカ102型を凌駕しております。在来機種において主たる顧客から、加速性能と機動性の向上を求められておりますが、この船体はその意向に添うものとなります。更に今後、競合すると思われるノーラン&ベイズ社のアンドロメダと対比して、その加速性能は、、、」

イマムラはテーブルの緑茶をすすった。妻のアマリアの返事はやや遅れた。紅茶にリンゴジャムを入れてかき混ぜてるのに手間がかかったのである。彼女のお気に入りの飲み方である。

「しかし、機動性の点では劣っているのではないかね？」

「表に示しましたようにR P Yコントロールの値と推進剤の消費は……。この説明は分かりにくいかな？」

イマムラは言葉の途中で、夫に戻って妻に尋ねた。

「そうかもしれないわね」

妻のアマリアは紅茶をすすった。イマムラは少し考え込んで説明を変えた。

「ユーザーにおいて『機動性』とは、具体的に船体が一定の姿勢をとるための時間と、その姿勢制御に消費する推進剤の消費効率を指しています。MSB-Xの場合、姿勢制御時間は競合メーカ

一の船体に比べて劣っているように見えますが、今後、姿勢制御ノズルの位置の調整と推進剤の噴射速度の向上により補えると考えられます」

「長い。もう少し、端的に説明したまえ」

役員会議を前にして技術部の会議を控えていた。議事進行は技術部長が行うが、社長が出席する。技術開発課で進行しつつあるMSB-Xが議題に上るはずだった。最終的には役員会議の判断を待たなければならないが、その動向は、ほぼ、技術部の会議で決まると言って良いのである。

今のところ、量子コンピューター上のデータでしかないMSB-Xを、実際に試作するかどうかの判断する重要な資料になるはずだ。会議には技術的な補佐役としてウォルヒを同席させるつもりだったから、技術的な受け答えはウォルヒに任せればよかった。しかし、課長の自分が基本的な受け答えが出来ないようでは、MSB-Xのイメージが悪い。彼はメンバーに命じて、予想される質問事項とその模範的な受け答えについて要点をまとめさせていた。内容は技術的で難しく、やや首を傾げなければならない。更に、自分に分かるように手を加えて想定問答集を作成していた。そして、妻に上司の役をさせて、会議のための練習をしていたのである。

部署が編成されてから、奇妙な連中も居たが、おおむね仕事に対して積極的で、課長の自分が技術的にサポートできないにもかかわらず、自分達で問題の解決を図っていた。その努力を見てきただけに何かをしてやりたかったが、今の自分に出来ることは、会議で試作船の製造を承認させることだった。

間の悪いことに、この時期、保安局からはスピカの改修について、様々な要求がされていた。エンジンの出力の向上、機動性の向上、航続時間の延長、固定武装の換装等である。それらの要求が、思いつくままされているのではないかと疑いたくなるほど次から次へと出されて、この時期の保安局の混乱ぶりを物語っていた。

技術部はその対応に追われていた上に、忙しいのは技術開発課に人員を割いているからだという思いも蔓延していた。スピカの改修は設計課の担当だった。設計課が快く思っているはずは無い。会議は紛糾が予想された。設計課だけではなかった、シュミレーションセンターも技術部や製造部から持ち込まれた試験に、スケジュールが詰まっているはずだった。声に出さなくても、将来性のない宇宙船の自主開発から手を引けという意見が聞こえてきそうだった。

妻のアマリアから見れば、夫は会議を明日に控えているらしい。一週間ばかり、夫の上司役を演じたが今夜が最終日だった。具体的にどんな状況だったのか、夫は説明してくれなかったために、彼女の推測の域を出ないが、夫は営業部に、宇宙船の自主開発について側面からバックアップを求めて断られたらしい。彼女はそれを語った夫が締めくくりに言った言葉を思いだした。

「全く、営業の連中は無定見でわがままで、自分勝手な連中だ」

その言葉をアマリアは笑って聞いていたのである。彼女の夫は、ほんの数年前には

「技術部の連中は無定見でわがままで自分勝手だ」

そうぼやいていたはずだ。いつの間にやら彼女の夫は技術部の人間に成りきってしまったらしい。仕事になじむと言うことは悪いことではないように思われる。

壁際のディスプレイに灯が灯って、臨時ニュースが報じられた。登録してあったキーワード、たぶん『レオン事件』という単語だろう、に反応したのである。拘置所を取り囲む人々や検事局の建物の映像が映し出されている。

酒場レオンで起きた殺人事件で、容疑者引渡しの判断を求められていた検事が、抗議のために辞職したというニュースだった。法律上の解釈を求められれば、容疑者を連邦軍に引き渡すのが妥当かもしれなかったが、誇りを踏みにじられてきた火星市民の感情を考慮すれば、許し難い行為だった。もはや、事の経緯に火星市民の民意は及ばない。過去の事例を考えれば、殺人者には数年後の仮釈放、或いは数年の懲役刑に執行猶予がつく、そういう結末が予想されるのである。地球市民が考えるより火星市民の団結心が強い。火星市民は火星という大地で生き抜くためにそういうものを必要とした。殺された仲間の命が過失致死程度のものかと不満をつのらせるのである。

臨時ニュースとして扱われるほど、事件についての火星市民の関心が高い。ここにも救国市民戦線のアクセ代表が、声高らかに愛国心を煽る姿が映しだされていた。

ベルが鳴って、この夫婦に来客を知らせた。ニュースの展開を知りたいと思いつつも、妻のアマリアはスイッチを切った。来客が地球市民だと言うことを知っていたからである。互いに、気ま

ずい思いをしたくはないのである。

アマリアは客をもてなす料理を温めるために台所へ姿を消し、夫は客を出迎えにドアに向かって歩き始めた。

「どうでした？ イマムラ課長」

朝の技術開発課で、上司と顔を合わせるや否や、好奇心を露わにして質問したのは、アサハリだが、他のメンバーも振り返って、その返事に聞き耳を立てている。昨日、イマムラが自宅の夕食にラベルを招待した、ということは全員が知っている。

「久しぶりに、旨い家庭料理を食べさせてもらったね」

ラベルはそう言ったが、メンバーの興味は夕食のメニューではない。ラベルはそれ以上言及する記はないと肩をすくめて見せて、イマムラに尋ねて見ると身ぶりで示した。

（ちゃんと聞き出せたのか？）という一点に、この部屋のメンバーの好奇心が集約している。

ラベルのような高名な男が、何故、わざわざ火星に、しかも、こんな中小企業にいるのかという、彼らの疑問が解けないのである。ことの発端は、シンが自分の給与明細にため息を付きつつ、ラベルが受け取っている報酬について首を傾げた事だった。ラベルの質素な風貌や、時折、彼の口から漏れる生活ぶりからは、どう見てもそんなに多額な報酬を受けているようには見えないのである。

（何故？）

そんな疑問が湧き上がってくるのだが、ラベルはそんな疑問を笑って聞き流すだけで、答えようとしないのである。そして、そういうラベルの態度は、バレやウィリアムスの好奇心を更に刺激して、深い詮索を思いとどまらせようとするイマムラに向か

って、

「女にとって、他人の秘密は知的な泉、うわさ話は最高の娯楽よ」

そう放言してはばからないのである。イマムラは部下の好奇心を抑えることが出来ないでいる。しかし、悪いことではないかもしれない。この種の好奇心は、ラベルに対して深い敬愛の情が無ければ、生まれにくいに違いないのである。

ただ、バレと同じ女であるはずのウォルヒは、静かな表情の中に困惑を隠せないでいる。週末に、北公園の付近をラベルと散策する約束になっている。来週、イマムラと同じ質問を受けているのは彼女なのである。困惑し、迷惑にも思いつつ、彼女もまた、そんな好奇心を持っている。この週の、彼女の気がかりな点は、MSB—Xの開発の進行状況と同時に、週末にどうやってラベルの秘密を聞き出そうかという方策だった。彼女たちにとってもいい気分転換になっているようだ。

子供のブロック遊びのようだったMSB—Xの姿は、細部が出来上がって、確かに宇宙船の姿をしている。通常はMSB—Xの映像が単独で浮かんでいるが、思考ロボットに命じるとFW201スピカの映像と並べて映し出すことが出来る。2つを比べると、全体の大きさはMSB—Xの方が少し大きい。出力の大きな核融合エンジンモジュールを搭載している為である。両者とも最前部に居住モジュールがあり、最後部にエンジンモジュールが位置している。その前後のモジュールを、スピカでは直径98センチメートルの巨大な鋼管で接続しているが、鋼管の周りを推進剤タンクや通信機器などの小型のモジュールが取り巻いているので

、その鋼管型のフレームの全体像を見ることは難しい。制御信号を伝える重要なケーブルや、酸素を供給するような重要な配管は、この頑丈な鋼管の内部に配置してあるのである。

一方、MSB-Xは、太い支柱でも直径11センチ足らずの鋼管でしかない。そんな鋼管を幾つも繋いで、まるで目の粗い網の籠で出来た大きな筒をフレームにして、前後のモジュールを繋いでいる。タンクやその他のモジュールは籠の筒の中に収まっていたが、籠の中で外部から露出して見える。

硬さという点で比較すれば、スピカのフレームの方が頑丈に違いないが、粘り強さという点で評価すれば、両者の安全性に甲乙つけがたい。MSB-Xのフレームは製造に手間がかかるという欠点と、一体型の鋼管型のフレームよりずっと軽く作ることが出来るという長所を持っていた。

両者の姿に違いはあるが、その映像と共に、彼女たちは確かな手応えを感じている。本当に自分たちの手で、N&B社やデメテル社の技術陣と肩を並べる船体が出来るとは思っていないかという思いである。

指導当初、ラベルはメンバーに思考ロボットの使用を制限するという、本来の設計業務を見れば、ひどく回りくどいこと指示した。もちろん、今の彼女たちは、一定の水準に達してラベルの試験に合格しているらしい、思考ロボットの使用を許されている。そのような回りくどい道を通り、しかも、その設計途上で、この生徒達は様々なトラブルを起こしたにも関わらず、目の前の映像通り、MSB-Xの開発は予定通りに進行している。ラベ

ルという男は一流の設計者というのみならず、教育者としても優れた手腕を発揮していたのである。

現場の技術者というのは非常に単純な一面を持っている。彼らは理論や数値を生業にするにもかかわらず、学問的な理論や数値について、冷ややかなほど距離を置いて冷静につき合っている者が多い。ところが、目の前に示された現象や事実には驚くほど素直で、理論を放り出しでも、目の前の事実を受け入れるのである。MSB-Xの姿に象徴されるラベルの能力に、彼女たちは一片の疑いも抱いていない、それは、地球市民に対して嫌悪感を示すドノバンですら認めているのである。

この週もまた、技術開発課のメンバーたちは、彼らの教師に対する好奇心を満たせないまま、週末を迎えたのである。

好奇心を持った人々は大勢いる。しかし、ラベルの年齢に達しても好奇心が尽きない人物も珍しい。この星に来て以来、彼の好奇心は火星市民の生活に向けられている。

ただ、昨日は都市機能に興味を示したかと思うと、今日は隣人のエリカやレイの学校の話を通して、火星市民の教育意識に興味を示すと言う具合で、その好奇心の対象は、子供のように気まぐれに切り替わるのである。ラベルも彼ら火星市民から素直に学んでいる。そして、解き明かした疑問や秘密について、日々、メールにしたためて嬉しそうに妻に報告しているのである。妻からは、まるで母親が息子の成績を誉めるような返事が返ってきている。最近、ラベルの好奇心は、ウォルヒ・パクという典型的な火星市民について向けられていた。

この時代、姓名から祖先の出生地を推し量ることは難しいが、敢えて名前から推測すると、彼女の血筋は極東の地に行き着くようだ、顔立ちなど外見的な特質も、極東アジア人女性の特徴を持っている。これほど強く、地球とのつながりを外観に現している女性の何処に、火星市民を代表するという印象が潜んでいるのだろう。ラベルがウォルヒを眺めて考えるのは、そんな疑問である。

「先生、私の顔に何か付いていますか？」

ウォルヒは、じっと自分の横顔を見つめていたラベルに怪訝そうに尋ねた。ウォルヒの近所に絵の好きな女の子がいて、ウォルヒは女の子が誤ってつけた、衣服や顔のインクを指摘してやっている。ラベルが彼女の顔を見る表情に、自分があの女の子を見る姿を重ねて考えたのだろう。彼女は指先で頬を撫でてその指先を確認した。

「いや、予定が変わるというのも面白い」

突然に、返事を求められて、ラベルはしどろもどろにならざるを得ない。たしかに、ラベルはウォルヒの横顔をじっと見つめていた。しかし、ウォルヒにその理由を説明することは難しい。

ウォルヒという女性は、何事もスケジュール通り緻密に積み重ねていかなければ、気が済まないという性格のはずだ。その彼女が、今朝の気象予報を見て目的地を変更した。ラベルの依頼というのは、（この町の中で、火星の人々を象徴する場所を案内して欲しい）というもので、特定の場所を指定したわけではない。今日の目的地はウォルヒ任せにするつもりだったから、不満は

ない。目的地が変わったということよりも、ウォルヒの新しい面を見つけたことが興味深く、バスの中で傍らに座る彼女の横顔を見つめていたのである。

「MSB—Xの構造を見て思ったんですけど、」
とウォルヒが聞き、

「安全性を何処に求めるかという問題でね、N&B社の連中は破損しないように頑丈にすることを考える。デメテル社では破損しても元の機能を失わない仕組みを考える」
とラベルが答えて、二人は気まずそうに黙りこくった。

ラベルという男は、おしゃべりだというわけではないが、好奇心旺盛なだけに話題は豊富で、会話の時に話題に窮した経験はなかった。しかし、ウォルヒとの会話で、会話を継続させるためには共通の話題があるということを知ったのである。ウォルヒとの間で、共通の日常会話の話題がない。二人の会話は、迷宮の中で袋小路に陥るように、いまは避けているはずのMSB—Xの話題で行き詰まって途切れてしまうのである。

二人の会話は、意外なきっかけで新しい展開を迎えた。きっかけは『地球』という話題だった。

「当時は、3ヶ月もかかったんですよ」

ウォルヒは地球に旅行したときのことを語った。ラベルにとって意外なことでもない、地球に関する話題に関して、彼女が口にする表現は具体的で、想像や伝聞では得られない内容を含んでいたからである。しかし、彼女の口からハッキリと地球との関わりを聞いたのは初めてだった。彼女の記憶は地球時間で11歳の時のものだ、18年も前の話で、細部の記憶はぼやけてしまっ

いる。

「3ヶ月か」

ラベルはそう呟いた。現在の旅の長さは、宇宙船のエンジンの出力増大によって、もっと短縮されている。しかし、ラベルはその旅の長さで、彼が初めて火星にやってきた時代を思い起こした。もちろん、地球と火星の相対的な位置関係で、二つの星を行き来する旅の長さは変わる。しかし、観光や商業レベルでは、尤も移動効率の良いタイミングで行われるため、ラベルが最初に火星に来た時に経験した3ヶ月という時代は、ウォルヒが言う3ヶ月と、重なるのかも知れない。

「交錯したのか」

ラベルがそう呟いたのは、ウォルヒが地球を訪れたのと同じ時代、ラベルは火星を訪れていたのかも知れないと思ったのである。ウォルヒはラベルの思いも知らないまま、思い出を語った。

その年に火星は親善と教育の名目で、教育委員会事務局のバックアップのもとで、幼年学校から選ばれた少年少女30名を、地球に送ったことがある。彼女は偶然にも、その一人に選抜されたのだった。

「きっと、私が選ばれたのは、『火星の息吹計画』遺族だったからです」

彼女は旅の発端をそう断言した。

「先生や委員会の人たちは、旅客船の中で、これから訪れる地球の素晴らしさを毎日語ったんですよ。そして、毎日作文を書かせ

るんです」

「そりゃ大変だ」

「でも、私はそんな人たちを失望させてばかり」

「失望？」

ラベルはこの優等生に違いなかった女性の意外なメンにそんな疑問を抱いた。ウォルヒは記憶を辿って笑った。

「作文の内容は今でも覚えています。『旅客船というのは、わたしが考えていたよりずっと複雑な機械の塊でした。でも私が、おどろいたことは、このおおきな旅客船を、人間が動かしている、ということでした』」

ラベルもウォルヒの記憶を、出合ったことのない教育委員会の人々と重ねて笑った。ウォルヒが経験した旅行に目的があるとするれば、火星の子どもたちに地球のすばらしさを子供達に実感させると同時に、地球の子供達との交流を図りたかったのだろう。当時まだ数が多かった地球生まれの教育関係者が考えそうなことだ。

ただ、ウォルヒは物事の核心をよく見ている。宇宙船を巨大な機械として捉えていたらしい、高度にシステム化された指揮系統の元で、巨大な船を人間が運用しているのだという発見は、彼女を感動させたのだろう。しかし、その感動は、教師が彼女に期待した、地球のすばらしさを体感するという目的から大きく逸脱していたに違いない。

ラベルには彼女の教師たちの渋い表情が目につかぶようだった。もちろん、その旅費は税金で賄われていたはずだ。この時の彼女の作文は、市の教育委員会が今回の予算組みを市民に納得させ

るにはもっとも不適當なものに違いなかった。

「重力に慣れるのに、到着した月面のローズウッド市で3日ほど過ごしてから、スペースプレーンで地球に降りたんです」

「それで？」

「降りた所はカンサイ宙港、この町と同じ名前。それが何となく不思議でした」

そんな言葉で語り始めたウォルヒの思い出話から、ラベルは当時の状況を思い浮かべた。彼女たちは、月面を経てカンサイ宙港で初めて地球の大気を呼吸した。『カンサイ』という彼女が生まれ育った都市と同じ音感をもった場所に、不思議な感覚を覚えたという。大地の上で、マスクも付けずにそのまま呼吸できるというのは便利だった。キョウトで古代建築を見学し、地元の子供達との交流を手始めに、地球をぐるりと一周し、極北では地元の子供達と雪合戦をして雪の冷たさを知った。親善という名のもとの交流は決して冷たくは無かったが、子供、特に彼女にとって違和感をぬぐえないものだった。彼女たちは雨と言う物を初めて見た。地球の子供達から見て、遠い惑星からやってきた子供達が、雨を避けようともせず、びしょ濡れになったまま不思議そうに空を見上げているのは異様な光景だったかもしれない。呼吸すら出来ない大気、この豊かな自然を知らない可哀想な人々、というイメージが、彼女達に対して向けられていた。

教師達が彼女達に地球の素晴らしさを教えようとする度に、その対象になる火星は常に貶められたのである。教師達に何の作為もない。子供心にもそれは分かるのである。

「でも？」と、火星の子供達は思うのだ。

地球という星を美しいと思うし、その大地の織り成す豊かな自然は素晴らしい、何より耐寒与圧服も着ないで、大地の上で呼吸が出来るというのは実に便利な事だった。

地球という遠い故郷を否定することは出来ないが、彼女達は生まれた大地を離れることは出来ないし、それを不幸だとは感じてもない。時を経てそういう世代になっていた。それをあえて理由付けようとするれば、子供たちの父母や祖父が彼らの目の前に築いてきたものや、その熱意への敬意と言えるのかも知れない。難しい言葉で表現することは出来なかったが、火星生まれの子供達の態度の中にもそういう意識の芽生えがあった。

彼女は地球各地を交通機関で回りつつ、そこで整備士というものの存在に気づいた。知ったという表現が適切かも知れない。搭乗員だけではなくて、整備士が整備をして交通機関が動くのだ。整備士に気づいた彼女は宙港の管制官や作業者の存在も知った。宇宙船を運用するためにこういうさまざまな人々とその仕組みが必要なのだと感じたのである。彼女が他の子供と違った点は、交通機関そのものではなくて、それを維持する仕組みやその仕組みを運用する人間を見ていた点だろう。

この時期の作文も教師を失望させた。この時の彼女の作文の題材は交通システムに関わるもので、教師が期待する、雪の冷たさや海の雄大さ山の木立の香りは、彼女の文章には全く出てこなかった。引率の教師は、教育委員会の連中は人選を誤ったのだと考えた。

「えっ？」

ウォルヒが言葉を途切れさせたのは、ラベルが笑い始めたからである。ラベルは笑顔で言った。

「すまないね。私は君たちを勘違いしていたようだ」

ウォルヒが疑問を感じたという地球市民。たった今まで自分もまたそんな人間だったと感じたのである。地球という根で、確かに地球市民と火星市民は繋がっている。しかし、火星市民は地球という幹から伸びて風に揺すぶられる哀れな小枝ではないらしい。火星市民は地球市民と同じ根本から伸びた太い幹なのである。その価値観が分かれるきっかけを考えたラベルは、このバスの終点の地と結びつけて尋ねた。

「北公園に行くのかね？」

「ええっ」

ウォルヒは短く答えて頷いた。ラベルはウォルヒが北公園にある火星の息吹計画の記念碑、『記憶の碑』に案内するつもりなのだろうと推測した。確かに、分岐点の象徴に違いない。密かにバスの中を見回してみれば、その体格から明らかに地球市民だと知れるラベルに、乗客たちの視線が集まっていた。好奇心に混じって露骨な反感もかいま見える。ラベルはドノバンを思い出した。

「ドノバンもよく北公園に行くのかね？」

ラベルの質問にウォルヒは微笑んで襟元のバッジを見せた。

「ご存じのように、彼も事故の遺族です。でも、彼はこの事故遺族のバッジをつけてないでしょ？」

「どうしてかね？」

「私のように事故を記憶に刻んで古い記憶を忘れたくないという

人間も居ます。でも、ドノバンのように辛い記憶を忘れてしまいたいという人間も居るんです」

「なるほど」

「ドノバンのカティアの関係のこと、ご存じですか？」

ウォルヒの質問にラベルは首を傾げた。自分がドノバンの嫌悪の対象になっていることは知っていて、ドノバンの私生活に踏み込むことは避けていたのである。ウォルヒは言葉を継いだ。

「カティアは彼の実子じゃないんです。居なくなった奥さんの連れ子です」

「ほお、そんなことが」

ドノバンを思い出したラベルはそう呟くしかない。彼がカティアに注ぐ愛情は、紛れもなく肉親のように濁りがないのである。ウォルヒは続けた。

「幼い頃にここで親類縁者を無くした彼は、ここで新しい家族を作りたがってるんです。きっと。その点では、私よりずっと前向きです」

黙って頷くラベルにウォルヒは意外な言葉を吐いた。

「地球の人たちは、事故の濁流が全てを綺麗さっぱり流し去っていれば、罪の意識を引きずることなく、清々したのでしょうか。でも、私たちは事故から生き残って、いま、ここにいます」

それは私たちは死んでしまったらよかったのか、地球の人たちはそれを望んでいるのかという憎しみの言葉である。ラベルはウォルヒの口からそのようなことが出たことに驚きながら諭すように言った。

「憎しみは何も生むまい」

「でも、憎しみを持たなければ、死んでいった者たちは。父や母や弟が可哀想です」

ラベルの沈黙にウォルヒは言葉を継いだ。

「わたしは、憎しみをもち続けなくてはならない自分自身が大嫌いです」

そういうことをウォルヒは感情のこもらない苦笑いで言った。そんな思い出話をする内に、二人が乗るバスは『北公園前』停留所に到着した。ラベルはウォルヒがここによく来るらしいと判断した。目的地に案内する道順に迷いが無い。ラベルもここは知っている。この角張った旧区画を抜けると展望区画があるはずだ。

記憶の碑を見せたいのだろうというラベルの予想は、ウォルヒが導く道順で崩れた。ウォルヒは碑を通り過ぎ、ラベルを展望室に導いたのである。

「ほお」

ラベルは目の前の透明な壁面を通して見える光景の美しさに感嘆の声を挙げた。それ以上の感想の言葉は、喉に詰まって出てこない。淡い青紫に染まった夕焼けの空を背景に、真珠色の流れる雲がゆっくり渦巻くように、その色を変化させながら空に舞い上がっている。その美しさや雄大さは地球のオーロラに例えることが出来るが、もちろんオーロラではない。

「気象条件がうまく調ったときにだけ、ちょうど、今の時間帯に、」

ウォルヒはそう解説した。赤道付近に位置するシンカンサイ市あたりに、緩やかな上昇気流がみられる事が多い。気象条件が整

って、東方からマリネリス溪谷添いに流れてきた、霧を含んだ冷たい風と、北西のハポニス山の斜面を駆け下ってきた風がぶつかって生み出した雲である。その状況が、この夕方の時間に起きると、火星の薄紫の夕焼けを背景に、雲が夕日に彩られてこの景色を生み出すのである。

この景色は確かに美しい。ただ、ラベルには周りの人々を見回す余裕と、目の前の雄大な光景を見比べる冷静さがある。客観的に見れば、地球の極地のオーロラや、朝日に照らされた熱帯の森林や、きらびやかな熱帯魚が泳ぐ珊瑚礁の海などの方がよほど美しいとも思うのである。この火星の赤茶けて干からびた大地との対比だからこそ、目の前の美しさが強調されているだけではないかと考えるのである。しかし、見回すと、この区画にいる人々は皆、この景色に感動していて、この区画は静まり返って言葉がない。

ラベルはそんな人々を冷静に観察しながら、この展望区画についてふと考えたことがある。このシンカンサイ市を上空から見れば、大きな楕円形をしていることは既に述べた。しかし、その大きな楕円の滑らかな曲線は、この展望区画の部分で歪な突起を形づくっている。ここは旧市街の墓地があった場所なのである。人々はこの土地を、都市に突起を作ってまで、強引に都市の中に囲い込んだ。ラベルは彼らが冷たく乾燥しきった大地に、肉親の遺体を葬っておくことに抵抗を感じたのではないかと考えたのである。とすれば、彼らが火星の大地に抱く郷愁は、地球市民が地球の大地に思い描く、豊饒や再生のイメージではないはずだ。

しかし、美しい。彼ら自身は気付いていないのだろう。彼らと

距離を置いて、この巨大な景色を背景に、彼らの姿や表情がかさなると、美しい1枚の絵になる。ラベルにとって首を傾げたいのは、この美しさを感じるためには、彼らと距離を置かなければならないことである。もはや価値観を共有できないのかもしれない。

「先生、私が何か？」

ウォルヒにそう尋ねられて、ラベルは彼女をじっと眺めていた自分に気づいた。その理由を説明することも難しく、ラベルは透明な壁面を撫でて話題を変えた。

「こんな丈夫で巨大な一枚板の、建材が作れるというのは、凄い技術だね」

口から出まかせではない。都市を外部の環境から隔離して、人の生存を可能にするために、都市を包み込むこの建材は、圧力に耐え、長期の砂嵐に耐え、真空に近い外気を通して降り注ぐ強烈な紫外線から人々を守りぬく。そして、優美な曲線を持った信頼性のある建材を継ぎ目のない一枚板で加工するというのは、おそらく地球には無い技術だろう。

もちろん、地球ではこの種の建材の需要はないから技術が育たないわけだが、この星に移り住んだ人々が、この大地で生きるために新たな技術を生み出しているのである。

「ドノバンに教えてもらったことがあります。タイペイ建材というメーカーで製造しているそうです。彼の友人が勤めているとか」

「そうか」

ラベルは腕時計で時間を確認した。夕刻の6時である。まだ、時間はたっぷりある。ラベルはウォルヒに向き直って言った。この女性には何かお礼をする必要があるだろう。

「ところで、君も、私がなぜ火星にやってきたのか知りたいのか？」

突然の核心を突いた質問に、ウォルヒは面食らって口ごもった。聞き出したいと思いつつ、バスの中では地球の思い出話に時間を費やした。ウォルヒはラベルの質問に黙って頷いた。このチャンスを逃せば、永遠に聞き出す事は出来ないようにも思われたのである。ラベルが考え込むような素振りを見せたので、彼女はラベルが秘密を打ち明けてくれるのかと期待を膨らませた。

「いいか、他の者には内緒だぞ」

ラベルが小声でそうだったので、ウォルヒはもう一度、頷いた。ラベルはウォルヒの耳元に口を寄せてゆっくり囁いた。

「その秘密は、君が一人前の大人になったら、自然に分かるはずだ」

二人は顔を見合わせて、会話にしばらく間が空いた。彼女などまだまだ子供だというのである。この老人はまだ若者に道を譲って引退する気はないらしい。ラベルは明るく笑い出して続けた。

「よし、今日のお礼に、君に欠けているものを補ってやろう」

ラベルはウォルヒに肘を突き出した、腕を組もうと誘っているのである。妙なカップルである。孫と祖父どころか、曾祖父と呼んでも差し支えない年齢差がある。ラベルはウォルヒと腕を組んだまま、彼女を町の中央に連れ戻した。そこに、彼が見つけたお気に入りの店がある。

あくる日、ウォルヒはメンバーからラベルの秘密について質問を受けたのだが、昨日の出来事については黙ったままだ。ただ、彼女の雰囲気が違う。いつもの無機質な歩調が、今日は軽やかなターンを見せたりするのである。

しかし、昨夜、別れるまでの間にたっぷりと、あの老人から娘が父親から手ほどきを受ける調子で、ジルバやタンゴやチャールストンといった古いダンスのステップの手ほどきを受けた、ということは言い出しにくい。

(ニシダの時代は良かった)

そう語る人々が居ることを、ウルマノフは知っていた。大抵は社内の技術屋の連中である。経営を無視しても技術を優先させることが正しいと考える連中だった。無鉄砲に突出することを潔しよしとしたニシダが、自分たちの能力を正当に評価し、活用してくれていたと考えている。

しかし、ウルマノフもまた、ニシダの時代は良かったと考えるのである。従業員が90名足らず、ニシダという個性的な男を中心に、互いの顔や性格を知り尽くせる規模の会社だった。宇宙船の修理やメンテナンスを通じた生活基盤を有する、と言うことで共通の利害関係があり、90名の社員に一体感があった。

今は350人を越える社員が居る。急激な需要の増加という時代にも恵まれたが、その時代の波に乗ったのはウルマノフの経営手腕と言っても良い。しかし、ニシダが社員の一人一人の名や、家族構成まで熟知していたのに対して、ウルマノフには、彼が名も知らない社員がいるのである。社内で価値観がいくつにも別れて、複雑な権力闘争が生じている。

その一人が、社長のウルマノフに対して、副社長のエバンズといえる。ウルマノフの前では言わないが、陰ではデメテル重工との太いパイプを築いているらしい。ウルマノフがN&B社の仕事を受注して経営基盤を立て直したのと同じ事を、デメテル重工を通じて行うつもりだろうか？

(結果は同じ事だ)とウルマノフは思った。

当時、月面や地球軌道上の植民市において小型機のシェアを握っていると言われたデメテル重工は、火星進出という点でライバルのN & B社にひどく後れをとっていた。彼らの小型機はスピカと同等の性能を有しているにも関わらず、火星における販売シェアは、スピカの1割にも満たないのである。ユーザーは整備や操縦士の慣熟訓練の手間を省くために、保有する船体の種類を増やすことをいやがる傾向がある。いち早く火星の市場を占有していたN & B社のスピカに対して割り込む余地がほとんどなかったのである。

デメテル社もこの火星に、小型機の製造販売の拠点を必要としているのである。ただし、この拠点は20年もすれば火星から小惑星帯に移る。その時にデメテル重工は、N & B社がそうしたように、ネヤガワ工業を捨てるだろう、悪くすればその巨大資本はネヤガワ工業を飲み込んでしまいうに違いない。

（同じ事だ）とウルマノフは繰り返し思った。

どちらにしても、火星の中小企業は巨大資本に翻弄されるのである。ウルマノフはため息を付くように瞑目した。古い記憶が蘇ってくる。

「ロシア者に、資本主義を説かれると思わなかった」

吐き捨てるように言ったニシダの表情は、ウルマノフの脳裏に刻みつけられて残っていた。経理部を与っていたウルマノフは、社長に新型機開発中止を意見具申したのである。単純な理由である。修理やメンテナンスで、細々と稼ぎ出している利益を、開発費が消費して改善する見込みが立たなかった。ウルマノフの見

たところ、個人的な趣味と経営が、この男の中でごっちゃになっていて、区分する意志も能力もない。

技術者上がりで、会社の利益に疎いところがある。はっきり言えば経営者というタイプではない。その男の宇宙船に携わる仕事がしたいという一念と、宇宙船の修理やメンテナンスの業務に需要があったという時代が、ニシダという男を本人さえ望まぬまま、経営者の位置に据えた。ただ、技術者として独特の卓越した感性を持っていたことと、怒りっぽい性格ながら他人に対して裏表がなく、激情家と呼んでも差し支えないほど、仲間をかわいがるという単純な性格が魅力になって、「うちの親父」と慕われていたのである。

ウルマノフは「うちの親父」になりたいとは思わなかったが、ニシダの独特のカリスマを認めないわけにはゆかない。そのカリスマが倒産に至る道をひた走るネヤガワ工業を、精神的に支えていたのである。しかし、当然、限界点に達する。資金繰りが付かず、自分には打開策が無く、社員を救う力量がない。ある日突然に、ニシダはそれを認めて受け入れた。

意外なことに、ニシダはウルマノフに座を譲った。自分の身の回りには、エバンズをはじめ同じタイプの人々しかいない。会社を変えてゆくのなら、異なる価値観を必要とする事を悟っていたのだろう。反感を抱きつつも、ウルマノフの正しさと長所を受け入れるという点で、ニシダは認識の確かさと、経営者としての公平さをもっていた。

ただ、ニシダ自身にとっても、ウルマノフにとっても、不幸な

出来事は、現役を退いたニシダはまるで生気を尽くしたかのよう
に、あっさり他界したことだった。ニシダを慕う人々にとって
悲劇的な出来事ともいえた。ニシダに対する思慕はウルマノフに
対する反感となって、今も社の一部に澱のようにわだかまっ
ている。

ウルマノフはニシダになりたいとは思わないが、唯一、彼の私
心のない引き際の鮮やかさを真似たいものだと思いつつ、十数
年を経た。安全な体制の中にどっぷり浸かっている。と腹立たし
く思うことがある。

「社長。お時間です」

秘書が彼に会議の時間を告げた。

職場内の意見を調整すると言う点で、技術部長ストヤンは苦慮
している。今日の会議で、議題に上がる「新型船開発」という問
題に対してである。社長の意向を受けて、新型船開発を推進する
という方向で、議事をまとめ上げていれば問題はないのかもしれ
ないが、設計課のキムなどは副社長エバンズの意向も受けてい
らしい、些細な欠点を上げへつらって反対するに違いない。そ
して、何よりも困ったことに、ストヤン自身がその問題について
ひどく懐疑的な事を自覚しているのである。この男のおもしろ
さは、そう自覚しつつも中立的な位置に自分を置こうと思い、そ
う行動した点である。しかし、ひどく気苦労が多い。撫でた額が
つるりと禿げ上がって、抜け毛の多さと気苦労は比例関係にある
。

「対案はまとまっているな」

設計課のキムは、部下が自分のディスプレイに転送したデータを確認して納得した。自分の意向に沿ったものになっている。2日前にデータを受け取って、チェックし細部を修正させたのである。

「ファイルはオープンした状態で、サーバーに転送して置いてくれ。後は会議室で利用する」

「すでに転送しています。今、ファイルは、オープンにしました」

キムは部下の仕事ぶりに満足した。対案とは、もちろん新型船開発についてである。今日の会議の議題はいくつかあるが、新型船開発が主要な議題になることは間違いがない。社の命運を支配する。キムはN&B社の「スピカ」に代えてジェルバ社の「アコンガグヤ」やジェミニ社の「アトランティス」をベースにしようというのである。どちらも一世代前の船体だが、スピカに比べれば新しい。新しい分だけ、スピカに比べてその船体の能力に余裕があり、ユーザーの求める性能の要求に応えられるものと考えている。既存の設備や技術の転用も可能であり、現実的な問題解決策に違いない。可能性がないとキムは信じて疑わないのである。新型船開発にうつつを抜かすよりも遙かに合理的に違いないし、この意見には他部署の支持も得られやすいだろう。

イマムラ、もしくは営業部員なら別の見方をしたに違いない。彼らの主なユーザーは危機管理部や運輸交通部保安局である。彼らの顧客は船体の用途が同じなら、その機種を絞りたいがる。保有

する船体の種類は少ない方が稼働率が良くなる。整備に要する機器や部品、整備士や搭乗員の教育訓練などが効率よく行えるからである。いま、両者の保有している小型機はスピカが主流を占めている、ネヤガワ工業という規模から言えば中小企業の船体が、これほど大量に採用され、市場を独占しているといっているのは、彼らが最初に採用したときにスピカしか無かったこと、一度採用した船体の種類は増やしたくないという意向が働いたこと、そういう理由なのである。

ただ、両者は次期の主力機の選定をしているはずだが、アコンカグヤに手を加えた改良型と、N & B者の最新機アンドロメダを比べれば、間違いなくアンドロメダに軍配が上がる。現在の能力ばかりではなく、今後の拡張性を見ても両機の差は広がるばかりである。作れるかどうかは別にすれば、アコンカグヤやアトランティスの改造品は作れても売れる見込みはないだろう。

様々な人々の思惑をはらんで、たぶん、今日の会議は荒れるだろうという共通の予感が漂っている。その予感をウルマノフが突き崩した。

「ストヤン君。私は後の仕事がつかえている。悪いが、先に新型船開発の話を知りたい」

そう話を切りだしたのである。ストヤンは自分に会議室の技術部員の視線が集まるのを感じた。確かに最も注目を浴びる議題に違いない。

「それでは、技術開発課から、作業の進行状況について報告してもらえないか」

ストヤンが、どちらが報告をするんだと、ウォルヒとイマムラを見比べるように言った。イマムラはウォルヒを促した。ウォルヒがMSB—Xの概略の説明を始めたのだが、その話を聞くウルマノフの表情が険しい。丸いテーブルの中央にMSB—Xの映像が浮かび上がっている。MSB—X開発反対派の人々にとって、映像よりも、社長の苦渋に満ちたかのような表情は好ましいのだろう。

ウォルヒは説明を続けながら、室内の顔を見回して、ひょっとすると誰も私の説明を聞いていないのではと訝った。自分やMSB—Xより、社長に注目が集まっている。ウルマノフが傍らのストヤンに何か囁いた。ストヤンは説明者のウォルヒに指示を下さざるをえない。

「パク君、もう少し要点を絞って手短かに説明してくれないか」

ウルマノフの不満は、説明がだらだら長く、時間を無駄に消費していると言うことらしい。もともと、ウォルヒの説明は彼女の性格を表していて簡潔そのものだ。彼女のレポートを見たアサハリなど、もっと自分たちの努力を説明してきてくれと懇願しているのだが、彼女は報告から事実以外の点を、あっさり切り捨てている。ウォルヒは更に説明を切り捨てざるを得ないのである。

ウォルヒの説明を聞いたウルマノフは、不機嫌な表情を崩しもせず、片手を振ってウォルヒの発言を封じた。

「結論から言ってくれ。国産機は設計上は、既に出来上がっているんだろ」

イマムラやウォルヒの説明をろくすっぽ聞きもしないでウルマ

ノフはそう言った。頻繁に技術開発課に顔を出しているから、この程度は熟知しているはず。そんな説明内容を聞いただけである。ウルマノフは不思議そうにストヤンに首を傾げて見せた。

「ストヤン君。何の問題もないじゃないか。次の役員会議にこの議題を上げるから準備をして置いてくれ」

ウルマノフらしいと言えば、そう言える。ややこしい問題をさりと流してしまった。

「じゃあ。わしは行くよ。次の仕事が控えてるんだ」

この件については既に決定済みで、これ以上話すことはないと言わんばかりに、ウルマノフは席を立った。そして、呆気にとられた人々を見回して怒鳴るようにいった。

「おいっ、しっかりと給料分は働けよ」

ウルマノフはいつもの口癖を残して去ってしまった。荒れるだろうと言う危惧に満ちた国産機開発の議題は、技術部の会議を素通りして役員会議に送られてしまったのである。

(あとは役員会議の席上で決定するだけだ)

会議室を出たウルマノフはそう考えている。その前に、彼が会議の席で触れた「次の仕事」を片づけておく必要がある。もしも、自主開発に反対する者の名を上げろと言われれば、まず副社長のエバンスの名が上がる。技術部上がりだから技術的な数値をあれこれ並べて、実に論理的に反対してのけるに違いないのである。ただ、ウルマノフはロシア者として、彼が賛成派に転向してくれると信じ切っている。

副社長室には技術開発課のような警報装置があるはずが無い。

ウルマノフの訪問は、ほぼ奇襲になった。エバンズは驚いて席から立ち上がった。彼の想像では、この時間、ウルマノフは技術部の会議に出席して、国産機開発の議題に頭を悩ませているはずだった。

「やあ」

ウルマノフはエバンズに明るくあいさつをした。

「ご用が有れば、此方から出向ききましたのに」

「いや、君に相談事があるね」

ウルマノフはそう言い、エバンズの机の上のファイルを持ち上げて何かを熱心に探す様子をした。

「何か、お探しですか？」

「いや、君が昨年発注した500トン・プレス機はどこに隠れているのかなと思ったんだ」

もちろん、素材に500トンもの荷重をかけて加工するような、大型の工作機械がファイルの下に隠れているわけがない。ウルマノフの皮肉の混じった比喩である。

「プレス機？」

エバンズが不思議そうに尋ねた。しかし、発注した彼が知らないはずがない。スピカの後継機として、N&B社の新型船アンドロメダを受注をするために、エバンズはアンドロメダの製造に使用する大型工作機械を独断で発注していたのである。受注交渉が不調だった時期に、その工作機によって、ネヤガワ工業はアンドロメダの製造に必要な設備を有していますと言う交渉の切り札にしたのである。

その受注は失敗に終わって、設備が宙に浮いた。エバンズは発注した設備を転売し、生じた差額の損害は、他の損失に紛れ込ませて、会計上のつじつまは合わせていた。経理部上がりの社長がそれに気付いたのかもしれないとエバンズは思った。

ウルマノフはファイルを元の位置に置いて詫びた

「いや。ここで見たような気がしたんだが、私の勘違いだったかもしれない」

エバンズは黙って答えない。こういう場合、相手の出方を探る必要があるのだろう。ウルマノフは明るい口調で尋ねた。

「ところで、君に頼みがあるんだが、」

「何です？」

「N & B社のアンドロメダのライセンス生産が出来なかった」

「全力を尽くしたのですが、残念です」

「いや、君が最善を尽くしてくれた事は知っている。しかし、受注するはずだったアンドロメダに代わる船体が必要だと思うんだ」

「おっしゃる通りです」

「そこで、君にはアンドロメダの件は綺麗さっぱり忘れて欲しいんだ。君の受注交渉に代わって、私は新型船開発がしてみたい。そこで、技術者としての君の協力も仰ぎたいと思ってね」

ウルマノフが綺麗さっぱり忘れて欲しいというのは、工作機器の独断発注とその損失の発生、及び損失のもみ消しも含めてのことらしい。副社長室のドアをくぐって出てきたウルマノフは上機嫌だった。

「前から、君は物わकारいの良い奴だって考えてたんだ」

エバンズはやや皮肉な調子で応じた。

「社長。20世紀の昔なら、KGBの長官がつとまるかもしれない」

「ありがとう。でも今のところ、この仕事を投げ出して引退する気はないよ」

これで、役員会議を待つまでもなく、試作機の製造は決定されたも同然だった。反対派の総元締めが、開発推進派に転向してくれるのである。エバンズにも不満はないはずだ。彼の犯罪的な不手際が表面化することが無くなったばかりか、小型船の自主開発の失敗の経営責任をとって失脚する、ウルマノフ社長の後継者という地位が約束されているようなものだ。

火星の暦で言えば67年4月。彼らが初めて技術開発部員として顔を揃えてから、1年が経過していた。ラベルもすっかり火星に馴染んで、その期間を地球時間で2年間と換算せずに、時の長さを感じ取っているようだ。

「いよいよ、始まったんだね」

シンが目の前の情景が信じられないように言った。メンバーが初めて会議室に集められて技術開発課が発足した日が、遠い過去の事の様である。彼らの努力が、想像や映像ではなく実際の形となり始めている。

（今日から始まるのかもしれない）とウォルヒも思った。

誰のものでもない、彼女自身の夢が実現して行くのである。

技術開発課のメンバーはジグトレーラーを取り囲んでいる。その形から、別名フラットトップ（航空母艦）とあだ名されている。本来は組立中の小型機の運搬を行うトレーラーである。MSB-Xは試験的に製造する船体なので、通常の製造ラインには乗らない。この巨大トレーラー上で、あちこちのラインを回りながら、必要な艤装をしてゆくという変則的な製造をしなければならないのである。

もちろん、MSB-Xの姿は、トレーラー上で未だその片鱗もない。この後、この上で組み立てられる船体の荷重を支えるジグがあり、そのジグの大きさと位置関係から、メンバーは頭に刻んだMSB-Xの姿を推測することが出来るのである。彼らはこのジグトレーラーの上のMSB-Xの姿を、日々取り付けられて行

くケーブルや配管やタンクや各種モジュールの1つ1つまでイメージしていた。

「イメージだ。イメージを描け」

ラベルが怒鳴り続けたそういう能力を、メンバー達は彼らも気づかないうちに身につけていた。ドノバンは居住モジュールを中心に酸素タンク配管から電力供給のケーブルの配置まで、シンはレーダーなどの探査装置や通信機器、ウォルヒは全体像といった具合に、目の前にその姿を描き出すことが出来るのである。

ネヤガワ工業の製造部の建物は、主として西の端から整備工場、北側の資材倉庫に接して加工工場、東の船体組立工場、その向こうに仕上げ工場という4棟から成っていた。

ここはネヤガワ工業の整備工場の中で解装ラインと呼ばれる区画である。空間が他より大きい。十数メートル上の天井にはクレーンが見える。今は、保安局から定期整備に回されてきたスピカ68号機が、この整備ライン上で分解整備を待っているのである。この後、この船体は外観を点検した上で、居住モジュール、動力モジュール、探査機モジュールなどに分解されるのである。例えば居住モジュールはウォルヒ達のいる位置から見て左手の居住モジュール点検ラインに運ばれて、更に分解点検を受ける。点検ラインの出口で各モジュールは再び合流して、もとの船体に組み上げられて行くのである。

西隣の棟は、大型や小型の工作機械を取りそろえた加工工場、彼ら技術部員も時折顔を出すことがある。彼ら技術部員の設計データは承認を得た後、この工場の工作機械に転送される。船体の改造に使用する部品を、削り出したり、張り合わせたり、

溶接したり、各部品の加工を行うのである。MSB—Xの場合、フレームを組み上げる鋼管など、ほとんど特注の部品になるから、この工場の世話になるはずだ。

組立工場では言うまでもなく、スピカが組み立てられている。今は6ヶ月に1隻のペースで製造されているにすぎない。最盛期は月産2隻、実に2週間に1隻以上のペースで生産されていたというから、スピカを運用している保安局や危機管理部が、次期主力機が決まるまで、新しい船体を買って控えている様子がかげえるのである。

MSB—Xを組み立てるジグトレーラーは、解装ラインの片隅にポツンと間借りして落ち着かない風情だ。この場所が工場の中で、最も空間が広く、邪魔者を収容する余裕がある。

「希望への入り口か」

ウルマノフは感慨深げに言った。

「よい希望にするさ」

ラベルが応じてそう言った。自信があった。あの連中ならやるだろう。ウルマノフは顔をしかめて現実的な感想を漏らした。

「やってもらわなきゃ困る」

「社長。お出かけの時間です」

秘書が時間を確認して言った。ラベルはこの秘書を密かに「古時計」と呼んでいる。ラベルがふと気付いたのだが、ウルマノフと言う男は合理性を好む割に、スケジュール調整や予定の確認に、思考ロボットではなく人間の秘書を使う。それを指摘して、妙な男だと表現したら、あんなの手首の古時計と同じだ。自分で納

得できる者を使うという。この「古時計」は気まぐれなウルマノフの行動を、正確に調整してのける能力を持っているのである。ウルマノフは秘書の言葉に怪訝そうな表情を浮かべた。

「随分と早いじゃないか？」

「目的地まで警察の検問を幾つかくぐらなくてはなりませんから、」

「また、テロ事件か？嫌な世の中になった」

軍裁判所でレオン事件の公判がある。火星市民達は過去の例から見て、裁判では寛大な判決が出るだろうと見ている。それだけに反感を持つ者のテロが引き起こされる可能性が想像されるのである。市内の各所は嚴重な警備がしかれ、道路は幾つもの検問で遮られているはずだ。ラベルは肩をすくめて立ち去るウルマノフを見送った。誰にとっても、酷く不愉快な気分させられる情勢である。自分の力の及ばないところで、行動を規制され、解決するめどが立たないのである。

MSB—Xの全ての設計データは、技術部のサーバーのメモリー上にあって、製造部が活用できるように開かれている。この後、新型船開発は製造部に引き継がれ、製造部の管轄の作業になるのである。もちろん、彼らもこの船体の製造は初めてだから、設計に携わった技術開発課のメンバーが補助に付く。

最初の作業は船体のフレームを組み上げることである。長さ18メートルほどのパイプを短い構造材で繋ぎ合わせて、長さ18メートル、直径4.7メートルの網の筒を作ると想像すればいいだろう。このフレームの筒の中に推進剤タンクを初めとしたタ

ンク類、発電機や通信機器が収まり、筒の前方には搭乗員が乗る操縦モジュール、後方に船体を推進する核融合エンジンモジュールが付いて1つの船体になるのである。必要な配管やケーブルもこの段階で設置しておかなければならない。

「調べてくれ。エラー表示が出てロボットが動かない」

組立ロボットの操作盤に付いていたアデンという名の製造部員が同僚に言った。何か製造上のトラブルらしい。フレームを組み上げて溶接していたロボットが、突然に停止したのである。作業に立ち会っていたウォルヒたちは不安そうに見守っていた。製造は製造部員の領分で、自分たちが手助けするのもはばかられたのである。

「構造材の形状が合わないんだ。加工工場に連絡してみる」

アデンは部品の加工ミスではないかというのである。溶接する部品を加工する段階で、不手際があったのかもしれない。アサハリとガーヤンは不信感と不満の入り交じった視線を彼らに注いだ。ごく自然に感情が表情に溢れたのである。ただ、その視線を受けた製造部員も気分が良いはずがない。ウォルヒはやや眉をひそめた。大きな夢を実現するはずの船体によって、会社内の雰囲気が悪化しているのである。

加工工場からの返事は、設計図面通りだという返事である。彼らもかなり気分を害しているらしい。当然だろう、もともと、目が回るほどの忙しさの中で、何とか要求された部品を加工して取りそろえた。その作業にケチをつけたのだから、悪態の1つもつくのは無理はない。

しかし、現実には構造材は所定の位置で短く、隙間を生じているのである。溶接ロボットは安全性を優先して、自ら判断して作業を優先させることなく、人間の指示を求めて停止してしまったのである。工場に呼ばれたラベルが溶接箇所を撫でて指摘した。溶接の熱によって歪んでいる。本来1.7mの間隔で平行に走っているはずのパイプが歪んで、フレーム中央付近ではフレームを縦に繋ぐ構造材に数ミリの隙間を生じているのである。溶接ロボットはその停止理由を【局所的な加熱による素材の変形】と正しくモニターに表示していた。

ラベルは怒鳴りつけたい衝動を、諦めに変えてため息を付いた。金属加工に携わる人間にとって常識と言っても良い。単純に溶接すれば金属には歪みが生じるのである。通常、これほど大きな物を溶接する場合、歪みを緩和しながら溶接する、或いは、溶接後に様々な処理を加えて歪みを緩和する。ロボットが悪いわけではなく、そういう常識をロボットが明示しているにもかかわらず理解できず、対処方法を指示できない作業者に問題がある。この連中は作業経験は長いのかもしれないが、おそらく、命じられた仕事をマニュアル通りにこなしていただけなのだろう。幸か不幸か、このような大きな構造物を溶接することがなかったために問題が表面化しなかった。

ラベルは溶接ロボットの操作盤に足を運んで、従来の溶接手順をディスプレイに呼び出してアデン達に示した。

「いいかい。これが君たちが今までやってきた溶接の手順だ」

アデンたち製造部員は露骨に不快な表情をし、それを隠そうとはしなかった。いきなりやってきた地球市民に対して反感もある

のだろう。ラベルはそれを無視してディスプレイの表示内容を指で示した。

「プログラムの43行目で、溶接をするときに同時に反対側からも加熱するようにロボットに指示してある。この指示によってロボットはちゃんと溶接をこなしてきたんだ」

製造部員は黙って答えない。感情的になっていて言葉を受け入れることが出来ないのかもしれない。ムハマドやシンにも記憶がある。ラベルの指導を受け始めた頃の彼ら自身がそうだった。

「この意味を理解していれば、問題は無かったはずだ」

ラベルの分かりやすく指摘に対して、若いアデンは言い訳じみた反論をした。

「今まで、私たちにとってこんな長いフレームを溶接する必要がなかったんです」

(彼らが、ラベルを受け入れるのに時間はかかるだろう)

ウォルヒは自分たちがラベルを受け入れるまでの時間を思いだした。

「いいかい。人間は考えることを止めてはいけないよ」

ラベルは技術開発課のメンバーに言い続けてきたことを、ここでも繰り返さざるを得ないのである。彼らに長年、小型船の製造に携わってきたという自信やプライドがある。しかし、悲しいことに、これが本当の実力なのである。このトラブルは人間の責任だが、もしも、ロボットにも責任を求めるとすれば、あまりにも人に頼られすぎて、人に考えると言うことを止めさせてしまった点に違いない。

この事件は社内で多少の波紋を呼んだ。ウォルヒたちが直接に聞いたわけではないが、設計課の連中が、製造部に出向いた折りに、自分たちが設計に携わっていれば、スピカのフレームを模した構造にしたと公言しているというのである。要するに、楕円形の断面を持った巨大な鋼管で船体の荷重を支えるというのである。そうすれば今回のような失敗も、溶接の手間すらいらないうのである。日常、スピカに接しているだけに、製造部員に対して説得力がある。しかし、そんなことをすれば重量がかさんで、要求された性能を発揮できなくなるという事実には触れられていない。

「やっかいなことだ」

イマムラは呟いた。設計課の連中はMSB—Xのデータを見たときに、エンジンの選定ミスだと騒いだこともある。何故、出力の大きなハリマ社のフジVを使わないのかというのである。様々な考えがあることは分かっている。批判されるのはやむを得ない。会社の意志が分裂して収拾が付かない。混乱させたがる人間は腐るほどいる。その混乱の中で、問題を収束させる方向に動く者は誰もいないのかとぼやきたくなるのである。

この日もまた、問題の一つが表面化した。レオン事件を契機に火星行政府と連邦府の関係が悪化していた。その地球で「技術供与制限法」という名の法律が可決される見込みだというのである。武器開発に転用されうる技術や機器は輸出制限すると言う。ネヤガワ工業は武器や戦闘艇を造っているわけではないが、この法律を拡大解釈すればパトロール艇に搭載する高出力エンジンもそ

の対象になるだろう。

(タイド社のフェニルⅡを選定して置いて良かった)

メンバーはそう考えていた。フジVなど地球からの輸入品を使っていれば、今頃はエンジンが手に入らなくなったはずだ。フェニルⅡの場合、タイド社が試験機として3基のエンジンを先行輸入済みで、このエンジンをお手本にして火星でライセンス生産が始まるのである。その3基のうち1基をネヤガワ工業が購入してMSB-Xに搭載する手はずになっていたのである。

組上がったフレームはジグトレーラーに乗せられた。この後、工場のあちこちに移動して、様々な部品を取り付けられて行くのである。

技術開発課のメンバーにとって、日が経つのが早い。ほぼ毎日のように何かのトラブルが生じ、その対処に追われるからである。しかし、実際に目の前で組み上がって行くMSB-Xを見ると、嬉しさも湧いてくるのである。映像ではなく手で触れることの出来る嬉しさである。しかし、その嬉しさと裏腹に、社内には険悪な雰囲気膨れ上がっている。

「馬鹿野郎。さっき言ったばかりだろう」

怒鳴り声が工場に響いた。ムハマドの声である。

「お前達は俺の指示通りにやってくれば良いんだ」

新造船という、いつもと違う船体に、製造部員が戸惑ってミスをしたのかもしれない。こここのところ、単純なミスが目立って、作業に立ち会うムハマドを苛つかせていたのである。しかし、自

分より遙かに若いムハマドに怒鳴りつけられた作業者達は、思わずムツとムハマドをにらみ返した。他の部員も手を止めて反感を滲ませている。

「クソ餓鬼。もういっぺん言ってみろ」

言い返したのは製造部長のカルロスだった。生来、口が悪くラテン系の血筋で気性が激しい。たまたま、通りかかったら、部下が技術部の若造に怒鳴られていた。その若造の無礼さを腹に据えかねたのである。もともと無理だった仕事に、無理を重ねて協力してきている。挙げ句の果てが、意味不明でミスが多い製造指示書を提示して、お前達は間違いのない作業をしろと要求するのである。カルロスの中にもそう言う不満が鬱積していた。

幸い、アサハリが仲介し、ウィリアムスがムハマドに頭を下げさせた。作業の途中で繰り返される単純なミスの責任は、製造部員にもあるのだが、それ以上に設計に携わった彼ら技術開発課のメンバーがマニュアル造りに慣れていない点にもある。マニュアルの内容にもミスが散見される他、表現も拙く、作業手順の内容を正確に伝えることが出来ないのである。

「この次、馬鹿なことをほざいて見ろ。即刻、部下を引き上げさせるぞ。尻拭いくらいは自分でやれ」

そう言い残して立ち去ったカルロスの言葉を、ムハマドは悔しそうに黙って聞いていた。鋭い反感や不満を胸に秘めて納得した様子はない。ネヤガワ工業の中で、新型船をめぐって分裂が大きく広がっていた。ムハマドは外したばかりの計器を床に叩きつけて、工場から姿を消した。プライドの高い彼にとって耐えきれないことだったに違いない。追いかけようとするウィリアムスを

アサハリが制した。

「ウィリアムス。彼はちゃんと、戻って来ますよ。僕らの作業を続けましょう」

アサハリは部品のリストを手にとって、作業者に語りかけた。

「皆さん。私たちがずっと立ち会っていますから、マニュアルで分かりにくい点はすぐに私たちに指摘して下さい」

普段は存在感の薄い男だが、ムハマドより、よほど精神的に強い男らしい。この場を収めて作業を再開させた。

「指摘を受けた箇所は、一緒にやりましょう。マニュアルも、どう表現すれば分かりやすいか教えて下さい」

アサハリはウィリアムスに向き直っていった。

「マニュアル作りは私たちの責任だ。ウィリアムスは指摘を受けた部分をチェックして置いて下さい。部屋に戻ってから書き直しましょう」

アサハリのおかげで、この場は何とか收拾がついたが。しかし、技術開発課にしても、製造部にしても、反感のしこりは拭いきれないのである。

船体の姿が少しづつ完成に近づいた。完成に至る順序はトラブルの回数と同じほど、最初の予定と異なっているが、それでも、映像と同じ姿が目の前に現れて行くのである。

居住モジュールの組立が終了し、船体に据え付けられる準備が進んでいた。場合によっては操縦モジュールと呼ぶこともある。小型機の場合、操縦者の居住空間と操縦のためのコックピットを

兼ねているからである。その内部は操縦者の搭乗席と航法担当員の搭乗席が2つ横に並んでいて、航法担当員は通信員を兼ねている。搭乗員の座席に合わせてディスプレイや計器やスイッチが配置しており、航法担当者の後ろには予備搭乗員の席がある。搭乗員が席を交代できる程度の狭い通路が2 m伸びていて、モジュールの出口と操縦席を繋いでいた。

今日のドノバンとガーヤンの作業は、製造された居住モジュールをフレームに接続する直前の最終確認である。信号を送るケーブルは既に接続され、後はフレームに固定するのみになっているのである。

「アレは？」

ガーヤンが不思議そうに指さす先に、フレームの姿勢制御ノズルがあり、まるで誰かに操作されているように動いていた。

「誰か居るのか？」

ガーヤンと顔を見合わせたドノバンが言った言葉を、フレームに取り付けられた警告灯が点滅して裏付けた。もちろん今はエンジンは着いていないから点滅するのみの警告灯だが本来は側面の噴射ノズルが稼働することを船外に知らせるものである。誰かが操縦モジュールの内部にいて、動かしているに違いなかった。

しかし、技術開発部員ですら未だテストもしていないモジュールに誰が？ ドノバンは操縦モジュールの入り口に繋がるラッタルを駆け上がり、激しくノックをしてドアを開けた。

「どうぞ。入ってもいいわよ」

素直な笑顔でドノバンを迎え入れたのは、見慣れない黒人女性

である。

「貴方たちはどなた？」

本来ならこの不審な女性の身分を先に問わねばならないのだろうが、先にそう聞かれると答えざるを得ない。

「僕はエリック・ドノバン。こっちはタロウ・ガーヤン。技術開発課のメンバーだ」

「あなた達がこの船の設計者なのね。私はオボテ・サナカ。品質保証部員よ」

そう言われれば彼女は確かに品質保証部員の身分を示すバッジをつけていた。ただ、ドノバンは未だ納得しがたい。

「その君がどうして？」

「工場見学の途中、案内役の上司にはぐれちゃたの。探したんだけど可愛い部下をほって置いて何処に消えたんだか」

「それで、このモジュールを見つけて」

「そう」

彼女は遊園地で遊ぶ子どものような笑顔で頷いた。ドノバンも釣られて笑って言った。

「で、この遊具は気に入った？」

「私思うんだけど、貴方たち、船にはまだ素人でしょ？」

サナカの外観を見れば、火星年齢で8歳か9歳、ようやく小型宇宙船の操縦免許が取れる年齢ではないだろうか。その彼女は自分より年配の人間を捕まえて素人と言い放つのである。ただ、明るくあっけらかんとした性格であるらしく悪意は感じさせない。そのギャップに無言を保った二人にサナカが語りかけた。

「速度計と、エンジンの出力計はセットで確認することが多いの。だから、隣り合わせに表示してあるのが分かりやすいわ。生命維持システム関係の表示はまとめておくと良いわよ」

ガーヤンとドノバンは素直に頷いた。そう言われればそうかも知れない。計器類の配置はスピカを参考に決めた。ただ、この空間はスピカの居住モジュールに比べて狭く、同じ配置というのも問題があったのかも知れない。彼女は言葉を続けた。

「知ってるでしょ？ スピカでもパイロット席は横並びなの。真ん中に席を替わる通路もあるのね」

「それが？」

「でも、実際には、席を替わる事なんて無いのよ。」

この時、工場内に怒りのこもった男性の声がスピーカーから響き渡った。

「こちらフランクリンだ。訓練生、サナカ・オボテ。今から60秒以内に工場入り口に出頭！」

上司が迷子になった部下を捜しているのである。本来は火星軌道上のフォボス港に事務所を置く、ネヤガワ工業の品質保証部に所属する。男は製品の航行試験を担当していて、技術部にも関わりがある。ジーン・フランクリンという名は、その頑固な人柄を技術部に伝えていた。サナカは眉を顰めて同意を求めた。

「聞いた？ あのジーンの野蛮な声。隣の席にいたら今頃、私の耳元で怒鳴ってるわよ」

「なるほど」

「それに、気むずかしい上司は横に乗ってるより、席を縦に並べて前席で怒鳴らせておく方が良いわね。そう、座席配置はダンデ

ムがいい。そうすればモジュールの幅も狭められるし、なにより、前席に座らしとけば私の鼓膜は破れずにすむわ」

「サナカ・オボテ。あと30秒！」

再び声が響いて、サナカは再び肩をすくめ、二人に愛想笑いを残してかけ去った。まるでつむじ風が吹き荒れたような気分だったが、ドノバンとガーヤンにとって苦笑いを浮かべる出会いだった。

「ダンテムか？」

ドノバンは彼女が残した言葉をガーヤンに繰り返してみせ、ガーヤンも頷いて彼女の正しさに同意した。スピカの横並びの座席配置に慣れきったパイロットたちが受け入れてくれるならばという条件付きだが、座席の幅にやや余裕を持たせつつ、全体をコンパクトにまとめることも出来るだろう。

「嵐は去って被害もないようだし、仕事を始めようか」

ガーヤンは先ほどの女性を嵐に例え、ドノバンに今日の仕事を促した。ガーヤンの作業は整備士を演じて、モジュールの外部から整備点検作業の容易さを確認するのである。ガーヤンはドノバンを残して大きな姿をモジュールの外に消した。

「確かに、狭いな」

試しに操縦席に座ったドノバンは一人呟いた。実感である。搭乗員は気密服を着たまま、この席に着く。もっと狭く感じるだろう。スピカの居住モジュールに比べて内部の空間は2割ほど小さいのである。出力の小さなエンジンで、N&B社の新型船並み

の性能を、ということが、必然的に船体の軽量化を要求して、ドノバンの担当した居住モジュールにもそんな影響を受けていたのである。

もちろん、いきなりこういうものを設計したわけではない。技術部の一角に居住空間再現室という4 m四方の小さな部屋がある。ネヤガワ工業の自慢の設備である。中央の席に座ってスイッチを入れると、設計データに従って、居住モジュールの内部の映像が投影される。昔の人々が実物大の模型を作ったのと同じ理屈である。試験者が装備した特殊なスーツを通じて、目に見える映像だけではなく、座席の座り心地やスイッチの感触、操縦桿の手応えを感じることが出来るのである。この設備で計器が搭乗員の手の届く範囲にスイッチが配置されているか、操縦者の動きの障害になるような機器はないか、すべて、この部屋で確認したはずなのである。映像ではこれほどの閉塞感を感じなかったはずだ。ドノバンはデータと実機の間には差があることを思い知らされたのである。

ドノバンはモジュールの入り口から顔を出して、ガーヤンを呼びよせた。メンバーの中で最も体格がよい。試しにこの狭いシートに座らせて感想を聞いてみようと思ったのである。

「閉所恐怖症の人間なら、シヨンベン漏らして逃げ出すね」と言うのがガーヤンの感想だった。しかし、彼は席について歓声を上げた。

「ああっ。動くんだ」

もちろん動く。目の前のスイッチや計器は実物である。今、居住モジュールには外部から電源が供給されている。モジュール内

は明るく照らされ、ディスプレイは点灯して工場内部の様子を映し出していた。エンジンはまだ搭載されていないので、スイッチのオン・オフの感覚だけだが、目の前のモニターに映し出された姿勢制御ノズルなど、操縦桿の操作に応じて動くのである。自分の手で動かすことが出来るという感覚が、自分たちで船体を作り上げているという実感として、温もりのように伝わってくる。

夢中になっていたガーヤンはモジュール内の違和感に気付いた。臭うのである。

「『シヨンベン漏らして逃げ出す』んだと？」

モジュールの外ではハッチを締め切ったドノバンがいて、内側からハッチを開けることが出来ないように押さえている。率直な意見が聞きたい反面、一生懸命作り上げた物が批判されるのも何か腹が立つ。彼はモジュールの中でおならをすると、一人モジュールを出てガーヤンを閉じこめたのである。外部から電源が供給されているとはいえ、まだ空調機の調整は済んでいない。ガーヤンはドノバンのおならが充満する室内に閉じこめられてしまったのである。中からハッチを叩いて開けようとする音が響いている。

「ラベル先生の指導を受けて出来上がったものが、そんなことで壊れるものか」

ドノバンはハッチの強度に自信を持っている。

はしゃぐメンバーを工場関係者が冷たい視線で見ている。製造部員にとってはMSB—Xなど、ただの厄介者にすぎないのである。

エンジンモジュールの製造は、ネヤガワ工業の技術陣の手には負えない。核融合の制御など、専門の高度な技術とノウハウを要するからである。彼らは完成品としてのエンジンモジュールの納入を待っていた。すでにタイド社にフェニルIIというエンジンモジュールを発注しており、契約も済ませて、納品を待つのみである。現段階のMSB-Xを眺めると、ケーブルや配管がフレームを伝って後方に伸びている。モジュールの操作信号はUIS標準規格に適合しているから、ケーブルのコネクタはモジュールに差し込まれて信号や動力を正確に送れるはずだ。フレーム後方のエンジンマウントのボルト穴はエンジンモジュールにぴったり合って受け入れるはずだ。MSB-Xの完成は、あとエンジンモジュールを据え付けるだけ、という段階まで進んでいるのである。

そのモジュールの納品が遅れるという連絡があった。そのタイド社の様子がおかしい。そんな気配を感じ取っていたある日のことである。

「そんな馬鹿な」

そんな第一声に始まって、通話装置の前のイマムラの声が、技術開発課に響き渡った。

「いいですか？ 契約は2ヶ月も前に完了しているんですよ」

メンバーはそのイマムラの言葉で、タイド社からの連絡だと悟った。

「私たちはそのエンジンを搭載するつもりで作業を進めてきたんだ」

メンバーは電話から漏れ聞こえてくるイマムラの言葉を繋ぎ合わせて事態を推測している。技術供与制限法という法律が、彼らの前に立ち塞がっていたのである。納入期限から今までの時間のズレは、タイド社が技術供与制限法に抵抗していた事を示していた。納品の手段を模索して、万策尽きたというのだろう。

タイド社の話は、既に契約不履行の際のペナルティの支払いの話にまで進んでいるらしい。予定していたエンジンの搭載が不可能になった。ある意味ではネヤガワ工業側の見込みも甘かったと言えるのかもしれない。地球にはタイド社のフェニルII以上に高出力のエンジンがいくつか存在する。いわば、やや旧式化したエンジンなのである。ただ、初期型をベースに改良が施されて信頼性が高く、何より旧式化しているが故に、メーカーは火星の企業にライセンス生産権を与えるという見込みをたてていたのである。タイド社の経営陣はそのライセンス生産を含めて放棄してしまうと言うのである。

イマムラは電話を切り、メンバーを振り返って言った。

「兵器に転用される恐れのあるモジュールは輸出制限を受ける。高出力核融合エンジン。掘削用高出力レーザー、軌道径算用高速演算システム、長距離光通信システム」

「タイド社のエンジンモジュールも？」

「そうだ、その制限に引っかかるという正式な通達を受けたそうだ。」

「火星にあって、しかも、既に契約済みのエンジンまで？ 既

にフォボス港の税関倉庫にあるんですよ」

「現在、引き渡しのついていない該当品は、6週間以内に地球に転送される。既に該当する製品には連邦軍の管理下に置かれている」

このエンジンを使う事を前提にして、エンジンに合わせて船体を設計した、と言っても過言ではない。そのエンジンが手に入らないというのである。船体は既に8分通り出来上がっており、あとは納品の遅れていたエンジンを付けて、細部を調整するだけだ。

メンバーは突然の変更に混乱している。職場の雰囲気は沈痛な雰囲気で落ち込んでいる。エンジンの選定が船体の性能を根本的な左右すると言う事を、開発の過程に置いてメンバーの一人一人が身に浸みて知っていた。ガーヤンの担当するフレームも、アサハリの担当する推進剤タンクはもちろん、バレ、ドノバン、全てのメンバーの作業はこのエンジンを搭載する船体に集約されてきたのである。その前提が根本から変わる。

ラベルが言った。

「ウィリアムス。タイド社のフェニルIIの次の候補は何だい」

「スニム社のダブルユニコーンですが、これも地球からの輸入品で制限を受けるでしょう。搭載できるのはヘリオス社のMU5でしょう。これなら、既にライセンス生産されています」

「でも、一世代前のエンジンだぞ」

「もうダメなの？」

「おしまいだ」

生まじめだけに融通が利かない、温厚で責任感があるのだがその責任感が、進むべき方向を見失って、ドノバンにそう叫ばせたのだろう。周囲の信頼が厚い男の叫びが、職場の雰囲気覆い尽くして支配した。MSB-Xの完成直前で打開策のない絶望感がこの部署を覆い尽くしたのである。

「馬鹿たれが」

ラベルがマグカップをドノバンに投げつけた。コーヒーが室内に飛び散って、マグカップはドノバンを逸れて壁に凹みを造って跳ね返った。メンバーは驚いている。しかし、ラベルは一転して、静かに語り始めた。

「私が、なぜ、この火星にやってきたのか知りたくはないか？」

知りたいという思いと、ラベルの豹変ぶりと、今のこの場所に似つかわしくない穏和な声音に、メンバーは黙って、視線をラベルに集中させた。

「きっかけは、イシダ某という古い戦国時代の人物だ。名ははっきり覚えていないが、姓はニシダ社長の名に似ているので覚えている。ニシダ社長は初めて出会った私に、イシダという歴史上の人物が、勇猛なサムライのシマという男を召し抱えたときの歴史話をした。そのイシダ某はシマに気前よく自分の知行の半分を与えたいらしい。シマもイシダの期待に応えて命が尽きるまで彼に仕えた。ニシダも私に対してそうしたいと提案したんだ。火星で育った男が、地球の極東の古い歴史を引用するというのが、非常に面白かった。あの男は私をその勇猛なサムライに例えて、ヘッドハンティングしようとしたんだ」

意外な話の展開にメンバーは黙って聞き入った。ラベルは昔を

懐かしむ目で語り続けた。

「ニシダ社長には誤算があった。当時、私がデメテル社から受け取っていた報酬は、ニシダが自信満々で提示した額より、遥かに多額だったとは思っても寄らなかったらしい。そのあたり、あの男はただの中小企業の頑固親父だった。ただ、私にとって自分が、そのサムライになった気がして、ニシダに何かしてやりたいと思うじゃないか？」

ラベルは同意を求めるようにメンバー一人一人の顔を見回した。

「船を設計して欲しいのかと聞いたら、ニシダがなんて答えたと思う？『地球市民の設計はいらない』って怒ったように断言したんだ。それじゃ、何をして欲しい？『船を造るのは俺達だ。俺達が作れるようにしてくれ』ニシダはそう断言したんだ。残念ながら、私は地球に家族と仕事があって、帰国せざるを得なかった。ニシダもまた、社長を退いて、私は約束を果たす機会がなかった。ただ、ニシダは亡くなくても、ニシダが私をサムライに例えた思い出は残っている。ニシダとの約束は、まだ生きている。私がここへ来たのは、その約束を果たすためだ」

ラベルは思い出話を切り上げて、マグカップを指さして話題をこの部屋に戻した。

「惜しい、ニシダと会った頃からそうだった。もっと私のコントロールが良ければ、ドノバン、今頃は君の頭が凹んでいるはずだ」

「先生。先生にも分かっているはずだ。俺達はこのエンジンに合

わせて船体を設計したんだ。今更どうなるって言うんだ」

ドノバンが怒鳴った。普段、大声を上げる事がないだけにその豹変ぶりはすさまじい。

「逃げるつもりなら、今の内に去れ」

ラベルは今一度、冷たい声音でドノバンを怒鳴りつけた。ドノバンは地球市民のラベルに逃げるつもりかと問われて口ごもり、ラベルを睨み付け、ラベルがそれに応じてにらみ返して言った。

「そうだ。腹が立つなら喰いついてこい」

「さあ、みんな集まってくれ。もう一度検討してみよう」

イマムラはそう言うしかない。

後に、ラベルはこの時のことを思い出して、恥ずかしそうに苦笑いするのである。人の行動や、その方向を定めるものは、他人に話すのが恥ずかしいほど些細なきっかけであるらしい。この場合は、ニシダがラベルをサムライに例えた、そこに行き着くようだ。

もともと、エンジンや各種のモジュールの付け替えは彼らの本業といえる。しかし、より高出力のエンジンに積み替えたりするもので、重く出力が低いエンジンに積み替えて、性能はもとのまま維持すると言った変更は経験がない。付け替えるだけでは無く、もとの想定される性能を維持しなければならないのである。

ラベルの指導のもと、エンジンモジュールの変更には2ヶ月を要した。細かく探せば、幾つもの不満はあったが、MSB-Xは2ヶ月の遅れを経て、ようやく新たなエンジンモジュールが取り付けられたのである。

先代のニシダ社長のMS A—Xの場合、船体を構成する主要な部品の大半は地球からの輸入品だった。MS B—Xはライセンス生産とはいえ、ほとんどの素材は火星で製造したものだ。初の火星市民の手による宇宙船が、完成したとっていいかもしれない。

もはや、量子コンピューター上のデータや映像ではなく、さわれば掌にその感触がある。エンジンの取り付けは完了し、船体は完成してると言って良かった。思いの外、大きい。エンジン部分である。20メートルばかり距離を置いて、船体の全体像を眺めると、たとえ美しさと言う点で、その船体の価値が定まるわけではないにせよ、初期の設計に比べてバランスが崩れているようにも見えるのである。初期に予定していたエンジンが使えなくなったために、推力は同等だが一回り大型のエンジンを使わざるを得なかった。大きくなったためにフレームにエンジンを据え付けるマウントも一回り大きくなった。推進剤を余分に喰う。推進剤のタンクも大きくせざるを得ない。重心が大きく後方にずれた。姿勢制御ノズルを重心に合わせて大きく後方に変更した。エンジンが変更になっただけでなく様々な二次的な変化と重量の増加が見られるのである。

そして、外形が単純になった。巨大な推進剤タンクの外、酸素や水、圧搾空気などのタンクが据え付けられて複雑な外観をしていたはずだが、そのタンクが幾つか、姿を消しているのである。それぞれのタンクには宇宙塵との衝突で被る被害を防ぐ目的で、頑丈な装甲がされている。ラベルはタンクを2重にした。中心部

に推進剤が入る、その外側を囲むタンクの中を仕切って酸素や水や圧搾空気を入れるようにしたのである。タンクの装甲を多少薄くしても、想定される宇宙塵は、万が一の場合でも、水や圧搾空気の入った箇所を打ち抜くだけで、中央の推進剤のタンクに被害は及ばない。そういう軽量化を図ったのである。

外観の単純さと裏腹に、タンクの製造には手間がかかるだけではなく、船体のメンテナンスも複雑化して整備士から嫌われるだろう。船体のメンテナンスが複雑化するというのは、ラベルの好みではない。しかし、この時には、増大したエンジンモジュールの重量に見合う軽量化が必要だった。

工場の隅に置かれた新型船の周りを技術開発課のメンバーが取り囲んでいた。イマムラがストヤンとウルマノフを伴って現れた。船体に全てのモジュールを据え付けて最終調整を完了した。そういう報告をしたのである。クレーンでつり上げられた船体が、床に下ろされた。主脚の緩衝器が軋むように唸って、MSB-Xの重量を支えた。ジグトレーラーという子宮から生まれ出たMSB-Xが、ようやく自分の足で立ち上がったのである。

ウルマノフは感慨深げに船体を撫でた。掌がひんやり冷たい。「ほおっ」

そして、驚きの感想をやや苦笑いに変えた。何故か突然にニシダの顔を思い起こしたのである。小型船の自主開発に反対だった自分が、今この船体の前にいる。ニシダが見ればどう思うだろう。

ストヤンも同じ種類の感慨を抱いた。彼は技術開発課という部

署を編成したときに、ものが出来上がるとは信じていなかったの
である。新型船開発は本来なら設計課で担当する作業だろうが、
完成見込みのない作業での混乱を最小限に食い止めるための防波
堤として彼らを編成したのである。形になるまで仕上げたという
、彼らの努力は誉めてやっても良い。ただ、ストヤンは冷めた目
を持っていた。

（誉めてやるのは、この船体の性能が判明してからだ。しかし、
この船体の寂しさはどうだ？）

完成式典とかいうお祭りがあるわけではなく、拍手と共にシャ
ンペンを機首に叩きつける儀式があるわけでもない。脇を通りか
かる社員がいても冷たく素通りして行くのである。必ずしも望ま
れて生まれて来た船ではない。この寂しさは、MSB—Xという
船の運命を暗示しているようだと考えたのである。

いったん完成した試作機は、エンジンモジュール部分で再び前後2つに分割されて、2台の運搬用の大型トレーラーに乗せられていた。この工場の敷地から幹線道路に船体を無事に搬出するために、小さく分割しなければならないのである。N & B社の施設が巨大であるばかりではなく、幹線道路沿いに建設されているのが羨ましい。N & B社なら、こんな手間をかけなくても済むはずだった。

2台の大型トレーラーはローウェル市のローウェル工科大学工業実験センターに向かうのである。ドノバンの出身校である。1号車の助手席にはドノバンの姿が、2号車の助手席にはウォルヒの姿が見える。二人を見送るガーヤンとバレが顔を見合わせた。

「くそっ。N & B社なら自前の試験センターがあるのに」

「銭も設備も無けりゃ汗を流せばいいのよ」

ガーヤンが悔しそうに地団駄を踏んで、バレが子供をあやすように答えた。新型船開発において、その製造の許認可という点で行政が関わっている。試作段階で安全性を確認し、宇宙空間を航行する許可を出すのである。

スピカの場合はN & B社のライセンス生産品であり、その母胎となった試作機の段階で、宇宙空間を航行する許可が下りている。この後に製造する全てのFW201や火星仕様のスピカも宇宙空間で試験航行する事が出来る。この試験航行によって、ネヤガワ工業は製造した船体が人を乗せて航行するための様々な安全基

準に適合していることを確認するのである。この一隻ごとの確認試験もとに、行政に販売認可の申請を行い、顧客に引き渡すのである。

今、メンバーの目の前にある船体の場合は、現段階ではメーカーの実験機でしかなく、仮に船体にその能力があったとしても、法律上、宇宙を航行することが出来ない。船体の強度試験。居住モジュールの安全性試験。エンジンの安全性試験。通信機器の信頼性。様々な試験について、一定の基準を満たしたと認定された時に、この試作1号機は宇宙空間を航行する許可を得るのである。この許可が下りなければ、新型船は宇宙空間を航行することがないまま終わる。メーカーにとって重要な試験なのである。そのために、N & B社を始め小型機の開発メーカーは通常は社内にその試験設備を有している。ネヤガワ工業はその設備を持たなかった。試験施設の面積を見ても、ネヤガワ工業の敷地を遙かに上回る面積を要するだろう、一中小企業に過ぎないネヤガワ工業に持てるはずのない施設である。そのため、試験施設を求めて、ドノバンが出身校のローウェル工科大学と掛け合った。大学の実験の合間に割り込んで、試験設備と研究員を2週間ばかり借り受けるのである。もちろん、多額のリース料を支払う。

トレーラーを見送る人々の中にウルマノフの姿がある。ネヤガワ工業の経営陣にとってこの試験結果が新型船の今後の判定基準になる。この試験において、MSB-Xの能力の概算値が判明する。行政の認可を得ることが出来たとしても、それは宇宙空間を航行しても差し支えないという許可にすぎない。経営者として別の悩みがあった。少なくとも、この試験結果に置いて、競合他

社の船体と同等の性能を示すものでなければ、この開発は失敗だったと判断するしかないのである。

行政の認可があり、性能も他社の船体と同等だとして、今度は船体を宇宙空間まで運んで、宇宙空間で新型船のテスト航行を行う。その試験航行に同行し、様々な試験データを計測する試験司令船が必要になる。試験には約3月がかかるものと推測されていた。その期間の試験司令船のチャーター料が850万OSAと見積もられている。ネヤガワ工業の年間売り上げの4%に相当する。苦勞して稼ぎ出した純利益の大半を消費することになるのである。ウルマノフにとってまだまだ頭を悩ます問題を残している。

ウルマノフは経営者らしく、今回の試験結果でMSB-Xの今後を判断するつもりである。多額の費用を要した新型船だが、他社製品に比すべき能力が無いのなら、この段階で計画と試作船を破棄する。というのである。可能性のないものにこのまま深入りすることはネヤガワ工業の企業体力から考えて耐えきれない。

ウルマノフは出発したトレーラーをじっと見送っていたが、その姿が視界から姿を消すと、暗い表情のまま残った技術開発課メンバーを振り返った。メンバーの表情も暗い。工場で再設計したMSB-Xが完成するのを待つように、ラベルが疲労で倒れたのである。ラベルの元気のいい怒鳴り声で、メンバーは彼の年齢を忘れていたが、既に80歳を越えているのである。メンバーに疲れは見せなかったが、不慣れな土地で、疲れを貯め込んでいたに違いない。医者からは、幸い短期の静養ですみそうだという報告

を得ており、彼らを多少ほっとさせている。しかし、MSB—Xを送り出すこの場に、開発の支柱になった人物が欠けているのである。

見送りを受けつつ、2台のトレーラーは出発した。見送る人々の表情は一様に期待より不安が大きいと言っても良い。一方でトレーラーに乗るドノバンやウォルヒにも状況は変わりがない。「へえっ。火星市民の自主開発船ねえ。珍しいモンを運んだってカミさんに教えてやらなきゃ」

1号車の運転席でトレーラーの運転手とドノバンの会話が弾んでいる。先ほどまでむっつり黙りこくっていたドノバンが朗らかに話し始めたのである。黙っていれば不安と責任で気分が落ち込んで行きそうだった。対して、2号車の運転席は静かなものだ。ウォルヒはむっつり黙りこくって考え込んでおり、初老の運転手は、彼女に話しかけられる雰囲気ではない。2台のトレーラーはシンカンサイ市を離れ、9号線を東に走っている。片側2車線、半ば地中に埋まるように建設されていて、丁度、トレーラーの運転席の高さまで壁面があり、壁面に添って転々とライトの光が淡い青に輝いている。空には透明な天井を通して、ほとんど瞬くこともなく星が輝いて見える。9号線はこのままタルシス台地をゆったり下ってルナ平原に向かうのである。

出発して数十分を経過したのだが、ウォルヒは黙りこくったまま、凍り付いたように身動きもしない。視線は運転席前方を見ているが焦点はおぼろげで、時折、堅い表情の中で瞬きが無ければ彫像と変わりがない。ウォルヒは後からこの時のことを振り返ることがあるのだが、自分が何を考えていたのか、まったく覚え

ていなかった。

ただ、彼女が記憶を取り戻すのは、突然に、運転席が暗くなった場面からだ。彼女がふと我に返ると運転席が暗くなって、運転席のパネルの表示ばかりが輝いて見える。息が白い。運転席の空調機も止まったに違いなかった。9号線の内部は外気から遮断されて与圧されてはいるが、トレーラーの外は氷点下の温度に近い。呼吸の度に冷たい空気がのどの奥を冷やしている。ウォルヒは運転席の男を見た。

（こんな所で、故障かしら）と思ったのである。

男の笑顔がそれを否定した。

「あんたも運がいい。良いものを見せてやろう」

男はハンドルから手を離して前方を指さした。もちろん、運転は彼の思考ロボットが担当している。そして自分も頭の後ろで手を組んでシートにもたれかかった。まるで、今から始まる映画を待ち受けるような仕草だった。ウォルヒは今度は焦点を定めて、視線を前方に向けた。上空は暗く、瞬くことのない星が輝いているが、地平線の彼方が、ぼんやりと柔らかな薄紫に輝いている。夜明けが近いのである。トレーラーはその夜明けに向かって走り続けている。2人はしばらく黙って前を見続けていた。頭の芯がさえ渡るようで冷たさが心地よい。

突然に、眩い光が前方から走ってきて、2人を貫いて後方に過ぎ去っていった。ウォルヒは驚いて、思わずその光を追って、トレーラーの後方まで振り向いた。地平線の向こうから、朝日が9号線沿いに道路や壁面を一直線に照らし出したのである。

「綺麗ですね。夢の中みたい」

まるで光の通路を、朝日に向かって走っているような心地よい感覚に捕らわれる。

「面白かったろう」と運転手は自慢気に言った。

9号線の、この付近は東西にまっすぐに伸びている、晴れた日の夜明けにここを通過すると、この光の通路に出会うことを知っていたのである。

運転手は再び車内の環境を彼の思考ロボットに任せた。車内に暖かな空気が戻り、ウィンドガラスが色づいてまぶしさを遮断した。それからじっとウォルヒを見つめていたのだが、不思議そうに言った。

「へえ。やっぱり生きてたんだな」

「えっ？」

「あんたが全然動かないから、人形みたいだって思ってたんだ」

半ば本気で言ってるのかもしれない。木訥とした笑顔で冗談か本気か判別できない。ただ、一片の悪気も無いらしい。ウォルヒは彼につられるように微笑んだ。メンバーですら知らない柔らかな笑顔である。

シンカンサイ市とローウェル市を結ぶ9号線は、シンカンサイ市から東に走って500km程の所で、サモア中継所を通過する。ここは町と言うには小さい。しかし、霧で有名な南西のシナイ平原を經由してシャクルトン市に至る118号線、北のビウス市と南のソリス平原にあるアリオン市とを結ぶ98号線など、火星の大動脈が合流して、明るく、荒っぽいという雰囲気満ちて

いて、豪快な活気がある。MSB-Xを運搬する大型トレーラーは、予定通りこの中継所で燃料の水素を補充した。同じ大型車でも、宇宙船を運搬するだけに、他のトレーラーに比べて大きく、駐車に場所をとる上に、何か特殊な物を運んでいるのかと人々の興味を引く。しかも、荷台にかぶせたシートに透き間があり、いかにも、中をのぞき込んでみたくなるように、人々の好奇心を刺激しているのである。新型船開発を行うメーカーとして、考えられないほどの迂闊さである。ネヤガワ工業が新型船開発に不慣れだという事実は、こういうセキュリティー感覚の欠如としても現れていた。慣れた人間がシート越しにこの外形を見れば、エンジンや推進剤タンクの大きさを見るだけで、この船体の性能の概略や船体の用途を推測することが出来るのである。

ウォルヒとドノバン、トレーラーの2人の運転手はトレーラーを離れた。夜明け前に会社を発って、既に5時間が経過しており、昼食の時間でもあった。ドノバンが何か腹に入れておかなければならないと思いながら、さっぱり空腹感を感じていないのは、まだ緊張感から解放されていないからだろう。

ドノバンが乗るトレーラーが停車した後、ウォルヒの乗る2号車が並んで停車した。全長20メートルはある大型トレーラーである。助手席から降りて見ると、停車する2台の大型トレーラーは平行に停車して、その間隔は50センチと空いていない。ウォルヒはその間をすり抜けて歩きながら、その間隔の狭さに運転者の技量を認めて感心した。

「へえっ。見事なものですね」

「嬉しいこと言ってくれるねえ」

もちろん、彼女の思考ロボットのコロンを、トレーラーの運転システムに転送すれば、彼女自身の意志でトレーラーを動かすことは可能である。しかし、この間隔でぴたりと停車させようとするれば、彼女もコロンも苦労するだろう。運転手と彼の思考ロボットは苦もなくそれをおこなっているのである。熟練した人間と、その人間に教育を受けた思考ロボットは想像を超える技量を生み出すらしい。

このとき、シドニー・ウォーデンの思考ロボットは、中継車を9号線上シンカンサイ市に向けて走らせていた。

車内は撮影スタッフ兼運転手と取材助手、ウォーデンの3人だけだ。この3人がタルシスTVが昨日のテロ未遂事件の取材に送り込んだ全スタッフである。多発するテロ事件の中で、未遂に終わったため、ウォーデンの上司はその程度の取材価値しか認めていない。3人、とりわけウォーデンには取材価値のない取材にかり出されているという自覚と不満があった。テロが実施されていれば数十人の規模の死傷者を出した可能性のある事件である。（あのテロリストどもが、もう少しマシな連中なら、）とも思うのである。

「でさ、女に言われて嗅いでみたら、ホンマに消毒薬の臭いがするわけよ」

取材助手が語るのは、昨夜、一夜を共にした女が、彼の衣服に染み付いた臭いで医者と間違えたという話である。

「病院の取材の時か？ テロ事件のレポートばかりだ」

「もっと、ほのぼのした話はないの？」

「おれはこの仕事に付くまでアイドルの追っかけが夢だったんですけどねえ」

「今じゃ、病院と葬儀屋と警察の追っかけで急しいってか？」

突然に、ウォーデンが会話を途切れさせて、左の親指で通り過ぎたばかりのサモア中継所を指さして、ムーバーを操縦する思考ロボットに命じた。

「おいっ、ちょっと気になる。引き返してくれ」

「えっ。腹でも減ったの？」

カメラマンの不満に、取材助手もまたウォーデンの指示に異議を唱えた。

「このまま行こうよ。早めに着いて、ゆっくり風呂に浸かって、血の匂いをおとしたいんだ」

「気になるトレーラーがあった」

ウォーデンは短く理由を告げ、カメラマンが笑って答えた。

「テロリストの爆弾でも積んでた？」

「いや、高速艇じゃないかと思う」

ウォーデンは対向車線の駐車場の大型トレーラーの荷台に気付いたのである。テロ事件の取材で衛星軌道上まで足を伸ばすことがあり、取材の特質を現して、危機管理局に所属するレスキューチームの高速艇や保安局に所属する機動隊のパトロール艇を目にすることがある。シート越しに見えたものが、その種の小型機ではないかというのである。

「シンカンサイ市に小型船のメーカーがある。メーカーのトレ

ーラーがここを通過しても不思議じゃないだろう」

「アスクレウス港はメーカーから見て逆方向だ。それに、」

ウォーデンは口ごもった。何か違和感を感じたと言うほか、気を引かれた理由が良く分からない。船首と船尾に分割して搭載していたようだが、その二つを頭の中で組み立てると、ふと好奇心の混じった勘が働いたのである。今まで見たことがあるどの高速艇より大きいような印象を与えたものか、胴体部分のシルエットが、よく見かけるスピカと違っていていることに、何となく気付いたのだろう。

「あたしゃどうなっても知りませんよ」

「知ってるか？ 保安局の連中が自前の攻撃機を導入したがつてるって噂を」

「万が一、戦争になれば、矢面に立たざるを得ない連中ですからね」

「まさか。あれが？」

「奴らはパトカーに対戦車砲を搭載してでも、一戦、交えたらしい」

「シンカンサイ市での中継はどうするんです？番組に間に合わなくなりますよ」

「ほっとけ、どうせテロの後始末だ」

「ボスには、あんたが説明してよ」

「あれがオレの勘通りの代物なら、オレがボスに昇進してお前らを誉めてやるさ」

ウォーデンは中継車を方向転換させ、気になる船体を追った。もちろんMSB-Xはウォーデンが考える船体ではない。しかし

、このウォーデン達によって、MSB-Xという火星市民による自社開発の船は、注目を浴びることになった。騒動はネヤガワ工業に移った。

「イマムラ君」

感情を抑えるような声だった。イマムラはストヤンがこういう口調で語りだすときには、機嫌が悪いか、困惑しているかのどちらかだという事を覚えていた。こういう口調で部長室に呼び出されるときにはろくな事が無かった。

部屋に顔を出したイマムラにストヤンが言った

「タルシスTVの件は、聞いているかね」

「ウォルヒから連絡を受けました。タルシスTVのスタッフから取材を申し込まれたので、此方に窓口を回したと、」

「じゃあ『報道職人68』という番組は知っているな？」

「ええ」

あまり上質な番組だという印象は無い。職人の名と裏腹に、時事問題を取り上げて、第三者の立場から問題をことさら煽り立てる。冷静な報道という名目で、第三者的な立場を取っているから、出演者やレポーターにとって気持ちよく、時事問題をこきおろせるわけだった。

「今朝方、シドニー・ウォーデンという人物から、うちで開発している新型船について取材がしたいという正式な申し込みがあった」

「取材ですか？」

「そうだ、君の部署の船体についてだ」

ストヤンはMSB-Xを「我々の船体」と言わず「君の所の船体」と距離を置いた表現をする。ローウェル工科大学実験センターの試験の結果、新型船の性能は思わしくないということも予想される。取材というのは、彼らにとって迷惑な話だった。中途半端な公表をされれば会社にとって損害のみ大きいだろうし、社内においても技術開発課の肩身が狭くなるのが見えている。巻き込まれるのは、少しでも避けたいと思うのは当然の心理だろう。イマムラ自身、避けられるなら避けたいのである。

「私には今回の取材の申し込みはタイミングが良すぎるように思えるし、相手はかなり細かな情報をつかんでいるようだ」

「出来れば新型船の性能が判明してからにしたいのですが、」

「私は、彼らを避けるより、今回の取材を受けるほうが得策だと思う。既に車中には私が許可を取り付けた。あとは広報課と連絡を取って、話しを進めてくれ。当日は君と広報課の担当者が窓口になる、セキュリティの専門家が一人つく。取材の前にラベルさんから技術的なアドバイスを受けておけ」

相談という形式を取りつつ、ストヤンはイマムラの意見を聞くことなく一方的に決定事項を伝えた。営業畑出身のイマムラはこの叩き上げの技術者に未だに信頼はされていないらしい。イマムラはそう考えて肩をすくめた。

一方、ストヤンのイマムラに対する評価はやや異なっている。わざわざ調査に来る相手なら、イマムラの経歴ぐらいいは調べてくるはずだ。彼は火星時間で1年前まで、技術と無縁の職種の中にいた。しかし、イマムラはよけいな見栄を張る男ではない上に、

知らないものは知らないと素直に答えるに違いない。しかも、そう答えても嫌みを感じさせない人柄をしていた。専門家を出せば、取材陣の質問に、専門的に突っ込んだ回答をせざるを得ない。ネヤガワ工業として開発責任者を取材窓口に掲げるといふ誠意をみせつつ、情報が漏れる心配がない。イマムラという男は今回の様な取材の窓口にはうってつけだろう。無垢な素人という点で、ストヤンはイマムラを随分、信頼しているのである。

取材当日の朝、ウォーデンは総勢3人のスタッフでやって来た。言うまでもなく、本来の取材対象のMSB-Xはローウェル市にある。今日の彼らの取材は、番組のさわりの部分である。視聴者にネヤガワ工業というメーカーを紹介するのである。汎用高速艇という限定した市場のシェアでは、トップクラスの企業と言えなくもないが、一般の火星市民にとって、ネヤガワ工業は一地方都市の、名前も聞いたことがない小企業に過ぎない。

シンがバレとウィリアムスのためにクジを作り、バレが当たりを引き当てていた。

「こういう場合、やっぱり知性と教養を備えた私でなきゃ」

そう口にしたバレがレポーターの案内役を務める。ウォーデンが彼女のどちらかを指定したのは、イマムラが案内するより絵になると言うことである。

イマムラは画面に映らないようについて行くだけだ。撮影ゴーグルで目のあたりは隠れてしまっているが、口元でカメラマンが笑っているのが分かる。イマムラのいじけた様子を見て、あん

たも撮してあげようかというのである。イマムラは手を振って断った。ハンディカメラも持ってはいるが、主としてカメラマンのゴーグルを通して、イメージ通りの映像が、彼が腰につけたメモリーに蓄えられてゆくのである。カメラマンの視線は、スピカの製造ラインを借景にして、案内者のバレとレポーターのウォーデンを捕らえた。

「我が社では、N & B社の汎用高速艇FW201のライセンス生産権を得て、火星仕様のスピカとして製造しています。保安局や危機管理部のパトロール艇として皆さんもよくご存じでしょう」

彼女が伸ばした腕の先に、スピカの製造ラインがひろがっている。この後、社内のセキュリティの専門家に指示された打ち合わせのコースに沿って、ウォーデン達を案内するのである。

「ここは、我が社で解装ラインと呼ばれている区画です。オーバーホールを受ける船体は、まずここで外観をチェックされて、モジュール毎に分解されて、左手の方に見えるオーバーホールの工程に送られます」

（忙しいものだ）

イマムラは彼らの苦労を思った。取材スタッフはバレの説明の傍ら、工場を駆け回って、作業員にぺこぺこ頭を下げてポーズを取らせたり、イメージ通りの映像作りに忙しいのである。その様子にイマムラは共感を覚えた、まるで、ネヤガワ工業での彼の立場の様だった。

「そして、これらの製造ラインは、全てN & B社の定期的な監査を受けて、同社の製造基準に適合しています」

バレの言葉にウォーデンが念を押した。

「高度な地球の技術を継承してると言うこと？」

「その通りです。我社は地球時間で4年に1度の監査を受けて、地球メーカーと同等の技術水準にあると認定されています」

やや寂しい説明である。火星市民の手になるMSB-Xの信頼感を印象づけようとするれば、彼らの工場が地球の巨大資本N&B社の技術面の承認を受けた工場だと言うこと、MSB-Xが地球で開発された技術の延長上にあることをアピールしなければならないのである。

「さらに、私たちはスピカの製造実績を基にして新たな船体を開発しました。それが今回、皆様にご紹介する、新型船MSB-Xです」

「開発に自信は？」

バレがやや口ごもったためにイマムラが補足した。

「試験の結果にご期待下さい」

自信があるかと聞かれて、無いとは答えられないのである。

ウォーデンは仲間に手を振って取材終了を指示した。わずか1時間に過ぎないが、このメーカーを描き尽くすには充分だと判断したのである。ウルマノフという社長にインタビューできなかったのは、多少残念だったが、報道のシナリオに支障が出ることはあるまいと考えたのである。彼らはシンカンサイ市を離れ、ムーヴァーの目的地を本来の取材対象があるローウェル市に向けた。ムーヴァーの中で先の取材内容を編集しつつ時を過ごせば、ローウェル市に着く頃にMSB-Xの最後の試験が始まる頃になる。

ウルマノフは出張先から彼らの取材に注文を付けていた。

①試験の障害になる取材には応じられない。

②新型船の性能の数値の公表についてはネヤガワ側の許可を要する。

③ドノバンやウォルヒを始め、社員のプライベートな部分に立ち入らない。

ウォーデンとして、ネヤガワ工業が示した報道の制限に異論はなかった。取材はローウェル工科大学に移って、到着したウォーデンたちは挨拶もそこそこに、研究員の邪魔にならないカメラアングルを求めて施設をうろついていた。

「試験の邪魔をするなって？ 貧乏くさい取材制限だな」

ウォーデンは仲間に苦笑いをした。自分を含めて、火星市民というものに対してである。地球の大資本なら、間違いなく金を払ってでもこういう報道の機会を、積極的に企業宣伝のために利用しようとするだろう。

試験の障害になる取材には応じられないというのは、裏返して言えば、新型船開発に要するコストを、今以上に引き上げる余裕はないということだろう。小型機の試験設備のない彼らは、高額なリース料を払って、この設備を一時的に借り受けるという形を取っている。大学側としても、本来の研究施設をいつまでもネヤガワ工業に使用させるわけもなく、ネヤガワ工業は多額のリース料を要した上に、契約期間を過ぎれば、試験自体を中断させなければならないのである。

ネヤガワ工業が彼に課した報道制限は、取材の支障にはならない。ウォーデンが報道したいのは、ウォーデンという報道レポ

ーターがこの新型船を見いだした能力を持っているということと、本来は火星市民の祝福を受けるはずの新型船が、残念なことに、失敗作に終わる。その過程を、火星市民である彼が、火星市民の愛国心に訴えつつ、失敗に至る悲劇の経過を報道するのである。ウォーデンの中では既に、MSB-Xが失敗作に至るシナリオの結末まで出来上がっている。そのシナリオの結末は、彼にとって確固として揺るぎがない。別に、彼がネヤガワ工業に対して偏見や悪意を抱いているわけではない。ウォーデンは既に小型船開発の専門家と称する人々の幾人かに、火星市民による自主開発について意見を求めていたのだが、肯定的な意見は全くなかったのである。

ウォーデンはドノバンやウォルヒというネヤガワ工業の社員と、この試験施設で2週間ばかり行動を共にする。その初日にウォーデンは夕食に誘うと言う形で、ウォルヒとドノバンという人物に触れておこうと思った。

ウォルヒという女性に『ステンレス・プリンセス』というニックネームがあることは、ネヤガワ工業の取材の時に聞き知っていた。たしかに表情に乏しく笑顔が硬い。このメーカーは新型船開発に不慣れで、役割分担がはっきりしていないのだが、イマムラという男は素人だ。ウォーデンはこの表情に乏しい女が、実質的な主任設計者だと性格に見抜いていた。番組を盛り上げるためには、この女の話聞く必要があるだろうと考えたのである。

ドノバンやウォルヒのプライベートな部分には踏み込まないと

いう約束なので、カメラを回すのは避けていたが、ウォーデンは胸のポケットの中の録音機のスイッチを入れてレストランの席について二人を待っていた。

（絵になりにくい女だ）

というのがウォルヒ・ウォルヒという女の初対面の印象だった。化粧っ気がなく表情が乏しい。そればかりではなく口まで重い。（緊張しているのだろう）とウォーデンは思った。

仲間の期待を背負ってここまでやって来た、今後の成否が自分たちにかかっているような気がして落ち着かないのだろう。彼らの会話は弾まず、質素な食事を追えたウォルヒは、ウォーデンが勧めるワインを断って席を立った。結局、ウォーデンは得ることもないまま食事を終えた。とうてい二人を酒に誘う雰囲気ではなかった。

「胸に銀色のペンダントをつけているほか、全く化粧っ気はない。絵になりにくい女だ」

ウォーデンの録音機にはそういう呟きが残っていただけだ。

ウォーデンの取材対象は、実験棟内の一階フロアーに固定されていた。MSB-Xには幾本ものケーブルが接続されていて、このケーブルから伝えられる船体のデータは、ウォーデン達取材スタッフが陣取る3階の試験指令室に送られている。この試験司令室から1階フロアーのMSB-Xの全景を撮影することが出来、絶好のカメラアングルだった。

研究員達はモニターに現されるデータを読みとっている。

「積載重量53.86地球トン、重心位置座標、」

「ヨーイングコントロール、0.8秒、減衰率22.3%、」

専門的な用語の羅列でウォーデン達には分からないが、別に問題はない。そんなものは、視聴者にも興味はないからである。

(しかし、彼らの表情は実に絵になる)

ウォーデンはそう思った。初日の緊張感のあったウォルヒとドノバンの表情が日々変化している。失望や怒りや絶望が加わって視聴者の興味を引く実にいい絵になる。数値で試験結果を追うより、二人の表情の変化が、そのままMSB-Xの試験結果を、分かりやすく率直に現しているのである。

判定

加速性能 : 要求性能に達せず

姿勢制御能力 : 要求性能に達せず

航続時間 : 要求性能に達せず

これが、この二人が最終日に得た結論である。要求性能が引き上げられたという、彼らにとって思いもかけない理由である。理不尽な運命だが、彼らが迂闊といえなくはなかった。MSB-Xの報道は、もちろんN&B社でも把握している。N&B社がMSB-Xの試験とタイミングを合わせるように、アンドロメダのエンジン換装を発表したのである。エンジンの出力増大によって彼らの船は格段に性能が向上する。MSB-Xはその船の性能に達せず、旧型エンジンの出力向上も望めなかったのである。もちろん、エンジン換装などまだまだ先の話だが、その発表によって

拡張性のないMSB-Xは息の根を止められたのである。

カメラはセンサーやケーブルが外されていくMSB-Xを撮影した。今回の試験が完了したことを象徴する映像である。ウォーデンはカメラマンに指示して、そこにドノバンとウォルヒが肩を落とした後ろ姿を重ねさせた。ウォーデンは最後に確認したいことがあった。ウォーデンは二人に近づいて尋ねた。

「それで、ダメだったんでしょう？ この船体はいつスクラップにするの？」

ひどく残酷な質問だと言うことは分かっている。ウォルヒは一瞬目を見開いて怒りを露わにしたが、何も反論できずに黙りこくった。しかし、ウォルヒはじっと正面を見据えて視線を逸らさない。

(いい目をする)

ウォーデンはそう思った。同じ火星市民として救われた思いだった。その彼女が胸元に何か握りしめていた。

(こんな女でも何かに祈る事があるのだろうか？)

小さな銀のペンダントで、「火星の息吹」の事故の遺族だということを示す品である。ウォーデンは彼女が事故の遺族かどうかということに興味はない。ただ、彼女が試験を祈るように眺め続けたその視線の先に、神ではなく、彼女に連なる肉親の姿があったということを知った。

ネヤガワ工業の社内では、取材の直後から、報道の日程とその内容について関心が高まっていた。

「うちの会社が全国ネットワークで放送されるんだ」

「ねえ。私は映っているかしら」

ネヤガワ工業のような中小企業にとって、報道取材というのは初めての経験である。社員は皆、その片隅にでも自分の姿が映っているのではないかと興奮し、気の早い者は家族にもこの番組の中で自分の姿を探すようにと命じていたりした。MSB—Xの試験結果が思わしき無かったという結果は、ローウェル工科大学に出張した2人から入った連絡を通じて、うわさ話として全社内に広まって居る。社員たちは、その結果ではなく、自分の姿が全国ネットで映しだされるかもしれないという事に興奮しているのである。

番組は一般公開を待たず、電子ファイルとしてネヤガワ工業に届けられていた。社内で番組を流す昼の休憩時間には、食堂のあるスクリーンの回りが社員で埋まった。

番組の始まりは、おおむねネヤガワ工業とMSB—Xに対して好意的な内容といえた。

映像の視点が良い。普段、ここで働いている社員にさえ、こんなに広々として、整理整頓の行き届いた最新工場だったのか？と感心させるほどである。

映像を見たラベルも素直に感心した。

「ほおっ。いろいろ参考になる」

壁際に立って、他に対比するものが無いまま、ゆっくりと壁面を見上げて天井のクレーンを小さめに撮せば高さが強調される。やや高めの視点から、画面手前にはみ出るほどに大きく作業者を撮し込んで、部屋の端のスピカを小さく撮し込めば、作業場の奥行きが強調される。ずいぶん広々とした工場という印象を与えるのである。

最新設備を備えているように見えるのは、新しい設備機器を手前にして、古い設備が隠れるような角度の映像を繋いでいるからだ。事実を報道しているのは間違いないのだが、その種の映像上のテクニックを多用して、番組のためのイメージを造っているのである。

その映像を背景にしてアーシャ・バレの工場の説明の音声が被さっている。

「そして、これらのラインは全てN & B社の定期的な監査を受けて、同社の製造基準に適合しています」

ウルマノフは一人、応接室にこもってこの番組を見ていたのだが、ほっとした様子を見せた。既に試験の結果はウルマノフにも届けられていた。それだけに、これ以上のダメージを被るような報道は避けて欲しいという思いだ。しかし、ここに来て思わず、彼をムツとさせるようなタイトルクレジットが浮かんだ。

『無謀か？ 国産機開発。ある中小企業の悲壮な挑戦』

スタジオの奥にアドバイザーとして専門家が3人、手前に司会者が二人とウォーデンが控えている光景が撮されている。司会者

の男が番組の口火を切った。

「もちろん、今回のような宇宙船の自主開発と言うものは、その一面ではなく、多角的に分析し評価をする事が必要でしょう。

今回、我々の番組では、レポーターのウォーデン氏による現場取材の他、様々な専門家においで頂いて、この火星における小型船の開発現場の現状を、皆様と同時に見ていきたいと考えています」

司会者が「航空工学専門家」という肩書きのパットナムを指名した。

「パットナムさん。技術的な面から見た、宇宙船の自主開発についてご説明頂けませんか？」

MSB-Xの映像を眺めていたパットナムが重々しく頷いて答えた。

「まず、宇宙船は様々な最高技術の集大成なんですよ。おそらく小型船と言うことで、このメーカーは、開発を甘く見ていた部分があるんでしょう」

「例えば？」

「搭載したエンジンモジュールを見て下さい。なんで、こんな旧式なものをつかうんだらう。この船体の用途が分かっていない証拠だね。我々専門家なら、まず、高出力のエンジンを選定するのが常識だね」

「たぶん、価格面を気にしたんでしょう。出来るだけ価格の安いモジュールを使用したんじゃない？」

「ウォーデン君。取材の手応えはどう？」

「先ほどの映像にも流れましたが、このメーカーは名前は余り知られてはいませんが、20年来の小型船の製造実績を持ったメーカーです。この種の高機動小型船で言えば、トップシェアを占める企業です。その能力を持っていてもおかしくはないと思うんですが」

「でも、ライセンス生産でしょう？ 与えられたマニュアルに添って部品を組み立てるのと、新しい物を作り出すことは違うんですよ」

「自主開発といえない？」

「そう。自主開発と言ってもねえ。ちょっと表を準備したんで、撮してもらえないかな。この船体のモジュール毎に構成する部品を調べたものなんだが、ほら、ほとんど輸入品かライセンス生産品でしょう」

「ああ、部品を組み立てただけ？」

「自主開発っていうにはほど遠いね。今、ワンさんが言ったとおり、寄せ集めの部品を組み立てただけだね」

「最近、地球で高校生が手作りの宇宙船を造ったって騒がれたことがあるじゃない？ 宇宙船を構成する部品のモジュール化が進んでいるんで、強度計算ができれば高校生でもやるんだね」

番組を見ているイマムラたちもその話は聞き知っている。数人の高校生たちが、月面の小型機のスクラップ置き場からこっちの船体からコックピットモジュール、あっちのスクラップからパワーモジュールという具合に各種のモジュールを入手して1つにくみ上げて、密かに宇宙船を作って大人を驚かせたという話である。

ここ30年ばかりの間に、部品の規格化とモジュール化が進んだ結果、規格に適合するモジュールでありさえすれば、言い換えれば信号を伝えるケーブルのコネクタが一致して繋がりさえすれば、コックピットモジュールから発した操縦信号は船体の各所に正しく伝わって船体を制御することが出来る。推進剤の配管の内径から、ボルトやナットに至るまで、部品の共用化が進んで特定の船体にしか使えないという特殊な部品はほとんど姿を消しているのである。

もちろん、高校生たちは宇宙を航行する船体を組み立てたというだけである。彼らには宇宙船を宇宙空間に運搬する手段も無く、推進剤をタンクに注入しようとして、警察に補導されたという事件である。

ただ、専門家がこのニュースを比喻として持ち出すのは悪意がある。ネヤガワ工業では船体の強度や安全性を十分に計算した上で、商業製品として船体を試作した。もともとの技術レベルが全く異なっているはずだ、それをモジュールをつなぎ合わせた高校生と比較して貶めているのである。

「ウォーデン君。この船体の試験結果についてはどう見たらいいんだろう？」

コメンテーターたちの前のスクリーンに試験中のMSB-Xの姿が映しだされている。画像に合わせてウォーデンが解説を入れた。

「彼らは出来上がった船体を、ローウェル工科大学に運んで試験をしたんですが、残念ながら、競合するメーカーの船体の性能に

及ばなかったようです」

パットナムが、他の出演者に苦笑いをしてみせた。

「そもそも、宇宙船を開発するからには、試作機の試験設備をもっていないからには、どのメーカーも持っている設備ですよ。その基礎的な施設がないと言うことは、このメーカーに開発能力もないということだよ」

「そして、さっきウォーデンさんが言ったとおり、この企業は火星で小型機のトップシェアを占めてる。その企業がこの状態なら、火星で独自で小型船開発をするというのは、無謀なことだね。勢いや思いこみだけで動いちゃいけない、自分たちの力量を素直に受け入れる勇気も必要だよ」

「この試みは無謀だって事？ 高校生が作ったんなら誉めてやっても良いけどね」

「オルタンスさん。ローウェル大学の試験結果の数値が出ていますが、これをごらんになって性能という面から見た場合、この自主開発船はどう評価できるんでしょう」

「さっきの話の続きだが、高校生が作ったものよりましだね」

「まあ、冗談はその程度にして、ワンさん。今度はご専門の経済的に見た場合、この開発が火星経済に与える影響は？」

「経済的な効果と言ってもね、N & B社やデメテル社がこの火星に生産基盤を移しつつあるんです。N & B社やデメテル社で遙か信頼性のある船体が製造されています。現在の我々の技術力を冷静に考えれば、むしろ、無謀な開発に費やす経済損失の方が無視できないね」

「経済損失と言っても、既存のモジュールをくっつけて、あとは

それをスクラップにする費用の損失だけですから、」

「まあ、温かい目で見て良いんじゃないでしょうか？良薬は口に苦しとか言います。長い経験の中では、失敗するって言うのも、いい経験じゃないですか？」

「経験を積むことで次回に生かせれば良いんですが、N & B社やデメテル社が進出してくる以上、彼らにとって、この次はあり得ないでしょう」

報道の内容に、ネヤガワ工業の応接室ではウルマノフがディスプレイのスイッチを切った。ネヤガワ工業の食堂では、ガーヤンやウィリアムスは息をのんで、バレは昼食のトレイを床に叩きつけて怒りを露わにした。

「ひどい」

報道の内容はウォーデン達の裏切り行為のように思われたのである。

「うるさいなあ。どいてくれ。番組が見えない」

妙に冷静な声がして、バレは振り返った。製造部員である。昼食に食堂に集まっていた人々の視線が彼女たちに集まっていて、その視線が彼女を刺すように冷たい。

「あの番組で嘘を付いてるって言うのか？ 全部本当の事じゃないか」

「そうだわ。事実は受け入れなきゃ」

「専門家の人たちも、みんなで否定するんだもの」

「これ以上会社の恥をさらすのは嫌だわ」

設計課には新型船開発というカッコいい仕事は自分が果たすはずだったという妬みもあるのだろうが、技術部の他の部署や製造部にもMSB-Xについて随分と負担をかけている。その反感が吹き出したのだろう。新型船開発、MSB-Xという船体、その船体を設計した人々、そういうものに向けられた好意的な雰囲気は微塵もなく、気付かない内に、彼ら技術開発課は社内でも社会からも孤立していたのである。

あの報道の、わずかあくる日である。突然のウォーデンからの連絡の後、イマムラは部下に問いつめられていた。

「あの連中が、私たちにまだ何か用があるって言うんですか？」

「追加の取材か何か、分からない。我々に直接会いたいそうだ」

イマムラ自身が彼らの意図が掴めず、事態が把握できていない。昨日の番組に対する怒りが、メンバーの間でまだ収まっていない。むしろ、思い出す度に、怒りが増幅して爆発しそうだった。ただ、この怒りは技術開発課飲みに限ったものらしく、他の部署では冷ややかなほど冷静さを保っている。そんな時期にウォーデンはイマムラに面会を申し込んできたというのである。

「ただの謝罪なら聞きたくもない」

シンが吐き捨てるように言った。他のメンバーも同じ思いだ。

ウォーデンは2人のスタッフとネヤガワ工業の受付に現れ、バレが罪人でも連行するような雰囲気、技術部棟入り口の応接室に案内してきた。技術開発課メンバーが顔をそろえており、部屋に怒気が充満していた。イマムラでさえ、露骨に不信感を現して隠そうともしないのである。ウォーデンらはメンバーの怒りの視線に動じる様子はない。

席に着いたウォーデン達に、ウィリアムスがドリンクサーバーからマグカップに入れた飲み物を運んで来たのだが、彼女は突然にウォーデン達の頭上にカップの中身をぶちまけた。

「あら、ごめんなさい。手が滑っちゃったわ」

ウィリアムスは、彼らを睨み付けて姿を消した。

「嫌われたものだな、ただの水か？ コーヒーを出してもらおうほどには歓迎されていないらしい」

ウォーデン達は水をかけられたことには触れず、大して気にする様子もなく、ハンカチで水を拭いた。裏切りを詫びるわけでもなく、ウィリアムスの挑発から逃げ帰る分けてもなく凶太く厚かましい連中だった。話はイマムラから切り出した。

「ウォーデンさん。まず、私たちの方から聞いて欲しいことがある。私は、我々の開発した船体の性能が在来機種のパフォーマンスに遠く及ばないという事実において、あなた方の報道が正しいと言うことを認めなくてはならないと考えている。私たちの次の進歩がその失敗を受け入れることから始まるからだ」

(なるほど、こういう男だったのか?)

ウォーデンは思った。何故か、試験の最終日にウォルヒがじっと前を見つめる視線と重なった。イマムラは続けた。

「今、この火星の大地の上に10億を超える人々が居る。まだまだ増えるだろう。100年前の人類にこの状況が想像できただろうか。夢を可能にしたのは我々の両親や祖父母が、農夫が大地を耕すように都市を築き、我々を慈しみ育てたからだ」

ウォーデン達はメンバーの冷たい視線に晒されているのだが全く動じる様子がない。ただ、イマムラの話に軽く相づちを打ちながら聞いている。

「私たちは彼らの血を引き継いでいる。我々メンバーはこの地で我々の船を創り上げる。同じ火星市民として、その同胞の熱意や努力を侮辱する報道が許されるものだろうか？」

黙っていたウォーデンが突然に話し始めた。

「イマムラさん。専門家連中の意見は一致している。火星市民の手による宇宙船の自主開発を否定する事実は山のようにある。私は私たちの報道が正しいものであったと信じている」

ウォーデンはここで言葉を途切れさせて部屋の中の人々を眺めてから続けた。

「しかし、イマムラさん。現実というのは面白い。火星市民の祈りは専門家を否定するらしい。それを皆さんに出会って教えてもらいましたよ」

ウォーデンはメンバーを見回してバレに目を止めた。自分を案内した女だと言うことは記憶していた。他の誰よりも怒り狂った目でウォーデンを睨み付けているのである。

「私たちが今日、ここに来た理由を知りたい？」

ウォーデンはバレに子供っぽくウインクして尋ねた。バレはぴくりと眉を動かした。たしかに興味がある。しかし、ウォーデンは自らのびしょぬれのハンカチと、びしょぬれの仲間を眺めて、子供のように言った。

「やめた。もう、教えてやらない。でも、間もなくあなた方にも届きますよ」

3人はメンバーの一人一人に強引に握手を求めて、さっさと姿を消した。彼らの取材と同様に自分勝手な男たちだった。突然にやってきて、何もせず返ってしまった。メンバーにも彼らを引き留める理由はない。

「いったい。何のつもりです？」

「私たちをからかいに来たの？」

結局、何の説明も受けないまま、ウォーデン達に取り残されたメンバー達は憤懣やるかたなく、イマムラは不満の受け皿になっていた。ベルが鳴り、たまたま、間近にいたウィリアムスがふくれっ面のまま電話を受けた。短い会話を繰り返す彼女の様子がおかしい。

「ウォーデンさん？」

ラベルは技術部棟の通路にウォーデンを待ち受けるように立っていた。イマムラ達の様子から、あの報道に携わった連中がやってくることを知っていた。ラベルはにこやかな笑顔で握手を求めた。

「ジャン・ラベルです。ここで宇宙船開発の仕事をしています」

ラベルは彼らに自己紹介をし、駐車場まで送ろうと申し出たのである。ウォーデンも名前だけは知っていた。ネヤガワ工業で宇宙船の自主開発が始まった時期や、宇宙船開発に関わる業績かに彼の記者としての勤を働かせれば、ジャン・ラベルの名がリストに上がる。ラベルは歩きつつ、思い出話でも自慢するように、MSB-Xにおける自らの功績を自慢した。

ウォーデンは尋ねた。

「火星市民の自主開発ではなくて、地球からの技術導入だと？」

「そうです。独自の思想なんてありません。すべて私の指示通りにやりましたから」

「その話、番組で流してもよろしいか？」

「事実を報道するのがあなたの仕事だ」

「あなたの話が事実なら、今回の失敗の責任の大半はラベルさん

にあることになる」

「その通りかもしれないね」

「ラベルさん。私たちは取材に当たって、あなたの経歴も調べさせていただいている。デメテル社でプロメテウスを始め一連の小型機の主任設計者をつとめた人だ」

「よく調べてあるね」

「開発担当者として高名な方だ。こんな報道は下手をするとあなたの経歴を泥まみれにしますよ」

「今は、失敗を笑って吹き飛ばすピエロが必要だ」

この短い会話を、ウォーデンはニュースの原稿に代えて、頭の中で整理していた。しかし、興味を引くものではない。彼自身の存在を誇示するという目的は達していて、この会話にそれ以上の価値は見いだせない。また、ラベル自身も彼らと顔をつきあわせて取材を受けているわけではなく、ただの世間話にしか過ぎない。

四輪ムーヴァーで帰社する3人をラベルは門まで見送った。窓の外に小さくなって行くラベルの姿を見てウォーデンが言った。

「あの男。失敗を背負って地球に帰るつもりだな」

ウォーデンは車内の端末でニュースのトピックスを閲覧した。次のターゲットを探すのである。それは彼らレポーター同士の情報交換の場で、一般の人々の目には触れない。貪欲な目つきでトピックスの1行毎に目を光らせた。

『技術供与制限法、対象拡大か？』との項目がある。ウォーデンの興味を引くことはなかった。

その日、ウォルヒとドノバンが会社への回線が繋がりにくいという実感を抱いていた。連絡が彼らに届けられたのは、あくる日の残務整理に忙しい時だった。連絡をもたらしたのは大学の研究員である。ローウェル工科大学への直通回線を利用したのだろう。研究者は通信内容を電子ペーパーに転送してウォルヒに届けた。研究者の表情がこぼれるほど明るい。

ウォルヒがその電子ペーパーを読みながら湧き上がってくる感情を抑えるように、細かく肩を震わせている。ドノバンが彼自身、ウォルヒを励ますと言うよりも、自分を納得させるために大きく頷いて、ウォルヒの肩を叩いた。研究所の所員たちはそんな二人の周りに輪を作って温かく見守っていた。ネヤガワ工業では、事務員が事務所内を駆け回るほどの混乱にようやく回復のめどが立ったところだ。昨日来、通信回線が麻痺して、臨時の回線を確保するまで、2時間に渡って社の回線が麻痺した。20万通を越える市民から寄せられた電子メールがサーバーのメモリーをパンクさせていたのである。

ウォルヒは電子ペーパーに見入っている。

いかにも子供のつたない宇宙船の絵が書いてあり、『こくさんき』という文字が添えられている。ページの切り換えスイッチに触れて行くと、様々な人々の思いが伝わってくるのである。

『私たちにだって、やれるんだ』

『火星市民の夢。火星市民の希望』

『火星歴63年。我々、火星市民の新しい出発の年になった』

番組を見た全国の視聴者から、彼女たちに寄せられた励まし

のメールである。失敗に重く打ちひしがれていたウォルヒたちにとって、これらの名もない市民から寄せられた激励は、じんわり浸み行って心を潤す思いだ。

夕食後、二人はそれぞれホテルの個室にこもって過ごした。彼らを取り囲む研究員の声援もありがたかったが、一人になってゆっくりとメールを味わいたいという気がしたのである。ドノバンにはウォルヒとは別に、彼女に打ち明けるには気がかりな点がある。よほど決心を要したらしい、困惑する様子を隠せないまま、隣室のドノバンからウォルヒに連絡が入った。

「ウォルヒ。手短かに言う。君にまだ伝えていない会社からのメールがある。例の法案が可決された。明日、先に社に帰ってくれ。ボクもこっちの残務整理がつき次第、帰る。じゃあ、メールを転送する」

ドノバンの通信が切れ、ウォルヒはモニターに映し出されたメールを読んだ。短い言葉が並んでいる。

『関係者通知。技術供与制限法追加法案可決』

『派遣技術者にも対象の網が広がる』

『ラベル技師、帰国の見込み』

『交渉継続の可能性無し』

火星時間で1年前に、彼らから新型船の核融合エンジンを奪った法案が、今回は彼らの指導者さえを奪おうとしていたのである。ネヤガワ工業があるシンカンサイ市と、ドノバン達のローウェル工科大学があるローウェル市には約2時間の時差がある。

イマムラが追加法案の件を知ったのは昼過ぎである。情報収集を始めて、およその概況をつかんだのは夕刻になっていた。イマムラは多少迷ったらしい。明日の朝の定時連絡まで待ってドノバン達に伝えようかとも思ったのである。しかし、部下に隠し事をするような後ろめたさがあったのだろう。ウォルヒと共に食事を終えてホテルに帰ったドノバンは、イマムラからのメールに接したのである。

ドノバンがホテルの部屋からイマムラの自宅に連絡を取ると、イマムラは彼の連絡を待ち受けていたように対応をした。状況が好転したという話はなく、メールの内容を繰り返すだけだ。社長が夜半、最終便でシルチスに飛んだらしい。火星行政府にラベルの在留許可を求める交渉に赴いたのである。しかし、事態が好転する可能性はほとんど無いだろうという。

通話を追えたドノバンは、ベッドに横になって考えた。課長が俺を連絡先に選んだのは、ラベルを敬愛するウォルヒが直接そんなニュースに触れたら動揺が激しいと考えたのだろう。彼はことごとくラベルと対立していた。自分の冷静さが信用されているわけではなく、その仲の悪さを見込まれたのである。

ホテルに戻った後、着替えもせずベッドに横になってしまっていた。作り上げてきた船体の性能が要求性能に達しなかった、日々その事実を突きつけられてきた失望感と、連日の試験の疲労が貯まっていて、着替える気力も萎えてしまっている。そのくせ頭の芯は冴え渡っていて眠れない。雑多な思い出や想像が湧き上がってくるのだが、短く断片的でまとまらない。ドノバンはいつの間にか、窓の外から聞こえる音に耳を傾けていた。幹線道路

沿いの安ホテルである。窓から様々な音が侵入してくるのである。いつの間にか空っぽになった頭の中に、そんな生活の音が侵入して流れ去って行った。夜の10時だというのに、幹線道路を行き交う車に切れ目がない。大型車や小型車の音を聞き分けることが出来た。タイヤが軋む音がして、小型車が突然に方向転換をしたに違いなかった。工事関係者の声が小さく混じっている。夜間の内に工事を終了させてしまわなければならないのだろう。

（あの連中はこの時間まで働いて、いくら夜の夜勤手当を稼ぐのだろう）

ドノバンはそう思いつつ苦笑いをした。妙なことを想像したような気がしたのである。ただ、町や人が生きているという実感は悪くはない。ドノバンはしばらくその雰囲気身に委ねた。

突然に、かん高いハウリングに乗せて、駐留軍の撤退だの火星市民の誇りだのという単語を羅列する声が近づいてきた。「愛国市民戦線」だか何かの街頭宣伝車である。この間の選挙で議席を幾分増やした。調子に乗って嬉しさに浮かれているのだろう。ドノバンは眉をひそめた。地球市民は嫌いだが、この連中も大嫌いだ。彼の人生の選択肢の片方に常に何か立ちふさがっているような閉塞感があって不快だった。ドノバンに選択肢を与えないと言う意味で、地球市民と愛国市民戦線に代表される人々は変わりがない。自分の進むべき方向は自分の意志で決めたいと思うのである。

「あのテロリスト共が、、、」

不快気に呟いたドノバンの声が途切れるように弱々しく、寝息

に変わっていった。

翌朝、目覚めたドノバンの頭には、まだ、昨夜の不快な記憶が残っていた。部屋のドアの所で隣室のウォルヒと合流して、二人は黙ったまま、朝の食事を済ませた。ウォルヒも時折、不快そうにこめかみに手を当てたり、あくびを噛み殺したりしているから、彼女もよく眠れなかったに違いない。フロントで宿泊費の精算を済ませると、ドノバンはウォルヒを駅まで送って、ムーヴァーの行く先を大学に向けた。残された仕事は多くない。1台の大型トレーラーがチャーターしてある。そのトレーラーに船体を分割せずそのまま乗せてネヤガワ工業に持ち帰るのである。十分な梱包が出来ないためにMSB-Xの船体が破損する恐れがあった。ただし、運搬コストは安く付く。この失敗作と判定された船体に余分な費用はかけられないのである。試験に協力してもらった人々にお礼の挨拶をして、夕刻には、トレーラーに同乗して帰途につけるはずだった。

試験施設の内部は、しん、と冷たく凍り付くように静まり返っていた。まだ、研究員が出勤する時間には早い。ドノバンはしばらくMSB-Xと向き合っていた。自ら進むべき方向を選択したいという意志はあるのだが、失った方向を定めることが出来ない。ドノバンは、MSB-Xを撫でていて、何故かラベルの顔を思い出した。

今まで、ラベルが彼らのために道を切り開いてくれていたので

ある。つい今まで、自分の前を歩いて進むべき方向を指示してくれていた存在を失ってしまう。

ドノバンは両の手の平で強く顔を覆って涙を拭いた。

職場の士気が低下している。今まで全力で突っ走ってきただけに、立ち止まってしまった今の士気の格差は大きい。市民から寄せられた支援のメールには随分励まされた。しかし、メンバーたちはその士気の格差をメールの返事を書いていて気付いたのである。とうてい、その全てに返事が書ききれない。一方で、イマムラはやや醒めた目を持っていた。市民が彼らに送ったメールの内容は、好意的だが、その20万通のメールの中にただの1通も、当然のことだが、MSB-Xを導入を検討するという内容は見られないのである。間違いなく、開発が失敗に終わったと考えた。

イマムラの立場は微妙で苦しい。

(MSB-X失敗の責任を取って辞表を、、、)

そう考えなかった訳ではない。部下も彼の意図を推し量って不安気にイマムラを眺めることがある。しかし、彼らの精神的な支柱になっていたラベルが帰国するとなったいまは自分まで抜けるわけには行かないのである。その状況でもたらされた火星市民の励ましは、彼を少し変えたようだ。

「課長、何処へ？」

ウィリアムスが席を立ち上がったイマムラに尋ねた。

「ちょっとクレーム処理に」

イマムラはぼかして言い、心の中で付け加えた。

(心配するな、辞表を出しに行く訳じゃない)

ローウェル工科大学での処理はドノバンとウォルヒに任せて

ある。しかし、社内での事後処理がまだまだ残っていると考えている。

「困るな。こっちの指示と違うじゃないか」

試作課の担当者が気色ばんで工場関係者に詰め寄っていた。キム課長が部下をなだめて製造課長に要求した。

「これは間違いなくおたくのミスだ。納期が迫っているから、明日までに此方の要求した物を揃えてくれ」

一方的な要求を伝えてキム課長は引き上げていった。

多少、イマムラにとって運の悪いタイミングだったかもしれない。同じ給料をもらいながら、自分たちが汗まみれで仕事をしているときに、技術部員は空調の利いた清潔な部屋に閉じこもって仕事をしている。たまに顔を出すことはあっても、今のように文句を付けに来るだけだ。口に出しては言わないが、製造部員にとって、技術部にそんな感情的なしこりがある。イマムラはそのしこりが最高潮に達したときに、居合わせたのである。

「アデン君」

イマムラは言いにくそうに間近にいた顔見知りの若い作業者に声を掛けた。MSB—Xのフレームの溶接に携わった工員である。MSB—Xの製造中に何度かここに顔を出して、彼らの顔を知っている。アデンを始め彼を困む工員達が怪訝な表情をイマムラに向けた。開発が終わった今、イマムラは自分たちに用はないはずだ。

「アデン君。それから他のみんなも、もう知ってるとは思うけど、MSB—Xの開発が不調に終わった。君たちにも製造を手伝っ

てもらったけれど、申し訳ないね。私の力不足だった」

イマムラは寂しそうに微笑んで頭を下げた。

(変な人だ)

アデンやその仲間がイマムラの後ろ姿を目で追い、顔を見合わせてそう思った。今までにこんな人物に出会ったのは初めてだった。今もまた、パートのおばちゃん達と話し込んでいるから、イマムラはおばちゃん達にアデン達に言ったのと同じ事を繰り返しているらしい。

(君たちに手伝ってもらった)

そう表現されるのは悪い気はしなかった。そして、別にイマムラは彼らに詫げる必要はないとも思うのである。

世間では大した波紋を呼ばなかったが、数日前、ウォーデンはラベルとの会話を小さなニュースとして、ラベルの意向を汲んだ報道をした。その内容はうわさ話として広まって、この社内では知らない人間が居ない。ラベルという地球出身の古い頑固な技術者が、あの失敗作を全面的に指導したことを知っていた。実際に現場で接したラベルの印象から想像しにくいのが、番組が事実だとすれば、MSB-X失敗の責任は、彼ら火星市民ではなくラベルという地球市民にある。アデン達はイマムラの寂しい笑顔を共感した。随分と慌ただしい思いをさせられた船体だったが、振り返ってみると、自分たちもあの船体によってずいぶんいろいろな経験を積んで自信をつけているのである。アデン達ばかりではなく、技術開発課の連中もこの工場で彼らから学んでいたはずだ。その彼らをどんな言葉で表現して良いのか分からないまま、技術開

発課のメンバーを、イマムラの後ろ姿に集約させて

（変な人だ）というイマムラの奇妙なイメージが工場の中で定着しつつある。

イマムラの後ろ姿を見送っていたアデンはそんな思考を途切れさせた。通りかかったカルロス部長を見つけたからだ。カルロスにスピカの工作について相談したいことがあった。

（この所、部下が多少マシになった。）

カルロスはそう考えていた。もともと仕事について妥協のない厳しい男で、部下をしょっちゅう怒鳴りつけるほどの激しきで指導管理している。その男が部下の変化に気付いて、言葉に出して誉めるほどではないが、好ましい変化だと見守っているのである。ただ何故、彼らがそういう変化を起こしたのか、首を傾げるような気分である。

今もまた、アデンが溶接の手順を変えてみたいと提案している。正確な溶接が短時間で出来るというのである。カルロスは自身の直感を判断基準にする男で、アデンの提案をその場で支持した。もちろん、実際に作業を変更するのは、その変更がスピカの船体に悪い影響を及ぼさないと言う確認が取れてからだが、長年、小型機造りに携わった経験から考えて、このヒヨツ子の提案は満足していい。

イマムラが工場を訪れたのと同じ目的で、製造部長カルロスの部屋を訪れたときに、彼は工場を巡回し終わって、満足気にくつろいでいる様子だった。若い連中がマシになったということもあるが、MSB-Xというモノにならない仕事が片づいて、工場は

以前の状態に戻って順調に稼働していて、本来の仕事に専念できるのである。

（君はロシア者がみんなコサックダンスを踊ると信じているのか？）

ウルマノフが呆れて彼に尋ねたことがある。激しいリズムはカルロスを高揚させる。悪意のない偏見だが、彼に当てはまるものは、サンバのリズムをロシア舞曲に置き換えて、ウルマノフに通用すると考えるらしいのである。同じ種類の偏見で部屋に入ってきたイマムラを眺めていた。先代のニシダに対する敬愛の情があって、ニッポン血筋に対してブシドーとかハラキリというイメージを抱いている。任務の失敗を詫びるために、短刀で腹部を掻き切って自殺するという派手さと衝動性はカルロスの好みに合う。

（こいつはここへ腹を切りに来たのか）と思ったのである。

MSB—Xが失敗作に終わったという事実が、怒りどころか、冷淡で無関心な態度で社内に受け入れられている。その社内に生じたヒビにイマムラは愕然としていたのである。数日舞うの報道で、彼らをかばったラベルの言動がありがたいと思いつつ、イマムラは困惑を抱え込んでもいる。ラベルの言動がラベルとネヤガワ工業との間にヒビが入ることを恐れたのである。特に、カルロスの誤解はといておいた方が良さだろう。

（なるほど）とカルロスは思った。

イマムラが一生懸命にラベルの立場を釈明するのを聞いたからではない。現場のヒヨツ子共が変わった理由が納得できたからで

ある。奴らの変化はラベルの影響かと思いついたのである。このイマムラという男もラベルの影響に染まって、カルロスと同じ職人気質の香りを放っている。カルロスは釈明を終えて部屋を出るイマムラに声をかけた。

「俺はお前みたいな奴が好きだぜ」

声音は荒っぽいのがカルロスが年下の者にかける言葉として優しい部類に入る。MSB-Xの失敗ではなく、イマムラという男の職人気質で、彼と彼の部署を信用し評価してもいいと考えたのである。

「何か、課長に聞き出して欲しいことはないのかね」

終業時間を迎え、ラベルが技術開発課の部屋の中を見回してそう言った。この男は今の状況でもユーモアを忘れては居ない。以前、技術開発課のメンバーたちが、ラベルが火星にやってきた理由を聞き出そうとしていた時のことを指摘しているのである。技術開発課のメンバーにはもう知らない者は居なかった。

「これはもう不要なようだ。私がもらっても良いかね？」

ラベルが手にしたのは、部屋の隅に飾られていたMSB-Xの模型である。設計段階での映像に代えて、製造段階で工場の片隅の工作機械を使って作ったものである。模型の縮尺は二百分の一で、ラベルが方手で支えるほどの大きさがある。

MSB-Xの開発失敗で、設計データと共に倉庫の隅にでもしまい込まれるはずのものである。ネヤガワ工業にとって財産としての価値はなく、誰かが記念品として保管するならラベルにこそ、その資格があるだろう。イマムラは職場の責任者として頷いてラベルに引き渡すことに同意した。

「では、一足先に失礼するよ」

ラベルの挨拶にイマムラが応じた。

「それでは、お待ちしております」

ラベルはイマムラのそんな誘いに、片手を振って笑顔で応じて部屋を離れた。足取りは意図して明るく軽い。その目的地には迷いはなかった。ラベルは帰宅途上、玩具屋に立ち寄り、一体の人形を買い求めた。以前、店頭でちらりと見かけてドノバンの娘の

カディアを連想させた人形だった。ラベルにとっても一つの転機になった少女だった。商品を梱包する店員に依頼して、腕に抱え込んでいたMSB-Xも包んで青いリボンをかけてもらった。これから隣人の家に寄る。

「エリカとレイはいますか」

呼び出しのベルに応じて顔を見せたワイス夫人に、ラベルはそう尋ねた。

「まだ、帰っていませんが」

「それでは、これをエリカとレイに」

ラベルは二つの包みを差し出した。ピンクのリボンと青いリボン。そのリボンの色で受取人が想像できた。

「お茶でも飲んでいかれませんか」

「いえ、この後、出かける予定がありますので」

「お帰りになるんですの？」

「ええ、一度帰宅するところです」

「いえ、地球に」

「ええ、ここでの仕事は全て終わりました。あとは故郷の妻が待っていますので」

ワイス夫人はラベルに手を回した。柔らかな腕の感触や体温とともに思いが伝わるようだった。彼女はラベルの耳元で囁くように言った。

「いつまでもお元気でね。素敵な奥様にもよろしく」

ワイス夫人はラベルを抱く腕を解き、贈り物を受け取った。

シャワーを浴びて身だしなみを整えても、外出の予定時間まで30分間が余った。この時に呼び鈴が来客を告げ、部屋の環境システムはドアの外にいる来客の姿をスクリーンに投影した。

「ドアは開いているから入っておいで」

ラベルは優しく語ってドアを開けた。

(ほおっ)

ラベルは心の中で感嘆の声を漏らした。来客はエリカとレイである。日々のように挨拶を交わす友人だが、それだけに彼女たちの変化に気づかなかったのだろう。二人がドアの所に立っていると、ドアの枠との対比で彼女たちの体格を正確に推し量ることが出来るのである。

肩幅はともかく、エリカの身長はラベルの身長に近く、並べばラベルを見上げずに会話をしている。幼かったレイも手を上に伸ばせばドアの上の枠組みに届くだろう。気づかないうちにこの二人の友人はずいぶんと成長したものだ。二人が先ほど彼女たちの母親に託した贈り物を手にしていたことで、贈り物の返礼に来たと言うことを知った。

「ありがとう」

よほど気に入ったらしく、いつもは姉に促されて行動するレイがこの時には自ら礼を言った。ラベルが技術開発課からもらってきたMSB-Xの模型である。

「これ、ありがとう」

エリカは等身大の金髪の赤ちゃんの人形を差し出して見せた。人形は樹脂製で関節が動き、本物の赤ちゃんのような姿勢を取ら

せることができる。衣服や帽子を身につけさせることも出来た。他にも陶器やブロンズ製のものもあり、火星市民たちはこの赤ちゃんの人形を「エリカ人形」と総称している。ラベルの目の前のエリカと同じ名だが、もちろんこのエリカとは関係がない。

エリカ・マクガイアー。この火星で初めて生まれた赤ちゃんの名である。そして、その少女の誕生年は彼らが使う火星歴という暦の元年にあたる。この人々は、神話や宗教や権力者にかかわらず、この地で生まれた少女の誕生を元年とし、人形にその姿を留めているのである。

この二人に出合った頃のラベルなら、自らの出自を象徴するように、二人に地球を象徴するものを与えていただろう。いまの彼は火星の人々から数多くのを学んでいた。この子どもたちに地球への郷愁を要求する必要はない。この星で生まれ育まれたことに誇りを持って欲しいと思うのである。地球の大地に根ざした地球という樹木の枝葉に火星市民が居るわけではなく、人類という一つの種から発芽した人々という意識が根付いていた。ラベルは短い会話の後、二人を優しく帰した。外出の予定が迫っていたのである。

ラベルはイマムラ家を時間通りに訪問する必要があった。訪問に地球にいる妻を伴うためである。ラベルは到着までの歩調を整え、腕時計で時間を確認してから、イマムラ家のドアの呼び鈴を鳴らした。イマムラと妻のアマリアがラベルを出迎え、迎え入れた。

三人は軽食と飲み物を囲んでテーブルについてスクリーンを眺

めた。好奇心豊かなアマリアは夫やラベルの顔を眺めて微笑んでいた。やがてスクリーンが明滅して、通信回線が開かれて、最後の来客が姿を現した。

「イマムラさん、イマムラ夫人。初めまして、セリーヌ・ラベルです。私のことはセリーヌと呼んでください。普段、夫がお世話になっています」

そう挨拶をした初老の女性は、写真で見たことがあるラベルの妻だが、彼女の声を聞き、微笑む表情の変化を見ていると、温厚で上品な女性の雰囲気伝わってきた。彼女は言葉を続けている。

「タダシさん、アマリアさんと、呼ばせてくださいね」

夫婦はその言葉を受け入れて頷いて言った。彼女からファーストネームで呼ばれるのは光栄であると言うより、肉親にでも慣れるような嬉しさがある。

「初めまして、セリーヌさん。お目にかかれて光栄です。私がアマリアです。ラベルさんにはいつも夫が世話になっています」

「初めまして、タダシ・イマムラです」

もちろん、この瞬間のセリーヌはそれを知らない。この瞬間、彼女の姿は十数分の時を経て届いた映像であり、イマムラ夫婦が返した挨拶は、十数分の時を経て地球のセリーヌに届く。

彼女は自己紹介代わりに近況を語り、膝の上に乗ってきた愛猫のウォルターを紹介し、夫との出会いを語った。

「話しすぎたかしら。では、おしゃべりをお譲りするわ」

十数分ばかり話し続けた彼女は、そんな言葉で話を締めくく

って、喉を潤すようにテーブルの上の紅茶をすすった。猫のウォルターは彼女の膝の上で温和しく撫でられている。この猫の興味を引く変化は何もないのである。回線が開くと同時にこちらの映像も送られているはずだが、情報が地球にいるセリーヌに届くのは未だ先だろう。こういう場合、アマリアは好奇心豊かで積極的だった。マリアは今まですすっていたココアのカップをテーブルに置いてスクリーンに話し始めた。

「可愛い猫ですね」

アマリアがそう言った瞬間、映像に映し出されていたウォルターが、セリーヌの膝の上でひょいと頭をもたげて、不思議そうにスクリーンを眺めた。通信回線が開かれた瞬間の、こちらの映像がセリーヌに届き始めたのである。スクリーンの画面が自動的に分割された。右側の大きな画面に地球から送られてきているセリーヌの姿が映し出されている。左側が上下に分割されて、上はこの瞬間に地球に送信されている映像が表示されている。左下はこの瞬間にセリーヌが見ているはずの過去の火星側の映像に、この時彼らが発した言葉が文字のテロップ重ねてある。両者の時をすりあわせる工夫だった。

ウォルターがスクリーンに映し出されている主人に気づいて、懐かしそうに、しかし、不思議そうに接近し、スクリーンを撫でた。ラベルはその老猫に優しく注意を促した。

「ウォルター。スクリーンを引っ掻くんじゃない」

前足の肉球がスクリーンを叩いた。主人にこの画面から出てこいと促しているようにも見えた。セリーヌはそんなウォルターを再び膝に抱いた。アマリアはそんな映像を眺めながら、セリーヌ

と同じく、近況や、火星での生活のことを語った。ラベルの見る
ところ、イマムラより妻の方が話題が豊富で饒舌であるようだ
った。アマリアもまた、10分ばかり話し続け、未だ話し足りない
ことがある。ただ、時計を確認してみればそろそろ話を打ち切
って、セリーヌに話の番をゆずらねばならない。

「このウォルターはね、今から十六年前、夫が火星から帰ってき
た日に、町の隅で見つけて拾ってきたの。まだ小さな子猫だった
のよ。でも、酷い夫だと思わない？ 四十年以上連れ添った伴侶
を地球に残して、火星に出張したあげく、三年間もほったらかし
。帰ってきたのは良いけど、火星から手ぶらで帰ってきて、地球
に着いて帰りがけに拾った子猫が、3年間の出張のお土産だっ
たの」

彼女は朗らかに笑って続けた。

「文句の一つも言ってやろうと思ったら、その時の夫は大あわて
でね。子猫が死にそうだって。確かに、冬の冷たい戸外に捨てら
れていて、寒さで弱っていたのね。それから、獣医に診せたり、
大変」

セリーヌの回想に、イマムラはラベルの若い時代に意外な人柄
を見つけたようで、微笑んでラベルの顔を眺め、ラベルは不機嫌
な表情で照れくささを隠した。セリーヌの回想は続いた。

「でも、ウォルターも良い思い出を作ってくれたわ。今はこの
子が、私たち夫婦の子どものようなものね」

セリーヌの言葉にアマリアが頷いた。子どもがいないという点
でこの二組の夫婦は一致していた。セリーヌが話の番を火星側に

譲り、アマリアはセリーヌの言葉を引き継いで話し始めた。

「うちは、動物は居ないんです。でも、この人が子どもみたいなものですから」

アマリアは肩をすくめて苦勞を訴えた。

「髪が乱れているから直しなさい。下着は毎日着替えるのよ。お風呂に入りなさい。遅くまで起きていないでちゃんと寝なさい。毎日そんな事を言わなきゃいけないんです。子どもの相手をするように疲れるんですよ」

ラベルはイラムラが困惑する表情を眺めて笑った。この言葉が届く十数分後、地球ではセリーヌも笑うだろう。果たして、三十分近い時を経て、スクリーンにアマリアに同意して笑うセリーヌの笑顔が届いた。アマリアの言葉に逐一頷き、イラムラを困惑させた。アマリアが時計を確認して話を終えて順番を譲って間もなく、先ほどアマリアが話し始めた話題に応じてセリーヌからの返事が届いた。

「夫が言うのよ。もしも、私たちに本当の子どもが居るなら、この連中かも知れないって」

この連中というセリーヌの言葉に、イラムラ夫婦は耳を澄ませて次の言葉に期待した。

「火星の子どもたち。彼は貴女たちのことをそう呼んでいるの」

夫婦は顔を見合わせてにんまりと満足げにほらってラベルを眺めた。セリーヌの思い出話は、夫のネヤガワ工業への技術指導という目的での火星生活に触れ、この数年の出来事について語った。最後に時計を眺めたセリーヌは言葉を締めくくった。

「では、名残惜しいけれど、ここでこちらの通信を終わるわ。ま

たいつかこんな機会があると良いわね」

セリーヌは膝の上のウォルターの前足を取って、ウォルターにも別れを告げさせるように、前足の先を振って見せた。あとは、火星からの返事を受け取って回線を閉じるのである。

「火星の子どもたち。良い言葉ですね」

アマリアはセリーヌの言葉を繰り返して頷いたが、同時に、セリーヌの表情に僅かに浮かんだ妙な満足感を読み取った。彼女の視線は、アマリアの背後に映り込んでいるラベルと夫のタダシに向けられているらしい。アマリアは背後に居た二人を振り返った。二人の男、特にラベルは今まで心に秘めていた思いを妻にバラされてしまった照れくささに、視線を合わせることを避けて黙りこくっていた。

(あらっ)

アマリアはふと思い出して、言葉を押さえるように口元に手を当てた。ジャン・ラベルを照れくさくさせたものがセリーヌの言葉なら、夫のタダシが気まずそうに視線を避けるのは、彼女が暴露した夫の生活習慣のせいらしい。しかし、二人の男を並べて眺めてみると微笑ましい。二人の夫の様子は本当の父と息子のよう似通っていた。アマリアはセリーヌの笑顔のわけを察してスクリーンに向き直って言った。

「ひょっとしたら、若い頃のジャンは、今の私の夫のようでしたか？ 夫って、いつの時代も世話をするのに子どものような手間がかかるのかしら」

そんなアマリアの言葉が届く十数分後、地球ではセリーヌが笑

いながら頷いているだろうと、二人の男は顔を見合わせた。アマリアは名残惜しそうに手を振ってから通信回線を閉じて、背後のラベルを振り返って言った。

「どうして、他の子どもたちも誘って下さらなかったの？」

彼女は技術開発課の他のメンバーもみな誘って、セリーヌを交えて談笑すればよかったというのである。

「そんな恥ずかしいことが出来るものかね。私は君たち二人の前にいるだけでも恥ずかしくて冷や汗が出てる」

事実、ラベルは暑くもない部屋の中で、ハンカチを額に当てていた。

「そろそろ、お暇しよう」

「お宅まで、ムーヴァーでお送りしましょうか」

「一人で歩いて帰りたい気分なんだ」

ラベルはそこで言葉を途切れさせ、思いついたように言葉を翻した。

「いや、やはり頼めるかね？」

イマムラは笑顔で応じ、思考ロボットに四輪ムーヴァーを準備するよう指示をした。

ムーヴァーが待つ表通りまで並んで歩きながら、イマムラはラベルに言った。

「でも、火星の子どもたちということは、部下にも伝えてやりたいんですが」

イマムラの言葉にラベルがぴくりと反応して、顔をまじまじと見つめて言った。

「髪が乱れているから直しなさい。下着は毎日着替えるのよ。お風呂に入りなさい。遅くまで起きていないで、ちゃんと寝なさい！」

言うまでもなく、アマリアがイマムラを表した言葉である。ラベルは諭すように良い添えた。

「いいかね、アマリアの言葉は部下に内緒にしておいてやる。だから、セリーヌの話も内緒だ。わかったかね？」

ラベルの提案にイマムラも苦笑いで応じざるを得ない。

ラベルがイマムラに指定した目的地は、ラベルの行きつけの店で、市街地の一角にあるレストランだった。ラベルの自宅から徒歩で10分の距離の場所である。ムーヴァーを操作するイマムラの思考ロボットは、二人を降ろして駐車場へと走り去った。本日貸し切りというプレートが掛かっているのにも気にせず、ラベルはドアのノブに手をかけた。ノブ、ドアを手で開けるといふ古くさを火星に持ち込んでいるのがラベルのお気に入りなのだろう。

イマムラがラベルに肩を抱かれたままドアをくぐると、店内には数十人の人々の姿があった。男、女、老人、子ども様々な人々が、新たな客に気づいて笑顔を浮かべ、店内にラベルを迎える拍手が広がった。ラベルは手を上げて店内の人々に挨拶をし、イマムラにちらりと囁いた。

「店内でくつろいでいてくれ。今夜は、知り合いがお別れ会を開いてくれるというのでね」

イマムラは納得した。技術開発課のメンバーから敬愛を集める

のと同様、ラベルは私生活でも周囲の人々と暖かな関係を作り上げていたに違いない。そんな人々の中から両親らしい夫婦の手を引いてきたのはエリカとレイである。

「おやっ、君たちも来てくれたのかね」

ラベルは子どもたちの頭を撫で紹介をした。

「これは、私の息子でタダシ・イマムラ。こちらは私の隣人のワイズ一家だ。ダン、トレイシー、エリカ、レイ」

ラベルは、トレイシーと二人の子どもに導かれて友人たちの輪の中に入り笑顔に包まれた。イマムラは距離を置いて見守ることにした。この時間は、ラベルの友人たちのものだ。ただ、それにしては、どうしてラベルはこの中に自分を誘ったのだろうかという疑問も湧いた。

「ラベルさんとのご関係は？」

イマムラはそんな言葉と共に、ビールで満たされた大きなジョッキを差し出され、自分が下戸だと断る隙もなく、ジョッキを抱えていた。飲み物を勧めたのはワイズ夫妻の夫のダンである。

「ラベルさんの指導を受けながら宇宙船を造っています」

「では、MSB-Xは、貴方たちが？」

その質問に頷くイマムラに、ダンは部屋の中に息子の姿を探して呼び寄せた。

「おいっ、レイ。ちょっとおいで」

何事かと不思議そうに近づいてきた息子の肩を抱いて、ダンはイマムラを息子に紹介した。

「このおじさんたちが、MSB-Xを作ったんだぞ」

その一言で、レイは表情を一変させ、イマムラに尊敬の眼差し

を注いだ。

「すごいや。ホント？」

レイの言葉に頷くイマムラはやや気恥ずかしいが誇らしげでもある。レイは父親を振り返って言った。

「父さんも、宇宙船をつくれればいいのに」

「ダン、あなたのお仕事は？」

その質問にレイが答えた。

「緩衝器を作ってるんだ」

「緩衝器というと、高速鉄道の連結器や四輪ムーブアーのバンパーですか？」

「いや、そっちじゃなくて、エアバッグ。高速走行する乗り物の中で乗員の体を保護する必要があるね。現在使われるものは、構造に信頼性があるので21世紀の頃から変わりにくい構造。つまり風船を膨らませて人の体を保護するんです。でも、搭乗員をスポンジの中に入れておけば、全体を柔らかく保護できるよね。そういう装置の開発です」

「そんな事が出来るんですか」

「特殊な高分子を空間の中に浮遊させておくんだ。匂いもないし、普段は分子間で反発しあっていて、そんな分子が漂っていることに気づかない。そこに一定の周波数のエネルギーを与えて分子の立体構造を代えると、今まで反発しあっていた分子同士が結合して、目に見えないスポンジのような状態になるんだ。スポンジの硬さを調節も出来るし、その中では呼吸も出来るし、目も見えるよ」

「搭乗員に害はないんですか？」

「分子量が大きいから、目の細かいフィルターのマスクをすれば吸い込まないですむし、分子内の結合は人間の体内で簡単に分解されてしまって、体外に排出されるから無害だよ」

「なるほど」

イマムラは頷いた。仕事について熱く語り始めるダンに、仕事は違ってもこの男にも技術者の香りを感じ、自分と同じタイプの人間だと納得したのである。人々が談笑し、ラベルとの関係や思い出話を語る中、ダンはラベルが店の中で一段高いピアノを置いたステージに登ったのに気づいて、大きく手を打ち鳴らして、人々にラベルに注目するように促した。人々はしんと静まりかえってラベルの言葉を待った。

ラベルはスピーチのお膳立てをしたダンに笑顔で手を振って礼に代え、ラベル自身が心の底から言葉が湧いてくるのを待つように一呼吸の間をおいて語り始めた。

「みなさん、今日は私のために集まっていたいてありがとうございます。この星に来てから私は数多くの友人や家族を得ました。そして、この星や人々から数多くのものを学びました。意外なことに、私は生まれ故郷から遙かに離れたこの星で、人類の本質に触れることも出来ました。繰り返しますが、私たちは友人であり家族です。しかし、その関係は様々な理由で引き裂かれ、距離が出来ます。ただ、私はこの星でK I Z U N Aという古い地球の言葉を知りました。友人や親子兄弟、親しい人々の全ての関係を含め、その関係が時や距離に隔てられ途絶えることなく続く。そういう関係

を示す言葉です。たとえ遠く隔てられても、私たちが友人として、家族として結びつけているのです」

ラベルの質朴な性格を物語るように1分足らずの短い別れの挨拶だった。その言葉に共感する人々の拍手に包まれ、イマムラは自分もまたその一員なのだと言うことが嬉しく誇らしかった。

小さなトランクがラベルの人柄をよく現していた。質素な生活を物語る、このアパートを引き払う時にも、ラベルの私物が全て収まってしまったのである。ラベルはその荷造り作業を、メンバーに見守っていてもらうように、テーブルの上の立体写真を荷造りの最後まで残した。出発まで半日を残して、荷造りはほとんど済んでしまった。ラベルは黙って、その立体映像を眺めて残りの時を過ごした。技術開発課の内部でラベルを中心に彼の教え子達が映っていた。

既に、最後のつもりで、昨日会社を去るときに別れの挨拶を交わしていた。

「何か、やり残したことは無いだろうか？」

ラベルは映像に語りかけるようにそう呟いた。メンバーの一人一人の姿や癖を思い浮かべた。

イマムラ、縫いぐるみのクマのような男だった。何より自分が素人だと自覚しているのが良い。本人は気付いていないのだろうが、メンバーがのびのび育てているのは、彼がそれを自覚して、技術的なことを部下に任せているからだ。ただ、気苦労は多いだろう。

シン、叱りつけたときに最も真剣に食らいついてくるのがこの男だった。

アサハリ、存在感の薄い男だが、たぶん、メンバーの中で最も忍耐強い。いい技術者に育つだろう

ムハマド、この男との出会いは衝撃的だった。電車の中で彼の

演説を聞いたのである。

ガーヤン、やや無頓着な性格だがメンバーの中で彼の素直な明るさは棄てがたい長所だ。

ドノバン、若いくせに私以上に頑固な男だ。とうとう親しい会話も交わさずに終わってしまうらしい。ただ、この頑固な男と娘の表情はずっと記憶に残るに違いない。

ウォルヒ、彼女に誘われて北公園に出向いたことがある。その展望室から見える景色を見て欲しいと語ったのである。彼から見れば荒涼とした光景だが、いまは何故かその景色が懐かしい。

バレ、ウィリアムス、この二人は仕事より、二人の掛け合い漫才のような楽しい会話が記憶に残っている。

ひょっとすれば、ラベルよりも彼の妻セリーヌの方がこういうエピソードを記憶しているかもしれない。ラベルは頻繁に、この火星の子供達のことをメールにしたためていた。一方で口に出しては言わなかったが、過去に何度か帰国しようかと考えたことがある。いつだったか具体的な日付は記憶にないが、セリーヌにメールを送った時の記憶が残っていた。

地球と火星市民の関係が悪化するにつれて、火星行政府が火星に在住する地球市民のメールを盗聴しているのではないかという噂が、火星に住む地球市民の間で囁かれていた。ラベルはアパートの部屋が盗聴されていることを願いつつ、大っぴらに火星市民への不満や悪口をセリーヌへのメールにしたためたのである。

『時折、君と一緒に山の峰で風に吹かれた事、風の香りが懐かしくなる。ここの連中はまるででたらめで、そんなことも理解できないようで話が合わない』

普段はまめに返事をよこす妻が、このときは3日ばかり間を置いて4日目に返事が返ってきた。

『ご苦労はお察しするわ。がんばって下さいね』

この短い返事が、セリーヌの笑顔の映像と共に帰ってきたのである。

ラベルは頭を冷やすための時間の後で『まだ、帰って来ちゃだめよ』という宣告を受け取ったのだった。まったく、女って言うのは、世紀末までこうやって男を欺き続けるに違いない。

(ニシダとウルマノフのおかげでいい思い出が出来た)

20年前、デメテル社から技術調査の目的で火星にやってきたラベルを、大胆にもニシダという中小企業の親父がヘッドハンティングしようとしたのである。会社の規模を考えれば象と蟻の差がある。この男とは妙にウマがあった。そして、ウルマノフという男がラベルの名を記憶して思い出したらしい。

時計のブザーが鳴った。もう出かけなければならない時間だった。

「教え残したことは山ほどあるが、考えることは教えてある。この老いぼれがいなくても自ら考え、道を切り開くだろう」

ラベルはその写真を大切に厚手のセーターに包み込んだ。その包みがラベルが荷作りをした最後の荷物である。部屋を見回して荷造りに漏れたものが無いか確認した。この地の思い出と学んだことは心から溢れて、トランクに入りきらない。

シンカンサイ市の西方のアスクレウス港から定期便で火星軌道

上のフォボス宙港に行き、貨客船アトランティックオーシャン号に搭乗して地球に帰国するのである。意外にもフォボス宙港の埠頭に着いてみると、ウルマノフが彼を待っていた。二人は顔を見合わせて黙って並んで歩いた。火星という星が丸みを見せて彼らの眼前に見える。ウルマノフがここまでやってくるとは思わず、別れの挨拶は全て昨日の内に済ませたつもりだった。交わす言葉がない。ウルマノフが重い口を開いた。

「すまない。あんたを守りきれなかった」

シルチスの火星行政府に出向いたが、彼の在留許可を得ることが出来なかったと言うのである。

「いや。別のことを考えていたよ」

ラベルは考えをまとめつつ切れ切れに言った。

「今度は、地球の大地の上で、夜風に吹かれながら、空をふり仰いで思うんだ。あの赤い星の連中は、土の香りが染み込んだ風に吹かれることがない。なんて、不幸な連中だ？」

ラベルの話をも黙って聞いていたウルマノフが苦笑いをした。ラベルの表情がお前もその不幸な連中の一人だと語っているのである。

「そのくせ、奴らは荒涼とした赤い砂漠や砂嵐に感動する。なんて変てこな連中だろう。しかし、最後に私は考えるんだ。人類ってのはなんて大きな可能性を持ってるんだ？」

その言葉を聴くとも無くウルマノフは同じことを繰り返した。

「すまない。あんたを最後まで守りきれなかった」

「おい、おい。何か誤解してやしないか？」

ラベルは笑って言葉を継いだ。

「私は責任を全うして故郷に帰る。やり残したことは何も無い」
ラベルは言葉を途切れさせた。イマムラの姿に気付いたのである。地球に向かう貨客船の出発ロビーに技術開発課のメンバーが顔を揃えていた。ウルマノフはラベルに言った。

「最後はあの連中と居てやってくれ」

ウルマノフの言葉の通りになった。彼らは、ただ一緒に時間を過ごした。別れの挨拶の後だという気恥ずかしさがあったのかもしれない。バレやウィリアムスが何かを口にしようとしたのだが、口ごもってしまうのだった。意を決したようにドノバンがラベルに進み出た。

「先生、随分お世話になりました。感謝しています」

(やっと心を開いてくれたらしい。この日この時まで頑固な男だった)

ラベルは腕時計を外して時を調節した。

「今日の記念だ。メンバーの人数分、9分ほど時間を遅らせておこう。時計を見る度に、この火星の、のろまな連中の顔を思い出してやる」

彼の最後の毒舌だった。アナウンスが、出航準備が完了したことを告げた。ラベルが立ち上がってメンバーを見回していった。

「とうとう、飛ぶこともなかったが、みんなで作りに上げた船だ。MSB—Xが教えてくれたものを忘れるな」

搭乗口から振り返って言い加えた。

「『火星市民は信念に祈る』そういう君たちの感性を信じているよ」

火星の人々が頼るのは神ではなく、自分自身の信念だろうと言うのである。ウルマノフの心にこの言葉が刻まれた。

遠ざかって行くアトランティックオーシャン号に音がない。静かに闇の中に消えただけである。この後、ドノバンやシンはラベルと会うことはなく終わる。ウォルヒはラベルと再会を果たすのに地球時間で9年という年月を要するのである。

ウルマノフは、技術開発課メンバーと距離を置いて遠ざかる貨客船を見送っていた。発着する船が宙港の大型スクリーンに拡大して映しだされていた。宇宙船が拡大された姿すら、闇に溶け込んで消えたとき、彼は大きくため息を付いた。ラベルが帰国せざるを得なかった。それは技術開発課のメンバーばかりではなく、ウルマノフにとっても大きな痛手になっていた。

(夢は、破れた)と考えていたのである。

M S B—Xの開発が不調に終わって、ラベルまで失った。多額の投資はネヤガワ工業に大きな負債としてのしかかっており、次の自社開発には見込みが立たない。現実的に見れば、国産機開発という夢は放棄しなければならないだろう。この時に、目つきの鋭い男がさり気なく一人になったウルマノフに接近した。

「ウルマノフさんですね？ 運輸部保安局のリーです。あなた方の新型船について話を伺いたい」

男は運輸部保安局の局員と名乗った。男が称した局名は略称で、厳密には火星自治州・運輸交通部・軌道空間本部・保安局という長い名称になる。その役割を現代の組織に強引に当てはめれば海上保安庁と言えるだろう。火星近傍の宇宙空間で、捜査や海難

救助に当たる。このリーという男の眼光や身のこなしは、そういう任務によるのかもしれない。ウルマノフはもちろんこの男とは初対面だが、この部局については良く知っている。ネヤガワ工業にとって有力な顧客の1つである。通常は、ネヤガワ工業の営業第一課がこの保安局の中の船体整備係という部署に接触していて、この部局からネヤガワ工業のトップのウルマノフに直接接触する例はない。ウルマノフには大きな違和感がある、しかし、このリーという男の出現は、何かの新しい展望も予感させるのである。

リーはウルマノフを彼のオフィスに案内した。リー個人の話として聞いて欲しいと切り出した。

（提示する能力を持った小型機を造ることが出来るだろうか）というのである。

リーの提示は文書化されているわけでもなく、日常会話の中のただの冗談にもとれないことはない。おそらく、彼らにとってメーカーに新型船開発を依頼したという事実は、記録には残したくないのだろう。しかし、単純な理由で、リーの提示はウルマノフにとって魅力に満ちている。MSB-Xはたとえ開発に成功したとしても、売れるかどうかの見込みが立たなかった、むしろ競合他社の船体に対して苦戦したに違いない。リー個人、、、現段階で少なくとも保安局という部局ではない、が提示する条件を満たす船体が開発できれば、導入を検討するかもしれない、つまり、売り上げが期待できるのである。そして、一旦、正式採用されれば、その後のまとまった受注にも繋がるばかりではなく、他の

顧客に対してアピールする販売実績にもなるのである。

日常会話とも取れる面会で、正式な返答をすることは出来ないし、ウルマノフはそれほどお人好しではない。

「返答には1ヶ月、時間を頂きたい」

ウルマノフは次の接触時期だけ約束した。この1月でリーの提示がネヤガワ工業で実現可能かどうかを探るのである。二人の話題は既に、ネヤガワ工業がフォボス宙港に置いている品質保証部の出先機関に移っている。

「ジーン・フランクリンさんとは再三、」

ジーン・フランクリンとは、ネヤガワ工業の品質保証部に所属する男で、このフォボス港で製造後のスピカを顧客引き渡し前の試験を担当している。彼らの仕事ぶりを誉めるリーの口振りには、眼光の鋭さを笑顔で隠して、もう先ほどの新型船の話題の片鱗も見られないのである。

ウルマノフが笑顔で握手をしてリーのオフィスを離れたとき、ウルマノフ個人がこのオフィスで、リーと接触したという事実は残っているものの、その本来の目的は、品質保証部に所属する検査官に付いて会話をしたという事実で覆い隠されていた。

アスクレウス発着場への連絡機の搭乗時間までの空き時間に、ウルマノフは副社長エバンズと技術部長ストヤンに連絡を付けた。彼がリーに約束した一ヶ月、それは相手がネヤガワ工業から興味を失う限界期間である。その期間内にネヤガワ工業として、技術的な目処をつけて、再びリーと接触しなければならないのである。あまりにも短い期間だろう、余裕は残されていないのである。

技術部長ストヤンと製造部長カルロスは、N & B社が申し入れてきた予定外の品質監査の対応に忙しく、直接に監査の対応をする設計課などは、従来の作業に加えて、突然の品質監査の準備が加わった。手の空いている人材を回してやりたいところだが、手が空いていそうな技術開発課の連中は、失敗作MSB-Xの破壊試験のためめに慌ただしい。1ヶ月に区切った時間の短さと、そんな約束をしたウルマノフに文句を言う二人の表情が目につくようだった。

一方、帰宅するウォルヒも、僅かながら新たな出会いを経験していた。声をかけてきたのは相手の方からである。

「ドノバンじゃないか？」

「ワルデン。どうしてこんな所に」

そんなやりとりで、ウォルヒは初めて出合った人物がドノバンの友人だと悟った。

「以前、説明したことがあるだろ。都市の外壁を作ってるタイプ建材ってメーカーの技術者で、ワルデンっていう不良さ」

ドノバンは不良という言葉で幼なじみの友人をウォルヒに紹介したのである。その表現に相応しく、ワルデンは初対面の人物に対する礼儀を欠いたように率直に、しかし親しげに尋ねた？

「それで、こちらの綺麗なお嬢さんは、お前の彼女？」

「ウォルヒ・パクです。彼女という関係ではありませんが」

笑顔で応じたウォルヒだが、その笑顔ではなく、「彼女」という関係を否定されたドノバンの残念そうな表情にワルデンは笑

った。彼はこの宇宙港の拡張工事に伴う立ち会いでここに居るのだと言った。地表で都市を守る建材は宇宙でも利用されているのである。仕事に戻るワルデンと、地表に戻るドノバンとウォルヒ。僅か数分の出会いだっただが、ウォルヒはラベルがちらりと言った絆という言葉思い出した。彼との出会いが、自分たちの新たな関係や展開に関わってくるのではないかと予感したのである。

遅めの夕食の後、妻のアマリアがイマムラに背を向けたまま言った。

「ねえっ『火星に初めて着陸した船の名』は？」

妻は突然に妙なことを聞く。イマムラは首を傾げて答えた。

「マリナーかな？」

「ブー。当てはまらないわよ」

「じゃあ『バイキング』だ」

「ピンポーン。正解のご褒美にお煎餅を上げましょう」

アマリアはクイズ番組で正解が出た時の効果音を口まねして返事に代えた。彼女は立ち上がって正解のご褒美の煎餅を取りに台所へ姿を消した。ここ最近、妻のアマリアはクロスワードパズルに凝っているようだ。

(妙な質問を)

妻の背に視線を転じたイマムラは、ふと、彼女を追って背中から抱きしめたいような思いに囚われた。彼は家庭内で仕事の話をする事がほとんどないのである。まして、仕事が順調とはいえない今は、意識して話を避けている。妻に余計な心配を掛けないようにとの配慮である。イマムラの一方的で押しつけがましい思いやりと言っても良い。疲れて帰宅して、妻との間に会話が少ない。妻との間に一家団欒の片鱗が維持されているのは、妻のクロスワードパズルのおかげだ。彼女はずけずけとイマムラの心に踏み込むことを避けながら夫と会話し、ここに、家庭を作り上げている。もしも、自分に何か功績があったとしたら、その半分は彼

女のものだと思った。しかし、残念なことに今の彼には功績らしきものの欠片もないのである。何故かラベルが語った彼の妻の話とダブった。もしも、この二人が出会うことがあったら、気の合ういい友人になったろうとも思うのである。ただ、イマムラは先の初対面の会話以降、アマリアとセリーヌは意気投合して、時々、夫についての不満を慰め合う関係になっていることに気づいていない。

台所から戻ってきたアマリアと視線が合って、イマムラは戸惑ったように壁のディスプレイに目を転じた。ランプが点滅している。緊急を要するニュースではないが、予め登録してあったキーワードに該当するニュースが録画されているという印だ。イマムラはスイッチを入れた。

画面に映し出された人物に『運輸交通部 技術担当官オスマイル氏』という補足のテロップが重ねられている。オスマイルにマイクを向けたレポーターが尋ねた。

「いま、火星行政府内で攻撃機に転用しうる小型機を独自で開発するという噂を聞いたのですが、」

テロ事件が続発して地球との間にきな臭い雰囲気漂っている。そういう物騒な噂もあるのだろう。

「その問題は同じ運輸交通部でも保安局の管轄でしょう。私どもとしても正確なお答えはしかねます」

オスマイルは質問をさらりとかわした。浅黒く髭が豊かな顔立ちに温厚そうな微笑を浮かべている。ただし、得てしてこの手の人物はひどく頑固だ。

「知っているけれど話せない？それともご存じ無い？」

「分かりやすい事例を上げてご説明しましょう。最近、一地方企業で新型船開発に取り組みました。運輸交通部側から見て注目していた企業です。販売シェアから言えば火星を代表する企業といえるかもしれない」

「ネヤガワ工業ですね」

レポーターはそう念を押した。オスマイルはレポーターには直接答えず言葉を続けた。

「しかし、結果は皆さんの方がよくご存じだ。冷静に見て、それが私たちの実力です」

「技術的に見て、攻撃機の自主開発の可能性はないと？」

「私たちはそう判断しています」

オスマイルは朗らかに笑った。

「いいかしら？クイズ番組でも見ましょうよ」

アマリアが夫を気遣ってさり気なくチャンネルを変えた。イマムラはため息をついた。この前は専門家の評価に叩きのめされた気分だったが、今度は行政側の人物から同じ評価を繰り返し聞いたのである。誰がどんな角度から見ても、彼らはピエロに過ぎないらしい。

「妙に、早いな」

というのがストヤン技術部長の感想だった。N & B社から品質監査の日程を繰り上げたいと打診があったのである。

宇宙船メーカーとしてのネヤガワ工業の唯一の主力製品は言うまでもなくN & B社のライセンス生産品である。その品質を確保するために、ネヤガワ工業の品質検査に関わる月々の資料はN & B社に送られてチェックを受けている。それ以外に、N & B社の品質保証部は地球時間で4年に一度の割で、ネヤガワ工業の品質監査を実施していた。その製造ラインが、N & B社の定めた条件を満たしているかどうか、作業者がN & B社が定めたマニュアルを遵守しているかなど、事細かくチェックするのである。全ての監査に一週間を割いていた。監査の期間はその製造ラインの一部は止まる。N & B社にとってもネヤガワ工業にとっても大きな手間がかかる。前回の監査が2年ばかり前になる。次回の監査は2年後のはずだ。

イマムラは品質監査と言うことは聞き知っていてもその経験がない、製造部と品質保証部が対処するはずで、技術開発課には直接には関係はないはずだ。そう思いこんでいただけではなくそれを部下に確認していた。上司のストヤン部長に確認しても、やや冷たい口調で特に君たちの手を煩わす事は無かろうという返事だった。その冷たい口調が、技術開発課解体という噂を思い起こさせる。

そのストヤン部長から突然の連絡だった。イマムラは首を傾

げた。今日までストヤンは監査にかかりっきりのはずで、イマムラは今日までストヤンの顔を見ずにすむはずだった。

「イマムラ君か？ MSB—Xの資料を揃えてこっちへ来てくれないか。そうだ。ウォルヒか誰かを連れてくると良いだろう」

彼がすることはMSB—Xの資料を必要に応じてオープンに出来るようにセキュリティーを調節した。イマムラにとって社内のどの位置でも資料を利用できるはずだ。次にウォルヒに、MSB—Xのガイド役を指示する。イマムラ自身の説明では心許ないと言うことなのだろう。3番目にすることはウォルヒと会議室に向かうことだ。イマムラの選択の余地は全くない。まだまだ、ストヤン部長の信頼は得られていないらしい。

5分後にイマムラとウォルヒは会議室で紹介を受けていた。キム設計課長の姿も見られる。

来客はN & B社の品質保証部長ムクテイとその部下合わせて3名である。くつろいだ雰囲気伝わってきた。なにやら笑顔で会話を楽しんでいる感じだ。品質監査は順調に終わったに違いない。

「イマムラ君。N & B社の方々がMSB—Xを見学したいそうだと案内してくれないか？ キム課長を補佐に付ける」

もちろん、MSB—XはN & B社のライセンス生産品ではなく、ネヤガワ工業の独自の船体である。求められたとしてもN & B社に見せる義務は全くない。むしろライバルとなるかも知れないメーカーには隠すべきだろう。それを求めに応じて見せるということは、ネヤガワ工業自身がMXB—Xが失敗作であったと認めて、以降の開発を放棄するという他にない。イマムラにとって自らの失敗を責められているような気がするのである。

その上、イマムラにとって、ストヤン部長がキム課長を見学の補佐に付けるというのは、次の開発があるにしても、キム課長にその任務を引き継がせようとしているようにもとれるのである。

MSB-Xは工場の敷地の片隅に放置されている。半ば打ち捨てられていると言ってもいい。ムクテイ部長にとっても監査の途中でシート越しにその姿を見かけているはずだ。

既にシートが外されて、MSB-Xは久しぶりにその姿を現していた。

「ほおっ」

ムクテイ部長は、感嘆ともため息とも判別できない感想をもらった。設計思想というほどの大げさなものではない。宇宙船の設計に技術者の好みといったものが反映されている。その好みは血脈の様に引き継がれて、その好みに技術的なノウハウが蓄積されメーカーの癖として、自然に表面化する。

この種の小型船の場合、その特徴が最も顕著に現れるのが船体を支えるフレームの構造である。N&B社は前方の居住モジュールと後方の核融合エンジンを一本の太いフレームで接続するという形態に特徴が見られる。構造が単純で、なおかつ、様々な配管やケーブルをこの頑丈で中空のフレームの中に収容する為に、重要なケーブルや配管を保護する意味でも信頼性がある。

対照的なのがラベルが所属したデメテル社の船体で、フレームが外部に露出しているという点では同じだが、一体化した頑丈なフレームではなく、細い鋼管を幾本も繋ぎ合わせて1つのフレームを構成している。配管やケーブルを集中させずに分散配置して

いた。

一長一短があり、どちらの構造が優れているとは言えないが、どちらの基本構造を使うにせよ、船体の強度解析にはそれぞれ異なる経験の積み重ねが必要で、今まで、N & B社の技術の影響を受けているネヤガワ工業が、単独で新たな構造の船体を設計できるはずはないのである。

そのために、ムクテイ技術部長の目から見て、自分たち以外の技術が入っている、ということが一目瞭然なのである。

「近づいて、触れてみて構わないかね」

「ええ。構いませんよ。質問は私が承りましょう」

キムがイマムラを制して言った。お前には答えられないだろうと言わんばかりである。

あくまでもネヤガワ工業として好意で見せている。ムクテイの態度に偵察するという程の不躰な様子はなく、笑顔を浮かべているのだが、目が時折、鋭く光っている。

「リチャード、シルビア、ゆっくり見学させてもらいなさい」

「へえ。ずいぶんしっかりしたものなのね」

シルビアと呼ばれた女性が愛犬の頭でも撫でるように船体を撫でた手つきは、その感触で、船体を構成する部品の表面の仕上げを確認しているのである。キムが否定するように言った。

「いえ、やはりスピカにも遠く及びませんよ」

キムにとって、スピカという船体が物事の良否を判定する材料になっている。ムクテイ部長がMSB—Xの全体像をみて感想をもらした。

「フレームがスピカと違って、随分特徴的ですな」

さり気なく、何処から得た技術なのか探りを入れているのである。

「ええっ。その通りですね。ご存じの通り、細い鋼管でトラス構造に組んだフレームは構造が複雑で、製造に手間がかかります。私たち設計課で開発を担当していればスピカの構造を引き継いだものにしたでしょう」

キムが主張したかった点である。

「でも、この構造は軽量化に向いているんだよね」

リチャードと呼ばれた男は実にうらやましそうに言った。どのメーカーのどの技術者も同じなのだ。強度と軽量化の狭間で頭を悩ませる。彼らは構造が単純化できるというメリットから、筒状のフレームを用いてモジュールを搭載しているのだが、その単純な構造の恩恵に与りながらも、この違った構造が新鮮でうらやましく感じることもあるのだろう。

トラス構造。橋梁や大型クレーンのアームなどを思い出せばよい。構造材の組み合わせが三角形になっている。その三角形が幾つも組合わさって荷重を支える構造の形式である。MSB-Xの場合、船首のコックピットモジュールから船尾のエンジンモジュールまで5本の鋼管が伸びている。その鋼管を、短い構造材が縦や斜めに走って繋ぎ合わせているのである。

「私たち設計課で作っていれば、、、」

キムがその構造について自分の考えを披露した。キムが言うのは、柔軟に大きさの異なる三角形を組み合わせた構造で軽量化するというのである。リチャードが笑って反論した。

「そんなことをしたら、さっきあなたが非難したように、複雑で製造の手間がかかる物になるよ」

リチャードはキムにも分かるように説明を補足した。

「この船体のいい点はね、バランスが取れてるんだ。軽量化と同時に構造を単純化する工夫が随所に見られる」

「シルビア。あれを見てごらん」

ムクテイはシルビアと呼んだ部下にフレームを2カ所、指さして見せた。

「なるほど、構造材は同じ形だけれど、接合するモジュールに合わせて素材を変えてあるのね」

二人の会話にリチャードが参加した。

「あっちはチタン合金だろう。推進剤タンクのあたりはアルミ合金を使ってるんだ」

「接合の仕方も面白いわね」

「エンジンマウントの緩衝構造を見てごらん、エンジンの振動を分散させて逃がしてるんだ」

(技術屋の会話だ)

少し引きながらイマムラは思った。内容がよく分からない。しかし、リチャードの指摘の通りである。イマムラから見れば同じ形で同じ銀色の構造材である。彼らは、色調か表面の光沢か何か分からないが、構造をその素材まで正確に判別しているのである。生真面目なイマムラは彼らの対応に備えて、船体の全長や総重量やエンジンの出力などについて記憶していた。彼らはそんな物には興味はないらしい。ただ、船体の素材や構造材の隙間の間隔や表面の光沢などを、距離を置いたり、近づいたりしながら、絵

画でも見るように鑑賞するのである。

彼らの会話はよく分からないが、はっきりしているのは、奇妙な物を面白がるということだ。彼らの対応は、キムが言ったようにキムに任せるのが良さそうだった。イマムラはキムを振り返ったが、この同僚も一歩、間をおいていた。技術的な用語が分からないと言うより、価値観が違うのだろう。

MSB-Xという稚拙な絵画は、N&B社の人々を堪能させたらしい。ムクテイは満足気に言った。

「イマムラさん。私が地球時間で25年前に船の設計に携わり始めた頃は、船の性能というのは、この程度の性能だった。私達にとっても、こういう船が原点なんだ」

イマムラ達を自分と同列に並べて励ましてくれているのだろう。イマムラを励ますムクテイ部長の手が優しく暖かい。しかし、一方でその言葉がイマムラにショックを与えたのは、彼ら在必死に作り上げたものが、25年分の性能の格差があるというのである。もちろん、ラベルの指導が古くさいというわけではない。彼らが入手できる素材が25年分古いというのである。

品質監査の予定を2年間縮めた。N&B社ではその2年間で、ネヤガワ工業との関係が切れると見ていた。スピカという旧式機のメンテナンスは利益にならない、彼らに与え続けても良い作業だが、新型船アンドロメダのライセンス生産権が得られなかったことに不満を抱いて、N&B社の影響下から離脱しようとするかもしれない。そうなっても、旧式機のメンテナンスを、余った製

造ラインでこなせばいいからN & B社にとってネヤガワ工業の動向は影響がない。

ただ、最近、ネヤガワ工業が独自で小型機開発を試みているらしい。その状況を確認しておく必要がある。今回の品質監査を理由にした実質的な目的だった。

「彼らなら、やるかもしれないね」

帰社する車内でムクテイが部下のリチャードとシルビアに言った。

「エンジンモジュール周りの補強材は後から追加した物だわ。船体の形状から考えれば、もともと、彼らはタイド社のフェニルIIを搭載するつもりだったんじゃないくて？」

「もしも、初期に予定していたエンジンを搭載していたら、、」

「俺たちにとっては幸運だったね」

「運不運で片づけるんじゃない。これから私たちは彼らよりも努力するんだ」

(うちの若手にも良い刺激になった)とムクテイは考えた。

続けて、脅威と言うほどではないが、敬意が入り交じった漠然としていて複雑な感覚を抱いた。ネヤガワ工業が自分たちの影響下にある内は怖くはない。しかし、彼らは何とかその中から羽ばたき、飛び立とうともがいているのである。

しかし、設計課のキム課長の話によればあの船体も、9日後には破壊試験に供されるはずだ。宇宙を航行するどころか、MSB-Xという略称のまま、正式名称も与えられずにスクラップになるのである。

ネヤガワ工業の技術開発課のメンバーは、その試験の準備に追

われていた。

数日前から、ひっそりしていたMSB-Xの周りが再び活気づいている。見た目には奇妙な化粧が施されている。新しいエンジンが外されて古びて錆の浮いたエンジンに換装され、塗装が施されたのだが、ガルグレイ一色で塗装されているだけで、スピカのように細かなマーキングもなくのっぺりした外観だ。ただその表面の要所に直径一センチばかりの赤いマークがついており、前後左右、10センチ間隔に線が引かれている。これから受ける衝撃試験で各種モジュールの変形の度合いを確認するための基準になる線と点である。外されたエンジンは既に他社に転売の手続きがされている。

外観ばかりではない。内部の通信機器、探査機器、他に流用できる機器は全て剥ぎ取られて、今は使い物にならない中古品、或いは鉄や鉛のバラストに置き換えられているのである。破壊するための船体に、新品のモジュールや部品をつけておく余裕はないのである。

ウォルヒたち技術開発課のメンバーにとって、文字通り心血を注いだ船体に、破壊検査の準備が進められているのである。真っ白な死に装束ではなくて、死刑囚が粗末な囚人服を着ているよう、とウィリアムスは思った。

「でも、惨めで、悔しいよね」

彼女の言葉に、アサハリが黙って手を止めたのは、ウィリアムスに同意するものがあるのだろう。

イマムラは試験の立ち会いをドノバンとウォルヒに命じていた。二人にはローウェル大学での性能試験の実績がある、という名目である。自ら望んでいくのは嫌だろう。事実、ウィリアムスやシンなどは性能試験の時には、自分も行かせろと要求したのだが、今回は黙ってイマムラの指示を受け入れた。ウォルヒとドノバンは先にシルチス大学に飛んだ。試験の打ち合わせである。破壊試験のために小型機を大学側に無償で提供する。その代償に大学は分析データをネヤガワ工業に提供する。ドノバンがそういう交渉をした。ここでも、余分な資金を使う余裕がない。

試験当日、世の中の騒がしい政治情勢から切り離されるように、MSB—Xの周りは人は気配さえ絶つほどの沈黙で静まりかえっていた。船体は前日から試験台に固定され、幾つものケーブルや配管で外部と繋がっていた。2時間ばかり前からその配管の1つが霜に覆われて白い。推進剤タンクに液体窒素の注入が始まっているのだった。これから、この船体に様々な角度からレーンガンで加速した数グラムの小さな弾丸を撃ち込む。その時の衝撃の伝わり具合や各モジュールの破壊状況を確認するのである。もちろん最終的に船体は完全に破壊される。

推進剤タンクに注入しているのは、本来の推進剤のヘリウムではなく、ヘリウム代わる液体窒素である。化学的に安定な液体を充填して試験を行う。もはや、この船体は推進剤タンクに推進剤が注入され、宇宙を航行することは無いのである。

ウォルヒはそんなMSB—Xを、試験棟の窓の外から黙ってじっと眺めていた。準備は終了に近づいて居るらしい。ウォルヒは時間をイメージした。時計が彼女の頭に情報を伝えた。午前11時すぎである。昼食時間を挟んで午後1時から試験が始まる予定だった。ブザーが響いて、試験棟の中に残っていた研究員が、最後のチェックを終えて分厚いドアを出てきた。巨大な真空ポンプの音が響きだした。試験が始まるまでに、室内は宇宙空間を再現して、ほぼ真空になる。MSB—Xを見ながら、ウォルヒは耐圧性の窓に手を触れていたのだが、その二重の窓が冷たくなって行く。ウォルヒはその冷たさの中に幼い弟の死の記憶を思い起こ

して眉をひそめた。ドノバンがウォルヒの肩に手を添えた。

「食事をしておこう。先に課長に連絡を取っておく」

試験は休日を挟んで12日間に渡って続く予定である。試験に立ち会うために、食事をきちんと取って体調を維持するという冷酷さが必要になる。

秒読みの完了と共に、レールガンの銃口から溶融した金属が高温のガスになって吹き出すのが見えた。1gのペレットを秒速35Kmという高速に加速してMSB-Xに打ち込んだのである。ウォルヒたちが控えている試験指令室、やや斜め後ろの角度からでは、MSB-Xに外観上の変化は見られない。失敗してくれと言う思いが心のどこかにある。しかし、発射が成功したというのはモニターをのぞき込んでいる研究員たちの会話から分かる。

ペレットを打ち込む角度を変えながら、この日は、5回の射出で終了した。この日のデータをもとにして、試験は明日から本格化する。試験棟に空気が送り込まれる。ウォルヒたちが作業に入る番だ。衝撃の伝わり方や振動の数値上のデータは回線を通じてネヤガワ工業に送られている。ウォルヒたちの作業は自分たちの目でMSB-Xの傷跡を確認することだ。ウォルヒとドノバンはゴーグルをかけた。彼らが見たものが映像として記録される。ドノバンは2mばかりのラッタルを駆け上がり、コックピットモジュール前方の状況を確認した。最初にペレットが打ち込まれた箇所である。ドノバンの人差し指をあてた。

「表面装甲には俺の人差し指の第一関節まで入るほどの凹みが生じているが内部まで貫通している様子はない」

「ペレット衝突による発生した熱のために、塗料は剥がれ、金属層の表面は熱で変色している。まだ、熱い」

ドノバンはウォルヒに目もくれず、コックピットモジュールの中に入った。ドノバンの気持ちがよく分かる。彼が設計したモジュールである。目の前で破壊されたのだ。落ち着かないのも無理はないのである。平静さを欠いた声だけが伝わってくる。

「現在のところ、外部のモジュールとの接続状況に異常は見られない」

「推進剤タンクを接合するボルトに緩みが見られる。今後一考を要する」

「しかし、居住モジュールは未だ生きている」

映像を記録しながら10分ばかりドノバンはコックピットにいた。その間、ウォルヒはドノバンをそっと一人にしておいた。

ウォルヒはMSB-Xの側面に回った。推進剤のタンクには、タンク自体に傷を付けないよう試験用の装甲が追加され、受けた衝撃のみ船体に伝えるようになっていた。MSB-Xを気遣ってと言うわけではない。今回の試験は側面からタンクに受けた衝撃が、船体全体に及ぼす影響を調査する予備的な試験で、衝突したペレットは、この新たに追加した装甲を大きく凹ませていた。推進剤タンクの強度が破壊試験の項目に含まれている。その試験の日まで、タンク自体は無事に温存しておくのである。MSB-Xを保護するのではなく、手順を踏んで効果的な破壊するためのものだった。

耳に響く音が響き始めた。研究員が音波測定器で船体の状況を

調査し始めたのである。測定器が船体に伝える振動をコンピューターで解析して、微細なひび割れや接続の緩みなどの目に見えない破壊状況を調査するのである。

(あの音は、、、)

ウォルヒは澄んだ音に聞き耳を立てた。ウォルヒたちは既に音で異常を判別する耳を持っていた。ラベルが彼女たちに残した能力の1つである。フレームに歪みはなくモジュール間の連結状態にも問題はないと思った。

研究員たちの調査は念入りに続いている。研究員たちにとっても滅多に得ることのない貴重なサンプルなのである。ひび割れや接合部の緩みなどを調べ、次の試験の前に、試験に問題が無い程度に補修しておくのである。

擬人化する、というのは冷静さを欠いて好ましくないかもしれないが、この人々は、MSB-Xを蘇生させながら繰り返し拷問を加え続けるのである。そう考えると、ウォルヒもやりきれない気分だった。

破壊試験はスケジュールに従って順調に進んだ。その推進剤タンクは既に穴だらけになってしまっていて、既に本来の用はなさない。他のモジュールも同じだった。よく見ればMSB-Xは穴だらけだが、試験の都度補修されて、その外観は保っていた。しかし、宇宙塵の衝突を想定した微小なペレットを撃ち込む試験が、次の衝突試験に移るとMSB-Xの外見にも影響が現れ始めた。宇宙塵より低速だが大型の物体との衝突を想定して、その船体に機械的に大型のハンマーを叩きつけるのである。船体の外観が目

見えて変化する。変形し、時には小型の探査モジュールなど、船体から剥ぎ取られる。レールガンのペレットの発射音にかわって、MSB—Xの船体自体が軋み、悲鳴を上げるのである。

試験が続く中で、重苦しい雰囲気も研究員たちにも伝染していた。ネヤガワ工業の技術者たちは、平静さを装う努力はしているが、失望感や悲壮感が滲み出している。そんな彼らを前に、研究員たちは、貴重なデータがとれる反面、火星市民の手で作り上げたものを破壊する罪悪感にも苛まれるようだ。

試験棟に意外な人物が姿を表した。タルシスTVのウォーデンである。MSB—Xという船の結末には、もはや報道価値はない。しかし、一人の火星市民として、報道の結末を見ておきたいと思ったのである。

ウォーデンはドノバンとウォルヒを見つけて会釈で挨拶をしたが無視された。彼らがまだウォーデンに怒りを解いていないか、この試験に集中しているかどうかだが、ウォーデンにとっても関係がない。彼らはウォーデンにとって、もはや一片の利用価値はないからである。

ウォーデンの位置から、1Fのフロアーに固定されたMSB—Xが地震にあったように、ガタガタ揺れているのが見える。おそらく、研究員達は、その耐久性を凶っているのだろうと、彼は見当をつけた。

(馬鹿馬鹿しい)

吐き捨てたいほどの思いで、ウォーデンはその光景の愚かさを呪った。研究員の幾人かが何かをぶつぶつ呟いている。何を呟

いているのかと考えて耳を澄ませば、

「頑張れ」

「頑張れ」

「負けるな」

MSB—Xに対して声援を送っているのである。おそらく、本人たちも気付いていないに違いない。ウォーデンは彼らが自ら拷問を加えながら、その拷問の被害者に声援を送るという愚かさについて、心密かに罵ったのである。

この頑強な船は、その致命的な振動にもよく耐えて、まだ外形を保っており、機能も失っていない。しかし、試験は順調に推移しているようだ。それだけ確認して、ウォーデンは施設を後にした。最後まで見る必要はない、この船は予定通り破壊されるだろう。ただ、あの研究員たちの喧嘩は、ウォーデンの耳に残って離れない。

「くそっ」

ウォーデンはうつむき加減に舌打ちをした。それを本人も気付いていない。ふと、ドノバンやウォルヒに別れの挨拶をせずに帰ってきたことに気付いたが、それを後悔する気にはなれなかった。

そんな馬鹿げた日常も、スケジュールが順調に推移して12日目の最終日を迎えた。驚くべき事に、MSB—Xは未だ生きていた。コックピットモジュールも推進剤タンクも原型を保っていない。しかし、メインスイッチを入れれば、コックピットのコンソールパネルには幾つかの灯がともり、動きはぎごちなくなっ

たが、姿勢制御ノズルが操縦桿に呼応して弱々しく動く。連日の破壊によく耐えて、MSB—Xはその存在を誇示しているのである。

（まるで、自分の運命に抗うよう）と、ウォルヒは思った。

この船体は、必ずしも全ての人に望まれて生まれて来たわけではないが、本来、破壊するために生まれて来たわけでもないだろう。

最終日の試験は、MSB—X本体を加速して、前方の金属壁に、船体のフレームが変形するほどの強さで衝突させるものだった。この日、試験指令室にドノバンの姿がない。結果は分かっているのである。壁面との衝突によって、MSB—Xの船首は潰され、船尾のエンジンモジュールから受ける全荷重がフレームをも前方に押し潰す、その強さはフレームを構成する構造材の幾つかを拭き飛ばすだろう。そういうイメージが、正確にドノバンの頭に浮かぶのである。

（試験が終了した）

と言うことを、ウォルヒが彼に伝えに来た。

実験棟の中で、ウォルヒは足下に転がっていた装甲の破片を見て言った。

「これは居住モジュールの装甲ね」

その形状や色調や材質からそれ分かるのである。軌道上で小型機の船体を凹ませたものを調査すると、他の船体から剥がれ落ちて漂っていた大きさ数ミリの塗料片だったということも珍しく

ない。デブリは彼らのイメージを越えた高速で飛翔して、船体に損傷を与えるのである。

「ねえっ。船体が破壊されているって事は、重要部の装甲をもっと頑丈にしなければならないって事？」

ドノバンはウォルヒの冷静さにやや腹が立った。

「その解決策がラベルさんが言ったフェイルセーフってことさ」

ドノバンの言葉が不機嫌に短く、ウォルヒは重ねて聞いた。

「装甲だけに頼れないのね」

「例えば、推進剤タンクはその内部が3つに区切られている。デブリに何処かぶち抜かれても、残った部分は大丈夫ってことさ。操縦系統は4系統が独立していて、今朝方まで姿勢制御ノズルが動いたって事は一系統が生き残ってたんだ」

「それを動かすエネルギーは？」

「各モジュール毎にエネルギーコンデンサーがつけられているだろう？ 一見、無駄なようだが、仮にコックピットモジュールのコンデンサーが破壊されても残りのコンデンサーからエネルギーを回せるんだ。今朝方まで、居住モジュールにランプが点灯していたが、エンジンのコンデンサーから電力を回していたようだ」

「エンジンには予備はないわよ？」

「エンジンモジュールは1つしかないが、船体の中で最も大きな強度を持っている。万が一破壊されることがあるとすれば、エンジンが破壊される以前に船体は全壊してしまっている」

MSB-Xの中にはまだラベルから習い足りなかったものが詰まっていたようだった。

船首の居住モジュールは変形して入り口のハッチが吹き飛んで

穴が空いていた。その穴から中に侵入するとコンソールパネルの灯は全て消えて静まり返っていた。どのスイッチに触れても、MSB-Xはもう応答する気配はない。ついに、この船体は宇宙を飛ぶことなく終わったのである。

会社に残されていたメンバーは、連日、シルチス大学から送られてきていたデータをまとめるために忙しく費やした。マイペース派のウィリアムスや、おしゃべりなバレでさえ黙って、データの取りまとめをしている。余計なことを考えることが不安だったのかもしれない。シルチス大学からドノバンとウォルヒが帰社し、彼らの報告をもってデータの取りまとめは終わった。たった、1枚のデータディスクである。彼らのこの数年の苦労がこの1枚に集約されてしまった。破壊されたMSB-Xは既に完全に解体され、スクラップになって、この世に存在しない。

一人になると言うことが、不安であったのかもしれない。技術開発課の部屋には誰も残らなかった。気分が晴れない。MSB-Xが破壊され、試験データの整理も全て終わって、データの保管は関係部署に引き継いだ。火星時間で2年半に渡る努力が、今の彼らの手には何も残っていなかった。ラベルという支柱も失って、今後の見込みも立たない。

メンバーは黙って、ただ並んで歩いていた。気を晴らすためだけに歩いた。突然に、彼らは眉をひそめた。

(耳障りな) と不快に思ったのである。

選挙が近い。街頭宣伝車が耳障りな声を張り上げてパレードの

最中らしい。市民救国戦線という文字が読みとれる。そう言えば、と彼ら達にも記憶がある。シンカンサイ市でアクセ代表がの演説会をするというポスターが数週間前から盛んに街頭で見受けられるのである。街頭宣伝車にその救国市民戦線のアクセ代表が乗っているに違いなかった。

アサハリが宣伝車に手を振った。アーシャが目をむいて、アサハリの手をつかんで怒りを込めて引き下ろした。何をするのかというのである。アクセ代表と言えばタカ派の先鋒として名高い。愛国心を煽って支持者を増やしている。しかし、一面、その愛国者が鼻をつくのである。個人的な顕示欲を満たすために、火星市民の愛国心を利用されるのは嫌だった。元はと言えば、地球との関係を悪化させ、彼らが使う予定のエンジンが輸入できなかった、その責任もこの男にあるようにも思えたのである。アサハリはその宣伝車に向かって、にこやかに手を振ったのだった。そのアサハリの行為に反感を抱いたのはアーシャばかりではない。

「まあ、まあ」

アサハリは仲間を制した。最後まで自分の行動をよく見ておけというのである。アサハリは再び宣伝車に笑顔に向けて大きく手を振った。宣伝車に乗る人々もアサハリに気付いたらしく、笑顔を彼に返した。

「市民を喰いモンにする売国奴め。おまえ達にくれてやる議席なんかあるもんか」

アサハリが叫んだ言葉がにこやかな笑顔と矛盾してすさまじい。

「分かったか？ お前らなんか、全員そろって落選だあ」

しかし、そのアサハリの言葉は彼らがスピーカーでがなり立てる美辞麗句とアサハリの笑顔に隠れて彼らに届かない。アサハリの継いだ言葉には、宣伝車のスピーカーで嬉しそうな言葉が返ってきた。

「暖かいご声援、有り難うございます」

候補者の意図は別にして、アサハリの言葉と宣伝車の返事は奇妙な会話が成立している。メンバーはアサハリの意図を察した。彼らは飛び跳ねるように全身をふって、笑顔を宣伝車に向けた。そうすれば、熱狂的な支援者に見えるだろう。

「馬鹿野郎。その曲がった根性を叩き直してから来い」

「ご期待に添えるようがんばります」

「がんばって落選するのよ」

「私たちは皆様の期待を実現するために存在しているのです」

「あんたたちなんか、この宇宙から消滅しちゃえばいいのよ」

「皆様の希望は必ず実現させるとお約束します」

彼らのその一言一句に、宣伝車は深い同意をし、固く約束をし、礼を叫んだ。イマムラたちは街角に宣伝車が過ぎ去るまで、その遊びを続けた。メンバーは腹を抱えて笑った。笑いつつ、彼らの目に涙が浮かんでいる。最初はその遊びが楽しくおかしかった、次にこの2年半の労苦が涙と共に流れ出して止まらなかった。

この2年半を無駄に過ごしたのかという思い。敬愛する恩師との別れの悲しみ、これからどうなるのかという不安が溢れ出てくるのである。

イマムラも目頭を押さえて部下に見られないように涙を拭いた。心の底に僅かかも知れなかったが、食いしばった歯の奥に（潰されてたまるか）という思いが残っていた。しかし、具体的に何をすればいいのか見当もつかないのである。

ストヤンは入社後、一杯目のコーヒーも飲み終わらない内に設計課課長のキムの訪問を受けた。

「おはようございます。いま、お時間をいただいてよろしいですか？」

キムは自分の話を聞けと要求している。断ろうにも、すでに机の前から追い払わなくてはならないほど部屋に入り込んでいる。自信家のこの男らしい。

「朝っぱらから何かトラブルかね」

ストヤンの言葉には、幾分、皮肉がこもっている。

「ご提案があって来ました」

「いい話ならありがたいが、」

「新型船開発について、話は聞いておられますか？」

「MSB—Xの件だろう？ 昨日、破壊試験の最終報告は受け取っている」

「いえ、MSC—Xの件です」

落ち着いて考えれば推測できたのかもしれないが、この時、ストヤンには新しいコードネームが、ただ耳慣れない響きをもっていて、先のMSB—Xと区別が付かない。ようやくストヤンは怪訝な表情を浮かべた。今一度、新型船開発に取り組むとすれば、その船体のコードネームはMSC—Xと称されるはずだ。

「設計課として、次の新型船開発の仕事を請け負いたいと思います」

ストヤンは、内々、ウルマノフから打診を受けている。打診と

言うより、軽い相談という方が適切かもしれない。技術部として、今後、MSB—Xを上回る性能の船体を開発することが出来るだろうか？と言うのである。彼は返事は保留している。N&B社の品質監査に追われて十分な検討が出来なかった上に、保安局が具体的な要求性能を提示してきたのは昨日のことだ。その話を何処かで聞きつけてきたのだろう。この男の有能さと強引さは、この場に彼らの試作機の原案をデーターにして持参している点だろう。

「このデーターの通りです。MSB—Xを上回る船体を開発する自信があります。私たちにやらせてもらえませんか？」

「まだ、やると決まった話じゃない。関係部署との調整も必要だ」

「製造部のカルロス部長とはすでに話は付けました。営業部を始め、そのほかの部署には副社長から話を付けていただく手はずです。許可を頂ければすぐにプロジェクトの編成に取りかかりたいのですが」

（エバンズ副社長が裏にいるのか？）

ストヤンはキムの自信の裏付けを推測した。エバンズの直属の部下だった時期があり、彼の人柄については良く知っている。この会社創業当初からの生え抜きで技術者上がりだった。悪人ではないが、技術的な素養より政治的な駆け引きを好む癖があり、今は経営陣に身を置いている。この社の中で副社長派という人脈を形成しているのである。もともと技術者上がりだけに技術部員に顔が利く。ただし、ストヤンという男が極めて中立性を保ちたがる癖があるために、彼を経由すると影響力が失われてしまうので

ある。そこで、エバンズはキムをはじめとして技術部内に橋頭堡を築いて影響力を拡大しているわけだ。キムは自信に満ちた表情でストヤンの返事を待っていた。あとは、あんたの決断だけだというのだろう。

「キム君。私は君が子供の頃からこの仕事に携わっている。私も肩書きだけじゃない、この仕事については君よりも詳しいつもりだ。決断は私がする。もう下がっていい」

キムが食い下がった。

「会社の組織から言っても、本来、私たちの仕事だし、私たちがこなす方が効率がいい」

キムの言うとおりでだろう。会社の組織という点から見れば、技術部設計課がその任を背負うのが自然だし、日常の仕事と絡めて考えても効率がよい。

「キム君。私の記憶通りなら、新型船開発を設計課から切り離して、独立した部署に任せるとするのは君の発案だったはずだ」

ストヤンには様々な人々の意見を受け入れて熟成させ、自分の判断を生み出して行くという思考癖がある。技術開発課という会社組織から見れば中途半端な部署の設立を命じたのは彼だが、その発案者はキムだった。キムやエバンズの意図は分かる。成果の上がらない仕事から距離を置くのが賢いやり方だ。ただ、MSB-Xの結果を見れば、素人にこの程度のことが出るのなら、自分達ならもう少しましな物が作れるはずだと考えている。

「俺がこの部署のボスだ。最後の決断は俺自身がする」

ストヤンはキムに出口を指さした。キムの背を見送りつつ、そ

のまま設計課には戻るまいと思った。エバンズと次の行動を相談するはずだ。反感ではないが、純粹に技術的な判断に政治色を持ち込まれるのは避けたいと思ったのである。

(政治的なもめ事は俺の判断の後でやってもらいたい。)

キムが部屋を出ていくのとすれ違いにウルマノフが入ってきた。前もって連絡がない。気の向くままの行動である。

(いつもながら)とストヤンは思った。

突然に現れるよりも、社長室に呼び出される方が気分が楽なのである。

「新型船の受注の話は？」

ストヤンはウルマノフが席に座ろうともしないために、やむを得ず席を立て、視線をキムが出ていったばかりのドアに向けて答えた。

「つい先ほど、設計課のキムからも聞きましたが」

部内の混乱を防ぐために、N & B社の品質監査が終了するまで、部下には何も伝えていない。にも関わらず、キムが試作機のデータを持ってきたと言うことは、副社長を通じた独自の情報ルートを持っているらしい。優秀な男には違いないのだが、先走る傾向があり、やや不愉快な感じも拭えないのである。

「次の新型船開発を自分に指揮させろというのかね」

「そういったところですよ」

キムは設計課で作成したという独自の案をデータディスクにして持参しており、皮肉にも技術開発課から回ってきたMSB-Xの破壊試験データと並んでいた。

「あの男ならそう言うだろう」

「それで、具体的な話にまで進んでいるのですか？」

「昨日、提示された要求性能を満たせるかどうかの問題だ」

それだけ言ったウルマノフは黙りこくった。確かに気楽に決断を下せる問題ではないだろう。MSB—Xで既に多額の回収不可能な損害を出している。次に失敗すれば間違いなく潰れると思った。いや、潰れる以前にエバンズが自分にとって替わるだろう、エバンズやキムは既存の技術力を過信しているらしいが、顧客の要求に取り残された技術力など価値がない。彼の後に残されているのは企業の緩慢だが確実な死である。今は僅かな可能性に賭ける方が良く思うのである。

「要求性能を満たせば、新型船を導入するという話は本当なのですね」

ストヤンは再び聞いた。ウルマノフはストヤンにアドバイスを求めて彼に対する返事に代えた。

「君の率直な意見を聞きたい。次の船体は設計課に任せるべきだろうか？」

今一度、新たな船の開発に挑む、という点でウルマノフの決意は固まっている。しかし、ウルマノフは迷っている。MSB—Xの開発にあたり、各部署から人員を引き抜いて、技術開発課を編成した。しかし、従来の船体に扱い慣れている設計課に任せるかとも思うのである。

その点、ストヤンも同じである。3日前、MSB—Xの遺産と言っても良い、破壊試験のデータが技術開発課から回ってきて机の上にあった。莫大な投資をして残ったモノはこのデータ

だけなのである。気が重くまだその中身を見る気がしない、イマムラが持参したディスクがそのままの位置に残っている。ストヤンは返事に窮するように黙りこくった。ストヤンはドアに新たな人影を見つけて思った。

（今日はいやに来客の多い日だ）

製造部長のカルロスである。カルロスはウルマノフの姿を見てやや驚いたようだが、それでも二人を関係づけて尋ねた。

「新型船の内示の話？」

ストヤンは椅子の背もたれに頭を打ち付けて、やや非難じみた視線をウルマノフに向けた。新型船の話は極秘事項になるはずだ。いったい、この会社のセキュリティはどうなっているのかと問うている。そして椅子を手で示してカルロスに座れと指示した。ストヤンの1年後輩に当たる。ニシダ社長の時代から20年以上もお互いを知り尽くした仲である。

「技術部から、余計なものが回ってきて、生産部が混乱する」

不満をぶちまけるカルロスの手に、ストヤンの机にあるものと同じデーターディスクがある。ストヤンはこのMSB—Xの破壊試験のデーターの事かと思った。

「高いカネを払ったデーターだ。製造部でも少しくらい有効に使え」

「なんだ、折角持ってきてやったのに。要らないなら棄てるぞ」

カルロスは手にしたデーターディスクをダスターシュートに投げ込んだ。もとのデーターは技術部のサーバーに残っているので問題はないが、多額の投資をしたデーターをこんな風に廃棄されたら、目の前の社長もいい気分では無かろう。

「うちの課長連中から、今朝方、試作機の試験データについて相談を受けた」

「製造部の課長連中から？」

ストヤンはため息をついた。キムという男が製造部長カルロスの頭越しに、自分たちの試作機のデータを製造部の課長連中に渡して支持を求めたのかと思ったのである。いかにもありそうなことだし、自分の知らない内にそんな相談をされたら、カルロスが腹を立てるのも無理はない。

「キムの話では、新型船の件についてはお前と相談済みだということだったぞ」

「キムの話？ 今朝方、俺の所に来たから、もっと現実的な話を持ってこいと伝えておいたんだ。連中にそんな能力があるもんか。奴が持参したデータを持ってきてやったんだが、いま、お前も要らないって言ったろ」

カルロスが顎をしゃくってダスターシュートを示した。カルロスが廃棄したのはキムのデータらしい。

「話をややこしくするな。もっと前向きな話をしよう」

「おいっ。話が噛み合って無いぞ」

技術開発課が作成したMSB—Xの破壊試験のレポートは極秘にするほどの価値も認められず、ストヤンやカルロスを通じて製造課長や技術部課長にも閲覧可能なのである。カルロスが言う部下の相談事というのは、MSB—Xの破壊試験のレポートのことらしい。

「えらく頑丈な船体だ。これだけの破壊試験をうけて最後まで生

きてやがる」

「ラベルさんがいたデメテル社の設計思想が反映されているんだろう。生存性が何より大事なんだ。地球市民の命は火星市民の命より高価だからな」

別にN & B社のスピカが搭乗員の生命を軽んじているわけではない。ただ、船体を設計するときの重量配分を比較すると、地球や月に販売拠点を置くデメテル社の船体は搭乗員の生命維持にかかわる項目に、その多くの重量を割いているのである。それをストヤンは自虐的に（火星市民の命より高価だ）と称したのである。

「それで、うちの課長連中が言うんだが、もしも、この船体をスピカ並みの船体強度に抑えていたら？」

カルロス是指摘を続けた。

「エンジンマウント部分の緩衝器だが、今はこんな物を使わなくても、新しい素材があるんだ」

技術の進歩が早くラベルさえ考えなかった、軽量で、求める用途に適した新素材がある。と言うのである。製造部の担当者のように、日頃、船体に接している人々から見た時に、このMSB—Xという船体や、その設計に携わった連中にも、まだまだ新たな可能性を秘めているというのだった。カルロスは言う。

「親父の言ったことを覚えているか？」

彼らが「親父」という言葉を使う場合は先代のニシダを指した。

「宇宙船っていうのは、頭ん中で造るモンやない。油まみれの腕を使って、こん中で作るモンや」

カルロスは胸を叩いた。懐かしいニシダの真似をしているら

しい。

(まったく、古い技術者って言うのは、)

ウルマノフはそう思った。中小企業の技術屋の悪い癖から抜け出せない。精神論や根性で経営が成り立つと考えているらしい。

「製造部としては、技術開発課の連中を支持したい。これは製造課長の総意だと考えてもらって良い。俺達はあの連中とやりたい」

ラテン系の血筋がそうさせるのかもしれないが、カルロスは自分の言葉にわくわくと興奮しているのである。ストヤンはここでラテン音楽でもかけてやれば、彼が踊りだすだろうと思った。

「なんか、こう、久しぶりに胸の中に熱いもんがこみ上がってこないか」

ウルマノフは二人の会話を聞いていたが、会話の内容に満足したらしい。

「決まったのかね？」

ウルマノフの問いにストヤンが答えた。

「ええ。もう一度、彼らにやらせましょう」

「では、製造部と技術部は、可能性があると判断するんだな？」

そんな問いに、二人の部長は頷いて、最後の返答を促すようにウルマノフの顔を眺めた。ウルマノフはため息と共に、決断の言葉を吐き出した。

「ラベルさんによれば、火星市民というのは神ではなく自らの信念に祈るそうだ。火星市民を信じ、自主快活に祈るか」

(早い方が良い) とストヤンは思った。

時間を置けば、開発反対論者の様々な妨害も入るだろう。

「技術開発課につないでくれ」

ストヤンはイマムラを呼び出した。

「良かった。責任はお前が取ればいい」

カルロスにはストヤンから見れば無責任なほど大きく笑った。この判断によって、ストヤンは大きく責任を負った。ずっしり彼の背にのし掛かっている。

(ああ、親父の時代は良かった)

ストヤンはそう思った。ニシダの元で余計な事は何も考えずにモノ造りに専念できたあの時代が懐かしいと思うのである。

ウルマノフはその表情を見ながらストヤンの胸の内を読みとって、そして、思った。

(お前達のその古き良き時代に、この俺は毎日資金繰りに駆け回っていたことを知っているか?)

イマムラが部長室に姿を見せたが、入り口で立ち止まってしまった。MSB-Xに関するファイルを持っているところを見れば、3日前、部長に回したデータの説明を求められているのだと考えていたらしい。それにしても、室内の雰囲気は明るい。その雰囲気の明るさに面食らっているのである。

「これは俺が預かっておいてやる。あとは二人の話を聞け」

カルロスには現場上がりの太い腕でイマムラからファイルを取り上げて部屋の中に押し込んで立ち去った。

「さあ。忙しくなるぞ」

(部下がどういう反応を示すだろう)

イマムラは彼らの反応に不安を抱いている。MSB—Xでの挫折のあと、新たな仕事に拒否反応を示すのではないかと訝ったのである。

MSC—Xの開発という新たな任務が、技術開発課に回ってきた。イマムラの口からそれを聞いたメンバーは一様に笑顔を浮かべたのだが、ほっとため息をつきながらだったり、指先でペンを弄びながらだったり、ウォルヒなど僅かに口元を歪めただけで、微笑んだことがようやく分かる程度だった。しかし、どの視線にも落ち着きがあり、その視線はイマムラを通してMSC—Xを捕らえて放さないのである。以前の彼らなら、はしゃぎ回って現実と空想が入り交じった気楽な議論をしていたに違いないだろう。知らず知らずの内に随分たくましく成長しているのである。

「世話になったラベルさんの為にも、いいものが造りたいね」

イマムラはその任務の説明を閉じた。ムハマドが静かに語った。

「課長。俺、正直に白状するけれど、MSB—Xの仕事が終わったときに、ようやくこれで解放されたんだってほっとしたんだ。みんなは怒るかもしれないけど、MSB—Xが失敗だって判定されたときでも、開放感の方が大きかったんだ。もう二度とこんな苦しいことはゴメンだって思った。でも、最近、、、これでいいのかな？って。だから、そのMSCの話聞いて本当に嬉しかった」

アサハリがムハマドの意志を継ぐように語った。

「俺も嬉しい。ただ、もう一つ正直に言うと、ラベルさんの為じゃないんだ、自分のためにやりたい」

ドノバンが物思いに耽りながら語った。

「ここの連中に聞きたい。うちのカティアが『えむえすびいえっくす』って言葉をしゃべるんだ。誰が教えたんだ？ 俺の顔を見る度に、あの試作機の名前をしゃべるんだ。オレは『パパ』って人並みに呼ばれたことがない」

(ああ、あの子が、、、)

メンバーはそう思った。メンバーの手に抱かれて笑っていた子が、今は自分の足で立ち上がって言葉もしゃべっているのである。メンバーの動機は様々だが、MSC-Xを作り上げるという意志は共有しているようだった。イマムラはメンバーを見回して、ラベルの姿を思い起こした。

(よくここまで、、、)

彼らを育ててくれたと思ったのである。

先のMSB-Xの場合、目標となる要求性能は技術開発課のメンバーが決めた。競合他社のメーカーの船体の性能をもとに設定したのである。今回の場合は、提示された性能を満たすことが要求される。リーの提案を受け入れると言うウルマノフの言葉への返事として、保安局は具体的な要求項目を提示している。

①加速性 巡航加速力1.2G、最大加速力6Gの能力を有する

- ②姿勢制御能力 Y P Rコントロール0. 5秒以下
- ③標準装備で72時間の任務に堪えること
- ④搭乗員は3名以下で、緊急時において180時間の生存を保証すること。
- ⑤流動ペイロード450kg
- ⑥極力、火星で入手可能なモジュールと部品を使用すること
- ⑦要求される項目の優先順位は上記の順である。

メンバーはデータの検討に入った。

①の巡航加速力というのは核融合エンジンを最も効率よく安定運転する時の出力に左右される。使用するエンジンの選定がポイントになるだろう。

②の項目、Y P Rコントロールというのは、船の停止状態から船首を逆方向に向けて再び静止させる能力である。この要求値は一般的な小型機から見れば、極めて高い能力を要求されている。おそらく、緊急時に船体が高速で機動しているほんの一瞬に、大容量の画像データを光通信で司令部に送信するつもりなのだろう。もちろん、搭載する兵器で敵を補足する攻撃機にも必要とされる能力だが、メンバーは攻撃機という言葉在意図して頭の中から消し去った。

③の要求は、平均的な任務に要求される航続時間である。平たく言えば巡航加速で72時間消費する推進剤を搭載しろということだ。

④の180時間の生存というのは経験的に導かれた時間だろう。

宇宙空間で漂流状態に陥ったときに、180時間の猶予があれば仲間の船が救援に赴くことができるのである。

⑤は、ユーザーで個別に搭載する積載物を流動ペイロードと称している。ロケットブースターか、小型機の牽引装置か、灯台代わりに使用する標識ポッドなどを任務に応じて搭載するつもりなのだろう。その積載物の重量を450kg見込んでおけということである。

⑥、これはMSB-Xの時にも悩まされた点である。何より、社会情勢を鑑みたときに、技術供与制限法以外の規制も強まることも想定しておかなければならないのである。

「ガーヤン。フレームの担当だ。ウィリアムスはパワーモジュール、シン、通信システムを担当してくれ。バレ、君は運航システム」

「まかせなさい」

バレが自信満々で言った。明るさという点で、常にこの女性が職場をリードする。

「ムハマド。推進剤タンクを担当してくれ。アサハリ。姿勢制御システム。ドノバン。居住モジュール。ウォルヒは全体のとりまとめ。以上、およそ前回と同じ役割分担で構わないかな？」

まだまだ技術的な素養には欠けているが、イマムラはメンバーの長所や得意分野は飲み込んでいるらしい。すらすらと役割を分担して、部下から苦情は出なかった。

(よくここまで、)

メンバーはイマムラを見て、ラベルを感謝の念と共に思いだ

した。この素人課長を育ててくれたと感謝したのである。

「まず、エンジンを選定した方が良いのだろうか？」

イマムラは控えめな調子で、部下に相談を持ちかけた。

「現在、小型機用のエンジンとして候補に上げられるのが、リストの通り、火星でライセンス生産しているものが9種ありますが、今後開発する船体の重量はMSB-Xと同等か、それを上回るものになるでしょう。保安庁の計画要求書では加速性が重視されていますから、MSB-Xに搭載したダブルペガサスよりも推力の大きなものが必要になります。推力から絞り込むと、スニム社のユニコーン、タイド重工のライン89, オムニ社のチンギス11、ハリマ社のサカエ77とフジVが候補に上がります」

国産のモジュールを使用するという項目が挙げられているから、輸入品ではなくライセンス生産しているエンジンを使用することになる。

「このうち、オムニ社のチンギス11は単位重量当たりの推力には魅力がありますが、航空宇宙規格基準外の特殊な推進剤を利用しています。出来上がった船体の汎用性を失うでしょう。残るのは、タイド社のライン89とハリマ社のサカエ77のいずれかになります」

ウィリアムスはモニター上のエンジンを初期の9種類から2種類に絞った。その鮮やかな判断力は、彼女自身の能力が向上していることをうかがわせた。

「ライン89は現在スピカに搭載しているライン82の発展改良型です。信頼性はありますが、今以上の発展性は望みが薄いでし

よう。サカエ77は現段階の出力はそれほどでもありませんが、構造を考えれば今後出力の向上が見込めると思います。確実さを取るか、将来の発展性を選ぶかによって決まりますが、現段階では判断できません」

そういう内容を、ウィリアムスはデーターを表示させながらすらすら淀みなく言った。

このエンジンの選定によってこの後の基本性能が決まってしまうと言っても過言ではない。彼らに幾つかの選択肢はあるようにも見えるが、どれも、火星でライセンス生産されているいわば一世代前のエンジンである。彼らは開発当初からこういうハンディを背負ってしまっている。

彼らはそれぞれのエンジンを使用した場合についてそれぞれの船体の能力を計算して比較するところから始まった。

	A案	B案
全幅（メートル）	8.4	8.8
全長（メートル）	33.5	36.3
総重量（地球トン）	54	65
エンジン	ライン89	サカエ77
巡航加速力（G）	1.2	1.35
最大加速力（G）	6.2	1.35
航続時間（時間）	86	74

核融合炉の出力自体はライン89の方が効率が良く、推進剤の

噴射速度が早く推進剤の消費効率がよい。推力は劣るものの長時間の加速が可能で補いがつくように思われる。ただし、限界までと思われるほど出力を絞り尽くしており、このエンジンにこれ以上のパワーアップを望むことが出来ない。試作機的能力は彼らが何処まで船体を軽量化できるかという点にかかっている。

この段階で既に、彼らを愕然とさせたのは、新たに検討を始めているこの船体の能力が、失敗作と評されたMSB-Xと大差ないことである。当然とも言える。MSB-Xに搭載したダブルユニコーンとライン89は推力に於いて大差はない。ただ、設計時期に2年の差があり、ライン89は新しい分、やや勝っているという程度である。彼らより遥かに高出力のエンジンを搭載する、アンドロメダ等の船体に対して分が悪い。

誤解を恐れずに一言で言えば、とっかかりは非常に単純な計算になる。エンジンの推力が決まっている。その推力によって、要求される加速性能を満たすために船体の重量が決まってしまう。航続時間の要求を満たすために推進剤の搭載量と推進剤を入れるタンクの重量が決まる。船体の全重量からエンジンと推進剤の重量を差し引いた残りの重量をコックピットに何パーセント、、操縦モジュールに何パーセント、探査機器、通信機器に何パーセント、生命維持関係に何パーセント、それらを支えるフレームに何パーセントと、各担当者に割り振るのである。担当者が自分に割り振られた重量の範囲で仕事を成し遂げて、船体が予定した重量の範囲内に収まれば、MSC-Xは予定した性能を発揮するはずだった。ところがそうやって計算をしてみると、ドノバンに割

り当てられる重量は5800kgに過ぎない、MSB-Xの時より更に1割少ないのである。MSB-Xの時でさえ、その居住モジュールは小さく窮屈だった。MSC-Xでは更に削るのである。根本的でまともな解決策は高出力のエンジンに換装することだが、開発の前提で、それが不可能になっていた。

巨大な風車に挑むドンキホーテのように、第三者から見た滑稽さと、当人に自覚のない無謀さに、彼らの努力は似ているのである。しかも、その努力は始まっていて後戻りはできないのである。彼らの二度目の挑戦が始まった。

最初の10日間は瞬く間に過ぎた。

「イマムラ課長」

ドノバンが慎重に語りかけた。

「提示された項目に『搭乗員は3名以下』とあります。これは『搭乗者は1名でもかまわない』と解釈してよろしいでしょうか」

数学的な解釈は正しい、しかし、、、

「みんな、すまないが、ちょっと手を止めて聞いてくれ」

イマムラ課長のいつもの言葉である。イマムラは自分の中途半端な知ったかぶりを避けて、技術的な判断は部下の議論に任せるという姿勢をとっている。設計課のキム課長などが聞けば笑い出すだろうが、イマムラは自分で判断を下すことが出来ないのである。メンバーは各自、部屋の隅のMSB-Xの映像に、椅子の向きを変えた。ドノバンはそのMSB-Xの映像を、彼が担当するコックピットモジュールの映像に切り換えた。その手慣れた行動に、今の彼らの開発姿勢が現れている。もちろん、最終判断は

船体を組み上げているウォルヒがする。MSB—Xの時にラベルがそう指示をしたのである。しかし、各パーツについての判断にはこのような合議制のような形態をとっていた。この形態に問題はあるに違いないが、ラベルという指導者を失って、各自の知恵を集めて判断するしかないのである。ドノバンが映像を見ながら切り出した。

「この間から、コックピットモジュールの軽量化のために予備のシートを廃止する形で検討してきたんだが、」

スピカの場合、操縦者とナビゲーター担当の人員のシートの他、予備の搭乗員の為のシートが設置してあり、この形態が長く続いて、小型機の標準的な座席配置とされていた。ドノバンは軽量化を図るために、MSC—Xでは予備のシートを削って搭乗者を2名に限定していた。更にドノバンが切り替えた画像にムハマドが相づちを打った。

「そうだね。その後、シートをツインからタンデムに変更したんだね」

先のMSB—Xの場合、操縦者とナビゲーターの席は横に並んでいて、その中央に搭乗者が身を屈すれば席を交代できる程の通路のスペースがある。開発途上、若い女性パイロットがそれを無駄だと称したことを思い出していた。

ドノバンはその意見を参考に、席をタンデム型、前後に配置したのである。それを知った設計課の連中は例のごとくあざ笑った。慣例的に小型機のシートの配置は横並びなのである。しかし、調べてみると、宇宙空間を航行しているときに搭乗者が席を替わ

るといふ事例はなく、搭乗者が間隔を置いて横に並んでいる必然性は見られないのである。一方で、座席を前後に配置したことによって居住モジュールの外寸を縮めながら、その中の座席の幅には余裕が出来たのである。相次ぐ変更によって、ドノバンはコックピットモジュールの重量を初期の7800Kgから6400Kgにまで減らしていた。ただ、目標値には足りない、ウォルヒは納得しないだろう。

「今度はナビゲーター席を廃止したらどうかと思うんだ」

ドノバンは思い切った提案をした。

(無茶なことを言う)

メンバーは顔を見合わせた。一方、ドノバンの言い分もよく分かる。

ラベルが居た頃に「何故、船は人を乗せて飛ぶんだ？」と聞いたことがある。言外に、無人機なら設計者にとってありがたいんだがという意味も込められているのである。有人機の場合、居住モジュール内を与圧し、呼吸のための空気を供給し、モジュール内を適正な温度に維持する。そういう装備を余分に要するのである。そして、搭乗者の安全を保証するために、船体の強度を無人機に比べて、安全率で3割も頑丈に設計しなければならないという法律上の規定がある。更に、忘れがちなのだが、気密服を身につけた完全装備の搭乗者が3人も乗れば、船体は彼らの重さで300kg近い重量増大になるのである。船は人を乗せるために、随分と余分な重量を要するのである。スピカの場合で言えば、実にその総重量の32%が人を乗せるために要する重量だと言われていた。

ドノバンはその2名の搭乗員を1名にしようというのである。そして、予備の通信機器を操縦席の後方に配置し、ユーザーにとって必要な場合は、その予備通信機を外して、臨時の座席を設置して、予備の搭乗員が搭乗出来るようにと考えていた。ナビゲーターは量子コンピューターで補いが付く。生命維持装置をはじめ随分軽量化出来るはずだ。

ウォルヒはラベルに大根役者と罵られたことを思い出した。ウォルヒだけではなく他のメンバーもそうだった。ただ、今はちゃんと演技力を身につけているらしい。彼らはドノバンの提案に意外な問題があるのに気付いている。1つは搭乗者の精神的な負担、もう一つは搭乗員の保護である。

その精神的負担について考えるなら、この船体に乗るのは、保安局や危機管理部で高度な訓練を受けた、肉体的にも精神的にも非常にタフな連中である。しかも、航行中は通信回線で司令室と直結してバックアップを受けている。しかし、さまざまなストレスを受ける環境で、手の届く距離に信頼できる仲間が居るとするのは心理的なストレス軽減になっているはずだ。ドノバンの提案はその仲間を省いてしまうのである。

「量子コンピューターの演算速度を上げて、メモリーも3割ほど増やしてもらえれば、システム内に思考ロボットが転送できるよ」

アサハリがそう提案した。意外かもしれないが、専門的な訓練を受けた人々にとって、任務を果たすために思考ロボットは必要としない。思考ロボットはこの時代の人々にとって日常生活にと

って欠くべからざる存在だが、船体を操るために量子コンピューターで充分だと考えられていたのである。

その量子コンピューター的能力を向上させる。重量は7kgばかり増えるかもしれない。その代わりに自分が日常接している思考ロボットを搭載して、船体そのものが随分と人間臭くなり、ナビゲーターの代わりに勤まるというのである。

そして、このコックピットモジュールの小型化と軽量化は、フレームにかかる負担を減らして、ガーヤンが担当するフレームの重量も削減できるはずだ。MSC-Xはエンジンの出力と言う点で、開発当初からおおきなハンディを背負っていた。ドノバンやアサハリの提案も採用する以外に方法はない。

「残る問題は、搭乗員の保護の問題だね」

アサハリがそう首を傾げた。コックピットの軽量化に目を奪われて小さくすればいいと言うものできなかった。体格のよい搭乗員が分厚い宇宙服を着込んで乗り込む。スムーズに乗るためには十分な大きさが必要であり、航行中に掛かる様々な加速によって搭乗員の体がコックピット内のあちこちに押しつけられる。その搭乗員を保護する仕組みが必要になる。従来は搭乗員の体を包み込むような形状のシートに体を固定する構造である。頑丈で重い。イマムラがふと思いついたように尋ねた。

「ドノバン。もしも、コックピット内の搭乗員をスポンジのようなものの中に閉じこめられたらどんな効果が出る？」

「かかる荷重を体全体に分散させることができますから、搭乗員の負担も減る他、シートの軽量化も図れるでしょう」

「そうなのか」

考え込むイマムラにドノバンが尋ねた。

「何か思い当たることでも？」

イマムラには名前は思い出せなかったが、朗らかな人柄と仕事を熱く語る口調は覚えていた。ラベルの隣人で友人。ラベルの送迎会のホスト役。あの日、飲み慣れない酒で酔った後、ムーヴァーに押し込んでもらった。あの日、イマムラを家に送り返すよう指示された思考ロボットが、その人物の名を記録していた。ウルド特殊車両のダン・ワイズである。

「ドノバン。ウルド特殊車両で開発している緩衝器を、MSC-Xに使えるかどうか君の意見を聞きたいんだ」

「緩衝器というと、四輪ムーヴァーのバンパーか高速鉄道の連結器ですか？」

ドノバンの言葉にイマムラは苦笑した、ワイズと出会った時の自分と同じ発想をすと思ったのである。イマムラはワイズの表現を思い出して言った。

「いや、エアバッグ。登乗員の体を保護する必要があるね。現在使われるものは、21世紀の頃から変わらない構造だが、搭乗員をスポンジの中に入れておけば、全体を柔らかく保護できるよね」

「面白そうだ。検討してみましよう」

「またまた、設計課の連中が、」

アサハリがそう言い、メンバーがそろって苦笑いをした。これらの試みを知った設計課の連中が、哄笑するだろうと言うのである。たしかに、従来の常識から考えれば非常識な試みだろう。

彼らの哄笑を苦笑いで受け流すほど、メンバーはラベルの指導で自信をつけていた。ただ、この例は、苦しいながらも、対策が見いだせたという非常に幸運な事例である。

メンバーは各自の担当するモジュールを設計し、ウォルヒが船体に組み込んで行くのだが、データを受け取ったウォルヒが首を横に振って拒絶することがほとんどである。ただ、その時に困ったようなすまなそうな表情をすることがあり、彼女をやや人間くさく変えていた

M S C—Xの概略は固まりつつあった。しかし、軽量化という問題を抱えて、要求性能どころか、加速性能などはスクラップになったM S B—Xにも及ばないのである。

数週間が経過し、その問題の解決策も見いだせないまま、新たな難問が表面化して、彼らは頭を抱え込んでいた。

「これか？」

イマムラという言葉に船体の運航システムを担当するバレは頷いた。イマムラがつまみ上げたのは長さが約3センチほど、重量にしてたった8gの黒色のメモリーチップである。裏面には小さく警告表示がされている。

『内容を読み出せば、チップは即座に破壊される』

このチップから40本ほどの金色の端子が出ている。船体の姿勢を感知するジャイロ、エンジンの制御状態を感知するセンサー、機外の危険物を探知するセンサーなど、様々なセンサーの情報や、操縦者の操縦桿やスロットルの情報を、電気信号にしてこのチップの端子に入力する。すると、別の端子から、入力に対応

した姿勢制御やエンジン制御の信号が出力されるのである。最高速度で見ると、彼らの新型船は一秒間に数百キロメートルの空間を移動して目的地に向かう、或いは、時に通信のために数千キロメートルも先の受信アンテナに向かって正確に船体の機首方向を制御する。そんな機動を人間の手で直接操作するというのは不可能であり、この小さなチップに収められた運航システムが船体の運航を支えているのである。運航システムを担当していたバレは彼女のシステムの根幹になるチップが入手できないという問題と直面したのである。

スピカの場合、彼らが製造した船体に合わせて、N & B社からこのチップを提供してもらっている。MSB—Xの場合はスピカ用のチップを強引に流用していたのである。搭載するエンジンや構造の異なる船体に使用したために推進剤のロスや姿勢制御能力の低下などを招いていた。今後、技術供与制限法が強化されたときに真っ先に輸出制限がかかるはずの部品でもある。MSC—Xの場合は、その根本的な解決が要求されているのである。今まで購入して使用していただけに、運航システムという技術は彼らにとって未経験と言っている分野の技術だった。

技術開発課で新たな試作機の設計が行き詰まって、打開策が見いだせないという情報が社内に広がっていった。たしかに、更なる軽量化の必要性和船体の運航システムという未経験の問題が彼らの前に立ちふさがって、全く打開策が見いだせない袋小路に陥った。

技術開発課のメンバーが、課長のイマムラを筆頭に、職場に全員が顔を揃えていた。席が6つしかない部屋に、イマムラ、ドノバン、ウォルヒ、バレ、ウィリアムス、シン、アサハリ、ガーヤンがそろっていて、ドノバンなどは机にあぶれて部屋の隅の計測機器を机の変わりにして個人の端末でデータを整理していた。自宅で出来るはずの仕事だった。出勤時間が決まっているわけではないから、通勤時間を差し引けば、自宅でゆっくりくつろいでデータを整理すれば良いはずだ。行き詰まった感じが職場に充満してメンバーの体の中に染み込んでいた。何かしなければと思いつつ、努力するほど混乱が深まって行く。そういう悪循環に陥って、データの整理を自身への口実にして泊まり込みが続いているのである。他のメンバーも同様だった。しかし、同じデータをどういじくったところで、船体の性能を向上させる発想は浮かんできそうになかった。

この数週間の間、あの合議制での新たな提案も尽くされてしまったかのように静まり返っている。

部署を率いるイマムラもこの点では同じだ、技術的な素養に劣っていることは自覚していた、部下に適切な技術的なアドバイスが下せなかった。

「おいっ。みてみるよ。かわいいから」

突然にガーヤンがそう言った。

元旦に生まれた新生児たちがディスプレイに映し出されていた。新年の恒例の番組である。額のあたりの金髪の房がマクガイヤ

一夫妻の赤ちゃんにそっくりだった。火星市民に火星の暦が必要となった時に、彼らは神の誕生や火星に降り立った時間ではなくて、火星で初めて赤ちゃんが誕生した日を元年としたのである。実験居住都市で人口は僅か88人だったという。その実験都市でマクガイヤー夫妻に娘が生まれた。火星元年である。

バレが叫んだ。

「ああっ。もう新年じゃない。やだっ。なんで、こんな暗い部屋の中に閉じこもってなきゃならないの。みんな、気分直しに踊りに行くよ」

この女性はストレスを発散させるために大声でわめき散らすと言う迷惑な癖を持っている。しかしながら、バレは言葉と裏腹に一通りわめき散らすと席に腰を落ち着けてしまった。やはり担当するデーターが気になるのだろう。

イマムラが部屋の中を見回してドノバンの無精髭を指摘した。

「ドノバン。無精髭を剃れ。町の若い娘に嫌われるぞ」

彼は席を立って立ち上がって提案した。

「さあっ、みなで広場に繰り出すぞ」

メンバーは思い思いに席を離れた。このきっかけを求めて、今までじっとしていたのかもしれなかった。そんな上司に抗議をしたのはウォルヒだけだ。

「でも、課長。未だこのデーターの整理が出来ていませんし、第一、今後の方針も何も決まっていません」

「みんなで繰り出すんだ」

その一言にウォルヒを包み込む迫力がある。このまま居続けて

も良い結果が出るわけではなかった。何かきっかけを与えてメンバーを自宅に帰らせて休ませるきっかけを作ることが必要だと考えたのである。

ガーヤンが映し出したディスプレイで、新生児が母親の柔らかな腕に抱かれて幸せそうな寝息をたてている。空調機の風が優しく赤ちゃんの髪をなぶっていた。メンバーは全員そろって部屋を出た。無精髭が伸びていたり、服装や髪が乱れていたり、メンバーが新たな展開を迎えることのないまま、無駄に時間を費やした期間の長さを物語っている。ムハマドは不安げに頬から顎を撫でた。9人のメンバーがイマムラを先頭に社内の通路を歩いている。薄汚れた集団は、他の社員の注目を浴びて、ムハマドに自慢の豊かな髭が長期の泊まり込みの間に台無しになっていることを思い起こさせたのである。

彼のプライドは、メンバーにまず社内のシャワールームへ向かうことを提案させた。30分後、多少こざっぱりした集団が技術部の入り口に集合した。

「お出かけですか？」

事務の女性がイマムラに聞いた。ただ、首を傾げたくなるのは彼の髪からリンスの香りが漂っていることである。

「うん。市場調査」

イマムラは返事を返した。開発のためには顧客の事を良く知らねばならないと言うのである。事務の女性は建物を出て行く9人を背後から眺めて、顔を見合わせて笑い会った。イマムラという男の人柄を反映して、彼女たちの笑顔に悪意がない。

「やっと、冬眠から醒めたのかしら？」

今までほとんど姿を見せなかった生き物が、目覚めたように穴蔵から出てきたと言うことを話しているらしい。

シンカンサイ市では、1F 中央の官公庁前の中央広場が祭りの会場になる。人々は中央公園前駅から2駅離れた市役所前駅で下車して、会場まで祭りの雰囲気染まりながらゆっくの歩くのが常だった。幅10メートルばかりの道路の左右に対向する人々の流れがある。公園から帰ってくる人々の流れには開放感の余韻があり、公園に向かう人々の流れは期待感に溢れている。

その流れの土手にこの祭りの間だけの露店が並んで、売り子が商品の名にリズムをつけて、大声で客を引いている。この雰囲気は、地球昔の祭りと何も変わらないのである。

こういう場合、メンバーの中でガーヤンの頭の切り替えが早い。子供のようにむき出しにした好奇心を、今は露店の商品に向けている。とくにおもちゃに興味を惹かれるらしく、時折、イマムラが襟首を引っ張って仲間に引き戻さないと迷子になるに違いない。シンは既に赤や青のあめ玉の入った小袋を抱えて、その1つを口の中で転がしている。アサハリはそのシンから青いあめ玉をせしめていた。

ドノバンがふと、ある露店の前で足を止めた。金や銀、象牙色、透明感のある赤や緑に縁取られたきらびやかな雰囲気がある。イヤリングやペンダント、腕飾りなど手作りの小物を売る露店である。店はやや閑散として店員の愛想の悪さを物語っている。ドノバンは仲間の女性を振り返りつつ少し考えていたが、アクセ

サリーを3つ、手にとって買い求めた。高価なものではない。日々の小遣い程度のものだ。プレゼントする側もされる側も、大して気を遣う必要はない、ドノバンはそういう細やかな気遣いをする。

ドノバンはバレに銀色のブレスレットを渡した。バレの褐色の肌に良く映えるアクセサリーだった。ウィリアムスには小さな赤い石のお守りを渡した。質素な作りだがそれがウィリアムスの性格によく似合った。ドノバンはこの種のセンスがよい。そして、青い小さな飾り石が付いたペンダントが彼の手に残った。ウィリアムスやバレの見るところ、露店の商品の並びの中で、二人が受け取ったものより1ランク上の価格のものだ。二人は気付かない振りをした。

「これを、君に」

ドノバンは戸惑いがちに言った。ぼんやり考え事をしていたウォルヒにとって突然の出来事であつたらしく驚いていたが、ウィリアムスとバレが受け取ったアクセサリーを掲げて見せたので成り行きに気付いたらしい、堅い笑顔を浮かべて言った。

「ありがとう」

「君の好きな朝焼けの空の色に似ている」

ドノバンはペンダントの青紫を評した。その気取った言い回しに、むしろ本人が顔を赤らめた。

「ニブちゃん」

ウィリアムスが彼女独特の言い回しで小声でウォルヒの人柄をバレの耳元で評した。

「確かに、あの女、鈍いからね。もっとはっきり言ってやんなきゃ」

バレがドノバンの気合いの不足を嘆いた。

ガーヤンはお気に入りのおもちゃを手に入れて機嫌が良く、アサハリはシンからからせしめた2つ目のあめ玉をしゃぶっている。メンバーは様々な思いを馳せつつも広場に近づいて行く。音楽、とりわけドラムの音がリズムを奏でて大きくなって行く。バレやガーヤンは既に腰を揺らしてドラムに合わせて小さくステップを踏んでいる。

イマムラの妻のアマリアが、結婚前に彼の部屋を訪れたときに、イマムラの顔を不思議そうに首を傾げて見たことがある。

「ニューギニアの少数民族」「高砂族の生活」「古代ケルト人の宗教観」「アフリカ 生活と道具」「アボリジニーと精霊」「日本人の民間信仰」得体の知れない題名の書物が並んでいるのを見つけたのである。イマムラは子供の頃からこの種の学問に興味があり、生まれる時と場所が違えば、土地の古老から古い民話を収集したり、土地の人々と生活を共にしたり、そういう生活を送っていたかもしれなかった。

そのイマムラが首を傾げた妻を思いだしたのは、目の前の様子を見たからである。官公庁の建物の前に噴水がある。その噴水を中心に、祭りの企画者によって設定された二重の踊りの輪がある。空き地のあちこちにも自然発生した小さな踊りの輪がいくつもできている。特設のステージでは賑やかに音楽が奏でられているが、楽器を奏するのはロボットではない、笛を吹き、ドラムをたたく人々から汗が飛び散っている。普段は行政のニュースを映

し出している5面の大型スクリーンが今日は人々の状況を映し出して、人々を輪に誘っている。神懸かりともいえる熱気があった。人類が太陽系内を飛び回る時代にあって、この踊り狂う人々の姿は、古代、豊漁を神に祈ったり、豊作を神に感謝したり、元始の人類の姿に似ている。人類がその歴史の中で、信仰や民族問題等、様々にまとうてしまった余分な衣服を脱ぎ捨てて、本能の赴くまま踊り狂っているのである。

気が付けば、ウォルヒとイマムラを除いたメンバーは既に彼らを離れて踊りの輪に加わっている。バレなど黒褐色の肌が輝いて、手足の筋肉が目立つほど躍動し、目をつむって高揚感に浸る表情を含めて、全てが美しい。

「課長は？」

ウォルヒがイマムラは踊りの輪に加わらないのかと問うている。

イマムラの場合は、周りの目が気になって踊ることが気恥ずかしい。周りの目が気になるという事が彼の行動の規範になるあたり、彼の日本者という血筋を現しているのである。輪に加わる必要はなかった。目の前の情景に無垢に感動し手拍子を打って共感を覚えているのである。イマムラは言った。

「こんなにも、この町と、この町の人々が好きだとは思わなかったよ」

この数年間、挫折の繰り返しで先の見通しが立たない。何度も投げ出したい思いに駆られたが、その都度、様々な人々に救われた。そんな思いが蘇るのである。

ウォルヒはいうまでもなく、新型船開発の取りまとめをしている。各部の不具合が、取りまとめをする彼女に大きな矛盾としてかかっていた。彼女はその苦労を硬い表情に隠してはいるが、罪悪感を持ちながら内心でメンバーを罵ってもいる。

間近で見ると、彼女にその苦労を押しつける総元締め of イマムラの髪に、白髪が目立って増えている。よほど苦労をかけているらしい。ウォルヒはその髪を優しく撫でつきたいほどの思いで、踊りの輪に目を戻した。

「いったい、私たちは何者でしょう？」

地球を離れ、体格を初め価値観に至るまで地球市民とはかけ離れてしまっている。しかし、目の前に広がる人々の姿は、今の地球市民が失った元始の人類の姿に違いないのである。

イマムラはそう言う光景を見ながら、心にわき上がってきた考えがあった。

(未だ気がつかないまま、何かやり残しているものがある)

失意の中に、彼らの新たな可能性を見いだせそうな気がするのである。ウルド特殊車両の技術者ダン・ワイズと出合って、彼らの技術をMSC-Xに取り入れた。その彼にネヤガワ工業として話を持ちかけた時の意外そうな表情も覚えていた。当然である。彼らが市場と考えていた四輪ムーヴァーや高速鉄道に比べれば、宇宙船というのは市場は狭く注目することもなかった。また、事故の衝撃から人員を守るという目的に、技術者らしいこだわりを持っていて、宇宙船のコックピットで乗員を加速や減速から保護するという用途に活用できるということにも気づけなかったのである。偶然の出会いだったが、互いに思いも寄らない技術を持

ち合わせていたのである。

「もう一度、自分たちを見直してみよう」

イマムラはそう呟いた。

奇妙であり、なおかつ自然なことに、彼らは新型船を火星市民の手で自主開発しようとしながら、使用するモジュールは地球メーカーのライセンス品を中心に探し求めている。信頼性があるという、宇宙船の製造に何より必要な要件を満たすためである。とすれば、火星市民が自主開発するMSC-X自体に信頼性がないはずだ。ところが、彼らは自分たちの手で地球メーカーに匹敵する小型機を作り出すのだと信じて疑わない。イマムラは、もっと火星市民という仲間の実力を信じてもいいのではないかと思い立ったのである。今までの検索に漏れているメーカーや製品があるかもしれない。

アーシャ・バレが不機嫌な顔でぎごちない動きで部屋に入ってきたのを、ウィリアムスはウォルヒのような硬い表情で黙っていた。ガーヤンが大きな荷を抱えてバレの横をすれ違った拍子に、荷がバレに触れたらしい。

「痛い。さわるな」

バレは半ば本気で怒っている。ガーヤンはぽかんと口を開けた。大きな荷を抱えていた彼を避けようとして、バレがやや不自然な姿勢になった、その瞬間に荷が彼女に少し触れた程度のことである。怒られるという程のことではない。ガーヤンは何かを思いついたように、にやりと悪戯小僧の様な笑みを浮かべて、片手で荷を支え、空いた右手の人差し指でバレの額をついた。

「うりっ」

ガーヤンの指が軽く触れたという程度にも関わらず、体勢を大きく崩し、体を支えながら全身の筋肉痛を漏らした。

「あんたは、何とも無いのかい？」

「オレ、未だ、若いもん」

ガーヤンは平気だと言わんばかりに自分の太股の筋肉をぽんぽん叩いてみせた。

「あたしゃ、もうおばさんだって言いたいのかい？」

ガーヤンがつえを突いて歩く老人の真似をした。

「馬鹿な冗談をいってると殴るよ。あたしゃ気が短いんだ」

ガーヤンはしかめっ面で、頭を抑えた。

「もう殴ってるじゃないか」

一昨日、ガーヤンはバレとともに火星祭りのステージの上で、メンバーの誰よりも長く踊り狂っていた。たまっていたストレスを発散させていたのだろうし、もともと踊ると言うことも好きだったに違いない。しかし、運動の後のケアが不十分だった。昨日当たりからバレは筋肉痛に悩まされていたのである。しかし、自分と同じ運動をしていたガーヤンが平気であるということに何か腹立たしく、彼に絡みたくなるのである。室内にはやや明るさが戻っていた。他のメンバーは二人のやりとりを楽しんだ。本来なら真っ先に話題に加わるウィリアムスだけがじっと黙っていた。

ウィリアムスはここのところ彼女が独占しているモニターの前に座り込んで頼杖を付いている。真剣にデーターを眺めているわけではない。モニターの文字を指で撫でてみたり、角度をいじって自分の顔をモニターに映したり、要するに仕事に飽きているのである。彼女の担当はエンジンモジュールの選定である。核融合エンジンに関わるメーカーのリストの上から順に24社を当たっていた。ことごとく彼女の求めは断られていた。期待する出力のエンジンがなかったり、部品メーカーでエンジンまでは扱ってなかったりする。承知の上である。部品メーカーだということは元々データーから分かってはいる。しかし、万が一と言う僅かな可能性に賭けて新たなエンジンを探し求めると言うことを始めていた。

歴史において、時代が人に舞台を整える、とすることがある。予め定められていたかの様に、定められた結末に至るシナリオがあり、それぞれの役割を演じる人物が配置されているのである。

この時は、亡くなった先代のニシダ社長にまつわる細い糸と、ウィリアムス自身の気まぐれがその舞台を整えた。

「アルフォンス。データーを下位から逆に見せて」

アルフォンスというのは、ウィリアムスの思考ロボットの名である。アルフォンスはリストを逆にソートして表示した。

ウィリアムスは気分転換のために、データーをひっくり返して見ようと思ったのである。上から3社目にシルチス市にダロス社という名を見つけた。彼女はその行に気を引かれた。このシルチス市という土地にである。シンカンサイ市から見れば、火星のちょうど裏側に位置している。ダロス社はそんなシルチス市の中央にあった。

彼女は既に、頭の中で都合の良いスケジュールを組み立てている。時間で言えば早朝に此方を発てば、リニアモーター鉄道で16時にはシルチスに着くだろう。くつろいで音楽を聴きながら7時間のゆったりした鉄道旅行である。そこからダロス社に向かえば夕方になってしまう。そんな遅い時間に訪問するのは失礼に違いないから、まずホテルにチェックインして、夕刻からは彼女の自由時間である。シルチス市は有名なファッションブティック、アクセサリ店が立ち並ぶので有名なのである。彼女は旅行雑誌でレストランやケーキ屋まで記憶していた。あくる日は、10時頃にアポイントを取って置いて、ゆっくり朝の朝食を楽しんでから、ダロス社で1時間で要件を済ませれば、また、ゆったりした鉄道旅行で、夜には此方に戻ってこれるだろう。

「課長。14日頃にリストにあるダロス社を訪問してみたいので

すが」

「シルチス市か。13日の昼にこっちを出発してくれ。行きはスペースプレーンを利用して構わない。成層圏を行けば1時間半で着くだろう。一泊して14日の朝にデロス社を訪問して、同じシルチス市のクレイヴン社とボル社にも寄って来るといい。帰りは列車の車内で出張の報告書を書いて置いてくれ」

「ちえっ」

ウィリアムスは露骨に拗ねるように舌打ちをした。彼女の休暇は潰えたのである。それでも、彼女はダロス社にアポイントの連絡を入れた。

シンカンサイ市が、もともとエネルギー開発やテラフォーミングを目的として開発された工業都市だとすれば、このシルチス市は交通の要衝としての機能を持った都市である。そして、シルチス市のドームから東南にやや離れて小シルチスと呼ばれる出島があって、シルチス大学を始め研究機関が集中している点を考えれば学術研究都市と呼んでも良い。西南にはフォボス宙港への連絡港もあって、宇宙空間への道も開かれている。なにより、ウィリアムスの目から見れば、このシンカンサイ市のような無骨な田舎の工業都市と違って洗練された都会なのである。

ウィリアムスは13日の過密スケジュールをこなして、シルチスに到着した。成層圏を飛ぶスペースプレーンは1時間20分で彼女を火星の裏側に運んで、ウィリアムスは個人的なスケジュールを割り込ませる余裕がなかった。1時間20分という時間の短さが信じられないほど景色が変わっている。ウィリアムスが自分のファッション感覚に劣等感を抱きたくなるほど洗練された都市

である。ホテルの中で眺めた調査リストによればダロス社はこの町の中心部にある。

あくる日、彼女がムーヴァーで辿り着いたダロス社の事務所も洗練されていて、事務員の対応も心地よく彼女はこの企業に好感を抱いた。

(85点)

彼女は心の中でダロス社を採点した。不足分の15点は彼女が想像したより小規模な会社でとても求めるエンジンがあるようには思えなかったからである。対応してくれたダロス社の営業課長に、彼女は勘違いを指摘された。ここは営業事務所なのである。工場は小シルチスの西方にあるという。当然のことだった。核融合エンジンを扱う工場が、ファッションブティックが建ち並ぶ町の中にあるはずはないのである。

彼女は途中でチャーターした四輪ムーヴァーに彼女の思考ロボットを転送して、ダロス社の工場に向かった。工場では事務所から連絡を受けた社長が待っていてくれるはずだ。彼女は勘違いにも快く対処したこの企業に好感を深めた。なにか昔からの友人のような気がするのである。小シルチスに大学や研究機関があって、確かに大シルチスと雰囲気が違う。その隅にダロス社の工場施設があった。

彼女のムーヴァーはダロス社の正門を素通りして駐車場に停車した。門を素通りしたということは、彼女の来訪が連絡されて、相手が訪問者にセキュリティを解除して待っているということだ。ウィリアムスは辺りを見回した。敷地はネヤガワ工業より広い

。その敷地に建物が幾つかあって、彼女が面会するダロス社の社長が何処で待っていてくれるか分からない。

ウィリアムスは、人の良さそうな守衛のおじさんを見つけた。白い作業着姿で彼女の行動を観察しているようだ。こういう場合、自分を不審がる警備担当者を避けて通るより、こちらから接近した方が良いと彼女は考えている。彼女はその守衛に工場事務所の位置を尋ねた。彼女が考えたとおりの親切な人物で、彼女を事務所まで案内するという。初対面なのに初めて会った気がしないと思ったら、写真でよく見るネヤガワ工業のニシダ社長に雰囲気似ているのである。顔立ちは気難しい頑固親父そのものだが、懐の中に飛び込みさえすれば、面倒見の良い人物だったりする。ウィリアムスは素直に相手の懐に飛び込んで行く特技を持っている。この守衛は、既に人の良い笑顔を浮かべてウィリアムスと世間話を始めた。

「シルチスは初めて？」

「ええ」

「ここの雰囲気はどう？」

「うーん。ここより大シルチスの方が素敵です」

たしかに、大シルチスの方がこんな研究工業区画より、女性が好みそうなファッションブティックやアクセサリー店が多いに違いない。

「ひっ、ひっ、ひっ、ひっ」

守衛のおじさんはウィリアムスの素直さを笑った。そんなおじさんの笑い声は、陰謀を企む魔法使いのジジイのイメージを連想させ、ウィリアムスはやや眉をひそめた。

おじさんは彼女を事務所に招き入れ、応接室まで案内した。彼女を席に付けて自らも向かい合った席に付き、そして、彼女に挨拶をした。やや得意そうな表情である。

「社長のクルーガーです」

「ああっ。やっぱり」

ウィリアムスは、ぽんと手の平を合わせて相づちを打った。クルーガーは正門の所で彼女を出迎えてやるつもりだったのである。ところが、彼女はクルーガーを警備員か何かと勘違いしたらしい。社長のクルーガーに道案内を依頼した。半ば、彼女をびっくりさせるつもりで、名乗りもせずに此処まで案内した。ところが、彼女は何処かで気付いていたらしい。彼女に一本取られたような気がして、多少悔しい。

「ネヤガワ工業のヘレン・ウィリアムスです」

屈託のない笑顔でウィリアムスはクルーガーに握手を求めた。
(面白い女だ。)

クルーガーがそう思ったのはこのウィリアムスという女が、ネヤガワ工業とダロスの過去のいきさつを全く知らないらしい点だった。無警戒であっけらかんとして楽天主義の塊のようだ。クルーガーは試しに質問した。

「MSA—Xは知っていますか？」

「私たちの試作船に似た名前ですけど」

(お前の所の、一番初めの開発船だよ)

クルーガーはそう思ったが口にせず、表現を柔らかく変えた。
「ニシダ社長の時代の試作船です。その船体に私たちのエンジン

を搭載してもらいました」

「あらっそうだったんですか？」

「『銀河急行』って名付けたエンジンモジュールでね。私も随分張り切ってたもんだ」

「でも、ちっとも売れなかったんですね」

悪気はないらしいが、彼女の言葉には時折り、奇妙に棘を感じる。

「そう、私たちのエンジンの信頼性の問題でね」

(だから、個人的にニシダには借りがある。)

クルーガーはそう思った。ただし、経営判断に結びつけて考えるつもりはない。

「『銀河急行』って夢のある名前ですね。今は？」

「ソロモンドックって会社があるでしょう。軌道上で大型艦を建造している企業。今はその企業にエンジンを納品しています」

「大型艦向けのエンジンの製造に転換なさったんですね。だから、最初に私たちのリストから漏れてたんだわ」

「正確に言うとね。大型艦のエンジンも2種類合って、大型の磁気ノズルを1基備えたエンジン自体が大きなものと、小型の高出力エンジンを何基か束ねて大きくしたものだね。うちで製造しているのは小型の方です。それをソロモンドックの方で出力の必要に応じて束ねて使用しています」

「『銀河急行』の図面はありますか？」

「もちろん残っているよ」

「見せていただけませんか？」

「かまわないよ」

彼女に先手を取られて、ずっと、彼女のペースで話が進んでいるのだが、悪い気はしない。不安を吹き飛ばすような楽天的な笑顔に、何か救われるような気がするのである。

経営は順調とは言い難いが、それでも何とかやっている。そんなダロス社にソロモンドックへの吸収話が生じている。業績が安定するのは分かっているのだが、経営者の意地のようなものがあって拒否しているのである。不安や腹立たしい日が続く中で、クルーガーはこの変な女性の来訪を心から楽しんでいるのである。

「やっぱりね」

彼女はディスプレイ端末で見せられた図面で、彼女の記憶を確認したのである。

「ニシダ社長の時代の試作機のエンジンの構造を見ていて思ったの。随分と単純な構造にしてあるんですね」

「信頼性の問題でね。単純な構造の方が信頼性が確保しやすいでしょう？」

ウィリアムスはクルーガーの顔を見つめた。

「構造が単純だと言うことは小型化も容易ですよ。核融合エンジンで最も困難なのは磁気ノズルの設計でしょう？」

「そうだね。プラズマ制御にいろいろなノウハウがあってね」

「ねえ。クルーガーさん。今、お宅ではプラズマ制御のノウハウをお持ちでしょう。それから『銀河急行』の構造を見ると小型化に向けた単純な構造ですよ」

「そうだね」

「いま、当時に比べて磁気コイルの効率が飛躍的に向上していますよね」

「そうだよ」

クルーガーは頷き続けるしかないのである。

「理論的には『銀河急行』を小型化して出力向上させられるじゃない。そうでしょう？」

「ただ、元は旧式のエンジンだからね」

クルーガーはウィリアムスにちょっと逆らってみたい。

「御社がソロモンドックに納品しているのは小型のエンジンなのよね。理論的にじゃなくて、いま、実際に小型のエンジンを造ってるんじゃない？」

クルーガーは何か悪いことでもやらかして、証拠を突きつけられながら、調書を取られているようだ。彼女は言葉を続けた。

「第一、この会社は、今、仕事が無くて暇でしょ？」

この女は全く悪意を感じさせない笑顔で、ひどく辛辣な言葉を吐く。ただ、その笑顔と物怖じしない勘の良さに感心して腹立たしさを感じなかった。

「どうしてそんな事が？」

「大シルチスの事務所で、事務員の人が電話対応する様子は見かけなかったし、営業の人も手持ちぶさただったわ」

「だから、顧客からの注文がないと？」

「それだけじゃないの。この事務所に来るまでに見かけた、壁に大きな穴がある建物は、エンジンの試験施設よね。作業している人や、建物の様子を見ると、あまり頻繁に使ってる様子はなかった」

「あれは新型エンジンの試験をする施設だ、現在の我が社が製造している既製のエンジンでは使わないよ」

「やったー。設備が空いてると言うことは、新型エンジンの開発余力があるという事よね」

彼女は飛び上がって喜んでいる。それから、突然に計算を始めて、計算結果を突きつけた。

「社長。私たちは総重量が6.8トン以下で、最大推力150トンくらいのエンジンが欲しいんです。造って下さい」

ウィリアムスはここで言葉を途切れさせた。彼女が小首を傾げるそぶりで目の前の交渉相手を観察するように眺めたため、クルーガーはこの女が自分が唐突に強引すぎる要求をしすぎたことに気づいたのかと思ったが、そうではなかった。彼女は相手の能力を見極めるように静かに妥協した。

「その要求が無理なら推力は130トンぐらいいでもかまいません」

彼女はクルーガーたちには推力150トンのエンジンを作るのは無理かも知れないというのである。この場合、彼女の言葉は優しいと言うより、クルーガーたち技術者の誇りを荒々しく逆なでしているのである。ただ、彼女の人なつっこい笑顔には悪気はないらしい。

この女はエンジンの製造には素人らしいが、エンジンの性能については飲み込んでいるらしい。彼女が掲げた目標は、クルーガーたちが背伸びをすれば手が届くかも知れないという誇りと好奇心の入り交じった目標になる。しかし、クルーガーの経営者とし

での冷静さが、技術者の高揚感を押さえて言った。

「考えさせてくれないか」

「自信がないんですか？」

「言い換えよう。君の提案は前向きに検討しよう」

「よかった」

彼女はあっさりと言って、更に彼女たちの期待の開発スケジュールから算出して遠慮がちに付け加えた。

「納期は10ヶ月、出来れば9ヶ月くらいでお願いします」

ダロス社を取り巻く経営環境は、基本的にネヤガワ工業と変わらない。大資本に飲み込まれるか潰される。クルーガーは過去に夢を見たこと見もある。しかし、経営者らしい冷静な判断で『銀河急行』とともに潰えたと考えていた。

もちろん、ネヤガワ工業が再び宇宙船の自主開発に挑んだと言うことは、ニュースで知っている。今は、ネヤガワ工業との関係が途絶えてしまっているが、ニシダの時からにつき合いだから、ウルマノフについてもその人柄を知っていた。あのウルマノフが本気で宇宙船開発に取り組むとは思えなかった。事実、結果は人々を失望させただけだ。しかし、失敗の後、今一度取り組むというのなら、今度は信じてやっても良い。

工場の正門の所まで彼女を見送ってクルーガーは思った。

(こんな形でニシダへの借りを返すことになるとは思わなかった)

ウィリアムス指摘は間違えてはいない、ただし、彼女が求める数字は、彼ら専門家から見れば非常に厳しい数字である。だが必死で背伸びをすれば手が届くかもしれない。やってみる価値は

ある。技術屋として胸がわくわく踊るような目標だ。

「『銀河特急』か？」

クルーガーは呟いた。おの女は9ヶ月後に受け取るはずのエンジンモジュールを、勝手にそう命名して帰ったのである。

「カビラを部屋に呼んでくれ」

クルーガーは秘書に技術部長の名を告げた。クルーガーと共にニシダを知る古い技術者で、彼なら、やや無謀な試みにもおもしろがって乗ってくるだろうと考えたのである。ただ、営業や経理関係者の不満げな顔を見るのも遠い未来のことでは無さそうだった。

技術開発課が抱え込んでいる問題を挙げればきりが無い、しかし、最も大きな問題を挙げろと言われれば、船体を構成する構造材の中で最も大きなエンジンモジュールと、小さな運航システムが挙げられる。エンジンモジュールについては、ウィリアムスの報告で、進展しそうな気配がある。しかし、バレが抱え込んでいる運航システムの問題は、彼女の努力のかいもなく、行き詰まって進展のきっかけがない。

「ストヤン部長。玄関にご面会の方がいらっしゃっているそうです」

受付の事務員から連絡が入ったのだが、その声の調子が戸惑う声音なので、ストヤンは首を傾げた。

「今日は人に会う予定はなかったはずだぞ」

「昔からの親友だそうです、」

「映像を回してくれ」

親友を名乗る人物を見てストヤンは息を飲んだ。長身の者が多い火星市民の中でも、ひときわ長身だというばかりでなく肩幅がある。その女性は受付嬢に豪快な笑いを見せている。

「エリ・スメタナ」

と、ストヤンはぽとりとペンを取り落とすほど表情を固くこわばらせて言った。彼女の名前らしかった。そして、彼は思いを巡らしたあげく、彼女の相手をイマムラに押しつけることにした。

（たしか、あの連中は運航システムの作製で行き詰まっていたは

ずだ。この女がいい刺激になるだろう。)

「あれがね、」

スメタナはイマムラに要件より先に自己紹介を切り出した。『あれ』とは、ストヤンの事であるらしい。

「おねしょをしていた頃からのつき合いなんだから」と彼女は笑った。

しかし、ストヤンは公私を混同することを極めて嫌う。その彼が優秀な人物だと言うからにはそうであるに違いない。イマムラは目の前の人物に

(やっかいな役目を背負わされた。)

と思いつつも

(面白い。)

とも考えた。このスメタナの豪快な人柄もそうだがスメタナの持つ技術が自分たちの知らない部分に埋もれていたのかと感じたのである。まだ、可能性はあると思うのである。

この日から、彼らに新たな仲間が加わった。ただ、彼女の肩書きが面白い。「スメタナシステム開発社長」である。彼女の会社が倒産してストヤンを頼って仕事を探したらしいが、独立気概に富んだ人物で、ネヤガワ工業に媚びる気はないようだ。彼女のアパートには、夫と25歳になる息子がいてスメタナシステム開発の専務と部長である、それ以外の社員はいない。彼女はこの技術開発課に机を1つ置いて「社長室」と称した。技術開発課は、机一つ分の領土を彼女に奪われてしまったのである。

関係者との調整は問題がなかった。スメタナとバレは親子ほど

歳が離れているのだが、気があって仲がいい。あっけらかんとして朗らかな性格が似ているのと、趣味も一致しているのかもしれない、バレにとって信頼できる助っ人が現れたわけだった。

「運航システム？ 何言ってるの、あたしゃ宇宙船には素人だよ」

スメタナはバレの説明を詳しく聞いて、自分なりに解釈した。

「車を手動で動かすことを考えてごらん。まず、あたしゃ右の車線に移動したい。ハンドルを右に切るわね。ところが慣れないモンだから切りすぎてしまう、慌てて今度はハンドルを左に切りすぎてしまう、結果的にあたしゃ車を大きく蛇行させたあげくスピンして車は大破。あんたが言うのはそういうことだろ」

「そうね。だからそういう事故にならないように、まず安定して車を走らせるアルゴリズムが必要なの。そのアルゴリズムを基本にして人間がシステムに介入した変化を加えて修正するの、事故が起きない範囲で、、、」

しゃべっているバレ自身頭の中が混乱してしまっている。

「難しすぎてよくわかんないけどさあ」

「私にもわかんないわ」

「でも、あんたはアルゴリズムとかロジックとか難しい事を言い過ぎるよ。もっと人を信用しなきゃ」

「人を？」

「まず、人がハンドルを握って運転すりゃいいのよ。事故がおきたら本人の運転が下手なんだからあきらめもつくでしょ」

バレは黙って笑いながら聞いている。

「でも、あたしの旦那は優しいから黙ってみてないよ。事故がおきる前にハンドルに手を添えてくれるモン。その旦那に代わるモンがあればいいのよ」

「私みたいな独身者なら、ドライビングスクールの教官を彼氏にして、横に乗せとけばいいのね」

「そうね。論理より運転慣れした彼氏の方が役立つわ」

バレはふと何かを思いだした様な表情を浮かべた。

「要するに、いままで私は操縦者と機械の間を繋ぐシステムを考えてたんだけど、宇宙船の操縦教官に代わるものを作ればいいのね」

「そう」

「ちょっと調べたいことがあるの。明日まで待ってくれる？」

そのあくる日、バレはスメタナを捕まえて言った。

「ねえっ。ちょっとこれを見て」

イマムラものぞき込んだが意味の分からない記号が並んでいるだけだ。しかし、スメタナは何か理解したらしい。

「今、製造部の改装ラインに救助機動隊からオーバーホールに回されてきたスピカ84号機があるでしょう。あの船体の最後の48時間分の運航記録なの」

突発的な事故に備えて、1機ずつ運航状況を自動的に記録している。昔の旅客機のブラックボックスと考えれば、それに用途や目的が近い。そのデータの使用目的から幾重にもプロテクトがかかっている、部外者には勝手に閲覧できないはずだが、彼女がそのデータを表示させているということは、彼女がその最初の

プロテクトを外したと言うことだ。イマムラは危機管理部との保守契約を思いだした。守秘義務がある。オーバーホールした船体のデータについて、社外に漏らしてはいけない。

(ここは、まだ社内だ)

イマムラはそう思うことにした。各船体がパトロールに出かけて帰ってくる。その状況が記録されているだけだ。事故の解析以外に利用価値がないと思われるデータである。普通はブラックボックスからこのデータを手間暇掛けて読み出そうとはしないだろう。しかし、契約違反でなくても、データを勝手に読み出しているという事実には、危機管理部側はいい顔はしないだろう。

「普通は、勝手に読みだそうとした段階でデータが破壊される仕組みになっているんだけどね。あんたなら、事故の時にブラックボックスのデータを偽造できるかもしれないね」

バレはそれに答えず、美味しいご馳走が目の前に並んでいるように、小さく舌なめずりをした。

「読み出せればこっちのものよ」

彼女達は最も困難なプロテクトは外してしまったと言っているのである。

「でも、まったく意味不明の文字じゃないか？」とアサハリが聞いた。

「当然よ。このデータは暗号化して圧縮したデータだもの。でもね、データの性質から考えれば、この文字の大半は数字のはずよ。たぶん、十進数か十六進数の数字だわ」

彼女は自信ありげに彼女の思考ロボットに命じた。

「ナウシカ。このデータを8ビット単位で表示させてみて」

彼女の思考ロボットはディスプレイにアルファベットと数字が混ぜて表示した。まったく意味を成していない。

「分からないじゃないか？」

と、部外者のシンが口を出した。

「黙っててよ。ここはね、複雑に暗号化をする部分じゃないんだから」

「何故分かるんだ？」

「小型機に搭載する量子コンピューターは意外に処理速度が遅いの。そのコンピューターで変化する船体の状況をコンマ何秒という間隔で記録する必要があるの。複雑な暗号を掛けていたらメモリーに記録するのに間に合わないじゃない？」

彼女はプロテクトを掛ける側と外す側の関係は、単純な知恵比べではなくて、ポーカーの様な駆け引きなのだと言った。コンピューターと人間の役割分担で言えば、こういう駆け引きは人間の役割だ。彼女の考えによればこの箇所には比較的簡単な処理がされているだけだ。

イマムラにはこのやりとりが理解できないでいる。理解する必要はないだろう、下手をすれば犯罪行為にもなりかねない。ただし、彼の部下たちはこの危険なパズルに夢中になってしまっている。

この後の彼らの会話は、物語の進行には全く関係はない。ただ、この部下の会話を聞いていたイマムラの困惑した心中が象徴されている。ただ、理由が分からないながら面白いと思ったのは、

パズルを解析しているのは、膨大な情報と処理能力を持った量子コンピューターではなく、バレの直感だということである。

「ナウシカ。データーを1ビットづつシフトさせて一番数字が多くなるようにして」

イマムラにはよく分からない処理をいくつか施して、バレはデーターを精製してのけた。

「数字だけでよく分からないね」

「データーは一定のフォーマットで記録されているはずよ。その区切りの記号が入っていれば良いんだけど」

「この記号が小数点を表しているのね。この小数点を見ていけば、同じパターンで繰り返し出てくるはずだわ」

「記録して有るはずのデーターは、船体の三次元座標、運動ベクトル、搭乗員の姿勢制御の操作情報、運動ベクトルの変化量、
、」

「推進剤の消費量も記録して有ればありがたいね」

「そのデーターの項目と、組み合わせと、記録順序を探し出せばいいんだな」

イマムラは部屋を離れた。彼の立場は複雑である。作業を進める立場にありながら、違法行為すれすれの行為を注意すべき立場である。動機はともあれ、今は部下が仕事に熱心で、サボったり怠けたりする事はありません。その点、信頼して良い。

(任せておこう)

イマムラはそう思った。難しいことは分からないが、行き詰まっていた船体の運航システム開発が、新たな展開を迎えているら

しい。その展開には顧客の船体の運航記録が関わっているらしい。

(しかし、メモリーチップと機密)

彼は過去を振り返るようにそんな呟きを漏らした。ふと、営業時代の調査ファイルを思い出したのである。

イマムラは研究棟を離れて、懐かしい営業部に向かった。昔の上司と世間話をするためだ。今後、シンプソン営業部長の力が必要になるかもしれないと考えたのである。抱えていた問題は、部下達がなんとかしそうな予感がある。

数時間後、イマムラは興奮したバレに技術開発課に戻るよう呼びつけられた。

「課長。どこでサボってたんですかあ」

ウィリアムスが不満そうに言った。イマムラはただ、笑っただけだ。搭乗員が船体にどんな指示を与え、その指示に応じて運航システムが、どんな信号を発しているのか、この運航記録の無機質な数値の並びの中で、搭乗員と船体の運航の関係を探り当てたというのである。理論的な数式から導かれた値ではないが、これ以上の適任者はいないと言うほどのベテラン搭乗員の船体操作が、新たな開発機で再現できる可能性を秘めているのである。ただ、データ一数が足りない。このスピカ84号機以外の船体のデータも必要になるのである。

「それで、その過去のデータを保安局や危機管理部が持って居るんじゃないかというんだな」

イマムラは部下に取り囲まれて言った。部下はイマムラにそのデータを取って来いと要求しているのである。部下はその仕

事をやり遂げていた。あとはイマムラの番だ。行政側とかけあって、彼らが運用する船体の運航記録を公式に公開してもらい、彼らのデータベースへのアクセスを許可してもらう必要があるだろう。しかし、危機管理部にせよ保安局にせよ、一中小企業にこんなデータを提供するはずがないのである。提供させるとしたら、どんな条件を提示しなければならないだろう？

「今の段階で、既にデータを解析しているということは伏せておいてくれよ」

イマムラはそう部下に命じた。違法行為に近いことをやらかしていると言うことで、今後の交渉を複雑にすることを避けたいのである。イマムラは上司のストヤンの部屋に向かった。この件でストヤンを共犯に仕立てる必要があるだろう。

部長室では、目の前のイマムラにストヤンが言った。

「理屈は分かった。船の姿勢制御や操縦桿核に関わるパラメーターを、パイロットたちの操縦経験から割り出そうと言うんだな。しかし、我々の手で運航システムを作り上げる事が可能だとして、我社が作り上げるシステムを全て、他社にも公開するというのかね」

「たぶん、それが行政側として我々にデータを使用させる最小限の条件になると思います」

「官公庁に誰か交渉のパイプはあるのか」

「営業部のシンプソン部長に中継ぎを頼もうと思います。彼なら危機管理部や保安局に顔が利きますから、」

「公開するという件については社長の許可がいるだろう。私が許

可を取って置く。君は準備が出来たら、すぐに役所へ飛べ。どうした、さっさと行け」

ストヤンはイマムラを部屋から追い出した。そして、彼の背後から付け加えた。

「データの解析にはシュミレーションセンターの協力が必要になるだろう。この件を最優先に処理するように指示を出しておく」

ストヤンはデータを解析したという事実には大して気にとめる様子はない。こいつらは目的のために手段を選ばない、という性癖を持った連中なのかもしれない。

(技術屋ってのは、信用できん連中だ)

そう言ったウルマノフの言葉が、今のイマムラには納得できそうな気がするのである。ストヤンの早急さは、その日の内にイマムラを危機管理部のあるシルチス市に送り出した。シンカンサイ市から見れば火星の裏側である。イマムラはスピカに使用しているN & B社の運航システムのチップと、営業時代の調査ファイルをカバンに忍ばせている。このチップが交渉の切り札になるかも取れないと考えているのである。

シルチス市。火星自治州の行政の中心組織が集中している。シンプソンから与えられた情報と、思考ロボットの案内を受けてさえ、迷いそうな様々な部局の案内板を確認しながら、イマムラは危機管理部にたどり着いた。各都市の防災機能を管轄する組織で、その一部で火星近傍の宇宙空間でのレスキュー任務を持っている。ネヤガワ工業にとって、レスキュー仕様のスピカの主要

顧客である。

「過去にそう言う例はないが、」

危機管理部の担当官はそういう言葉で、情報の公開を尻込みした。予め予想できる、極めて役人らしい言葉だ。

「聞いて下さい。今の小型船の運航システムというのは、高加速時の船体制御能力が不十分で多量の推進剤のロスを生じています。姿勢制御能力についても現場の方々自身にご不満を抱いているはずです。私たちが何とかしたいと考えてもまったく手が出ないんです。私たちの手でシステムを作り上げる事ができれば、状況は一変します」

「そういうものが出来れば便利だと言うことは分かる。しかし、今まで無くてもやって来れたんでしょ？」

「この小さな部品が宇宙船の中樞の1つです。今後、技術供与制限法が強化されたときに真っ先に輸出制限されて我々の手に入らなくなる部品なんです。いま、この運行システムのチップを作って置かないと、我々は今後、運行システムどころか新しいパトロール艇を造ることも出来なくなるんです」

「イマムラさん、こう考えてはどうでしょう。今後、耐用年数が過ぎて廃棄するスピカが出てくる。そのスピカからこのチップを外して、あなた方に提供する。あなた方はそのチップを利用すればいい。別に問題はないと思うが、」

(頭の切れる男だ)

イマムラは呆れるように思った。現体制を維持するための理

由が、この男の頭に次々湧いて来るらしい。イマムラは営業時代の調査ファイルを広げた。

「見て下さい。ここに運航システムのメモリーチップの写真があります。地球で実際に使用されていたスピカの運航システムのチップが写っています。この横の位置にロット番号が表示されています」

イマムラ自身、営業部員時代にひどく不思議に考えていた事実を披露した。彼ら営業部員は、危機管理部や保安局に所属する搭乗員から（ネヤガワ工業のスピカは性能が悪い）という苦情を受けていた。その全てが地球に派遣されてスピカの操縦訓練を受けた人々である。おおかた、その地球技術の信奉者の勘違い、もしくは、モジュールを作る工作精度の微妙な違いが積み重なって、火星で製造したスピカと地球のFW201には、性能に若干の違いが出るのかもしれないと理由付けされていたのである。

イマムラは、当時まだ販売促進課の課長だったシンプソンのもとで、スピカのパンフレットや営業マニュアル造りをしていた時期がある。（高度な地球の技術を継承した）というセールストーク通り、その言葉を象徴する、運航システムのメモリーチップの写真をパンフレットに用いた。その写真の記憶と、バレから見せられたスピカのメモリーチップの現物の間に違和感を感じたのである。

もちろんロット記号は1つずつ全て異なっているが、彼らがN&B社から提供されたメモリーチップのロット表記の中に、暗号のように共通して「N」の文字が忍び込んでいる。イマムラの相談を受けたバレとスメタナが、そういう回答を下していた。一

方で、地球で製造したFW201のメモリーチップには、全くその気配がない。つまり、FW201とその火星仕様のスピカは同じ船体でありながら、その中枢部に目に見えない違いが現実にある。搭乗員の連中がいう、スピカは推進剤の消費効率が悪いとか、操縦時の応答が遅いという微妙に感覚の違いが説明できるのである。穿った見方をすれば、致命的な欠陥がシステムの中に意図的に埋め込まれていたとしても、火星市民はこのメモリーチップを使い続けるしかないのである。

「これが、私たちが地球から購入して使用する運航システムのチップです。目立ちませんが、よく見ると記号が違うでしょう？この2つは同じものじゃありません」

イマムラは念を押すように2つのチップの製造記号を指さして比較した。担当官もつられてのぞき込んで納得したように頷いていた。

「私たちはね。知らず知らずの内に、地球市民にとって都合の悪い部分を削除したシステムを使用させられていた可能性も有るんです。それすら、私たちにとって分からないんですよ」

担当官は黙ったままだ、事情を納得したのかもしれないが、ややこしい事実にあまり関わり合いになりたくもないのだろう。イマムラは情熱を込めて声のトーンを上げた。

「私たち自身の手で、小型船の運航システムを作ることで、今のレスキュー隊が抱える問題も解決できるんですよ。そのデータをあなた方自身がその価値に気付かないまましまいでいるんです。私たちに利用させて下さい」

「何をごちゃごちゃ戸惑ってるんだ」

ついたて越しに低音だが良く響く声で叱りつける声があった。イマムラに対してではない。目の前の担当官に対して怒っているらしい。その人物がぬっと姿を現した。体格が良く、50を過ぎているのだろうが、歳の割に身のこなしが軽い。柔和な目をしているが、何処かその眼光が鋭くイマムラの本心を刺す。デスクワークをやっている人間には見えない。

男は部下の頭を拳骨で叩いてイマムラに言った。その声音は優しい。

「悪く思わないでくれ、こいつも悪い男じゃないんだが、」

イマムラは、この種の部下のかわいがり方というのは、現場上がりの人間のものだろうと判断した。男はフランク・ローズと名乗った。

「で、イマムラさん。何がお望みだ？」

「貴方方の部の運航データを我々に利用させてもらえませんか？」

「イマムラさん。悪いがデータは我々の管轄じゃないんだ。データは船体のメンテナンスの時に運輸交通部本部に転送する。今は、彼らの管轄だ」

「そちらに出向けば利用させていただけるんですか？」

「俺の操縦記録も残っているはずだが、大丈夫だ。俺は交通違反をしたことがないからな」

フランク・ローズはそう笑った。

「イマムラさん。私は昔、地球でレスキューの訓練を受けたときに、スピカというのはこんなに優れた船体だったのかと驚いた

ことがある。言葉ではよく言い表せないが、こっちで乗るものと乗り心地が違うんだ。さっきのあなたの話でその理由がよく分かった」

ローズは担当官の頭をぐりぐり撫でて言った。

「運輸交通部にオレが許可していると伝えておけ」

担当官はやや渋い顔をして繰り返した。

「私が連絡するんですか？」

「オレがサラ・ロイドが苦手だって事は知ってるだろう。オレが嫌なことはお前の役目だ」

とローズは笑った。サラ・ロイド。豪快なローズが苦笑いと共に、苦手だと口にした名前をイマムラは何となく記憶した。イマムラはやがて、彼女と出会うことになる。

「まったく、腹立たしい話だ。俺たちはスピカに命を託してるんだ、そのスピカに勝手に手を加えられているのか？イマムラさん。奴らの鼻をあかしてやってくれ」

イマムラは運輸交通部に赴いて、先に保安局、正式には軌道空間部保安局と称している部署を回って彼らの了解を取り付けた。宇宙船の運航に関わる権限を有する部局である。ここでも危機管理局の担当官にしたのと同じ説明を要した。

次に赴くのが、この軌道空間部と並列して存在する、運輸交通部本部である。フランク・ローズが言ったサラ・ロイドが取り仕切る部署である。この部署で交通行政を一元化して扱っており、イマムラが必要とするデータはこの本部の下、航空宇宙局で保

管されているはずだった。危機管理部と保安局の許可があったためか、たいした手続きも経ずにデータの使用はあっさり許可された。もともと、日常の運行状況を記録しているだけだから、担当部局の許可があれば、民間に秘匿する必要もないのである。しかし、たいして重要度のないデータの閲覧するために、行政はイマムラに丸一日の時間を費やさせたことになる。

この日、出会うことの無かったサラ・ロイドという名に不安が加わって妄想が膨らんだ。戦車を踏みつぶし、口から炎を吐きそうなイメージである。

（出合う機会があるかもしれない）と、イマムラは思った。

彼らは運航データの管理だけではなく、新型船の許認可の権限も持っており、この後、イマムラ達の本業でお世話になる部署だった。

取りあえず、イマムラは行政からデータファイルを閲覧する許可をもらって、彼らのサーバーのドアをこじ開けた。あとはバレやスメタナに任せれば、ネヤガワ工業の社内の端末からデーターを利用するはずだ。

M S C—Xは運航システムと言う点で行き詰まっていたが、これで何とか運航システムの問題は片づくかもしれない。イマムラはその僅かな希望にすぎた。

「リストはこれで全部なのね」

サラ・ロイドはオスマイルに命じて作製させたリストをながめた。1 ページ目にソロモンドックという企業の名があり、その下にずらりと並んだ企業名の一つに、ネヤガワ工業やダロス社の名もあった。

彼女は立ち上がって窓の外を見た。見晴らしが良い。火星行政府の建物の4階、南側の壁面に面している。行政府を囲む広場や南に伸びる道路、道路に沿って立ち並ぶ建築物などが見渡せる。今は数百人のデモ隊と警護の警官たちが、広場を埋め尽くしている所である。距離がありすぎて群衆の叫ぶ声は伝わらず、彼らが何を主張しているのか分からない。

「『レオン事件』抗議する」とか、「駐留軍の撤退を求めて」だか、「地球市民の主権介入に抗議する」、「火星の自主独立」だか、今の火星でデモ隊がこの広場を埋める理由に枚挙に暇がないのである。

火星市民の生活に密着しているという点で、ロイドはここから見える景色と、この場所が気に入っていた。オスマイルの見たところ、ロイド部長は国粹主義者ではないが、航空宇宙に関与する全ての火星の地場産業の振興も含めて、自分の使命だと固く信じて疑わない。運輸交通部本部が背負っている義務の1つに違いないのだが、その任務のために、権限の枠を無視する傾向がある。企業の統廃合という目標もその1つである。経済的な問題は、お隣の商工労働部の縄張りのはずだった。

航空宇宙業界において、地球資本が相次いで火星に進出して、火星の地場企業の経営を圧迫している。その事実、ネヤガワ工業など中小企業ばかりではなく、彼女たち行政サイドでも十分に把握していた。

ソロモンドックという企業が衛星軌道上に本社を置いている。ネヤガワ工業と同じく、火星の生え抜きの企業と云っていい。衛星軌道上に、80万トンクラスの宇宙船を収容するドックを3基有しており、大型艦のメンテナンスや組立を行っている。企業の規模はネヤガワ工業より大きい。宇宙船のメンテナンスや製造販売を行うという点で両社は一致しているが、取り扱う宇宙船の大きさがまったく異なるために、所有する設備や技術は異なり、また、顧客にも違いがあって、競合関係はない。

ロイドはネヤガワ工業を含め、中小の関連業者をこのソロモンドックに吸収合併させることを検討しているのである。いくつかの周辺企業を集約することで企業の体力がつく。地場の企業が地球資本に対抗し存続することが出来ると考えている。問題は、当然のことだが、ベースになるソロモンドックが、赤字部門を抱え込むことに対して、強い難色を示すに違いないことである。是が非でも、ネヤガワ工業には新型船開発の野望を放棄させなければならない。新型船開発という点でネヤガワ工業の財務状況は極度に悪化している。ただし、この点を放棄すれば、彼らの経営状況は一変して改善されるのである。MSB-Xで挫折した彼らは自主開発に懲りて手を引くだろう。ソロモンドックが彼らを受け入れる余地が生じるに違いない。ダロス社にしてもネヤガワ工業と状況に大差はない。

彼女の考え方は正しいのだろうし、自己の責任に忠実に違いない。ただ、幾分その枠を逸脱している。中小企業の振興という問題は商工労働部の管轄の問題だが、ネヤガワ工業にとってお役所の縄張り争いには興味はない。困るのは、行政の意図に中小企業の意志が反映されていないことである。

その矢先、ダロス社から新たなエンジンモジュール認可申請があり、その納品先としてネヤガワ工業の社名が記載されていた。ロイドは、ネヤガワ工業が諦めていたと思われた新型船開発を継続していることを知ったのである。

イマムラがMSC-Xの許認可に関する相談で運輸交通部本部を訪れたのは、こういう運の悪い時期だった。ニシダ社長の時代に作られたMSA-Xは形は出来上がったものの、売れる見込みがないと判断されて廃棄された。イマムラたちがラベルの指導の下で作りに上げたMSB-Xもそれと大差がない。火星において小型船開発が試みられたのはその2件のみだった。つまり、法律上は新たに開発した宇宙船が運輸交通部本部の認可を受けなければ宇宙を航行することが出来ないと定められてはいても、今までの火星でその認可申請をした例は皆無なのである。その初めての手続きをするに当たり、担当部局に相談や調整を行おうというのがイマムラの意図だった。

「ネヤガワ工業のイマムラという人物が、新型船開発について相談したいことがあるという用件で、面会を申し込んできていますが」

オスマイルはロイドに自分が対応しましょうか、と問う形を取りながら、既に自分が対応するつもりでいる。話を聞くだけなら自分で充分だし、責任者の部長を引っぱり出す事もあるまいと考えたのだった。

「いえ。私も同席しましょう。客を応接室に案内して」

オスマイルにとって意外なことに、ロイドも新型船開発に興味を示したらしい。今の状況の中で、ネヤガワ工業の社員、まして、新型船開発責任者がやってきたというのは、彼女たちにとって手間が省けるのである。

イマムラは応接室に現れた女性を見て、これがサラ・ロイドかと思った。以前に危機管理部を訪れたときに担当官がこの名を口にしたときの状況をもとに勝手な妄想を膨らませていたのである。彼の予想通りの人物だった。威張り散らす感じはないのだが、威圧感と言っても良い存在感が重々しい。

一方、オスマイルもイマムラの態度に興味を抱いている。幾分、緊張感は有り、慎重な物腰だが、度胸があるのか、馬鹿なのか、ロイドの存在感に動じる様子がない。

『西洋騎士の勇気とサムライの勇気』という例えがある。名誉を失する行為を恐れ、恐怖や怠惰をたくましく抑え込んで行く積み重ねを騎士を育てる勇気とするのなら、目的と自己を同一化し、恐怖や怠惰を失って純化する、その純化がサムライの勇気だと言うのである。ただし、程度を過ぎれば、どちらも暴走する。

ロイドの場合は西洋騎士に近く、恐怖や怠惰を抑え込んできたという自己に対する自信が他者に対する敬意を薄めてしまつて暴走している。イマムラの場合はサムライに近い。

国産機開発という彼の分限を越えた責任が、彼の容量から溢れだすほど満ちていて、ロイドの存在感はイマムラの体を素通りして影響を及ぼす気配がない。

「イマムラさん。あなたはネヤガワ工業の財務状況をご存じかしら？ 私たちは航空宇宙産業を管理し、その振興を図るという責任を果たすつもりでいます。船体やエンジンの製造の許認可の権限を持っていますが、私たちの責任に反する事柄について積極的に許可する事は出来ません」

ロイドはそれだけ伝えると立ち上がり、オスマイルに後の処理を任せた。

「後はお願いね」

責任者として結論は決まっていた、イマムラの話など聞く必要はないと言うのである。オスマイルには彼女がこの席に同席すると言った理由が分かった。この席上で、この後の交渉の余地は無いという彼女の信念を、イマムラの頭に叩き込むつもりだったらしい。

彼女の言い分は強引でやや飛躍がある。オスマイルが行政側の意図と、ロイドの結論の橋渡しをした。行政として、ダロス社とソロモンドックの合併計画を推進しているという事を明かしたのである。イマムラにとって初耳だった。地球メーカーの高性能機が存在する中で、性能の劣る船体や、その船体に搭載する核融合エンジンに需要はなく、ダロス社の経営を悪化させる。ダロス社がその合併計画を阻害するような小型機向けのエンジン開発は望

ましくない。

もちろん、イマムラは面くらい、承伏しかねた。そこまで、行政が介入するののかという不快感もある。オスマイルはもう少し露骨に、しかし、表現を和らげて言った。ネヤガワ工業もその計画に入っているとハッキリ断言したのである。ダロス社もそうだが、ネヤガワ工業もその計画が完了するまで、もう少し大人しくしていてくれないかというのである。

彼ら行政の意図は分かる。まず、吸収合併させれば赤字を生じる部門は閉鎖される。小型機向けのエンジン開発や小型機の開発は放棄することになるだろう。そういう意味で、結果として、はっきりとものを言うロイドと、穏やかなオスマイルは同じ事を言っている。彼ら行政には他の選択肢は無いらしい。

イマムラはシルチスの滞在を1週間延ばした。他の仕事も抱えていてこれがぎりぎりの延長期間だった。この期間でなんとかと思うのである。そのイマムラをオスマイルは飽きることなく、毎回きちんと対応した。もちろん、オスマイルとしてはイマムラの陳情を聞くためではなく、目的は別にある。今後、合併話をメーカーに持ち込むためにネヤガワ工業と接触する必要がある。イマムラという男と話してみると、技術部に身を置いている癖に、交渉事の勘が良く、話がしやすい。この男は交渉の窓口として役に立つだろう。ただし、お互いの主張を受け入れると言うことは別問題だった。オスマイルもイマムラも主張を譲る気配はない。

イマムラはロイドに合うこともできないまま予定の期間が過ぎた。

(なんて熱心で頑固な男だ。)

オスマイルはあきれのような思いで考えた。一度、2人で食事でもしてみるのもいい。彼は髪を掻きむしるよう掻き上げた。迷ったり困ったりした時の癖である。

「一度、場所を変えてお話ししようか」

場所が変わればこのイマムラという男も、もう少し柔らかくなるかもしれない。

「こんなことなら、カフェの方が良かったかな」

オスマイルは笑った。二人は酒場のカウンター席に並んでいるのだが、二人の心を和らげたのは、酒ではなくて、二人ともほとんど下戸だという共通点である。イマムラはオスマイルの表情を見ながら頭が下がる思いだ。

（ありがたい）と思うのである。

オスマイルはたいして減りもしないジンのグラスを傾けながら、酔いで口が軽くなったように語った。吸収合併を意図していると言っても、行政サイドが勝手にやれるわけじゃない。必ず何かの形で企業を説得しようとするだろう。経営権を持った社長クラスの人物なら、ロイドも会おうとするだろう。と言うのである。

「私の力が不足していて、説得できなかったのなら、説得できるまで何度でも来ましょう」

オスマイルは初めて出会った日に、イマムラがそう言ったのを覚えている。その言葉にオスマイルは応じていた。

「無駄だよ。あなたはあの人のことを知らない」

ロイドの頑固さは手に負えないというのである。ただ、イマム

ラの見るところ、オスマイルという男の頑固さは組織に対して忠実だという点だ。その組織が方向を変えれば、彼も柔軟に方向を変える。頑固さと柔軟さを同時に持ち合わせているらしい。オスマイルという男の柔軟な部分が、（社長を連れてきて合わせればいい）という提案をさせたのだろう。

しかし、オスマイルの頑固な部分は、彼の分も含めて支払いを済ませようとしたイマムラを制して、自分の飲み代をきちっと自分で支払わせた。その態度がさり気なく、他人を拒絶するような印象がない。こういう男らしい。

「私では役不足だと考えているのかね」

シルチスから帰社したイマムラにストヤンは渋い顔をした。最前線の小隊長が、直属の中隊長や大隊長を飛び越して最高司令官に前線に出てこいと主張している。イマムラが要求のはそういうことである。イマムラはストヤンの立場を察して黙って頭を下げ続けている。

オスマイルの言うとおりに、ロイド部長という人物は、繰り返し訪問することで、こちらの熱意に打たれて彼女の信念を変えろと言うことはないだろう。次の面会で決着をつけないといけない。次の一度の機会に決着をつけるためにはウルマノフ社長というインパクトが必要なのである。ストヤンと共に社長室に出向いたイマムラにウルマノフが言った。

「事情は、クルーガー社長からも聞いた」

ウルマノフにシルチス市に出向くのに異論はなかった、むしろ、自分から交渉に出向くつもりだったらしい。

運輸交通部本部で彼らを迎えたオスマイルの笑顔がイマムラにはありがたかった。ようやくウルマノフとロイドを会わせ直接交渉させる事が出来るのである。

ところが、ウルマノフとロイドは向き合ったとたんに互いに露骨な嫌悪感を露わにした。

「ほお。あんただったのか」

まずウルマノフはそんな感嘆の声を上げた。初対面ではなか

った。お互いに顔は知っている。ロイドの方は技術供与制限法の施行に反対して怒鳴り込んできた中小企業の社長として、ウルマノフはラベルの在留を認可しようとしなかった頑固な役人として、互いに相手の顔を記憶に刻んでいたのである。

「あんたじゃダメだ。まるで分かってない。図面の読める担当者を出せ」

『図面が読める。』というのはラベルがよく使った比喻で、1枚の図面に込められた作成者の意図を読みとる能力を指している。ウルマノフはロイドに向かって、お前のような素人は交渉の相手にならないと宣言しているに等しい。

「ウルマノフさん。貴方は経営者として、今の状況が読めないの？ 貴方は会社の財務状況を見て、事態が改善するとお考えなのかしら」

ロイドはウルマノフにお前には経営者の資質が無いと言う。

15分の面会時間に、二人の話は遂に平行線を保ったまま交錯することがない。オスマイルの協力にも関わらず、面会は不調に終わったのである。

「うちの会社に招待してやるから、あんたも一度は、現場をみてみる」

ウルマノフはそう言い残してロイドの前から姿を消した。

ウルマノフが去った後、部屋に戻ったロイドの表情はいつもと変わりなく、彼女の信念に揺るぎがない。

「オスマイル君。中小企業の統合の話は早急に進めなさい。商工労働部との協議も必要でしょう。至急、調整を図ってちょうだい

。必要なら私が交渉に出向きます」

部屋から見える町並みに、その灯が幾つも消えて薄暗い。大気から閉ざされて太陽も見えない空間なのだが、この町にはこうやって昼夜の区別が存在するのである。時間は既に夜の6時を回っている。

(今夜も遅くなりそうだ)

彼女は自分の帰宅時間を考えた。窓から見える街路に帰宅の人々が連なるように歩いている。

(あの一人一人に家庭があって、帰りを待つ家族が居るのね)

眼下に人々を見ながら彼女はそう思った。感傷ではない、彼らを守る責務を思ったに過ぎないのである。彼女は夫を失ってから一人暮らしが続いていた。

このあくる日、娘が孫を連れて彼女のもとに戻って来た。

ロイドは几帳面に机の上を整理して立ち上がった。

「部長、今から外出ですか？」

部下の一人が驚いて声を掛けた。まだ、夕方の5時である。これから日が暮れ始めるところだ。出かけるには遅く、ロイドのいつもの帰宅時間にしては、随分と早いのである。

「娘から孫のお守りを頼まれていてね」

彼女はそう言って、コートを羽織った。『孫のお守り』という言葉が部下は解しかねた。もちろん彼女は孫がいてもおかしくはない年齢だが、娘や孫という、ひどく人間くさい言葉と彼女の人柄を結びつけて考えることが出来なかったのである。部下は啞然とロイドを見送った。

「まったく、こんな時しか戻って来やしない」

最後に言い残した言葉は、嫁に行った娘のことを表現しているらしい。

彼女は今日はムーヴァーを使わずに歩いた。

(たしか、この通りに、、)

古い記憶で不確かだが、この通りに玩具屋があったことを思い出したのである。彼女の思考ロボットに確認すれば良いのだが、彼女は頭の中の古い記憶に頼りたかった。ほぼ、記憶通りの場所にその店を見つけた。ビジネス街の一角で、この辺りで唯一の玩具屋である。勇気を出して踏み込んだのだが、場違いな場所に来てしまったような気がして戸惑いが隠せない。

「何かお探しでしょうか？」

品の良い若い店員が彼女に尋ねた。普段、この店では客が自由に商品を選べるように、店員から客に声を掛けないと接客マニュアルで定められている。その規則を破らなければならないほど、ロイドは店内に一人で困り果てていたのである。

「孫にプレゼントしたいんだけど」

彼女は的確な商品のカテゴリーを指摘できないでいる。

「女のお子様ですか？」

「いえ、男の子」

「歳はおいくつ？」

「たしか、3歳の誕生日を少し過ぎたところだわ」

「室内で遊ぶような物がいいかしら」

ロイドは店員の質問に頷くばかりで積極的な答え方が分からないでいる。店員は手慣れた様子で、彼女のために選択する商品を絞り込んで、宇宙船の玩具を選んだ。

「あらっ」

ロイドは何かに気付いたように、店の隅を指さした。

「ごめんなさいね。やっぱりあれがいいわ。あれをちょうだい」

人間の赤ちゃんほどの大きさのウサギの縫いぐるみである。店の片隅で時代に取り残されて、埃を被っていた縫いぐるみである。

「包みにはリボンもつけましょうか？」

「ええ。お願い」

ロイドは託児所の前で、一つ、生真面目な表情のままで深呼吸

をした。孫に会うということに勇気がいる。二人はまるで初対面のように向き合って、ぎごちなく手をつないだ。外見はおばあちゃんと孫娘に見える。目が大きい愛らしい顔立ちの子供で、男の子だが、ロイドが買い与えた縫いぐるみを抱いていると、女の子に見えるのである。この子の目の大きな顔立ちは、自分や娘の血を引いているとロイドは思った。孫に夕食のメニューの相談を持ちかける彼女の様子は戸惑うようで、仕事場での面影はない。

「ウィル。何か食べたい物はある？」

ウィルは少し考え込んだ。

「ハンバーガーとフライドチキン」

笑顔の孫に、祖母は渋い表情を浮かべた。

「あんた。もっと良い物を食べさせてもらっていなかったのかい？」

「じゃあ、ピザ」

「他には？」

「ドーナツ、ポテトチップも」

「ウィル。そんなものばかり食べてるとアメリカ人になっちゃうよ」

孫は料理の名を考えめぐねて、困り果てたように首を傾げて祖母を見上げた。

「ねえ、ウィル。おばあちゃんは、コーンスープやグラタンやニシンのパイ包み焼きなんて得意なんだけどな」

もちろん、この数十年で腕が鈍っていなければと言う条件が付く。そのやや控えめな提案に、職場でのロイドの面影はない。

食べ物の名をいくつか並べている内に、二人は家に付いてしまった。ロイドと孫の帰宅に合わせて明かりをつけ、部屋を暖めて風呂を準備しておくことは容易なことだ。彼女の思考ロボットに命じればいいのである。ロイドは心の底で、空調を先に帰宅しているかもしれない娘に任せていた。娘はまだ帰っていないようだ。家の中はひんやり静まり返っていて、暖かみがない。

孫を迎えて3日目になっても、彼女の料理をする手つきがおぼつかない。彼女ははるか昔を思い出しながら自分の手で料理をした。彼女はクリームシチューに母親と娘が絡む記憶を持っている。サラ・ロイドは、このシチューの味を母親から習って、娘に作り伝えてやったのである。

ロイドと孫のウィルは、もくもくと食事をした。共通の話題が見つからない。彼女が買い与えた縫いぐるみは、薄汚れたウサギの縫いぐるみと並べて、ウィルの手を放れてベッドの棚に置いてある。古いウサギは彼女の夫が、昔、娘に買い与えたものだ。いまは、ウィルが母親の代わりに抱きしめて床についていた。洗ってやろうとしたらウィルが抵抗したた、諦めて新しいのを買い与えてやったのである。新しいのを手に入れても、ウィルは古い縫いぐるみを手放そうとしなかった。

「おばあちゃんと一緒に、公園を歩こうか」

ロイドはそう提案した。その行動力は彼女らしい。もう、そうすると決めて孫にオーバーを着せていた。この時間、公園で孫を連れた年寄りが散歩している。この外出でウィルの友達を見つけることが出来るかもしれない、そんな理由付けしたのである。時間はまだ夜の8時でを少し回ったところで、ウィルを寝かしつけ

るには早く、ウィルの就寝時間まで会話をするには、二人に共通の話題が足りない。

外は肌寒い。凍えると言うほどではないが、夜間はエネルギー節約のため、都市内部の温度が低めに抑えられているのである。多少暗く調節した照明と、この気温が、太陽の光が射し込まない都市の中に夜を作り出している。

ベンチに座って孫を膝に抱き上げると、思いの外、重い。彼女は孫の温みに幼い頃の娘を思い出した。21歳で駆け落ち同然に家出をして音信不通になっていた娘である。きっかけは些細な理由だったような気がする。年頃に育った娘の連れてきた男が、夫や彼女の目から見て気に入らない。風采が上がらず娘を託すには至らないと思ったのである。世間一般から見ても、娘が連れてきた男に密かに反感を抱くのは珍しい事ではないだろう。彼女たちは若者の「愛し合っています」という言葉が信用できなかった。

彼女の夫は、自分の自慢の娘が学校を退学し法律家への夢を断念するというのもまた、この男の責任であるような気がしたのだろう。強硬に娘の結婚に反対した、彼女も夫を支持した。その夫も5年前に他界した。寂しい葬式だった。口には出さなかったが、彼女は心の何処かで娘の帰宅を待っていたのである。

「『ああ、ウィル・ボーイ。

パイプの音が、谷という谷に満ちあふれ、

山の峰をかけ下ってあなたを呼ぶわ。

夏は過ぎ去って、咲いていたバラは残らない。

あなたはもう行かなくちゃ。』」

ダニー・ボーイの詞を孫の名に変えて、彼女は古い民謡を口ずさんだ。このメロディは彼女が幼い頃に父親に抱かれて聞いた覚えがある。彼女にとって意外なことに、ウィルが膝の上で祖母のメロディを引き継いだ。

「『でも、また牧場に夏がめぐって来たら戻っておいで。

たとえ、谷間が雪で白く静まり返っていても、

晴れているときも曇っているときも、

ここでずっとあなたを待っているから。』」

「あらっ、ウィル。この歌を知っているのね」

「うん。ママが歌ってくれるよ」

娘のアレサがウィルの手を引いて彼女のもとに姿を現したのは3日前の休日のことだ。9年間も音信不通のあと、予告もなく母親のもとを訪れたのである。そして、娘は母親に、昨年、夫と死別したと伝え、彼女が初めて会う孫を紹介したのである。

「これ」

彼女はマフラーを差し出して続けた。

「もうすぐママの誕生日よね」

9年間の穴埋めがこの粗末なマフラーらしい。短い単語をいくつか繋いだ会話の後で、娘は彼女にウィルを託した。仕事が見つかるまで、子供を預かって欲しいというのである。

「よければ、あんたもここにいてくれても良いんだよ」

「ここは大きな事務所ばかりでしょ。ちょっと田舎で、小さな所で落ち着いているんな経験をしたいのよ」

娘はどこかの法律事務所に職を求めたいと言った。事務をしな

がら、再び法律家の勉強をしたいというのである。もう、娘は彼女の手を放れてしまったらしい。自分には娘の意志を変えることが出来ない、ロイドは愛する者に裏切られ捨てられたような気がした。では、このウィルを自分は娘を失った心の隙間を埋めるために利用している。そんな罪悪感がちらりとよぎった。

「お孫さんですか？」

幼い子供の手を引いた老人が彼女に声を掛けた。小さな女の子が老人にまわりついて、老人の足の向こうから此方をのぞき見ている。ウィルのことが気になるのだろう。

「ええ。娘に孫のお守りを頼まれてね」

「可愛い娘さんだね。目のあたりがおばあちゃん似だ」

「ボク、男の子です」

ウィルがそう反論した。

「ごめん。ごめん」

老人が勘違いを詫びつつウィルの頭を撫でた。

(おばあちゃん似?)

彼女は不思議な感覚を込めて思ったが、言葉はやや愚痴を込めたものになった。

「まったく、こんな時しか帰って来やしないんだから」

「それは娘さんから？」

老人はロイドの首に掛けたマフラーを指さした。編み目が大きく不揃いで手作りだと言うことが分かるのだろう。ウィルは彼女の膝から下りて、女の子と老人の足下をくるくる回った。

「ええ。子供の頃から、編み物が下手な子でしたわ」

去って行く女の子に手を振ったウィルは、満足気に大きなあくびをした。もう、寝かしつける時間らしい。

しかし、子供はこんなに気まぐれなものだったかと思わざるを得ない。眠そうだったはずのウィルは、ベッドの中で大きな丸い目をぱっちり開けてしまった。起きだそうとする孫を、ロイドはもう一度ベッドに押し込んだ。

「おばあちゃん。ご本を読んで」

ウィルは彼女にねだった。彼女の心の底にじんと響く言葉だ。孫が初めて祖母に甘えたのである。

絵本が書籍という形のままで、この時代にもある。幼児の枕元で読み聞かせるというコミュニケーションの手段が、ずっと人々に引き継がれている証拠だった。ウィルは縫いぐるみのウサギとともに、お気に入りの絵本を所有している。彼は母親がそうしてくれたように、枕元で聞かせて欲しいというのである。ロイドは孫の枕元で絵本を広げた。

「『ちいさい魔法使いのアトラは魔法の修行が嫌いで、今日もサボって、屋根の上に寝転がって夜空を見上げていました。空にはいくつものお星さまがきらきら光っています。』あらっ。このアトラは勉強が嫌いなのね。ウィル、あなたは？」

念を押した祖母に、孫は笑った口元を毛布で隠して、自分と同じかもしれないと同意した。

「『ああっ。あの星がボクの友達なら、どんなに楽しいだろう。』と独りぼっちのアトラは思いました」

彼女の声に聞き入る孫の表情は、絵本の主人公より数段可愛い。ロイドはページをめくって読み続けた。

「『ねえー。お友達になってよー。』アトラは大声で叫んだのですが、空のはるか上の方、お星さまはきらきら光っているばかりで、アトラの声は聞こえません。小さなアトラは独りぼっちなままでした。『ああそうか、ボクは魔法使いだったんだ。自分で作ればいいんだよね。』アトラは友達を自分で作ろうと思いました。でも、いままで、アトラは修行をさぼってばかりでした。あくる日から、まいにち、アトラの小さい家の中から、いろいろな大きな音が響き始めてとてもにぎやかでした。それは爆発の音だったり、アトラが泣いたり怒ったりする叫び声でした」

ふと、ロイドの言葉が途切れた。この小さな魔法使いの馬鹿馬鹿しい雰囲気、何故かネヤガワ工業の連中の顔を思い出したのである。ウィルは祖母の手を引いて、早く先を読めと催促した。

「やっと、お星さまが生まれました。

アトラは友達ができなくてうれしくて大はしゃぎです。

でも、ちょっと変でした。お星さまに元気がありません。

アトラには良く分かりました。だって、自分がそうだったから。

アトラのお星さまは、この地上で、ほかのお星様から遠く離れて、独りぼっちなでした。

また、寂しくなるかもしれないと、アトラはまず自分のことを考えました。

でも、アトラはお星さまを空に送り届けてやろうと思ったのです。

ちいさな魔法使いのアトラは、背伸びをしてみましたが、空に手がとどきません。

あんなにたくさん見えているのに、お星様はみんな空のずっと上でした。

このときでした。誰かがアトラを肩車で持ち上げてくれたのです。

それはアトラの仲間で、いちばんの力持ちのソユーでした。

それでもアトラの手は空の高さに届きません。

『みんなあつまれー。お星さまを空まで持ち上げるぞ。』

ソユーが声をかけたので、ものかげにかくれてアトラとソユーを見守っていたちいさな魔法使いがいっぱい集まって、空にはしごをかけたり、虹の橋をのぼったり、にぎやかになりました。

みんな、ほんとうは、アトラのことを心配していた、やさしいなかまでした。

それでも、なかまが持ち上げたお星さまは、空にはとどきません。

ちいさな魔法使いたちは、先生の大魔法使いに、相談することに決めました。

『あなたたちも魔法使いでしょう。』

先生の大魔法使いは、そう言って、手伝ってくれません。ちいさな魔法使いたちは、自分たちでやるしかなさそうです。

『そうだね。ボクたちは魔法使いだ。しんじることはなんでもやれる。』

『そうよ、魔法を使ってロケット花火が作れるわ。』

と、アリアが思いつきました。いい思いつきだとみんなは思いま

した。

みんなはお星さまを空に連れて行くのに、小さな魔法でロケット花火を作りました。

その花火は、アトラたち、ちいさな魔法使いの人数分だけあって、お星さまを空に運ぶのにじゅうぶんに思えました。

お星さまを空に運ぶ日がきました。アトラたちはロケット花火に火をつけて、花火につないだ紐にぶら下がったお星さまにお別れの手を振りました。

『あれれ、上手く上がらない、、、。』

空にあがったお星さまは、空のまんなかで宙ぶらりんでした。仲間のお星様の所に届きません。

『もう、あの子たちときたら。』

物陰で、アトラたちを見守っていた大魔法使いは、あきれたようにためいきをつきました。

『がんばれ、がんばれ、もっと、がんばれ。』

やさしい大魔法使いの声が、だんだん大きくなって、アトラたちの耳にも届きました。

『そうだったんだ。』

アトラたちは先生を振り返って思いました。

アトラたちは魔法使いです。魔法にとって大事なことは、お星さまの願いをかなえてやりたいという思いやりでした。

『がんばれ。』

『ぜったい、あがるぞ。』

『なかまのところへ、飛んでいけ。』

アトラのお星さまは、ちいさな魔法使いの声にのって、どんどん空の上に上がっていきました。

やがて、空にのぼってほかのお星さまにまじっていきました。

どのお星さまも幸せそうに輝いていて、とれがアトラのお星さまか区別がつきません。

でも、たくさんの光の中にの中に一つ、まんぞくそうにウインクする星がありました。

『きっと、あれがボクたちの星だね。』

アトラは周りを見回しましてそう言いました。

いまのアトラは、あのお星さまといっしょでした。お星さまと同じように、やさしい仲間に取り囲まれていました」

ロイドは読み終えて、最後のページを閉じた。

「よかったね」

ロイドは孫の額を撫でて、物語の結末に同意を求めた。しかし、幼児の気まぐれさを思い起こさずにはいられない。孫のウィルの返事は、物語と全く関係がない。

「おばあちゃんのシチューはママのと同じ味がした」

ウィルはベッドの中でそう言ったのである。

(おばあちゃん似?)

さっき老人が言ったことを孫の顔の中で思い出した。この孫は私の血を引いている。そして、この子の母親が自分の生き方にこだわるのも、母親である自分の頑固さを引き継いでいるのかもしれない。

ウサギの縫いぐるみが2つベッドに並んでいる。片方は自分がプレゼントしたものだ。ウィルは喜ぶふりをした。自分を喜ばせ

ようとしたのだろう。孫の幼い演技はおばあちゃんにばれていた。

(でも、私はこの子に何を与えてやれば良いんだろう)

親である自分の意志に反して、手を離れていった娘に対する、惨めな恨みが失せた。失った娘が残した心の隙間を、この孫で埋めてはならないだろう。この子を笑って送り出す時のために、ロイドはそう考えた。

彼女は絵本を閉じて、眠りについた孫の枕を優しく直してやった。絵本の裏表紙にはアトラを囲んで大勢の小さな魔法使いが空を見上げる絵があって、彼女は真ん中のアトラを指で撫でた。ウィルのイメージを重ねたのだろう。

「なに？」

イマムラは受付から連絡を受けて怪訝な表情を浮かべた。その驚きは表情通り、疑問や違和感に満ちていて、それを部下から隠す余裕がない。部屋の中のメンバーも首を傾げ、不思議そうにイマムラをながめた。

突然に予告もなく、運輸交通部本部の責任者が来社したというのである。肩書きから見て、あのロイドに違いない。部長クラスの役人が中小企業を直接訪問するというのは前例がない。連絡を受けたイマムラがまず考えたのは、社長に連絡をしておくかと言うことだ。しかし、別のルートでウルマノフに連絡が入ったらしい。出張中の社長から、すぐに帰社するという連絡があったという。そのウルマノフからストヤンに指示があった。

『自分が戻るまで、一時間の間、陣地を死守して守り抜け。』
と言い放ったらしい。その任務をストヤンとイマムラが背負った。

「お気になさらないで。仕事の都合でシンカンサイ市に来る機会があったので、ついでにお寄りしただけですから」

オスマイルを伴ったロイドはさり気なく言った。

「今日はどんなご用件ですか？」

ストヤンがロイドの迫力に圧倒されているようだ。

「時間がありませんから手短かに。まず、工場を見せていただけないかしら」

時間がないというのは事実だろう。部長というポストに大きな権限が集中している。有能な部下に恵まれているとしても、その忙しさは半端ではないはずだ。ロイドはすでに席を立ち上がっている。ストヤンは慌てて、工場に入るための作業着とヘルメットの準備を命じなければならなかった。既に主導権は彼女に握られている。

イマムラの案内で、ロイドは工場を巡回した。あまりこういうものを見る機会は無いらしいが、取り立てて彼女の興味を引く物もないらしい。

(雰囲気は悪くない)

ロイドはそう思った。自分と同じく技術的な素養のないイマムラが、生真面目に製造ラインやライン上の船体について、説明してくれるのだが、技術的なことはどうでもいい。そんなものは部下に任せればいいのである。彼女はイマムラの説明を聞く振りをしながら、工場の中を見回し雰囲気を味わっていた。

床にはゴミ一つなく、機械部品は名札をつけた棚に整理されている、機械工具は所定の位置にある。設備は新しいとは言えないが、綺麗に磨き上げられていて、そこで働く従業員はちゃんと教育されているようだ。

全て製造ラインには、船体や船体を構成する部品がのっかっていて、遊んでいるラインがない。この企業が設備を稼働させるだけの仕事を受注しているのは間違いがない。

製造部長が部下を怒鳴りつける場面に遭遇したが、怒鳴りつけられた部下の様子がはきはきと明るく、内にこもる暗さがない。モノを作ることに誇りと責任を持っている証拠だと思った。

「イマムラさん。もう、これで充分」

ロイドは工場半ばで見学を打ち切った。全てを見てもらって、今一度、再考してもらいたいというストヤンとイマムラには、ため息が付きたくなるほど残念だった。彼女が判断を変えるつもりでやってきたのかと、都合良く考えないこともなかったのだが、彼らの思惑とは別に、この女には彼らをソロモンドックに吸収させることしか頭に無いらしい。この来社はその為の下見なのだろう。

「次は、あなたの仕事場も見ておきたいわね」

ロイドは再び主導権を握った。新型船設計の現場も見ておきたいというのである。

彼女を技術部まで導いたイマムラは、その入り口でガーヤンに遭遇した。ガーヤンは彼らに愛想笑いを残して、ばたばた賑やかな足音をたてて廊下を駆けて姿を消した。

(あの重戦車が偵察か?)

ストヤンが呆れたような小声で尋ねたので、イマムラはそうかもしれないと小さく頷いた。ウルマノフの接近を知らせる警報システムが、ロイドには適用できない。部下達はガーヤンを技術部の入り口まで偵察に出していたらしい。じっと物陰に身を潜める狙撃兵のシンカ、軽快な機動力を持った偵察部隊のバレでもいい、もう少し適任者がいるだろう。ガーヤンという重戦車は目立ちすぎる。人選ミスだろうと非難するストヤンに、イマムラも同意したのである。

ロイドはガーヤンに気づいているはずだが気にする様子はない

。機動部隊が示威行動のために遊弋するように、存在を露わにしておくことが目的のようで、敵方が偵察することすら意味がないのである。技術部内部の部屋を回って行くロイドにそういう存在感がある。職場を見ておきたいという言葉と裏腹に、彼女は工場を巡回したときと同様に、大して興味を引かれるものはないらしい。イマムラやストヤンがオスマイルの質問に答えている内に、ロイドが次の部屋に移っていると言うことがあり、気付かない内に彼らは、ロイドが居なくなった部屋に取り残されていた。彼女は抵抗を受けないまま、この建物の最も奥の技術開発課にたどりついた。

イマムラが導き入れた技術開発課には、いつものメンバーがそろっている。ロイドは部屋を見回した。孫に読んで聞かせた童話に出てきた小さな魔法使いの家に似て、この部屋は随分小さい。この部屋から溢れるほどの人間がいて、みんな新型船開発という馬鹿馬鹿しい夢を見ている。

（でも、みんな素直でいい目をしているわね。このイマムラという男に似ているのかしら）

ロイドは技術開発課のメンバーを見回しての感想だった。彼らの目は卑屈でもなく奢ってもいない。ロイドに多少の心理的变化がある。彼女の信念が変化したわけではない、ただ、この連中の顔が微笑ましく見えるのである。

「ストヤン君。ストヤン君。ちょっと用があるんだけど」

スメタナがストヤンに用があるらしく小声で声をかけた。ストヤンにも心当たりがある。作業報酬の件でスメタナから相談を受けている。会社の規模は小さいながら、彼女は社長で社員の生活

を守っているのである。今日、彼女と相談して報酬額と支払い方法について再検討する約束になっていた。しかし、ストヤンは彼女に手を振って見せて、彼女の言葉を無視した。今はそうせざるを得ない。ロイドの相手で手一杯だ。

「こら、寝ションベンたれ。用があるって言ってるのよ」

スメタナがストヤンをその別名で呼んだので、今度はストヤンはスメタナと向き合わざるを得ない。

「イマムラさん。あのお行儀の悪い方はどなた？」

ロイドの質問は視線の先のスメタナのことを指しているらしい。ロイドには及ばないが、スメタナも独特の存在感を持っていて、ロイドはこの部屋で初めて興味を引かれるものを見つけたようだ。

「スメタナシステム開発の社長で、いまここで働いてもらっています」

「あら、イマムラさん。あなたたちは、彼女の会社を吸収してしまったというわけかしら。あなた達は弱者を吸収しても、強者に吸収されるのはお嫌？」

「ロイドさん。あれが吸収された様に見えますか？私たちが彼女に吸収されそうだ」

「でも、貴方達に協力して働かされて居るんでしょう？」

「あなたがどう見るか分かりませんが、喰ったり喰われたりする関係じゃない。お互いに敬意を持てる能力があるから、お互いを利用し合ってるだけです」

「吸収とは別の関係という事かな」

オスマイルがそう結論づけた。普段は気難しいロイドが、この時にはオスマイルの言葉に同意を示し、スメタナの後ろ姿を眺めていた。

「なるほど、興味深い関係ね」

イマムラはロイドやオスマイルと共に応接室に戻った。成否は分からないが、彼女がこの企業に不満を持っている様子はない。オスマイルは彼女の表情からそう判断して胸をなで下ろした。ウルマノフの帰りを待つ間、途切れた会話をロイドが繋いだ。

「ねえ、イマムラさん。あなたは子供に何を与えてやれるのかしら」

イマムラはオスマイルと顔を見合わせた。二人ともロイドから発せられた言葉だとは思えなかったのである。

「残念ながら、私は子供に恵まれていません」

「あら、ごめんなさいね。でも子供はいいものよ」

ロイドの人柄からは信じられない言葉である。この時に、ようやく社に戻ったウルマノフが早足で応接室に現れた。

「敵の寝込みを襲うような、見事な奇襲攻撃だ」

ウルマノフはそう言った。予告もなく自分が不在の間にやってきた事を指摘しているらしい。ウルマノフが応接室に顔を見せたために、ロイドは会話の相手をウルマノフに代えた。

「いえ、この間お会いしたときに、ご招待いただいたでしょう？」

そう言えば、前回会ったとき、ウルマノフは彼女に言い捨てた覚えがある。

(一度うちに招待してやるから、現場を見て見ろ)

「だから、一度、現場を見せていただいていたの」

ロイドの言葉に皮肉が満ちていた。ロイドが来社してくれたと言うことは、事態が好転する兆しかもしれない。イマムラのそんな甘い期待は裏切られた。

「ど素人に分かるもんか」

ウルマノフは皮肉ではなくストレートに言い、ロイドも応じた。

「あらっ。図面は読めなくても。企業の決算書ぐらいは読めますわよ。なんでしたら、御社の貸借対照表について、御社の悲惨な状況をご説明して差し上げましょうか？」

もと経理部出身のウルマノフに対する強烈な皮肉である。新型船開発の経費が経営を圧迫して、経営状況は悪化している。たった一枚の表からはっきり読みとれるのである。彼女は言外にあなたにはこの経営危機が自覚出来ないのかと問うているのである。彼女は説得の言葉を続けた。

「会社の規模ではなく、この火星で占める役割について、あなた方を随分評価しているつもりです。それゆえに、私たちは火星市民のために、地場産業が、致命的な打撃を受けることだけは回避しなければなりません」

「そのために、あなた方の提案に従えと、」

「会社を潰さず存続させるために、企業を統合するというのは最も適した方法です」

「統合と言えば聞こえは良いが、要するに弱者が吸収されるって事だ」

「もう少し幅広い視野で見えていただけないかしら」

「ロイドさん。あなたは企業というものを理解していない。私たちは積み木じゃない。あなた方の勝手な都合で組み立てられてはたまらない」

「ウルマノフさん。あなたは、社員を道連れにこの会社を潰すおつもり？」

場所を変えただけで、二人の会話にはまったく進展がない。オスマイルとイマムラは、互いに疲れた顔を見合わせている。

(強情で頑固な上司を持つと、お互いに苦勞する)

と言うのである。

どちらも譲る気配はない。話は物別れに終わったのである。帰って行くロイドとオスマイルを見送ってストヤンが言った。

「イマムラ。君が交渉の時に直接、社長を呼びだした理由が分かった。あの女はエリ・スメタナ以上だ」

「あら。寝シヨンベンたれが、何か誉めてくれているの？」

後ろから現れたのはスメタナである。

「さあ、払うものはちゃんと払ってね」

スメタナはストヤンの腕を掴んで、報酬の相談をするために会議室に連れ込んだ。彼女は自分がロイドにとって大きなきっかけの1つになったことに気付いていない。

早朝、イマムラに社外から連絡が入った、シルチス市のオスマイルから時差を考慮した通信だった。

「イマムラさん。23日にこっちまで来られるか？ 無理は承知だが、社長も同行してもらえばありがたい。まだ内容は明かせないが、我々と企業の関係について話し合いたい」

社長と同行というオスマイルの言葉で、イマムラは連絡の内容をウルマノフの耳に入れざるを得ない。イマムラが恐る恐るウルマノフに伝えると、彼はやる気満々だった。

「なに？ まだ、やり足りないって言うのか？ 上等だ。あのションベン臭い小娘に言ってやりたいことが山ほどある」

（あのロイド部長がションベン臭い小娘？ なんて好戦的な言葉だろう）

ウルマノフは即座に秘書課に命じて、3日後の予定を全てキャンセルした。そうしてまで、彼女と一戦交える準備を整えて、明るく日の戦闘への意欲に腕を揉みながらシルチス市に旅立った。

求められた日に、ウルマノフとイマムラは指定された部屋に入って首を傾げた。風格だか人間的な迫力だかわからない。中小企業の社長というのは大企業と違う一種独特の雰囲気がある。その雰囲気が室内に満ちている。事実、ダロス社のクルーガーなど顔見知りの中小企業の社長の姿を見受けることが出来るのである。

議事進行はオスマイルだった。困ったなあと言葉を掻き上げる癖を連発して今回の説明をした。

「一部の企業の方々には、企業の体質強化についてのご相談を申し上げていたのですが」

(企業の体質強化？素直に吸収合併と言え)

ウルマノフはそう思った。他の出席者も同感であるらしい。

「今日は新しいご提案について皆さんのご意見を伺いたいと思います」

この言葉も民間企業から見て、被害者意識にも似た反感を買う。行政の提案というのは揺るぎ無い決定事項だし、ここで出席者が放つ意見は、決定事項に反映されないまま、民間の意見を聞いたという行政の実績になるばかりだと考えるのである。

そんな聴衆を前に、髪を掻き上げながら語るオスマイルの話はこうである。彼ら行政のの目的は初期の目的と変わりが無い、火星の地場産業の体質強化である。つまり行政として従来の主張を譲ったわけではないと言うのである。次に国産機開発という目的で協力する企業を募る。それらの企業を高速通信回線で接続して国産機開発を目的とした巨大企業に育て上げる。

(一種の巨大プロジェクトか)

イマムラはそう考えた。今回のケースが順調に運べば、資源開発、テラフォーミング事業など他の業種にも拡大する。今回はそのテストケースに当たるため、ネットワークを構築する高速通信回線は運輸交通部本部から無償で貸与する。というのである。

「ウルマノフさん、いかがでしょう？」

オスマイルは尋ねた。彼の話に、指名されたウルマノフを始め、出席した経営者達の反応が全くない。確かに、経営者として難しい判断を要する問題だろう。しかし、イマムラにとってはあり

がたい。探査機器、通信機器、電力供給機器など、イマムラがこれから協力を求めて回ろうと考えていた企業がここに一堂に会しているのである。

参加期限表明に指定された7日後までに、大半の企業が参加を申し出ていた。かれらはロイド達の提案を受け入れたのである。更に行政にとって予想外な企業であつたらしく、リストに漏れていたウルド特殊車両など関連企業の参加も認められた。

ウォルヒたちは開発作業を中断して、ネットワークの再編成に追われていた。ネヤガワ工業の技術開発課を中心に協力工場との間に高速通信回線を確保し、指示連絡網を確立する。関係部門は火星全土17カ所に分散していたが、このネットワークによって、新型船開発を業務目的とした新会社が出来上がったに等しい。17社に渡る企業の関連部所が宇宙船の自主開発という1つの目的で結ばれて動き始めたのである。

必ずしも、情熱という点でまとまったわけではない。火星の地場産業にとって小型船の自主開発という選択肢しか残されていないことは明白である。この時勢の中でいち早く自主開発に参画するということは、同業他社に抜きんでることになるに違いない。そういう利害関係で繋がった。その自主開発の波の中で、他社に抜きんでてより優位な地位を築きたいと画策するのは企業の持っている本質といえる。このプロジェクトは一面、そんな危うさを秘めている。纏まるか分解するかは新型船の成否と、成功した場合のみの公平さにかかっていると云っても良い。ネヤガワ工業

にとっても今後の展望が開けた思いと共に、油断していれば出し抜かれるという危惧を捨てきれないのである。

ストヤンは1つの決断を迫られた。自分が出るか、ということである。新型船開発はもとはネヤガワ工業から始まった。その技術の総責任者である自分がプロジェクトのトップなら、表だった文句は出ないはずだった。新型船開発においてネヤガワ工業が主導権を握れるはずだ。しかし、強引なゴリ押しとも映るだろう。公平さを欠いてプロジェクトが瓦解する危険性もある。

再び、ストヤンはイマムラを（面白い男だ。）と思った。イマムラが先に主導権を握ったのである。最初のミーティングの席上、各社は偵察がてら、中堅の技術者を派遣していた。もちろん今回の件に関わりの深い人材ばかりである。セキュリティー保護の意味で、高速回線網ではなく、生身の技術者が、ネヤガワ工業の技術部の会議室に顔を揃えたのである。言葉や雰囲気は直にしみいつてくる。イマムラはこの会合を非公開とした。

イマムラの部下は火星の各地を回っていた。その報告の中で、あるいは彼自身が出会った者も含めれば、出席者の7割方の顔や経歴、癖に至るまで見知っていたし、相手も自分を知って居はずだ。

その会議の冒頭でイマムラは立場上、ネヤガワ工業がいかに重要な位置を占めているかを宣言する必要があるのだろう。集まった人員も、当然、それを想像していたに違いない。

イマムラは彼らの顔をゆっくりとみわたした後、

「良いものが造りたいなあ」と、言ったのである。

少年のように夢を見る口調で、やや現実味にかけてはいるが、

言葉に体温がこもっていて暖かい。その言葉が人々の感性に響いた。各メンバーは落ち着きのある笑顔で頷いた。ものを造るという手段で、夢を現実化する、各自の企業を離れてただ一点で価値観を共有したのである。ウルマノフが技術者という連中は信用できないと語ったことがある。その言葉が鮮やかに的中した。イマムラが言葉を発した瞬間からメンバーは各社の集まりでありながら、所属する組織の利害から独立してしまっている。

人々はイマムラという言葉にうなづいていた。この連中は会社の利益という価値観を放り出して、メンバーの夢という価値観で結びついたのである。経営者の目から見れば、緩やかな裏切り行為と言えるかもしれなかった。後年、ウルマノフやクルーガーはこの時のイマムラを評して（あのテディベアーは狐の心を持っていやがった）と笑いあった。

イマムラが一方では無垢な少年の心を持っていながら、もう一方では、ずる賢くたちまわったのは、この関係を維持するために、ここに集まった技術者の上司の面子が立つような工夫をした点である。イマムラも必死である。善意や夢や情熱だけで繋がっているわけではない。各社の利害で繋がっている。その利害を調整しなければならないのである。

開発作業は川の流れるように、細い流れがいつの間にか太くなったり、いくつかの流れが平行線を辿っていたり、合流したりしながらその河口で新型船として集約される。この川に16社もの流れが加わって、MSC-X開発という川は随分太くなった。

その川が氾濫しないように、かつ、1つの流れに合流させる役割を担っているのがウォルヒである。昔風に言えば主任設計者や設計責任者と呼べるかもしれない。職務の肩書き上はイマムラになるのだろうが、イマムラ自身は技術的なことについては部下に任せて、黒子に徹している。

そのウォルヒが、幾つか同時に抱え込む作業の中で、現段階でやっておかなければならないことに頭を抱えていた。今回開発するMSC-Xの場合は、保安局への納入の可能性が高い。引き渡しやその後の販売を容易にするために、協力メーカーのジェット社で、MSC-Xの訓練用のシュミレーターの開発を始めておくのである。先のMSB-Xの時には経験しなかった作業だった。

現在が火星歴70年20月、彼女たちは船体の完成を71年18月と見込んでいる。火星時間で約1年弱、1ヶ月の期間は地球とほぼ同じだから、22ヶ月先だと考えればいい。保安局への船体の納入をこの時期だと考えて逆算すれば、保安局はこの時期に合わせて搭乗員の訓練を始めなければならない。彼女たちは船体の開発と平行して、搭乗員の操縦訓練用のシュミレーターを開発しておく必要が生じたのである。当然だが、訓練用シュミレータ

一というのは、MSC—Xの操縦席や操縦性能を再現したものであるから、MSC—Xの概略が定まっていなければならないのである。その概略が変更次ぐ変更でまともならない。MSC—Xの開発には様々な企業の参画を経て、開発力は増大しているはずだった、しかし、考えてみれば、ダロス社の『銀河特急』は、地球メーカーの競合するエンジンの性能と同等かやや上回る程度なのである。

当初、ライセンス生産エンジンであったライン89を搭載していた時に比べると、出力は向上し、なおかつ2トン近い重量軽減になった。ダロス社の努力には敬意を払わざるを得ない。現在の所、船体の本体の重量が約26.7トン、搭載する推進剤が22.6トン、合わせて49.3トンになると見積もられている。

しかし、ウォルヒは、宗教の信者が教典をそらんじるように保安局が新型船に求めた7つの要求項目の一字一句を記憶していた。最初の項目で加速性が要求されている。要求を満たすために更に重量軽減が求められるのである。航続時間に関わる要求があって、推進剤の搭載量を減らすことは出来ない。ウォルヒたちは船体そのものの重量を26.7トンから、更に2トン近く削るという無茶な必要に迫られている。

先のMSB—Xの時に、周囲の仲間から反感を買っていたような強引さで、今のウォルヒは、協力メーカーに重量の軽減を求めている。

これは『ウォルヒ・パクのダイエット』と揶揄されていた。不要な体重を絞り尽くしたボクサーや長距離ランナーから、更に体

力まで奪うように体重を削ると言うことを、瘦身のウォルヒがダイエットするという無謀さにたとえ、メンバーは自虐的に笑っているのである。MSC-Xのオプションの装備は任務によって変更するように設計していて、現段階で船体から外せるような余分な搭載機器はない。船体の強度は安全係数3.0、ぎりぎりまで下げていて、これ以上強度を削るのは搭乗員の生命をいたずらに危険に晒すことに他ならない。もともと、やせっぽちに設計されていたMSC-Xの船体から、無駄肉どころか、強度に影響がないと判断された骨まで削りきっているのである。

ここまで来て、彼らの夢は、周りから寄せられる期待という重圧を加えて、再び行き詰まってしまっている。かといって、全体のスケジュールを遅らせるわけにも行かないまま、イマムラは現段階での船体の能力のデータを、ジェクト社に転送させた。取りあえず、仮のデータで訓練用シュミレーター開発を始めておいてもらうほか無いのである。

MSC-Xはネヤガワ工業やダロス社を始めとする民間企業が主導権をもって推進している。行政の関わりを見れば、ロイド部長の運輸交通本部がプロジェクトの立案推進という点で関わっている。しかし、もともと、MSC-Xの要求性能を提示した保安局は事態を静観していて、船体開発に関与する気配を見せない。自分たちには関わりがないと言わんばかりである。

その保安局からネヤガワ工業に、突然の警告が入った。通信が外部に漏れているというのである。イマムラがジェクト社に転送させたデータについて、ジェクト社の技術部員から通常通信で

問い合わせがあった。その会話内容が外部に漏れた形跡があるというのである。もちろん会話で触れたMSC-Xの概略に付いても、情報が漏れたと見なければならぬ。新たに構築した高速回線による、船体のデーターについてのやり取りには、厳重なプロテクトがかかっている、あのバレやスメタナでさえ解析は無理だと断言するほどである。

今回の場合は通常通信である。イマムラたちが迂闊だったと言えるだろう。しかし、一般市民の通話も含めて、膨大な通信量に混じった特定の会話が外部に漏れたというのは、首を傾げたくなることだった。ネヤガワ工業を狙って、通信が盗聴されていたと言うことかもしれない。いずれにせよ、誰がどんな目的で通信を盗聴したのかと言うことは現段階では捜査中であるらしい。保安局としては、MSC-Xが要求性能通りに仕上がって運用することになれば、その性能の細部は外部に秘匿しておきたい。その情報の流出を防ぐ意味での警告だった。

保安局の警告から一步遅れて、警察本部から今回のデーター流出問題について、捜査員がやってきた。通信が無断で傍受されていたということは、刑事事件として扱われ、彼ら警察組織の捜査対象になる。ウォルヒたちは、やや意外に思った。宇宙空間で捜査を行うと言うことから、保安局を警察本部と同一視していたのである。考えてみれば、行政組織上、両者は互いに独立している。分かりやすく、現代に例えて言えば、保安局は海上保安庁に該当する。宇宙空間での捜査権を持つては居ても警察ではないのである。つまり、彼らは今回の事件の第一報を、管轄外の部局から受け取ったのである。イマムラはやや眉を顰めて聞いた。

「バレ。運輸交通部から貸与された高速回線の盗聴は可能かな？」

「どういうことですか？」

「各社とやりとりをしているMSC-Xのデータの秘密が、通信を経由して外部に漏れると言うことはあるのだろうか？」

「スピカの運行システムのプロテクトの解析程度ならともかく、運輸交通部から貸与された高速回線は政府のセキュリティの管理下にあります。私たち程度のレベルでは回線に割り込むことすら出来ませんわ」

「情報が漏れる可能性はないということか」

「それに、政府で管理をしているとはいえ、各部局間でもセキュリティのレベルや暗号化の手段に差があります。政府関係者であっても他の部局の情報にアクセスするのは困難だと思います」

「もし、同じ部局なら？」

そのイマムラの問いに、バレは首を傾げつつ、行政組織を頭に思い描いた。複雑な組織を整理してみれば、バレにも思い当たることがある。

「運輸交通部の中に、回線を貸与してくれた運輸本部と、今回の警告を発した保安局が所属する機動空間部が並列で存在します」

「我々のプロジェクトの情報は、行政側に漏れていると考えても良さそうだね」

「ネットワーク上の情報に、こちらでプロテクトをかけてはどうでしょう」

「いや、情報はオープンに。ただ、この件については部長と社長

に報告して処置は任せよう」

保安局が極めて適切な時期に警告を発してきたと言うことは、盗聴犯のみならず、今までは国産機開発から距離を置いているように見えた保安局が、開発の状況に片時も眼を離さないほど関心を抱いて、監視を続けていると言うことである。なにやら、ややこしい状況の中に組み入れられてしまっているらしい。

「私たちは、いいモノを造るだけだ」

イマムラは、彼自身がそんなややこしさを振り払うように、部下にそう言った。現場は隠し事をしなくてはならないことは何もない。部下を物作りに専念させたいと思ったのである。行政が密かに彼らの情報をモニターしているというのは、行政サイドのきわめて違法に近い行為である。この弱みは行政との様々な交渉の切り札になるだろう。そういう腹の探り合いは、ロシア者に任せとておくに限るだろう。イマムラはウルマノフを信じてこのカードを預けることにした。

ウォルヒは立体映像モニターの前で考えがまとまらない。ダロス社の技術陣が生み出した核融合エンジンモジュール銀河特急64の核融合炉が最高出力159tの推力を生み出している。地球側には一回り大型だが178tの推力を有するエンジンが存在する。しかし、核融合エンジンが様々な技術の集大成であることを考えれば、彼ら火星市民の手で生み出された最高の小型船用のエンジンであることは間違いがない。彼女の専門ではないが、いささか無理をしているのではないかと考えるほど、限られた条件の中で、巨大な推力を絞り出しているのである。

それだけに、これ以上の出力増大を求めることが出来ない。とすれば、保安局が提示する性能を満たすために、あと700Kgもの重量削減が必要になる。今まで27tの船体を1g単位で削減して24tに絞り込んでいる。正確に言えば239,663,124gになる。その末尾の数字まで知っているほど、メンバーの苦労にも関わらず、この値は数週間の間、変化する気配がないのである。

700Kgどころか、これ以上1gの削減も不可能だという事実を突きつけながら、彼女たちは事実を受け入れることが出来ずに過ごしている。

この時期、肩書き上は責任者として判断を迫られるイマムラは、現実にはやや妥協を見せ始めていた。仮に、競合他社の船体の能力に劣るものであっても、技術供与制限法や搭載する機器の輸入

制限が強まる傾向の中で、火星で製造できるというメリットが必ず生じるはずだ。ここに集められた技術は、火星市民の技術の粋を尽くしたと表現しても過言ではない。これが自分たちの能力の限界だろう。現段階が考え得る能力の限界なら、もう、実際の船体の製造に移っても良いのかもしれないと考えていた。その場合に備えて、各メーカーを説得する手はずを整えている。機は熟した後には、彼らが事実を受け入れて妥協するかどうかにかかっているものと思われたのである。しかし、イマムラは最後の判断はウォルヒに任せようと思った。

「これが、私たちの限界なの？」

ウォルヒはM S C—Xの映像から目をそらせて、体をイスの背もたれに預けて目を閉じた。

それが、彼女の体に蓄積していた疲れをどっと澱のように沈殿させた。

「コロン」

イマムラはウォルヒの思考ロボットに語りかけた。

「部屋をもう少し暖かめに。ウォルヒの席をリクライニングさせて。そっとだぞ。私とアサハリが出た後でライトの灯を落として。あとは彼女が目覚ますのを待つように」

パブリックモードになっているから、コロンはイマムラの指示にも従うだろう。コロンの主人の方は、帰ってゆっくり休めと命じても従うまい。それよりも、ここでゆっくり眠らせてやる方が良かろうと思ったのである。イマムラはアサハリに目配せをして上着を手にとった。

やや暖かみを増した部屋にウォルヒが取り残された。彼女の脇

にうっすらとM S C—Xの映像が浮かんでいる。その姿はM S B—Xによく似ている。火星の技術の集大成と呼んでも良い船体だが、恩師ラベルに受けた指導を、素直に受け継いでもいた。

暗い部屋の中でコロンだけが起きていた。耳を澄ませたコロンにウォルヒの弦きが聞こえた。しかし、その内容は支離滅裂で意味を成さない。コロンは彼女が夢を見ているのだろうと結論づけた。

確かに、彼女は夢を見た。突然の開放感として記憶が残っている。淡い真珠色の空が彼女の目の前一杯に広がっていた。彼女は期待に胸を膨らませて、彼女は空を抱くように腕をいっぱいに広げた。翼に変わった腕に空気をはらんで、彼女は空に飛び出したのである。心地よい香りを全身に感じる。風も音もなく、そんな香りが風のような上昇気流になって彼女を空の高みに運んだ。彼女は羽ばたきもせずに、星の瞬く空間を自在に滑空した。

(星が?)

気付いてみれば彼女は成層圏から離れて、星々に囲まれる宇宙空間を飛翔している。飛翔するという表現は彼女にとって不自然かもしれない。周りの景色が、つむじ風のように彼女の周りをくるくる舞ったり、そよ風のようにゆっくり彼女の傍らを流れ去ったりした。再び、空の真珠の色に気付いてみると、彼女は火星の空にいた。彼女の体は淡い大気に昇華して、この星と彼女を分けることが出来ない。その一体になったこの星が、我が子のように愛おしい。

彼女は静かに目を覚ました。目の前にM S C—Xの立体映像が

浮かんでいる。ぼんやりした頭で、夢と目の前の映像の整合性を付けようとするように、指先でなぞるようにMSC-Xの機首から後方のノズルまでなめらかに鳥のフォルムで覆った。この後、白鳥とも評されるMSC-X「アスカ」が、姿を現した瞬間である。

彼女は何故か、ラベルと共に作り上げたMSB-Xの最後を思い出した。宇宙塵との衝突を想定した試験では、宇宙塵の代わりの金属片はすさまじい破壊力を発揮した。その宇宙塵や宇宙線から船体を保護するための装甲がモジュール毎に施されている。破壊され吹き飛んだ装甲。その重々しさと頑丈さを思いだしたのである。あの装甲の頑丈さは、船体にかかる様々な荷重を支える強さも持っているはずだ。個々のモジュールに施された装甲を繋いで一体化すれば、船体の中で最も重量がかさむフレームの代わりになるはずだ。彼女はそう思いついたのである。

別段、突飛な発想ではない。モノコック構造と呼ばれる構造で、空力学的に滑らかな形状の船体を軽量で造ることが出来るという特徴があり、航空機の構造として一般的に見られる。

彼女の目覚めは鮮やかだった。

「コロン。ドノバンにつないで」

まず、ドノバンに相談しようと思った。夜中の2時である。彼女はこの思いつきに夢中で迷惑だろうとは思いつかない。

「ドノバン、こういう装甲は出来ないかしら？」

『装甲』という表現は適切ではないかもしれない、もはや保護するためのものではなくて荷重を支えるフレームの用途を果たしている。画面にあらわれたドノバンに彼女は思いつきを説明した

。

ドノバンはモジュールの装甲の担当ではないが、この場合、担当であるというより、幅広い知識を要する。この点で、ドノバンは最適だろう。勤勉な勉強家というわけではないが、何にでも新鮮な興味を抱く男である。

「なるほど。面白いかもしれない」

「ドノバン。出来るの？」

彼女は不安だった。新たな解決策を思いついたものの、しかし、専門外の彼女が考えてさえ、新たな構造は、薄い外板で荷重を支える。船体にかかる荷重を上手く分散させるために、その荷重を支える外板は角や繋ぎ目が無いことが望ましいことが分かる。しかし、新型船の全長は少なくとも30メートル、推進剤を搭載した場合の総重量は現段階で50地球トンを越えるものになる。そんなものが、彼女たち火星市民に利用できるかたちで存在するものかどうか想像もつかなかったのである。

「出来るさ、きっと。君はこの都市の外壁を造る技術を知っているか？」

宇宙船の製造メーカーの技術者でありながら、都市を造る建材にまで思考の枠を広げてしまうところがドノバンの面目躍如と言ったところだった。

「複雑な曲線を持った巨大なパネルがあちこちに有るだろう？あのパネルは都市を支え、温度差や紫外線や砂嵐に耐えるんだぜ」

思いもかけないところに彼ら火星市民の技術があった。

「もっと詳しく知りたいわ」

「以前に会ったじゃないか。タイペイ建材の専門家にワルデンさ。あの不良を叩き起こして尋ねてみよう。でもね、」

ドノバンは言葉を継いだ。

「今のうちに、課長にも相談した方が良さだろう」

ウォルヒもうなづいた。大幅な設計変更になることは間違いなく、協力メーカーとの折衝も必要になるに違いない。

「今から？」

ウォルヒは眉を顰めた。ここで初めて、今が深夜の2時過ぎであることに気付いたのである。

「俺は今からワルデンに連絡を入れる。君も課長をたたき起こせ」

「そうか。やってみよう」

ウォルヒに叩き起こされたイマムラは顔を伏せて少し考え込んでいたが、表情を明るく変える演技をしてそう言った。イマムラはメンバー間の調整をウォルヒに一任し、ストヤン部長の説得と、協力メーカーへの連絡は、自分が受け持つよう役割を決めて通話を終えた。妻のアマリアが見るところ、夫のその明るい顔と裏腹に、通話を追えたイマムラの表情は硬い。ウォルヒたちに比べれば、イマムラはやや醒めた目を持っていた。

ウォルヒたち開発メンバーが、このモノコック構造という古典的とも言える構造に思い至らなかった、或いは、この構造を最初から捨てていたのかと言え、スピカの構造のメリットに至るのである。船体の荷重を支える頑丈なフレームにモジュールを取り

付ける。もともとフレームには十分な強度の余裕があるから、必要に応じて個々のモジュールを最新型のものに換装したり、用途に応じて、新たなモジュールをつけることが出来る。

船体の外形を、いわば装備品の容器を先に作ってしまえば、容量が決まった容器の中には、限られた装備品しか入るまい。容器の強度を増そうとしたり、容量を大きくしたりすることは困難になるに違いない。拡張性の無い寿命の短い船体になるだろう。メンバーは性能の良い船体と言うことに目を奪われているが、より性能を増すための可能性が見えたと言うだけのことである。

しかも、基本構造の変更は、ここ数ヶ月の間の開発活動を白紙に戻すことになる。そればかりではない、製造メーカーの製造設備、ユーザーとしての保安庁や防災庁の宇宙船の整備施設、宇宙港における宇宙船の係留設備、そして、そこで働く工員や搭乗者、整備士など、小型船を包み込む環境はスピカのようなフレーム方式の構造と共に進歩してきている。ここ30年来、全ての技術的・設備的な蓄積をも白紙に戻すに等しいのである。技術的な用語を用いて語ることは出来ないが、イマムラは漠然とそういう不安を抱えていた。

しかし、今の彼らの目の前にある問題の解決は、その構造変更しか残されては居ないだろうと判断したのである。一時の思いつきや直感ではなく、フレーム構造のメリットとデメリット、モノック構造のメリットとデメリットを評価して決断した。イマムラはそういう能力をラベルから与えられていたのかもしれない。

道が開けると言うことはこういうことかとウォルヒたちは思った。この数ヶ月の停滞が嘘のように前進し始めたのである。火星全土に渡る仲間たちも、モノコック構造に転換するというネヤガワ工業の提案に面食らいながらも同意を示した。確かにこういう方向に向かえば道は開けるかもしれない。少なくとも船体構造の変更は、現段階ではそのメリットの方が大きい。基本構造が変わることで、2次的な軽量化の余地も生じたのである。

更に、シンが居住モジュールを上半分を透明にし、船体上部に張り出させることを思いついた。搭乗員がコックピットに収まった時に、胸から上が機外に露出するような格好になる。まるで大昔のジェット戦闘機のキャノピーのようだった。しかし、このキャノピーは開閉はしない。悪趣味だと安全性を確認するアサハリは言ったが、本体と一体化してあることで強度は大きな変化はない。

一方、今までのMSC-Xでは、機外の状況を目視確認するためのビデオカメラと、コックピットモジュール内の投影装置が備えられていた。重要度が高い機器なので故障に備えて予備の機器も搭載されている。搭乗者が肉眼で機外を見ることが出来るようになったため、この重量のかさむ機器が不要になり、小型のビデオカメラ1台になったのである。

設計に携わった技術者たちに言わせれば見晴らしは良いかもしれないが、今までがっしりしたモジュール内にいた搭乗者には不安感や動揺を与えることになるかもしれない。このあたりが限界かとイマムラは思った。搭乗者という職業の人々は非常に慎重で

頑固な一面を持っているとイマムラは考えていた。ただでさえ、今までの船体と異なった点が多い、これ以上違ったものになれば、船体の性能はともかくも、搭乗者に受け入れてもらえない船体になるだろうと思った。

こうして、MSC-Xの外見は一変した。無骨な肉食獣が、柔らかみのあるツバメの姿に変身したのである。社外の仲間からも、ウォルヒたちの提案に対して、新たな提案が出た。

中でもタイプ建材の連中の提案は、複合素材の特質を良く知り尽くしている。

船体に用いた複合素材は、堅さと同時に適度な粘り強さを持っていた。彼らは軽量化のために船体の安全性や強度の重要度の低い部分の肉厚まで削ったのである。翼のように両脇に張り出した放熱板などは、船体の急激な機動の変化に対して、目に見えない程度にだが変形し、たわみ、しなる。ネヤガワ工業の技術者など宇宙船の設計に携わる者なら怖くて思いもつかないだろう。荷重を重く頑丈な素材で受け止める代わりに、素材に弾力性を持たせて柔らかく受け流すのである。軽量化を図り、なおかつ船体の十分な安全性を維持しているのだった。

肉厚を削るといっても、簡単な話ではない。1枚の素材は、引っ張り強度を得るために配向させた炭素繊維素材、放射線を防ぐための金属素材、その他、セラミック、等の素材を特殊高分子で接合させたもので、船体に用いた場合、船体の各所にかかる強度に合わせてその厚みを調節しつつ、一体成形するなど非常に困難な技術に違いない。彼らの技術を尽くしたもののなのである。

そういう苦勞を口には出さず、無造作に無精髭はやし、疲れを見せる表情で、誇りを込めて連中は言った。

「どうだい。もっと鳥のようになったろう？」

ウルド特殊車両の連中は、彼らがテストしていた緩衝装置の技術を提供してきた。彼らの秘蔵の技術と言っても良い。コックピット内で搭乗者が操縦装置に手をかけた状態で、コックピット内に、彼らがカオスと名付けた高濃度の特殊なガスを放出する。ガス分子は簡単な電氣的な刺激で、編み目構造を形成して、ゼリーのような粘性が生まれる。搭乗者はまるで母親の子宮の羊水の中ではぐくまれるように、コックピット内で加速度から保護されるのである。使用後、そのゼリーに再び電氣的な刺激を与えれば気体に戻って装置に回収される。理論や装置の基本構造自体は技術文献に見られたが、ガスの安全性やガスの回収再利用の技術に大きな難点があり、地球ですら開発が諦められていた装置である。

連中は言った。

「赤ん坊でも安全に乗せてみせるぜ」

「赤ちゃん以前に、お嫁さんを見つけて結婚なさい。坊やたち」

ウィリアムスがウルド特殊車両の若い技術者達に、投げキッスをして応じた。

「あんたらにこき使われて、嫁さんを捜す暇もない」

彼らはウィリアムスの肩越しに見えたウォルヒに言った。彼らはウォルヒを『首を絞めたくなることがある。』と笑顔で評したことがある。無理な軽量化を押しつけられて、彼女が正しいと分かっているにもかかわらず、殺意に近い反感を抱いてしまうことがある。ネ

ヤガワ工業のメンバーもその点は良く分かる、既に経験済みである。ウィリアムスやバレに比べて、ウォルヒは立場上、評判が悪いのである。

M S C—Xには様々な新しい工夫が盛り込まれた。彼らの力を注ぎ尽くしたと言っても良いかもしれない。カルロス部長はどうだいと言いたげに、ストヤンの肩を叩いた。

「よくもまあ」

ストヤンは呟いた。8ヶ月はかかるだろうと思われたM S C—Xの基本構造の変更を、技術開発課の連中は3ヶ月でやり遂げていた。彼ら自身の努力もあるが、彼らを支えて、共に開発に当たった社外の多くの技術者達の努力も忘れるわけにはゆくまい。（よくもまあっ）という曖昧な感嘆文に、そのストヤンの複雑な思いがこもっていた。

その技術開発課のデータが上がって、ストヤンの目の前にある。タイペイ建材やウルド特殊車両を初め、各社が国産機のために提供してきた技術や努力には驚かされると共に敬意を払いたくなる気分だ。各社の最新技術が彼らの熱意と共に込められていると言っている。

「さあ。2月で仕上げて見せるぞ、目標は7週間だ」

カルロスはそう言った。タイペイ建材は設計図に合わせて新型船の外板をネヤガワ工業に発送したという。ウルド特殊車両は、3日以内に彼らの開発した緩衝装置を技術者と共に派遣すると連絡してきている。バレとスメタナが作り上げた運航システムは、

アリオン電子機器の技術者の手が加わってメモリーチップとして完成して、彼女たちの手元に届いている。

既にMSC—X製造は火星各地で始まっているのである。新型船の開発スケジュールは、計画段階で空回りし、随分と遅れを出していた。

(彼らに免じて、その遅れは我々が補ってやるさ。)

カルロスは思った。MSC—X製造の主要な任務は、彼らネヤガワ工業製造部員の手に移っているのである。ストヤンは(我々の手でやる)と言ったカルロスの言葉を反芻して、今度の船体は、MSB—Xのような幸薄い船体にならずに済むだろうと思った。妙な話だが、人の手によって生み出されたものには人の運命と同じく、幸運なものや、不運なものが存在する。ストヤンはMSC—Xという船体と人生を重ねて、人々の愛情を受けて幸せに育つのではないかと考えたのである。

メンバーの心にやや不安がある。量子コンピューターのシュミレーションの上では要求性能に達してはいる。しかし、何もかも新しいといってもよい。その一つはこの船のモノコック構造に由来する外観である。この構造一つとっても、彼らに気付かなかったどこかに重大な綻びがあって、根本から破綻しそうな予感にも襲われるのである。

ただ、イマムラはメンバーのように、この船体に盛り込まれた斬新さについては、疑問を抱いては居ない。開発の現場にいて、この船に盛り込んだ機能の必然性については熟知していた。開発状況を密かにモニターしているらしい保安局は、彼らの意向に反する方針で開発に臨んでいれば、その途上で何かの警告を発してくるだろう。保安局から何の警告もないまま開発が進んでいると言うことは、おおむね、彼らの意向に沿う船体になっていると見てよいのではないかと考えているのである。

しかし、そのイマムラでさえ、『君たちの感性を信じている』と言った恩師の言葉を何度反芻しても、MSB—Xの最後が心の中に蘇ってくる。不思議なことに、自分自身の能力に対する不安ではない、もしも、今回失敗したら、自分たちのために犠牲になったMSB—Xに申し訳がないという不安なのである。MSB—Xは彼らの中で血や肉や意志を持った一個の生命体のようになっていた。

既にMSC—Xはその柔らかなフォルムをメンバーの前に現しつつある。美しいかもしれないが、スピカを見慣れた人々の目

には、見るほどに奇異な形状の様にも思えるし、俗に言う流線型の外観は、何世紀も前の画家が空想で描いた宇宙船のようで、古くささを感じさせる。不安は日を重ねるにつれ、濃霧のように漠然と広がっていくのである。

(そろそろ、MSC-Xの試験の日程についてシルチス大学と交渉を始めなければならない)

イマムラやドノバンがそう考えていた矢先のこと。突然の連絡が保安局から彼らの業務に割り込んだ。新型船の試験を保安局が所有する施設で実施するというのである。ネヤガワ工業にとっては莫大な経費が掛かる作業を肩代わりしてもらうのはありがたい。しかし、何か一方的な通知で高圧的な感じがし、やや不愉快にもなるのである。セキュリティーの面で信頼されていないのかもしれない。推測ではなく、間違いなくそうだった。開発の進展と保安局の連絡のタイミングが絶妙で、保安局が開発経過を見守り続けている様子が推測できた。イマムラは協力メーカー間の調整を図り、最後の艤装を急がせた。艤装を終了し、機器の細部の調整を追えたネヤガワ工業の元に協力工場から完成を祝う通信が寄せられた。

「ほらっ、シンの顔を」

アサハリがウィリアムスに、協力メーカーから通信を受けるシンの様子を見ろと促した。

「本当、ちょっとは成長したようね」

ウィリアムスが笑顔で頷いた。彼女の視線の先のシンは、戸惑いながらも相手の笑顔に、彼自身も笑顔で応じている。以前の彼

なら、開発経験者だというプライドを振りかざして、協力工場の仲間を見下すように言い放っていたに違いない。

「甘いな。お前たち素人は、これで完成したとでも思っているのか」と。

しかし、今のシンには、開発に携わった者全員で完成の喜びを分かち合いたいという気持ちが、素直に表れているのである。技術開発課のメンバーは、社外の笑顔の通信に丁寧に応対しつつも、MSC-Xが未だ、ただの機械の塊に過ぎないという経験をしていた。

確かにMSC-Xはその外形を現した。しかし、顧客の保安局の手で試験が実施されて要求性能に達していなければそれで終わる。要求性能に達していても、その後に、運輸本部による認可を得る複雑な手続きを要する。手続きに不備があれば宇宙空間を航行しすることは出来ない。更に、宇宙空間での試験航行では未だ経験したことがないトラブルが幾つも待ち受けているだろう。保安局の試験は、機械の塊に過ぎないMSC-Xが宇宙船として認められるかどうかの最初の関門なのである。

船体を保安局に運搬する日、メンバーがなるほど、と思ったのは、保安局の職員が手際よくトレーラーの荷台の四隅に支柱を立て、シートを張った点だった。バレは彼らが犯罪捜査の面で慣れているせいだろうと評した。ネヤガワ工業の社員がMSB-Xの運搬にシートをそのままかけたただけだということと扱いに大差がある。以前の試作機は、そんな彼らの不手際によって、ウォーデ

ンのような素人にも運搬中のものが小型船だと見破られていたの
である。

このシートによってM S C—Xはその外形さえメンバーの目か
らも隠されてしまった。

(縁起でもない)

イマムラがそう思ったのは、彼らがトレーラーを見送る姿に、
M S B—Xの姿が重なったせいである。M S B—Xは随分多くの
ものを彼らに教えてくれたが、その別れの姿を彼らの心にトラウ
マとして残しているのである。保安局の試験には3週間を要する
とされていたが、その内容は深いベールで閉ざされて、彼らに
はハッキリ明かされていない。

イマムラたちは遠ざかるトレーラーを見送りながらラベルが彼
らに残した言葉を唱えていた。

「火星市民は信念に祈る」

自らの手で運命を切り開く。その信念の象徴が、トレーラーの
上のM S C—Xと言えた。

M S C—Xが彼らの前から姿を消したとはいえ、仕事は山積
みで、彼らは忙しく時を過ごし3週間が過ぎた。ただ、その間片
時もM S C—Xのことは忘れては居ない。手元を離れてみると、
設計時の自信が徐々に薄れて不安が高まってくるような気がする
のである。

昨日が保安局における試験の最終日で、メンバーは昨日の内に
採用通知の第一報が有るのではないかと期待していたが、途中経
過の連絡はない。期待した連絡がなかったということが不安を

煽る。彼らに残されているのは悪い知らせだけかもしれないと思うのである。

「手が止まっているわよ」

ウォルヒが、シンやアサハリに非難じみた口調で注意した。試験の結果が気になって、仕事が手に付かないに違いない。試験を保安局の係官にまかせているとはいえ、彼女たちの手が空いているわけではなかった。開発作業は常に幾つかの作業が平行して行われていて、彼女たちがこの段階にやっておかなければならないことを抱えている。マニュアル作りもその作業の1つである。

1つの船体を製造運用するために、工場における製造マニュアルやユーザーで使用する整備マニュアル、搭乗者たちが使用する航行マニュアルなどが存在する。製造マニュアルはすでに原案が出来上がっていて、MSC-Xを組み立てる際に使われている。しかし、製造部からその内容に、幾つもの矛盾点を指摘されて、改訂箇所は800カ所を越え、その製造マニュアルも書籍のページ数に換算すれば実に3万ページを越えるだろう。メンバーの中で文章を書き慣れているはずのアサハリでさえ、机の傍らに『初心者のための作文技術』とか『サラリーマンのための文章表現』という表題の書籍を積み上げており、メンバーはその書籍のお世話になっていた。

彼女たちの思考を、誰にでも正しく伝えるために、文章の表現、図や表の使い方、ページのレイアウトづくりなど様々なテクニックを要する。メンバーは文章表現や単語の使い方を、学生に戻って学び直さなければならなかったのである。

(船体の強度計算の方が、よほど単純で楽ちんだ)

ガーヤンはそう呟いていた。

思考ロボットに任せてしまいたい作業だが、彼女たち自身が未経験で、マニュアルづくりの手順や方法を指示できないまま、自ら文章づくりに頭を悩ませているのである。

ウォルヒの役割は、「監修」と言えば耳に心地よく響く。仲間が作り上げた個々のページの内容の妥当性をチェックし、キーワードを抜き出す。目次に添ってマニュアルに挿入して、キーワードをもとに索引を作っていく。ウォルヒはふと手を止めて目次をながめた。

(私たちの歴史ね) と思ったのである。

目次の1項目毎に、泣きたくなるほどの思い出がある。最初からこれほど気苦労が多いと分かっていたら、とっくの昔に投げ出していたかもしれない。

モニター上でマニュアルのページを繰って行くと、冒頭の部分にMSC-Xの三面図があり、各部の説明が添えられている。

多目的レーダーや光通信の送信機を収納した船首から、核融合エンジンを包み込む船尾までの柔らかく滑らかな曲線は、船体の軽量化に困り果てた彼女の夢の産物だ。大空を飛翔する鳥の夢を見た。彼女はその事を胸にしまい込んで内緒にしている。その夢を現実に結びつけ、鳥のような姿に結実させたのは、ガーヤンの強度計算と共に、タイペイ建材という予想外の業界の技術者だった。

居住モジュールが船体の上に大きく張り出して、透明な突起部分は、まるで大昔のジェット戦闘機のキャノピーを思わせる。M

S C—Xの外形を構成する曲線の中で、レーダーを包み込む船首部分が嘴なら、このモジュールの外観は鳥の頭部を想像させるのに一役買っていた。キャノピーが随分すっきりしているのは、やはり軽量化に頭を悩ませたドノバンが、搭乗者を1名に削った結果である。本来、モジュールの中で搭乗者を包みこんで動きを制限する計器類の一部はキャノピーに形を変えて、搭乗者の前方上方に移動している。航行状況、船体の姿勢状況、推進剤の残量などのデータは、コックピット内部に配置した計測器に表示するのではなく、キャノピーをスクリーンにして投影されるのである。キリキア計測機器の技術者の技術が投入されていた。搭乗者はモジュールの中で空間に余裕を感じるはずだ。

頭部から続く曲線にも無駄はなく、その内側はインテグラルタンクとして使われ、汚水処理タンクやウルド特殊車両が提供した緩衝装置の特殊ガスのタンクとして使用されている。更にその内側には内蔵のように頑丈な2基の推進剤のタンクがある。その後方、大きく膨らんだ腹部は言うまでもない、ダロス社の「銀河特急」が搭載されているのである。上面図でながめてみると、この鳥は大きく翼を広げている。この翼によって体内の余分な熱を放出し、外部の情報を受け止めるのである。

「ウォルヒ」

アサハリとシンが非難じみた口調で、何度も彼女の名を呼んでいた。

(手が止まっている、空想に耽っていないで仕事に精を出せ) というのである。

この作業を進めながら彼女たちは共通の不安を抱いている。時間を掛けたマニュアル造りも、MSC-Xの成否にかかっている。保安局における試験に合格しない限り、マニュアルも彼女たちの思い出もMSC-Xと共に無に帰すのである。

ネヤガワ工業が窓口になっているために、保安局からの連絡の第一報は彼女たちが受けるはずだった。協力メーカーから再三、結果について問い合わせがある。彼女たちは、協力メーカーの仲間に対する返事を、（合否はともかく）間もなく連絡があるだろうと言う希望的観測から、結果が分かればすぐに連絡するという返事に代えなければならなかった。試験終了予定日から2日を経ても連絡を受けなかったからである。

（仲間の中に不安が高まって動揺し始めている）とウォルヒは思った。

彼女たちは彼女たちに与えられた物で性能を得ようとして、随分と無茶な背伸びをしている。大きな事例で言えば、複座や三座が常識のパトロール艇を単座にしている。船体の構造は信頼性のあるフレームではなく、使用者が見慣れないモノコック構造である。奇抜といえる程の変化をもたらしたのである。

「その事なんだけれど、」

ウィリアムスが、いつもの陽気な彼女と雰囲気を変えて、多少しんみりとした口調で語りはじめた。少し考え込み戸惑う感じだが、話しておかなければならないような気がしたのである。多少、今の話題から少しずれてしまうかもしれないと戸惑いつつ、彼女は言葉を続けた。

「食事の時にね。工場のジェニファーさん達に同じテーブルに誘

われたの」

ジェニファーさん。ウォルヒたちも名前や顔は知っている。製造部で働いているパート社員だが、仕事のキャリアーは長く、下手な新入社員より上司から信頼され、存在感がある。パートさん達の親分格という存在である。ウィリアムスはその性格で、気が付けばいつの間にか自然に心を通わせて対等の友達づきあいをするという羨ましい長所を持っていた。60歳を越えるというジェニファーさんも、彼女の歳の離れた親友の一人なのだろう。

その食事の時に、隣のテーブルにいた試作課の男達が、今、まさしくメンバーが危惧している、MSC—Xの奇抜さを指摘したというのである。開発に携わったメンバー自身が危惧しているくらいだから、彼らの指摘には説得力がある。明らかにテーブルにいたウィリアムスに対する当てつけである。

その時にジェニファーさんの向かいにいたおばちゃんがあった。怒り出すと言うより、あきれて静かにたしなめる口調であったという。

「くやしかったら、あんたらが作ってみたらええねん。出けへんくせに大きな口を叩いてほしないわ」

訛りがあるが、きっぱりと歯切れの良い口調だったらしい。ジェニファーさんが補足し、ジェニファーさんを囲む仲間が頷いたという。

「あのMSC—Xはね、私たちの手で造ったんだ。勝手なことを言ってもらっちゃ困るね」

メンバーの前で、その話をしたウィリアムスが穏やかな笑顔の

まま、華奢な指先で目尻の涙を拭った。MSC—Xの組立に携わった人々が、その船体を『私たちの手で造った、私たちの船体だ』と表現してくれた。それが嬉しいというのである。メンバーは黙って彼女の話聞いていた。しっとり暖かな雰囲気心が底に染み込んできて、ウォルヒは不安をため息に変えて吐き出した。メンバーは黙って、しばらく語りだす者がいなかった。

保安局からの最初の連絡は、思いもかけないルートでもたらされた。スピカの販売を担当するネヤガワ工業の営業一課にもたらされた。

「スピカの増産は可能だろうか？」というのである。

不可解な問い合わせだった。新型船導入を検討している中で、今更、スピカのような旧型機の追加購入を検討しているのだろうか。メンバーが待ち望んでいたMSC—Xの試験結果については、素っ気ない回答である。

「試験の予定が延びている。終了まであと2週間ばかりかかるだろう」

彼らは協力メーカーの仲間にそのまま伝えざるを得ない。結果の連絡を待っていた協力メーカーの仲間も、その連絡を聞くと、張りつめていた気が抜けたように言葉がない。

突然に思いもかけず、2週間の間が空いた。イマムラは部下に休暇を勧めた。気の抜けた状態で仕事をしていても、作業効率は上がるまいと考えたのである。たとえ数日であっても、休日らしい休日を取っていない部下を休ませてやりたかったのである。

「シンは？」

バレが聞いた。

「一度、気密服でオリンポス山に登ってみたいけれど、今回は無理だね」

太陽系最大の火山に歩いて登りたいと言う夢を語るなのである。東側と南側を主流にして、いくつかの登山ルートがあり、ルート沿いに避難小屋がある。また、避難小屋のいくつかは小規模なエアポートも備えていて。このシンカンサイ市と結ばれているのである。その交通機関を利用して登山を楽しむ人は少なくない。

そのオリンポスの中腹からでさえ、火星の丸みを実感でき、頂上から見える光景は、暗い宇宙空間の中にぽっかりと赤い惑星が浮かんでいると実感できるのだという。何より、大地に足を着けているという感覚が、衛星軌道上から見る火星の光景とは全く違った感慨を生むらしい。彼はその噂に聞いた景色を自分の目で眺めたいと思ったのである。ただ、完全装備の気密服で歩いて登るとすれば、1ヶ月はかかるに違いない。今回は登山を諦めなければならぬようだ。

シンはそんな夢を見ながら、目の回るような忙しさに耐え続けていたらしい。この仕事が一段落ち着いたら、という仮定で語り出したのはシンばかりではなかった。

「で？、ドノバンはカティアと遊園地。バレは彼氏とデート。ウィリアムスはペーネミュンデ市の観光。さあ、君たちの夢は分かったから、さっさと休暇届を出せ」

部下達は、イマムラがそう声を掛けなければ、（休暇があれば、、、）と想像を口にするだけに終わってしまうだろう。

「課長は？」

ウォルヒは首を傾げてそう聞いた。

「帰りに旅行会社に寄って、パンフレットを選んで帰るよ」

会社に留守番が要る。イマムラは休みを取れないようだが、パンフレットの写真を見ながら、妻のアマリアと共に楽しく話をするくらいは出来るだろう。そして、男同士では機密扱いのMSC-Xの開発が障壁になって会話しづらいが、セリーヌとアマリアという女性を介すれば、通常通信でラベル夫妻とのお喋りが楽しめるかも知れない。そう考えるイマムラの表情には休みが取れない不満感はない。

（私にはみんなのような帰るべき故郷や、頼るべき親戚がない）

ウォルヒは寂しく思った。彼女はこのシンカンサイ市で生まれ育っている。しかし、この都市で父母や弟を失ったという思い出が、無意識のうちに、この都市を故郷という認識から切り離してしまっている。イマムラが提示した1週間の休暇を彼女は5日に値切っていた。その5日間の内、既に4日間を、新しく迎えた家族と自宅で無為に過ごした。

「ねえ。ハム。あなたの故郷はここなの？」

ウォルヒは新しい家族を手の平に乗せて尋ねた。一匹のシャンガリアン・ハムスターが、ケージの枠を齧って、出してくれと催促していたのである。ハムスターなので、彼女はその名を「ハム」と名付けていた。単純で不慣れな命名の仕方だった。手の平に

乗せると、この小さな生き物の腹の温く味を感じることができた。

数年前に、ドノバンが幼い娘を連れて来た時に、そのカティアを抱くことが出来なかった。子供の柔らかさや温かさが、彼女の腕の中で死んだ幼い弟を思い起こさせるのである。女性として、子供を見るのは好きだが、触れることが出来ない。自分は女として大きな欠陥を持っていると、生真面目に自覚していた。彼女はその自分の欠陥を、この小さく自分勝手に動き回る生き物で補おうとしているのである。子供をハムスターと同列に置くというのは、世の中の母親から見れば笑い出したくなるほどの馬鹿馬鹿しさだが、彼女は大まじめである。以前の彼女なら、その欠陥を自覚はしていても気にもとめなかったろうが、笑い出したくなるほどの愚かさでも、彼女は自分に足りないものを無意識のうちに補おうとしているのである。

もしも、コロンに感情があれば、彼女がハムと交わす返事のない会話の中に、彼女の成長を嬉しく見守っていたかもしれない。彼女の表情が明らかに穏やかな優しい女性の笑顔に変わっている。

（そう。明日は北公園に行こう）

休日の最後の日、彼女は指先で碑の中に父母の名を求めながら思った。

（私は、何故、）

その言葉が続かない。ただ、何かをやり遂げつつある満足感があって、指で辿る父母の名に自慢したいほど誇らしいのである

。

自宅で妻と過ごすイマムラは、「スピカの増産が可能か」という保安局の奇妙な問い合わせの疑問が、やや解けてきた。ウルド特殊車両の連中が、彼らがモニターしていた地球の報道番組を録画して、イマムラの自宅に転送してくれたのである。

アマリアは夫がため息を付くのに気付いた。またしても、技術供与制限法である。植民市での高速艇開発を禁止すると言うのである。「植民市」と対象をぼかしているが、高速艇を開発する設備や技術は、月を除けば火星以外に無く、事実上は、彼ら火星市民をターゲットにしているのである。さすがに法律で開発の禁止を強制することは出来ないらしいが、そういう風に指導するという。火星行政府の権力は、地球で考えるより遥かに幅広く強大である。行政側から「高速艇開発は好ましくない」と言われれば、事実上禁止すると言うほどの強制力を持っているのである。

仮に、保安局が今すぐに、MSC-Xの性能を認めたとしても、その後の宇宙空間を航行するための許認可を求める審査には通常一ヶ月はかかる。先の通達は審査前に出されるに違いないと思われた。

「開発が望ましくない」

そういう通達が出されれば、認可が下りることはあるまい。

保安局は新型船採用を放棄して、スピカを使用し続けることを選択したに違いなかった。試験結果の通達がずるずる長引いているのはその混乱の結果に違いないのである。運命の分岐点で、彼らに選択肢が与えられないという閉塞感がのしかかっている。

その報道番組は、後半をテロ事件に費やしていた。数日前、フォボス宙港でおきたテロ事件で、イマムラも日常のニュースで知っていた。比較的、警備が手薄だった、軍関係者の居住区画を狙った爆破テロ事件だったらしい。この録画は地球のメディアのニュースであるために地球市民のニュースキャスターが、火星の報道関係者が踏み込むことがない爆破現場に、深く踏み込んで取材しているのである。アマリアが眉をひそめて顔を背けた。

爆発によって火傷を負った子供や、瓦礫の下からのぞく女の死体の上半身、手足を吹き飛ばされて治療を受ける人々が映し出されている。アマリアはイマムラの胸に顔を埋めた。

「あれは、私たちがやったの？」

もちろん彼ら自身が手を下したわけではないが、彼らと同じ火星市民の行為に違いない。地球市民との関係で、彼らは被害者と言って差し支えない状況に遭遇する。しかし、目に見えないもう一方で、加害者でもあるらしい。

「私たちは、宇宙船を造り、運命を自分で切り開きたいだけなのに」

宇宙船の自主開発という夢が、閉ざされていくように思われるのである。イマムラは保安局から、明日、船体を返還するというメールを受け取っていた。試験の結果について触れられていない。イマムラは傍らの妻をそっと抱いて、この妻に恥じないような態度を保ちたいと思った。

「取り乱すなよ」

という端的な言葉が、イマムラが検査技官の対応をするウォルヒに与えた指示だった。保安局の検査技官が試験の終わったMSC-Xを返還するために来社したのである。もちろん、試験の結果を聞く。

性能が要求に達しなかった。あるいは技術供与制限法によって新型船開発から手を引く。さまざまな可能性があった。メンバーは既に小型船開発が禁止されると言う報道を知っていた。自分たちの命運が個々で尽きたと考えているのである。

「結果はどうあれ、取り乱さずに受け入れる」

火星市民の最後の意地のようなものだ。MSB-XとMSC-Xがその誇りを彼らに植え付けた。

戻ってきたMSC-Xは既にシートを外されて、その鳥のような姿を現していた。人に見せるつもりでシートを外したのではない。工場の敷地が狭い。MSC-Xをこんな所に放置すれば、物資を納品するトレーラーが入れなくなるのである。彼らはMSC-Xを作業の邪魔にならないように移動させなければならなかったのである。不吉な予感がするのだが、ドノバンたち技術開発課のメンバーは、MSC-Xを工場の片隅、以前に破壊したMSB-Xを放置していた区画に運んだ。

「こいつも、もう終わりか？」

シンが呟いた。反論する者がいない。この後、火星市民に国産機開発を継続する底力は残っていないとメンバーは考えている。

それほど、全ての関係者がこのMSC—Xにのめりこんでいた。彼らの最後の船体なのである。

『船体の構造が奇抜すぎる』

『技術供与制限法に従って、新型船導入から手を引く』

この船体が不採用になった理由は、人に指摘されなくとも、ドノバンたちにいくらでも思い浮かぶのである。

ウォルヒはイマムラに先立ってメンバーの所へ向かった。心の中が落ち着かず、足下がおぼつかない。表情は以前の彼女のように硬く、MSC—Xに向かって歩を進めながらも、考え、戸惑うように、うつむき加減に視線を動かしていた。仲間に、その状況をどう説明し、納得させればよいか分からないのである。

MSC—Xを取り囲んで黙っていたメンバーは建物の出口にウォルヒの姿を見つけた。ウォルヒも彼らの存在に気付いたようだが、うつむき加減で戸惑う様子だ。

ひょっとしたらという虫の良い可能性を考えなかったわけではなかった。しかし、うつむいて言葉を失っているウォルヒの姿は、メンバーに最後の希望を棄てさせたようだ。メンバーは皆、黙りこくってMSC—Xの滑らかな姿を見上げた。

しかし、ウォルヒの様子がおかしい。肩が震え、拳を握りしめて、むずむずと湧き上がってくるものをおさえるようだ。やがて、ウォルヒが重荷から一拳に解放されたように叫んだ。

「私たちは、やったのよお」

一瞬、メンバーにはウォルヒの言葉の意味がよく分からない。

ただ、このウォルヒ・パクが、突然に叫び出すほど衝動的で、目から涙を溢れさせる程に人間くさい笑顔を浮かべ、地面を蹴って飛び上がって、手に持っていたファイルを無造作に投げ上げてしまうほど、全身で感情を表すような激しい女だったのかと、ウォルヒという女のイメージの変貌ぶりに驚いたのである。投げ上げたファイルが上空で散って、紙吹雪のように彼女を包んだ。

「えっ？」

「あれっ？」

ドノバンやムハマドは自分の勘違いを確認するように、MSC—Xを見上げたり、撫でたりした。MSC—Xがスピカに変わる新型船として承認された。その喜びを、ゆっくりと確実に伝えるすべを知らず、ウォルヒがメンバーの前でその喜びを爆発させているのである。

「本当なの？」

叫び返すバレ。ただ、信じられないと言うようにMSC—Xをなで回すシン。アサハリの手をとって踊り出すウィリアムス。

「うほおっ。うほおっ」

ガーヤンは意味のない叫びをあげて、満面の笑顔を浮かべながらゴリラのように厚い胸板を両手で叩いた。メンバーたちの怪訝な表情が、喜びに変わるのに時間は要さなかった。

火星歴71年19月21日。66年3月に彼らがラベルと出会った日から、実に5年18ヶ月を経過している。地球の時間に換算すれば、火星の子供たちがラベルの意志を遂げるのに11年間

と言う月日を要したのである。

先に応接室に案内されていた2人の保安局の検査技官は、開発責任者のイマムラと主任設計者のウォルヒを見て、戸惑うように2人で顔を見合わせた。話をどう切り出してよいものか戸惑っていたのかもしれない。自分たちの報告は随分遅れて、予定より2週間もずれていた。やや気まずい沈黙があり、ウォルヒは食い入るように検査技官を見つめた。ごくりと、つばを飲み込む喉の動きが分かるほど緊張している。

二人の検査技官はイマムラに握手を求め、ウォルヒの手を握って短く礼を言った。

「ありがとう」

M S C—Xを作り上げたことに対する、感謝と敬意のこもった礼である。ずんっと、重みを感じる笑顔だった。あとの態度は役人らしい、冷静に事実を淡々と述べた。

「細かな数値については、改めてご報告することになりますが、M S C—Xは私たちが要求した能力を大きく上回っていました」

事務員の女性がコーヒーを運んできた。

「どうぞ」

飲み物を勧めながら、イマムラの手が震えていた。検査技官の言葉が、信じられないのである。検査技官はコーヒーをすすってから、イマムラとウォルヒに詫びた。

「検査は思いの外、手間取ってしまいました」

船体の構造が違うという問題もあったが、試験で得られたデータが信じられないほど良かった。そのデータを素直に信じ

ることが出来ずに、再試験をしていたというのである。イマムラは気になっていた点をメンバーに代わって尋ねた。

「船体の構造が、在来機種と随分異なっていますが、問題はありませんか？」

検査技官はイマムラの言葉を一笑に付した。

「性能に満足出来るのなら、使いこなして行くのは、私たちの側の問題です」

「単座機だという点では？」

スピカでは2人の搭乗者が乗る、MSC—Xの場合は操縦者1名である。ウォルヒはその点については問題はないのだろうかという不安をぶつけたのである。

「今、治安の悪化という問題を抱えていて、パトロール艇の絶対数が足りないんです。それ以上に、パトロール艇の搭乗員も不足しています」

もしも、パトロール艇が1名の搭乗員で運航できるのなら、搭乗員の不足という問題や、彼らの過密な搭乗スケジュールを緩和することも出来るだろうと推測するのである。彼は締めくくりの説明を付け加えた。

「この船が、火星市民が出した結論なら、我々はそれを支持します」

火星市民として彼ら開発チームを信じるというのである。彼は苦笑いをして続けた。

「予算の獲得に時間がかかりますから、正式な発注は後日になりますが、当初、2隻を先行発注すると考えて下さい。今回、お返

ししたMSC-Xで試験航行を始めたいと考えています」

その言葉にイマムラは慌てて説明を加えた。

「まだ、運輸本部の認可の手続きが終わっていません。直ぐに申請しても審査が終わるまでに1ヶ月は掛かると思います」

イマムラたちが心に秘めていた難関の一つである。審査中に連邦政府から出された高速艇開発制限が自治州において通達されれば、認可が下りる可能性はないのである。しかし、検査技官はイマムラたちにとって意外なことを言った。

「既に保安局が認可手続きを代行して、申請は承認済みです。この船は宇宙に運べば、自由に飛び回れますよ」

検査技官はそう言って時間を確認し、慌てて飲み残しのコーヒーをあおった。

「旨いコーヒーだった。あの事務員さんにもお礼を」

2人の検査技官はそれだけ言い残して去ってしまった。仕事のスケジュールに追われているのだろうが、やって来たときと同じ素早さだった。

部屋に取り残されたイマムラとウォルヒは黙って顔を見合わせた。信じられない。しかし、二人の目の前に空のコーヒーカップがあって、二人の検査技官が居たことは間違いがないのである。

「ウォルヒ。他のメンバーにも知らせてやってくれ」

スタンやウルマノフが知れば怒るかもしれないが、この時、イマムラにとって上司は些細な人物にすぎなかった。まず、この事実を仲間に知らせてやりたかったのである。そして、その役目は、ウォルヒにさせてやりたかった。開発期間中、彼らは当初

からハンディを背負い、メンバーは様々な矛盾と直面し続けた。しかし、その矛盾は全て、最後に主任設計者の役割を果たした彼女に背負わせていたのである。

(他の者なら出来なかつたらう)

そう思うのである。全体を取り仕切ってまとめて行くという点では、ドノバンは人望もある。しかし、問題の調整能力があるだけに、彼は何処かで現実と妥協してしまつたらう。彼女はその小柄な肩で、わがままで独善的にも見える判断を下してメンバーの反感を背負いながら、仲間の努力をMSC—Xの中に結実させることに成功したのである。

「さあ、些細なことは、」

スタンやウルマノフのことを指している。イマムラは続けた。

「私が済ませておくから、君はメンバーの所へ。それから、手分けをして協力工場の連中にも報告とお礼を」

イマムラはそうやって戸惑いを見せるウォルヒを部屋の外に押し出したのだった。

アスカ誕生

取りあえず、この物語の第一幕を締めくくる情景が広げられている。ネヤガワ工業の応接室にはウルマノフの他、協力メーカーの社長の姿がある。一人、また一人と加わって狭いと感じるほど

になった。社内の技術屋から試作船が期待以上の性能を示したという報告をきいて駆けつけてきたのである。互いに笑顔で肩をたたき合ってはいるが、大騒ぎを言うより、コーヒーを飲みながらわき上がってくる喜びを噛みしめているのである。

「この男は、」

クルーガー社長はウルド特殊車両のモーリス社長にウルマノフを指さして言った。

「前から、ひねた奴だった」

ウルマノフに対して、もう少し素直に嬉しそうに喜んだらどうだと言っているのである。

ウルマノフはにやりと笑って返事を帰した。

「これからだよ。まだ、これからだ」

みな、ウルマノフの言葉に頷いた。経営者として現実的な目を持っている。しかし、慎重な言葉と裏腹に、その言葉の語感には先の見通しが付いた明るさを感じさせる。ウルマノフは、ふと思い出したように言った。

「よし、あの女にも知らせておいてやろう」

ロイドの元に連絡を入れる事にしたのである。ウルマノフはオスマイルを通じてロイドを呼び出して、彼女の映像に向かって言った。

「私たちの新型船M S C—Xは『アスカ』と名付けることに決めました」

名称が付けられたと言うことは、正式に製造に移ると言うことを示していた。経営者達にとって、こぼれ聞こえた『アスカ』という名は初耳だが、新型船の名称ぐらいはネヤガワ工業に優先権

があるだろうと笑っていた。

『アスカ』というのは地球の古い言葉だった。地名を表すこともあるが、もともと「飛翔する鳥」という意味だと、ウルマノフはニシダから聞いていた。ニシダが自分たちの手で開発した船体につけるつもりだった名称である。火星市民の自主開発を振り返ってみれば、ニシダという頑固な小男に行き着いてしまうような気がする。名称だけでも引き継いでやってもいいと考えたのである。なにより、MSC-Xの鳥のように滑らかな外観は、その名にぴったりだった。

運輸交通部本部の部長室で、ロイドの傍らにオスマイルが居る。ウルマノフからの連絡をロイドに引き継いだ。

(開発が成功した。)

ウルマノフの用件はそういう連絡に違いなかった。オスマイルは電話口から漏れ聞こえる会話からそう判断して、髭を撫でつけた。満足したときのオスマイルの癖である。

ウルマノフの声が一段と大きくなって、ロイドに語る言葉の内容がはっきり、オスマイルにも聞き取れた。

「ロイドさん。最後に年長者のアドバイスとして聞いてくれ」

ロイドは突然の提案に面食らったようだ。ウルマノフは続けてロイドに語りかけた。しみじみとした口調で年輩者らしい落ち着きと説得力がある。

「頑固はいけないよ。人間、素直が一番だ」

ロイドの反論を待つまでもなく、ウルマノフは電話を切って

しまったらしい。ロイドは苦笑いを浮かべるしかない。突然に会話を終えたロイドは、オスマイルに命じて言った。

「たしか、技術供与制限法の追加の通達が来てたんじゃなかった？」

オスマイルにとって、たしか、どころではない。

「毎日、実施はどうなっているとつきあげられてますが、、」

「あら、大変ね。至急検討するから、私に回してちょうだい」

新型船について、その開発すら制限しようとする通達を、彼女は今まで、アスカの完成まで握りつぶしていたのである。通達は開発計画途上の船体を対象にしたものだから、試作機が完成して製品になってしまえば規制の対象から外れるのは間違いがないのである。

オスマイルは思った。

(ホンマ、怖いおばはんやで)

ロイドが立ち上がって窓の外を見ると、人々が見えた。この区画は行政の中心地だった。独立を求める人々のデモ隊と警官隊が衝突していた。道路が封鎖されて火炎瓶が燃え上がり、警官が催涙弾で応射するという激しさである。

(もう、避けられないのかもしれない)

と、独立闘争のことを考えたのである。

格納庫ではいよいよアスカが航行試験のために宇宙空間に移送される準備が進んでいた。宇宙を航行する日が近づいているのである。「アスカ」と名付けられた船は、やがて開発メンバーの想

像を超えて、火星市民の誇りと運命を託す船体に育って行くのである。もちろん彼らには、この後まだ、いくつかの難関を抱えている。

しかし、今しばらくは、この連中を喜びの中で、そっといておいてやっても良い。

了

長い作品に最後までおつきあいいただきありがとうございますでした。

ただ、この物語はこれで終わりではありません。人々の夢や期待を紡いで姿を現したアスカは宇宙空間を孝行する許可を得て、いよいよ宇宙空間に運ばれ、この物語の途中で少し登場したジーン・フランクリンとサナカ・オボテの2人のテストパイロットに委ねられます。その二人の物語はまた改めて。

また、後にレスキュー仕様に改造されたアスカの物語がすでに公開済みです。もし、よろしければお読みください。

「赤い大地のレスキュー」

<http://p.booklog.jp/book/33033/read>

アスカ物語 ～アスカ誕生～

<http://p.booklog.jp/book/74823>

著者：塚越広治

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ken19570420/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/74823>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/74823>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ